

樺太

歴史民俗資料学叢書3

日本
東京

内地

一九三〇、四〇年代の 日本民俗学と中国

王京
WANG JING
著

満洲
(東北)

新京(長春)

朝鮮
京城(ソウル)

北京(北平)

済南

青島

南京

上海

(華東)

武漢

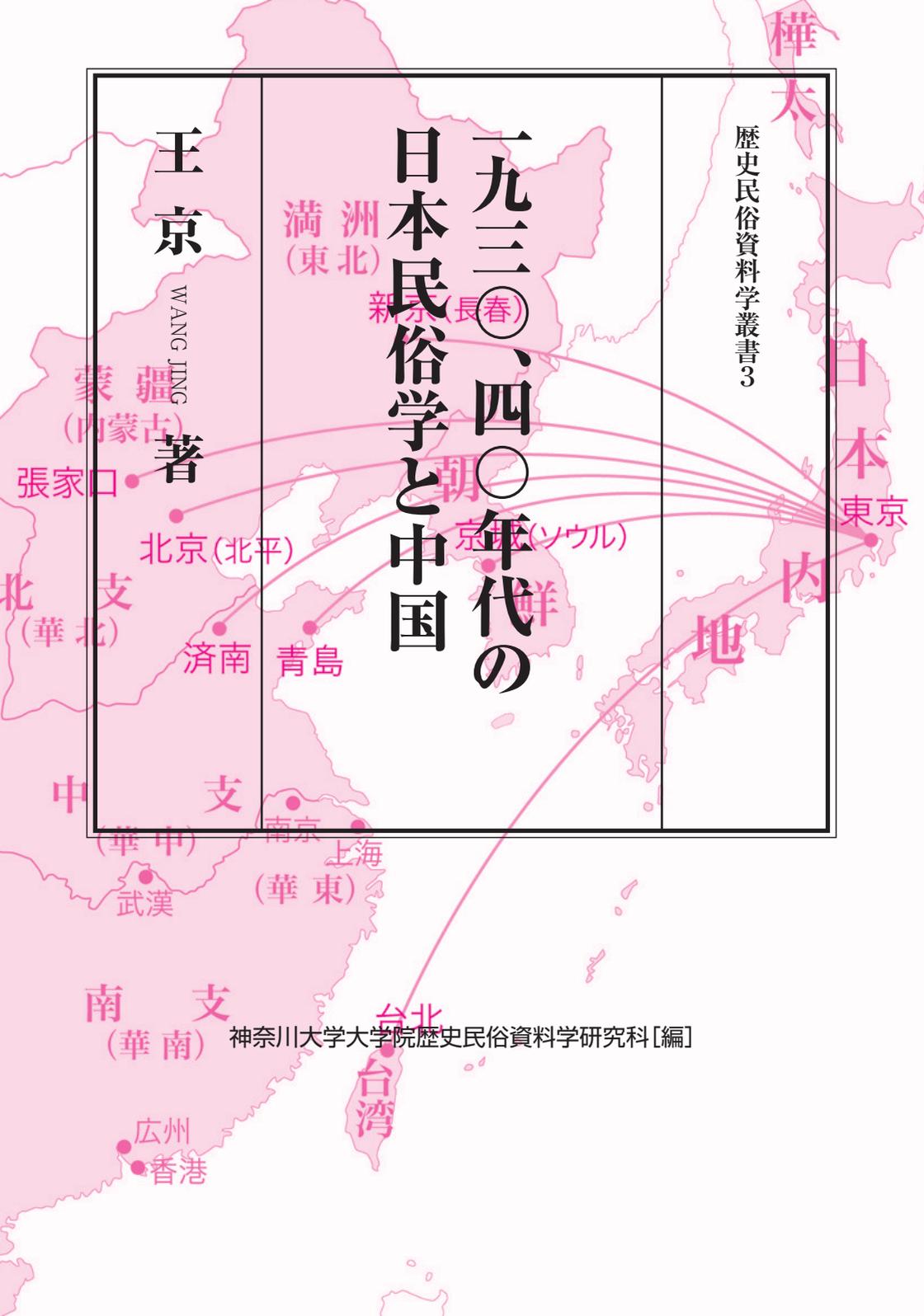
南支
(華南)

広州

香港

台北
台湾

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科[編]



歴史民俗資料学叢書3

一九三〇、四〇年代の
日本民俗学と中国

王京
WANG JING
著

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科[編]

一九三〇、四〇年代の日本民俗学と中国*目次

序章 主題と構成 3

1 主題と資料 3

2 本書の構成 14

第1章 日本民俗学の成立期と中国 17

1 「二国民俗学」の確立 17

1 「二国民俗学」の論理 17

2 学問体制の確立と組織的な活動の展開 29

2 日本民俗学と中国——『旅と伝説』と『民間伝承』から 36

1 『旅と伝説』の位置 36

2 『旅と伝説』における中国記事 41

3 『民間伝承』における中国記事 46

3 一九三九年——一つの変り目 48

1 日本民俗学の一九三九年 48

2 占領と中国調査の展開 49

3 日本民俗学徒と中国 51

4 柳田国男の昔話比較発言 53

第2章 太田陸郎——文化史的関心 61

1 郷土史から日本民俗学へ 63

1 太田陸郎の略歴 63

2 太田陸郎の業績 64

3 郷土から日本へ 70

2 「中支」での観察 75

1 日本研究の延長 81

2 中国文化への沈潜と認識上の制約 84

3 日本への発信 88

3 太田陸郎の中国経験と日本民俗学 91

第3章 大間知篤三——民族学と民俗学 95

1 新人会から民俗学へ 96

1 大間知篤三の略歴 96

2 新人会と民俗学 98

3 民俗学創立期での活躍 100

2 「満洲」での調査 104

第4章

直江広治——民俗学への熱意

1	東洋史と民俗学	138
1	直江広治の略歴	138
2	民俗学、中国との出会い	140
3	民俗学の訓練	141
2	「北支」での活躍	143
1	満鉄調査部と日本民俗学	144
2	折口信夫の中国旅行	148
3	その後の民風会	151
4	山西学術調査	153
5	石田英一郎との再会	156
3	民俗学普及の努力	158
3	大間知篤三の中国経験と日本民俗学	134
1	満鉄そして建国大学	104
2	民俗学から民族学へ	111
3	民族学とその政治性	119
4	新京民俗学同好会から満洲民族学会	130

第5章

柳田国男先生古稀記念会——民俗学の再編成

1	古稀記念会の計画	176
1	計画の全体像	176
2	計画の経緯	178
3	「内地以外に於ける民俗学大会」の背景	181
4	講演会から「国際共同研究」の場へ	190
2	北京大会の準備と挫折	195
3	日本民俗学の再編成	208
1	「比較民俗学」——実践への模索	208
2	国外世話人——組織上の変化	217
4	直江広治の中国経験と日本民俗学	169
1	輔仁大学と日本民俗学	158
2	民俗学教育普及の努力と効果	162
3	東方人類学博物館、エーデルと『民俗学誌』	167

終章 まとめと展望 223

1 戦後——消えた国外 223

2 本論のまとめ 226

3 日本民俗学と中国 230

註

参考文献

あとがき

人名・事項索引

『歴史民俗資料学叢書』刊行のことは

(1) 291 277 241

一九三〇、四〇年代の日本民俗学と中国

序章

主題と構成

1 主題と資料

■ 日本民俗学確立の時代と学史研究

柳田国男が民俗学の理論樹立に向けて本格的に動き出したのは一九二〇年代であった。一九三〇年代の半ば、日本の民俗学において『民間伝承論』や『郷土生活の研究法』のような系統的な理論、「木曜会」のような中心的な組織、「山村調査」のような組織的な調査活動、「民間伝承の会」のような全国的な学会組織、『民間伝承』のような中央の機関誌などが次々と登場し、一九四〇年代前半にかけて初期的な発展をなすとげた。

一方、日本の軍部が主導する大陸への野心が膨張し、一九三一年に満洲事変、一九三七年に盧溝橋事変が勃発し、日本は中国の東北、華北、さらに中国全土へと戦局を拡大し、そして太平洋戦争を経て一九四五年に敗戦を迎えたのもこの時期である。一九三〇、四〇年代の日本民俗学の発展や方向性を考える際に、この時代との関わり方

が重要な問題であるが、学史研究ではあまり重視されてこなかった。

日本の民俗学史についての最初の記述は柳田国男によるものであった。一九三二年八月、彼は神宮皇学館で民俗学の歴史や方法に関する四回の講義を行い、その内容は翌年『郷土史研究の方法』という小冊子として刊行され、のちに有名な『郷土生活の研究法』（一九三五年）の前半をなしている。その一節「わが国郷土研究の沿革」⁽¹⁾では、柳田は日本における民俗学のルーツを本居宣長の国学に求め、江戸時代の随筆類や風俗問状の試みなどを取り上げ、さらに明治時代の郡県誌編纂や『郷土研究』（一九一三―一九一七年）の成果にまで言及している。

続いて一九三八―一九三九年、大藤時彦は「日本民俗研究小史」を計六回（「ひだびと」六一七―一〇、七一、七―四号）連載した⁽²⁾。江戸文人―郡県誌編纂―『郷土研究』という柳田の学史記述は、新しい学問を樹立するための「伝統の創造」という色彩が濃い⁽³⁾が、それに対して民俗学が既に全国規模の組織や活動によって社会的な地位を固めつつあった段階の大藤の学史整理は、民俗学の発端を広義の人類学の中におき、東京人類学会及び明治大正時代の種々の動きを紹介し、柳田の記述の空白を埋めたといえる。しかし、一九二五年以降については、民俗学関係の雑誌や研究会、刊行物を列記しただけであり、記述の下限も日本において民俗学が全国的規模で組織的に確立することを示す民間伝承の会と『民間伝承』が登場する一九三五年までとしている。

一九四一年、柳田国男は「過去の日本文化に対する関心と畏敬と親しみを与へた功績は一種の国民教育として貴重なもの」であるとして、「二千六百年を記念する朝日文化賞」⁽⁴⁾を受賞し、彼がリードしている民俗学に対する評価も高まった。一九四二年、国民学術協会⁽⁵⁾『学術の日本』で「日本民俗学」と銘打った初の学史⁽⁶⁾が発表された。名義は柳田となっているが、実際の執筆者が大藤である旨の付記が載せられている。この「日本民俗学」で前記の二つの学史記述が合体された。江戸時代の国学から書き始め、東京人類学会の活動などのいわゆる前史にふれ、雑誌や学会組織を中心に記述することは、日本民俗学史の「正史」スタイルとして確立された。一九三五年以降については日本民俗学講座以外、柳田の民俗分類に従って住制、生産、農村生活史、人の一生、年中行事、祭

礼・神事、民間芸能、方言、民謡、昔話、伝説、心意現象などの主題別に論文や出版物を紹介しているが、学問をとりまく時代状況、学者の活動などについてはほとんどふれられていない。

当時はまだ距離が近すぎて整理、評価することができなかったといえるかもしれない。しかし戦後になっても状況はあまり変わらなかった。

初めて戦後までの学史整理を試みたのは関敬吾の「日本民俗学の歴史」（一九五八年）^⑥であるが、一九三五年以降の民俗学に関しては山村・海村調査、民俗語彙集の編纂、民俗学普及としての出版活動以外、「戦争が激しくなるにつれて学界活動はほとんど停止状態になった」^⑦という表現で括り、戦後の「日本民俗学講座」、民俗学研究所へ筆を移している。一方、大藤時彦は一九九〇年に『日本民俗学史話』（三一書房）を出版し、かつて執筆した学史に関する文章を収録した上で、明治・大正・昭和初期の動きについてはさらに詳細に補足している。しかし、叙述の下限は依然として一九三五年に置かれている。

以上のような通史以外にも、民俗学史にふれた研究は数多くある。しかし民俗学を専門とする者の学問の過去への関心は多くの場合、研究グループや雑誌の変遷、理論や方法に関する直接の論述、具体的なテーマに関する学説などにあり、その場合の「学史」も限りなく「民俗研究の内的発展史」であった。

一九七〇年代、「柳田国男生誕百年記念シンポジウム」に代表されるような「柳田ブーム」^⑧が起こった。思想史出身の後藤総一郎の指導のもとに柳田国男研究会が組織され、柳田の「正史」に向けての伝記として一九八八年に『柳田国男伝』を世に出した。柳田を中心に、彼が関わった人物や事項に関する資料を網羅的に収集し、時系列に配置するこの著作は、柳田国男個人を対象とする点で厳密な意味での学史ではない。しかし「日本民俗学は、（中略）そのものの成立と展開はすべて柳田個人の年譜に対応している」^⑨と言われるほどの、日本民俗学における柳田の重要性を考えれば、事実上、民俗学者によるものと異なった学史のスタイルとして認められよう。学者の活動、社会状況との関連などに注目した点で「研究の内的発展史」では対象にされにくい学問と外部との関係とい

う、学史のもう一つの側面が呈示されている。『柳田国男伝』では一九三〇年代半ばの「日本民俗学の確立」(第十章)と戦後の「新しい国学を求めて」(第十二章)の間に、もっぱら太平洋戦争に限定されているが、「戦時下の学問と生活」という章が設けられているところは、その特徴をよく現している。

勿論、柳田国男と時代との関わりへの注目も『柳田国男伝』を待つことはなかった。戦争との関連で最初に指摘したのが益田勝実や橋川文三であった。その時、「戦争のまったただ中では〈実際生活〉以外ではない戦争の歴史性、戦争の本質などについて『研究法』のいう〈平民の反省〉をすることができなかった」¹⁰、「柳田が自認したところでも、柳田は少なくとも戦争という国民総体の運命にかかわる大きな疑問に対して、ほとんどなら答えるところがなかった」¹¹というように、批判的な理解が示されていたが、やがて柳田の戦争への回避的態度、あるいは政府の一部の政策や当時の民族学に対する批判を取り上げ、柳田を評価する論調が主流となった¹²。後藤総一郎もその一人であった。彼はかつて「柳田国男と戦争」(『歴史公論』一九七六年五月号)という一文を発表し、天皇制ファシズムに屈服・便乗し、翼賛文化運動を担ぐ当時の多くの知識人と一線を画し、己の学問に閉じこもる禁欲的態度を持ち続けることができた数少ない知識人の一人として柳田を高く評価している。後藤は柳田国男研究会の指導者で『柳田国男伝』の監修者であったことを考えれば、『柳田国男伝』は基本的に柳田と彼が指導する民俗学を戦時下の抵抗として評価していることは理解しやすい。民俗学の戦争協力として、一九四一年大政翼賛会の委託による「食習調査」だけがあげられており、出版統制という現実的な制約のもとでのやむを得ないことだと説明されている¹³。

■ 責任重視論の問題

国民国家論、植民地主義論の影響を受けて、一九九〇年代、村井紀『南島イデオロギーの発生』(一九九二年)、子安宣邦「一国民俗学の成立」(一九九三年)¹⁴、川村湊『大東亜民俗学』の虚実(一九九六年)など柳田国男や

日本民俗学の植民地主義、ナショナリズムを指弾する一連の研究が現れ、従来柳田の思想的意義を高く評価してきた柳田論に一石を投じた。とくに「一国民俗学」としてのイメージが強いため、それまで戦争との関連を含めて柳田の思想や日本民俗学の歴史を論じる際、視線が主として日本国内に限定されてきただけに、植民地主義という批判の衝撃は大きかった。それに対して、視点が否定的な側面にのみ向けられ、柳田の文章を断片的に取り上げている論法には想像と推論と飛躍があるとして、さっそく激しい反論が現れてきた¹⁵⁾。

戦争と植民地との関連において、柳田国男や民俗学が果たした歴史的役割の評価をめぐって、意見は分かれている。

「擁護派」は、指導者である柳田国男は直接政治的局面に関わるようなことを避けていたことや「一国民俗学」という発想には拡張的な侵略政策に抵抗する思想的素地を持つこととして、時局に関わった事実があっても過酷な状況下でのやむを得ないことだと理解する。それに対して「告発派」は、柳田国男はもともと学問の実用に積極的であり、彼の文章や『民間伝承』誌上には一九三九年以降、時局迎合的な発言が多く見られ、『民俗台湾』の座談でその植民地主義的発想がよく現れていると指弾する。勿論この両者の間に、発言があっても実践の意欲がないと強調する「穏健擁護派」、そして意図的な迎合ではないが実質は親和的だと主張する「穏健告発派」も存在し、議論は多岐にわたっている。さらにたとえば新谷尚紀「戦争と柳田民俗学」(二〇〇二年)のように、「複数性」¹⁶⁾という考え方にふれ、「同時代的状況を推定する限り、それ以上でもなくそれ以下でもなかった」¹⁷⁾と説く「折衷派」も現れてきた。

戦時下の民俗学についての再考は、その植民地主義を強く批判する著述に触発されたものであったことを考えれば、全体として戦争責任の問題が重視される傾向を持つのも不思議ではない。しかし責任論重視の姿勢はこれからの学史研究の発展を束縛する問題点をいくつも孕んでいる。

まず論法として、最初から評価につながるか批判につながるかという視線で事実を捉え、都合のいいところだけ

を取り上げて強調してしまう恐れがある。次に資料面では、今まで判明した事実の中ですでに充分自説をサポートする材料があるとして、決定的な（と思われる）「証拠」でもなければ、新しい事実を求める欲求が衰えてしまう可能性はある。そして最も重要なのは、責任があるか否かについての発言そのものが目的となり、生産性の乏しい議論に陥る危険性である。

責任の有無を論じるのは議論のあり方の一つで、それ自体は学史研究の副産物であって目的とすべきではない。事実、もっぱら責任についての議論は限界が見えてきた。一九九〇年代に熱かった戦時下の民俗学についての議論がその後早くも停滞気味であったのは、決して既に研究し尽くされたからではない。戦時下における民俗学組織や民俗学者の活動に関しては、まだ多くのことが不明である。これらの事実を明らかにし、民俗学の体制、理論と実践などの角度から具体的に検討していく作業が求められている。

もう一つ、責任重視論には、柳田国男個人への関心が高く、それをもって日本民俗学の全体を代表させる傾向が強い。或いは柳田国男個人への関心が高いため、責任論になりやすい一面があるというべきかもしれない。確かに日本の民俗学にとって柳田国男の存在はあまりにも大きい。しかしそのみでは日本の民俗学史が柳田の個人史から脱出することはできない。

指導者である柳田と民俗学は別である。大きく重なりながら同一ではない。同じような指摘はつとに第一次「柳田ブーム」の只中にあった一九七四年に、福田アジオによって強烈なインパクトをもってなされた¹⁸⁾。福田の関心は科学としての現代民俗学方法論の構築にあり、「柳田と日本民俗学はイコールではない」¹⁹⁾と声高に主張するのも、民俗研究に関する柳田の方法的説明の絶対性を否定するためであった。しかし、民俗学における柳田の位置を相対化する必要は決して研究方法だけではない。民俗学の組織体制においても事は同じである。柳田と民俗学が別であると理解し、両方の動き、そして二者の関係を重視する視点が必要である。

一九九〇年、福田は「日本の民俗学とマルクス主義」（『国立歴史民俗博物館研究報告二七』）の中で、マルクス主

義から転向して民俗学に入った者に注目し、彼らの理論的思考力と組織力が民俗学の発展に大きく貢献したと指摘している。その視点は近年、主として鶴見太郎の研究に見られ、特に、一九三〇年代から民俗学の組織化に大きく関わっていた橋浦泰雄を中心とした一連の資料発掘や研究⁽²⁰⁾が果たした貢献は大きい。この流れは民俗学史における組織論を提起した研究として評価すべきであるし、その研究対象はさらにマルクス主義者以外にも広げられるべきであろう。

■ 日本民俗学と中国

一方、なぜ中国が問題になるのか。これまで日本民俗学の学史研究において中国が登場しなかった現状を考えれば、この疑問は当然なものとも言える。

学問としての日本民俗学と中国との関わりといえば、まず学問である中国民俗学との関係があげられるだろう。日中戦争前の中国民俗学の発展について、大まかに北京大学時代（一九一八～一九二六年）、広州中山大学時代（一九二七～一九三〇年）、杭州時代（一九二九～一九三七年）という三つの時期に分けられるが、北京大学時代では周作人（一八八五～一九六七年）⁽²¹⁾と江紹原（一八九八～一九八三年）⁽²²⁾、中山大学時代では何思敬（一八九六～一九六八年）⁽²³⁾、杭州時代では鍾敬文（一九〇三～二〇〇二年）、婁子匡（一九〇五～二〇〇五年）⁽²⁴⁾などの重要人物は日本民俗学と直接あるいは間接的な関わりを持っていた。そして一九三二～三三年末まで鍾、婁が主宰する杭州中国民俗学会と折口信夫が主宰する民俗学会との間に一時組織的な交流も試みられていた⁽²⁵⁾。一九三七年一月、婁は民俗専門の月刊誌『孟姜女』を創刊し、日本にも寄贈したが⁽²⁶⁾、まもなく戦争によって雑誌発行が中断され、婁はそれまで北京、広州、杭州などで活躍していた多くの民俗学者と同じく内陸の奥地に移った。両国の民俗学が再び組織的な交流を持つのは、一九八〇年末、中国民間文芸研究会の招聘により日本口承文芸学会が訪中するのを待たなければならなかった⁽²⁷⁾。

以上のように両国民俗学の間の影響と交流は限定的なものであり、しかも日本民俗学が理論的かつ組織的に確立された一九三〇年代半ば以降は、『孟姜女』の寄贈以外ほぼ空白を呈している。川村湊は『大東亜民俗学』の虚実³¹において朝鮮、台湾、満洲、南洋を取り上げて「大東亜共栄圏」各地域における民俗学の成立と発展に対する日本人の影響を論じているが、中国に関して章を立てず、「おわりに」で直江広治の論文を要約する形で中国民俗学の成立を概観するに留まった。その後も、朝鮮や台湾などについて、邱淑珍「柳田国男と台湾民俗学」（二〇〇一年）²⁸、呉密察「『民俗台湾』発刊の時代背景とその性質」（二〇〇二年）²⁹、崔吉城「日帝殖民時代と朝鮮民俗学」（二〇〇〇年）³⁰年など幾つかの研究が発表されたが、しかし「柳田国男と中国民俗学」や「日本占拠時代と中国民俗学」などのような研究はまだ現れていない。これはすべて研究者に責任があるのではなく、関連する事実が少ないのも大きな要因だと思われる。

しかし、中国民俗学ではなく、中国との関わりで考えれば、様相は異なる。

一九三〇、四〇年代の戦争は、アジア・太平洋の広い地域にわたっていたが、日本にとって中国は一貫して最も重要な存在であった。戦争と植民地支配を維持するために、軍事をはじめ政治、経済、文化など多面にわたる体制づくり、そしてそれらの体制を支える人的資源が必要であり、中国との関連で多くの人々が動員されていた。

従来の学史研究ではほとんど取り上げられてこなかったが、日中戦争に入り、中国民俗学との交流が途絶えたと同時に、日本の数多くの民俗学者が中国と関わりを持つようになっていった。その身分は軍人、記者、調査員、教育者また学者など様々であり、展開していた活動も多様であった。彼らによる数多くの中国関係の通信や投稿は中央の『民間伝承』『旅と伝説』から地方の『ひだびと』などに至る有力民俗誌に載せられ、誌面をにぎわした。さらに戦争が終結する直前に「柳田国男先生古稀記念会」の国外大会のような、日本民俗学が中国を中心とした東アジア地域に組織的に関わろうとした計画及び実践もあった³¹。

■ 帝国日本と「一国民俗学」

従来、日本民俗学に関しては「一国民俗学」、つまり日本のための、日本人による、日本に限ったの研究というイメージが強く、外部からの一般的な解説も、民俗学者による学史の整理も、柳田の思想としての「一国民俗学」の揺らぎに言及することがあっても、日本民俗学に対して確立から戦前、戦後を通じて「一国民俗学」の連続というような印象を共有しているように見える。

しかし中国との関連で展開された日本民俗学者の活動は、単なる「一国民俗学」からの一時の逸脱として処理されるべきものではなかった。それは個人というレベルに留まらず、当時の日本民俗学の一部であり、そして互いに無関係な存在ではなく、日本民俗学と内地以外の地域との関わりという大きな文脈を共有している。その活動は、柳田を中心とした日本民俗学との密接な関係を通して、日本民俗学の理論及び組織の両面に確実に影響を及ぼしていた。

戦時下における日本の民族学者の活動を民族学史に位置づけるべく、精力的に追究している⁽³²⁾ 中生勝美は「植民地と戦争の影に隠された日本の民族学史に焦点を当てることは、『告発』でもなければ、『弁明』でもない、歴史的事実の発掘とその『記憶』にあるのではないだろうか⁽³³⁾」と主張している。「一国民俗学」という性格が強かった日本民俗学において、植民地と戦争の影に隠された学史に焦点を当てることは、歴史的事実の発掘と「記憶」に留まらず、当時の日本民俗学の国内活動だけでは把握できない「一国民俗学」と帝国日本との関係を浮かび上げさせることにあるといえよう。

本論は以上のことを念頭におき、中国との関わり方について実証的な研究を積み重ねていくことによって、理論及び実践における初期日本民俗学と帝国日本における内地以外の地域との関わりの実態、及びその性格を明らかにすることをめざしている。

■資料と用語

本論が利用する主たる資料は以下の通りである。

① 『柳田国男全集』（筑摩書房、一九九七年）、続刊中。全三十六巻・別巻二巻が予定、以下『全集』と記す）を中心とした柳田のテキスト。柳田国男の著作集として代表的なものは今まで一九六二―一九七一年に刊行された『定本柳田国男集』（全三十一巻・別巻五、以下『定本』と記す）であった³⁴。しかし、『定本』は著者の書き入れ本を底本にしており、柳田の意思によって、本人名義で発表出版されたものでも筆記整理などの一部が除外されている。刊行中の『全集』は、初版本をベースとして柳田国男が関係する文字資料を網羅的に集め時系列に収録し、巻末に最新の研究成果を取り入れた詳細な書誌的情報が付されており、民俗学史研究の基本資料としても価値が高い労作である。本論は柳田国男のテキストに関してこの『全集』に依拠している。

② 成城大学民俗学研究所蔵「柳田文庫」と「橋浦泰雄関係文書」（以下、「橋浦文書」と記す。「柳田文庫」は柳田国男の寄贈によつて農政学、方言関係以外の柳田蔵書、雑誌数万冊を保管している。一部の蔵書に見られる柳田の直筆注記によつて業績の背後にあった柳田の民俗学研究法の特徴や形成過程、当時の関心や評価などを垣間見ることが出来る。そして所蔵する戦前の国内外の人類学・民俗学関係の著書、雑誌、調査記録などは学史研究に重要な資料を提供している。一方、「橋浦文書」は橋浦泰雄が残した膨大な個人資料の中から、一九九〇年代に成城大学民俗学研究所に移管された民俗学組織と関係する筆記、書簡、各種記録などによる資料群である。一九二五年から個人的に柳田に師事し、日本民俗学の組織化にその初期から深く関わり、戦前長く『民間伝承』の編集長を務めていたという経歴の持ち主だけに、貴重な一次資料が数多く含まれている³⁵。

③ 『民間伝承』『旅と伝説』を中心とする中央、地方の民俗学関係雑誌、出版物、そして初期民俗学と関係が深い人物の個人資料、著作集、書簡、そして関係者による戦後の回想など。これらは従来、学史研究の基本資料でもあり、本書ではその都度引用参照されているが、ここではいちいち名前をあげない。

④ 民俗学専門でない雑誌や新聞類、日本の外務省、防衛省など政府機関所蔵の中国調査関連資料、及び中国の大学、檔案館所蔵の関連資料など。日本民俗学と民俗学者をとりまく環境やその活動を全面的に理解するため、これらの資料もできる限り参照している。

ここでは、本書における用語について断っておきたい。

当時の日本は「大日本帝国」であった。一九三〇年代初期、日本は今日の領土以外に、朝鮮、台湾、樺太のような植民地、関東州のような租借地、南洋群島のような委任統治地、南満洲鉄道附属地のような一部統治地区、蘇州、杭州、天津、漢口、重慶などの専管租界、上海のような共同租界を持っていた。後の「満洲国」や中国の内モンゴル、華北、華中などにおける臨時政権は実質日本軍の支配下にあった。

以上のように、帝国日本の支配が届く地域は法的に見ればその性格は様々である。しかし当時の日本人は必ずしもこれらを厳密的に区別はしていなかった。むしろ日本列島が「内地」「本土」、或いは「国内」³⁶、それ以外の植民地、支配地などが一括して「外地」、或いは「海外」、「国外」、「内地以外」と呼ばれていた。本論ではこの意識上の内外の違いが重要であり、文献の引用を除き、「内地」、「内地以外」或いは「国外」「国内」と表現する。

一九三〇、四〇年代では正しくは「中華民國」であったが、「中国」という表記に統一する。その空間的範囲を第二次世界大戦終了時の領土とする。

本書では固有名詞については基本的に当時の日本側の呼称を使用する。

勿論、用語や呼称には強い政治性が含まれており、当時の日本側の呼称を無批判に使用することはその行為の正当性への黙認となってしまう危険性がある。「満洲事変」と「九一八事変」、「支那事変」と「七七事変」など戦争そのものに対する呼び方がそうであるし、地名に関してたとえば「北京」は、一九二八年六月に国民政府によって「北平」と改称され、一九四九年九月まで中国側ではこの呼称が使用されていたのに対して、盧溝橋事変後の一九三七年十月、日本軍の支配下でその名前が「北京」と改められ、一九四五年まで日本側と傀儡政府ではこの呼称を

使っていた。「新京」と「長春」、「奉天」と「瀋陽」なども、これと似たような経緯があった。さらに広域について、たとえば「満洲」と「東三省」、「蒙疆」と「西北地方」、「北支」と「華北地方」、「中支」と「華中、華東地方」、「南支」と「華南地方」など、日中間では呼称が異なるだけではなく、それが指示する範囲にもずれがある。中国人である筆者の立場からすれば、これらについてすべて中国側の呼称を使用する進め方は考えられる。しかし、日本語で執筆した本書はまず日本人を讀者として想定している。中国側の固有名詞の多用で理解を妨げ、或いは固有名詞について説明するために文章を冗長にしようとは避けた。その意味で本書では一部の用語についてあえて日本人が馴染みやすいものをそのまま使用することにした。

2 本書の構成

第1章では、日本の民俗学の確立過程と初期の活動を辿り、民俗学雑誌に掲載された中国関係記事を整理する。前者に関して、「一国民俗学」の論理の創出、木曜会の形成とその意味、民間伝承の会と『民間伝承』に現れる組織の特色、山村・海村調査と語彙集の編集にみる民俗学研究法の特徴などを中心に論じる。後者に関して、主として『旅と伝説』と『民間伝承』を材料に、日本民俗学における「中国の不在」を論じ、それが一九三九年を境にして大きく変化したことを指摘する。

第2章では、民俗学者太田陸郎（一八九六～一九四二年）を取り上げる。太田はまず兵庫県下で郷土史の解明に努め、一九三〇年代半ばから日本民俗学の体系化に積極的に参与し、重要な役割を果たした。一九三八年夏、彼は軍人として中国に赴き、その後軍務の傍ら、揚子江中流域の民俗学的研究を行ったが、一九四二年シンガポールからの帰国途中、飛行機の事故で亡くなった。

本章では太田の日本及び揚子江流域での活動を辿り、彼が日本研究の延長線上に中国研究を位置づけ、そこに強

い文化的関心が見られると指摘する。さらに国内学界との密接な交流を通して、日本の民俗学が中国を対象とすることが可能であるというイメージを日本民俗学界に与えた存在として、太田の役割が大きいと指摘する。

第3章では、民俗学者大間知篤三（一九〇〇～一九七〇年）を取り上げる。大間知は東京帝国大学新人会の成員であったが、柳田門下の木曜会の初期成員となり、日本民俗学の組織化に貢献する。一九三九年二月から建国大学に赴き、精力的な調査研究活動を展開した。戦後日本に戻り、民俗学研究所、『民間伝承』の活動に積極的に参加し、社会的な手法によって家族・婚姻制度の研究において業績をあげた。

本章は主として大間知の日本及び中国東北地方での活動を追跡し、多民族的环境のもとで、彼は理論的に民俗学が民族学に含まれるべきだという認識を獲得したことを明らかにし、そして満洲族、ダウール族を中心とした民族調査研究を検討することによってそこに見られる強い政治的傾向を指摘する。

第4章では、太田や大間知と比べて若い世代の民俗学者直江広治（一九一七～一九九四年）を取り上げる。直江広治は東京文理科大学東洋史科在学中から、木曜会に顔を出す。一九四一年日本人学校の教師として北京に赴任し、後、講師としてカトリック系の北京輔仁大学に籍をおく。戦後帰国し、民俗学研究所の運営に携わり東京教育大学、筑波大学の教育活動で民俗学のアカデミック化に深く関わり、比較民俗学を提唱する。

本章は、彼の日本及び北京を中心とした調査、教育活動などを整理し、彼には最初から中国と民俗学という二つの関心があったことを指摘し、そして北京時代において彼は中国の理解に努め、中国における日本民俗学の普及のために積極的に活動したことを描き出す。

個々の研究者に即した議論を踏まえて、第5章では日本民俗学の組織的な活動として「柳田国男先生古稀記念会」を取り上げる。当記念会は柳田国男の古稀を記念すべく一九四三年秋から準備が進められ、一九四四年一月から、①九地方協議会地区を単位とした民俗学地方大会の開催、②北京、新京、台北、京城、張家口等における国外民俗学大会の開催、③国外を含む民俗学内外の学者や有名人士による記念論文集の刊行、④雑誌『民間伝承』での

特集号一年間連続発行、などの内容が予定されていたが、敗戦で一部しか実行できなかった。

本章では発案から中止までの経緯を明らかにし、当事業を、戦時下において国外で活躍した民俗学者の活動やその人脈、そして国内における木曜会有力メンバーの推進と指導者柳田の積極性の増大などを背景に、民俗学の東アジア規模の統合と再編成を意識したものであると位置づけ、この構想の組織面及び理論面の特色を検討する。

終章では、これまでの検討を通して戦時下の日本民俗学と中国との関わり方の特徴を総括し、初期の日本民俗学にとってこの関わりは如何なる意味を持っていたのかを考察する。そして戦後の日本民俗学にもふれ、学史の回顧によって如何なる示唆が得られるのかを考えてみる。

第1章

日本民俗学の成立期と中国

1 「一国民俗学」の確立

1 「一国民俗学」の論理

多くの国と同じように、日本においてもちに民俗学の分野に属する事象に対する興味関心はかなり古い時代まで遡ることができるが、学問としての民俗学は近代的国民国家の形成を背景に成立したものである。そして日本の民俗学も他の近代学問と同じように欧米から学んだのである。

一八八四年、まだ東京帝国大学理学部生物学科に在学していた坪井正五郎（一八六三～一九一三年）を中心とする十名の若者は、のちに「人類学会」と名乗る研究会を始め、会報を発行した。日本人による組織的な人類学研究の嚆矢とされるこの研究会は、初めは考古学的な傾向が濃厚であったが、風俗習慣に対する関心も早い段階から見られた。渡瀬莊三郎の「我国婚礼ニ関スル諸風習ノ研究」^①がその最初であり、一八九三年以降、人類学会の夏期

講習会を機会に組織された土俗会の六回の総合討論^②はその集中的な試みであった。当時こうした伝統的な慣習を「土俗」、それを研究する学問分野を「土俗学」と呼んでいた。土俗学の視線はもっぱら日本国内に向けられていたが、しかしそれは「後進国」として植民地を持ちえなかった当時の状況によるものであり、坪井が「土俗調査より生じる三利益」で「決して日本国内の事に付いてのみ云ふべきものではございません。世界万国諸人種に通じても亦同様の事が云へる」^③と唱えたように、初期の土俗学は人類普遍的な志向があった。その関心はイギリス流の「残存 *survivals*」概念を前提に人類の進化史を再構成するところであり、その場合、進化の段階の頂点をヨーロッパの現代におき、人類の原始文化を闡明できる資料として、「文明社会」の、とくに辺鄙な地域に残る「奇習」が注目され、「未開社会」の慣習と同じく価値を付与されていた。

やがて日本は日清（一八九四～一八九五年）、日露（一九〇四～一九〇五年）の二つの自国以外で行われた戦争の勝利によって台湾（一八九五年）、樺太（一九〇五年）、朝鮮（一九一〇年）を植民地にし、さらに中国東北地方での利権を手に入れ、後発ながら「先進国」に仲間入りすることができた。かつて土俗会を提唱した鳥居龍蔵（一八七〇～一九五三年）のように、日本国内よりも、新たに獲得した植民地や大陸へと調査に出かける動きが多くなり^④、一方、ナショナリズムが高揚し、伝説、童話、俚諺、信仰その他諸慣習を材料に日本民族、日本国民を研究する姿勢が強くなった。「日本民族の民族生活の凡ての方面に凡ての現象の根本的な研究」^⑤をめざす「郷土研究」の強調と、「地方、下層の低級なる文化こそ、実はその国民の思想信仰、生活の正味に候へば、その国民を研究する材料としては、好個のものにこれあり候」^⑥という理解に基づく「民俗学研究」の提唱が同じ時期に登場したことは偶然ではなかった。

しかしこの時期、学史でその重要性が強調されている『郷土研究』においても、高木敏雄の神話研究や柳田国男の民間宗教者研究など具体的な対象についての関心はあったが、研究の多くは文献資料に頼っており、学問としての民俗学の輪郭はまだ明らかではなかった。

■「ナショナルな学問」の国際的志向

周知のように、日本において好事家の道楽というイメージを塗り替え、学問としての民俗学の社会的地位を確固たるものにしたのは柳田国男であり、日本民俗学の成立と発展は彼を「抜きにしては一言も語れない」⁽⁷⁾といわれるほどである。柳田の民俗学への関心にはエリート農政学者としての社会的使命感と、帝国日本の国民としてのナショナルリズムがあつたのは明らかである⁽⁸⁾。官界を離れて東北、沖縄の旅行を経験し、さらに国際連盟常任委任統治委員としてジュネーブに滞在することを通して政治的、学問的刺激を受けた柳田は、関東大震災の衝撃及び震災復興に向かつての国民的情熱を背景に、大正末期から昭和初期、「本筋の学問のために起つという決心」⁽⁹⁾をかためるようになった。「本筋の学問」というのは、つまり『郷土研究』時代のように個別に追求されたテーマと異なり、目的、対象、方法が統一された体系的な学問を意味している。

その場合の一つの特徴は、フレイザー流の「残存」という概念を受け継ぎながら、人類の進化の段階を計るエスノロジーの学問を「ナショナルな学問」に転換させることであつた。柳田は一九二六年五月の「Ethnologyとは何か」という講演で、「Ethnologyと呼ばれる方面だけは、行く行く次第にNational国民的になるべきもの」⁽¹⁰⁾だと主張している。

しかし注意すべきなのは、ここでの国民的なエスノロジーはのちの「一国民俗学」と同じではなかつたことである。同じ講演で「国別研究の機運」について柳田は以下のように説明している。

我々の文化史学は、世界の実験のただ一つの機会である。我々が果たして大陸を見棄てて島に入込んだ種族であらうとも、乃至は洋海を漂泊して此島に辿り着いた種族であらうとも、異なる環境が異なる文化を発生せしめた特殊なる一つの例として人間社会の可能性に、兎に角新しい前面を展開して居ることは一つである。さ

ういふ国民の学問に対して（後略）⁽¹¹⁾。

日本の「文化史学は、世界の実験のただ一つの機会である」。ここで国民の学問とは、明らかに人類文化発展の特殊な事例としての日本文化史研究を意識している。

その意味を正しく理解するために、それよりやや早い時期、一九二五年十月の講演を見てみよう。そこで柳田国男は以下のように述べている。

そこで我邦の学問が大に進んで、行く行く世界全体の文化史観、乃至は宗教史観が之に由つて立て直されなければならぬのと同じ様に、国内の地方研究が次第に全帝国の政治意見と、生活の理想との上に反映し、少なくとも今日の取次学問を駆逐する時代を楽しみにして働く者が、何れの方面にも段々多くならうとして居る⁽¹²⁾。

柳田国男は興そうとする学問に、世界への寄与と欧米への対抗という二つの性格を負わせている。論理的に欧米に対抗することによって世界に寄与する。即ち欧米への対抗は手段であり、世界へ寄与することは目的であった。二十年代半ばには、手段よりも目的が特に強調され、地方研究の帝国日本への寄与は、日本研究の世界への寄与という構図のもとで説明されている。

この時期の柳田国男が批判したのは「白人の先入主」即ちその「狭隘なる民族優劣観」⁽¹³⁾、特に「黄白といふ類の人種差別」⁽¹⁴⁾といふものであった。欧米人による調査の限界を指摘しながらも決して排除するのではなく、むしろ「白人学問の功績」として評価している。

それから今一段と学問に向かない民族はどうするか。島々の人に追々と自分で研究する力を授けると、さう

は待つて居られなぬから今の内に、外部の手で調査してやるのと、二者の得失利害は容易には決し兼ねる。行く行くは我々日本人の如く、何れも自分で考へ得るやうになるべきであらうが、其資料の消えて行くのが早いから、兎に角に不完全不精確の嫌ひはあつても、やはり外の者の探訪記述をも同時に歓迎するの他はないのである。此点は我国内の各地方でも同じことで、土地に正しい学者の養成せられる迄は、棄てて置くよりも旅人の觀察記、又は伝聞の類までを大切にし、又住民に代つて考へてくれる学者に感謝すべき場合が多いのである。之を要するに白人の物ずき筆まめは、大体に於て学問上有益であつた（一九二五年五月）¹⁶。

このように、学問樹立を考案し始めた初期、柳田の思考には国際色が色濃く現れている。一九二五年十一月に彼が岡正雄、有賀喜左衛門、石田幹之助、田辺寿利など新進気鋭の若手研究者を編集陣に『民族』を創刊し、海外の研究動向などに熱心だつたのも、こうした国際的志向が背後にあつたからである。

■ 中国民俗学への好意

柳田はこの時期にアジアのほかの国、とりわけ社会発展段階が近似し、自己認識の能力があると判断していた中国やインドの状況にかなり関心を持ち、中国で興りつつあつた民俗学の気運に対して好意を示している。

我々日本人は母語の感覚を以て直接に自分の遠い過去を学び得る幸福を十二分に利用するのみならず、尚進んでは此悦びを隣国に分つ義務がある。支那は現在に於ても確かに智識の大宝庫であり、それが開かれると世界は均しく益するのであるが、彼等自身の鍵は失われたか、然らざれば大に錆びて居る。それが最近に至つて始めて心付く者が出て、改めて史書以外の資料を直接に民間に求めようとして居る。印度人も次第に同じ意識に眼が覚めた。彼等の学問が此方向を取るべき時節も到来した（一九二五年五月講演）¹⁶。

隣国支那などもいつになつたら、無学者の歴史が明かになることかと思つて居ると、却つて日本人よりは御先きへ、民俗学の国民化が始まらうとして居る。是は我々に取つては何よりも心丈夫なことで、斯ういふ民衆心理のつかみにくい国で、外人ばかりが寄つてたかうつて所謂觀察をして見たところが要するに群盲の象を評するに過ぎない。それが片手を世界の思想學問にかけた自国人によつて解説せられようとするのは大きなことである（一九二六年五月講演）⁽¹⁷⁾。

一九二五年頃「最近に至つて始めて心付く」状態で、「此悦びを隣国に分つ義務」を感じていたが、一九二六年になると「却つて日本人よりは御先へ民俗学の国民化が始まらうとして居る」と評価するようになった。中国民俗學に対する柳田国男の認識には明らかに大きな変化があつた。

中国では一九一八年から歌謡の収集が始まり、一九二二年北京大学歌謡研究会が発足し、中国初の民俗学・民間文學の専門誌『歌謡週刊』が創刊された。さらに一九二三年北京大学風俗調査会、一九二四年一月同方言調査会が創立された。一九二五年六月これらの組織は国学門編輯室、明清史料整理会と連合で『北京大学研究所国学門週刊』（一九二六年十月から月刊、一九二七年末休刊）を発行するようになった。柳田の評価の変化は、この中国民俗學の發展の状況に関連すると思われるが、その際、中国に関する情報源が身近にあつたことの意味が大きかつた。

当時、日本の學界において中国の學問動向に関する重要な情報源の一つは、石田幹之助であつた。石田はタイムズ特派員から中華民國大總統顧問になつたモリソンの蔵書が三菱財閥の岩崎久弥によつて一括購入された一九一七年から、一九三四年まで文庫充実の任に当たつていた⁽¹⁸⁾。彼は中国民俗學に関する新しい動きにいち早く注目し、その関連雑誌、出版物を意図的に集めていた⁽¹⁹⁾。このような石田を『民族』の共同編集者として迎えたことや、岡正雄の友人として中国人留學生何思敬が柳田宅に出入りしていた⁽²⁰⁾ことは、柳田の中国への関心の外在的な環

境となった。

柳田は中国民俗学が国民化していく動きとともに、その学問が「片手を世界の思想学問にかけた自国人」によるものであるところを高く評価している。国民的な学問を志すと同時にいかに世界を意識しているかは、ここでもはっきりと見て取れる。そして同じ「片手を世界の思想学問にかけた自国人によつて」進められているという意味において、「何よりも心丈夫」とは中国民俗学への連帯感だと理解できる。この連帯感はその中国人にも確認できる。

当時東京帝国大学大学院在学中の何思敬は、石田幹之助を通して中国民俗学の進展を知り、閲覧の便も得られ、大いに感動して早速『民族』一―五（一九二六年七月、署名何畏）に「支那の新中国学運動」を寄稿した。そこで日本において「自己の民族が歩み来つた真実の道程、民族の過去の生活、文化の真相を探究する要求」によつて促された「民族的研究を興し且つ民族学の特設部門たる日本学の創生」が起きているとして、中国の新しい動向をこの日本での状況に重ねて紹介している。「偶然にしてはよくも同じ時期に、同様の性質の民族学的運動の二つの霧囲気が東洋に現はれたではないか。光輝の明暗こそ異なれ、此の二つの霧囲気が期せずして東洋に現はれたことは慶賀すべきである。此の二つの霧囲気の洋々たる未来を想像せば私の希望は恍惚し、私の責任感が湧き出る。此の二大霧囲気の接近と融合を希望しつゝ、大陸のそれを紹介することは意味あること、思ふ」²²と、この中国民俗学運動の日本への最初の系統的な紹介は、また同時に両国の民俗学運動の連帯を展望したものであった。

■ 三分類の提出

しかし、この後柳田国男において次第に「一国民俗学」の理論が形成されつつあった。まず一九二七年四月から七月『人類学雑誌』に「蝸牛考」が連載された²²。全国各地に現存する二〇〇を超える蝸牛の方言を素材に展開されたこの論の要旨は、冒頭の「方言の地方差は、大体に古語退縮を表示して居る。さうして一篇の蝸牛考は即ち

其例証の一つである」という箇所に見えるが、しかし、その意図は決して方言の分布を究明するところにあるのではない。のちの「一国民俗学」を念頭に置けば、「蝸牛考」の意味は少なくとも、①地域差は時代差に転換できることを方言を例に明示したこと、②日本全国を一つの文化範囲として国全体の変遷を示したこと、③比較研究法に大きな意味を付与したことなどが指摘できる⁽²³⁾。

次の問題は、方言以外の民俗事象について方法の適用を示すことであるが、その役割を果たしたのは一九二九年十月『三宅博士古稀祝賀記念論文集』（大塚史学会編）に発表された「婿入考」⁽²⁴⁾であった。この論文は現存の結婚の儀礼、結婚後の共同生活の場の所在などを手掛かりに、日本の婚姻史を婿入式から嫁入式へと変化してきたものとして示している。形態だけの検討が可能な方言と異なり、民俗事象の場合、他の要素との複雑な関連なども問われることになる。そこで柳田国男は、若者組や娘組の役割、隠居の意味、通婚圏や女子労働の変化などの要素を組み合わせて、一つの相互連関する全体として描き出してみた。「蝸牛考」ほど明快な周囲の分布を示せなかったが、多数の事例を収集分類し、地域差を時代差に転換させて国全体としての変遷を説く、という柳田民俗学の基本スタイルは、ここで確立されたと見てよい⁽²⁵⁾。

しかし、つとに指摘されているように、柳田国男の以上の論述の背後には、欧米の人類学、民俗学の理論の影響があり、とくに比較研究の理論形成の過程においてG・L・ゴム『歴史科学としての民俗学』*Folklore as an Historical Science* (1908)の影響が大きかった⁽²⁶⁾。蝸牛考と婿入考の研究は、日本における民俗学研究の存在意義を十分なインパクトを持ってアピールできたとはいえ、欧米の学問に対抗できるような独自性を獲得したとは言い難い。日本民俗学の独自性として、柳田が用意したのは民俗事象の分類であった。

すでに彼は一九二七年二月の社会教育指導者講習会での講演において「何時からとも無く口から耳へ、祖父母から孫曾孫へと語り伝へた歴史を概括」⁽²⁷⁾するものとして「口碑」という言葉を提唱したが、一九二八年八月の「木思石語」になると、「口と耳とで承継いで居る昔のもの全体を総称する」「口碑」に対して「目で見るもの、即ち

主として手足の働き」を「体碑」と、「直接に心で感ずるもの」を「心碑」とし⁽²⁸⁾、三分類への模索を始めている。三分類の完成は一九三〇年前後であった。この年の四月、東京人類学会第四二七回例会で柳田は「社会人類学の方法及び分類」という講演を行った。そこでは彼は「眼で見られる」「生活様式」、「耳で聞くべき」「生活解説」、「感覚に訴える」「生活観念」という三分類を唱え、それぞれ「旅人の民族学」「滞在者の民族学」「郷人の民族学」に対応していると説明している⁽²⁹⁾。続いて約一週間後の四月二十五日より三日間、柳田は十時間にわたり、長野県西筑摩郡洗馬村長興寺で行われた『真澄遊覧記信濃の部』刊行記念会で「民間伝承論大意」を講演した。そのとき聴講者に配られた要項は、『民間伝承論』出版の際、「序」として載せられている。

第一部は生活外形、目の採集、旅人の採集と名づけてもよいもの、これを生活技術誌というも可。在来のいわゆる土俗誌は主としてこれに限られ、国々の民間伝承研究は通例これに及ばなかつた。

第二部は生活解説、耳と目との採集、寄寓者の採集と名づけてもよいもの。言語の知識を通して学び得べきもの。物の名称から物語まで、一切の言語技術はここに入れられる。これがまた土俗誌と民間伝承論との「境の市場」であつた。

第三部は骨子、すなわち生活意識、心の採集または同郷人の採集とも名づくべきもの。わずかな例外を除き外人はもはやこれに参与するあたわず⁽³⁰⁾。

この目―旅人、耳―滞在者（寄寓者）、心（感覚）―同郷人という対応関係は柳田国男の分類案の骨子である。「民族学」「土俗誌」などの用語は、欧米の人類学・民俗学を強く意識していることを物語っている。従来の欧米流の分類は基本的に民俗事象そのものの性格によるものであるのに対して、柳田案の特徴は、調査の手段・方式、調査者と調査地の関係性という次元まで含めたところにある。

一九二〇年代後期から民俗学の理論化への関心が次第に高くなり、欧米の民俗学理論書の翻訳出版が始まったが⁽³¹⁾、民俗事象の分類によって民俗学の体系化をはかろうとする学者は多くなかった。同じく先覚者の一人、折口信夫の分類案(周期伝承、階級伝承、造形伝承、行動伝承、言語伝承)⁽³²⁾と比べれば、人間の感性や経験に訴える柳田案は明快で、社会一般にとつてより魅力的であつたことがわかるだろう。

■「一国」の論理

柳田はとくに第三部の意味を強調し、地方の人々が主体的に民俗学に参与することを呼び掛けている。しかし、柳田における「郷土」は同時にかなり伸縮自在の概念でもあることに注意しなければならない。『民間伝承論』での分類の説明においては一番狭義の意味で使われているが、一番広い範囲、即ち柳田が学問としてめざそうとした究極の目的は、「日本人」の「郷土」としての「日本」であつた。

郷土研究は斯様に研究の地域を小さく限る(「我町村」―筆者)といつても、目的は全日本を対象としてゐるのであるから、研究地域は狭く限つても、全国的な比較総合のための基礎の単位なのである⁽³³⁾。

私は可なり愛着の深い郷土をもつて居りますけれども一方には日本人といふ意識が非常に強い。私等の郷土研究はその日本人といふ共通の気持から郷土を見たいといふのであります⁽³⁴⁾。

と柳田は主張している。「郷土」は、その出発が生まれ育つ故郷である町村であることが望ましいが、帰着が常に日本でなければならなかつた。しかし、ここの「全日本」「全国」とは決して台湾、樺太、朝鮮などを含めておらず、もっぱら「一国一言語一種族の国」⁽³⁵⁾としての「日本」、即ち「帝国」の中核としての「内地」をその最大範

「一國」の論理は学問としての合理性と同時に、意図的であるかどうかを別にして、結果的に内地以外の地域を排除することによって、「帝国日本」内の差別構造を是認し強める一面を持っている。

柳田国男は「分類の後に必要なのは索引の作製である」と述べ、第三部との関連で「言葉、方言による索引が都合がよい」という。なぜなら「民俗語彙とも称すべき方言」による分類なら「ごく微細な心持まで小さく分類することができる」からである。

物には必ず名があるものである、従うてことさら外国語を借りずとも間に合う。(中略) 今日あまりにも無反省に漢字や横文字で簡単に済まされている学問上の用語なども、それに一致する方言があるかないかといふことなどは一応検討してみる必要があると思う⁽³⁶⁾。

対象を認識、比較、説明、判断する学問活動の基礎と前提である概念そのものを、日本という特別な現実に密着する「民俗語彙」によって表現することは、柳田にとって「喜ばしい発見だと秘かに誇っている」ものであった。なぜなら、この方法としての「民俗語彙」の発見は、前述した研究主体としての日本人の優位性に対する強調と合わせれば、儒学と中華思想、欧米中心の學術用語と普遍主義的理念に対抗する可能性を獲得したからである。日本にとつての外来文化、そして学問の作法といえば、近代以前は中国、近代以降は欧米の影響が強かった。柳田は、この両者と関係を切断することで、学問の独自性、そして学問が構築しようとする日本の固有文化の独自性を作り出そうとした。しかし同時に、その論理によって一国内に収斂する傾向にある学問は如何にして世界とのつながりを独自に再獲得することができるのかという課題も抱えるようになった。

「世界民俗学」はまさにそれを意識しての提言として理解されるべきであろう。『民間伝承論』では彼は以下のように述べている。

一 民俗学が各国に成立し、国際的にも比較総合が可能になって、その結果が他のどの民族にも当てはめられるようになれば、世界民俗学の曙光が見え初めたといえるのである（四七頁）。

国際的な比較総合によって普遍性のある法則を発見する「世界民俗学」は、民俗学の将来のあるべき姿として描かれている。しかし、同時に「世界民俗学」はただ「一国民俗学」の完成を待ってからの第二段階であり、「一国民俗学」から「世界民俗学」に進む回路についてほとんど指摘されていないということにも注意する必要がある。最も具体的に論じられた箇所を見てみよう。

この学問は何といつても人種が単位であるゆえに、まず一国内の整理ができることが必要である。国々の文庫が整理せられて後にこそ、世界の民間伝承の整理も可能となるのである。（中略）資料を国々で整理し、それをどしどし翻訳するとよい。少なくとも一つの言語一つの人種を単位として、一通りの知識のコミュニケーションを作り、その後で国際的協同に進むべきである³⁷。

「人種」はここでは「日本民族」の「民族」と同じ意味で使われており、違う箇所では「種族」³⁸と表現されることもある。柳田はいずれ「国際的協同に進むべき」と展望しているが、しかし個々の「一国民俗学」と世界の関連についてはただ「どしどし翻訳する」としかふれていない。もし日本と同じように各国の「一国民俗学」は「微細な心持」を持つ「民俗語彙」を基礎として展開するのなら、果たしてその翻訳は可能なのかどうか。柳田は「世界民俗学」が到達すべき彼岸であると主張しながら、「しかし比較法の恩恵はその華かなる夢を実現するには、今日はまだ十分に材料が揃っていないといふ他はない」³⁹と述べているのは、単なる材料の未整備という研究の現状

に留まらず、方法上の展望がまだしつかりできていないこととも関係すると思われる。

一九三〇年代の理論確立期になると、世界的展望にはふれているものの、一九二〇年代ほど積極的な主張が見られなくなった。外国人の調査に関しては「形を描いた記述は年を遂うて精細を加えるに反して、心を察したものはいつまでも疝気筋で、多分の臆断を交えているといふのが、今までの通弊であつたと言つてよい」、「言語の障壁はかなり高いからであつて、これを隔てた観察は實際は高の知れたものだつた」⁽⁴⁰⁾と否定的な評価を下している。

むしろ「この複雑を極めた世界全体を一つとして、これを現在のごとくならしめた力と法則とを、尋ね出す」⁽⁴¹⁾ことを目的とする「世界民俗学」を無限に遠い未来に据えることによつて、「日本人」によつて「日本」を知る学問として、内地範囲での資料蒐集、分類、比較によつて「一国一言語一民族の国」の文字なき歴史を構成する「国民民俗学」に集中することの正当性を強調している。限りある資源を絞られた課題に集中するという戦略は日本民俗学の一時の繁栄をもたらしたといえる。

しかし反面、結果的に、「日本」以外の地域との関係を切り捨て、「純粹日本的なもの」の追求に走り、そして「まず日本を」という当面の課題をいかにも民俗学の究極的な目的であるように取り違える傾向も現れてきた。「一國」を強調する理論が完成を見たとき、一九二〇年代半ばに見るような、中国やインドなど日本と同じく自己認識の能力を有する後発国に対する関心も後景に退くことになった。

2 学問体制の確立と組織的な活動の展開

民俗学の理論が次第に形成され、一九三二年一月に柳田はすでに「『一国民俗学』といふ名称は、幾たびか私が唱へんと欲して躊躇して居た所であるが、もう今日となつては大膽僭越と評せられる懸念無しに、此名の新学問が将来日本の土に繁り栄えんことを、祈念し又希望し得られるやうである」⁽⁴²⁾と宣言できるようになった。次は実践の問題である。

「二国」範囲において均質な資料を数多く蒐集することは、柳田がめざす民俗学の必須条件である。「採訪採集は民間伝承の学問の根本である。採集の方法のいかんはこの学問の死活を制する重大な問題である」⁽⁴³⁾と強調するのはそのためである。

これまで資料の蒐集は主として『郷土研究』、『民族』、『民俗学』、『旅と伝説』などの雑誌によって行われた。しかし、そこに二つの問題があった。一つは、研究資料としての「残存」は地域的分布に濃淡の差があることである。つまり「郷土には、我々の学問的調査の対象としては、階級があり階段があるともいえるのである（中略）どこをやつてもよいといふわけにはいかない」、「この点は一国民俗学と同じで、郷土郷土の調査研究がすべて同じでないわけである」⁽⁴⁴⁾。もう一つは報告の資料としての信憑性が得にくいことである。つまり「知らせたい人がする自然報告ともいふべき報告」が望ましいが、それは「採集者の資質に左右せられることが多い」⁽⁴⁵⁾のである。

柳田の学問に対して理解があり、基本的な訓練を受けた調査者の養成、及び計画的な調査の実施が急務となってきた。

一九三二年四月二五日に有賀喜左衛門、池上隆祐、熊谷辰次郎、小林正熊、野口孝徳、後藤興善、大藤時彦が参加する「郷土生活の研究法」の会が開かれ、さらに十一月二六日から一九三三年三月一日まで村落社会学会の依頼によって、柳田はのち『郷土生活の研究法』（一九三五年）後半の主な内容となる口述を六回していた⁽⁴⁶⁾。

同年七月二日、柳田国男は民俗学会主催の民俗学公開講演大会で、「民俗の採集と分類」という講演を行った。民俗学会は、『民族』停刊後、折口信夫を始め、早川孝太郎、石田幹之助、有賀喜左衛門、岡正雄、松本信広、宇野空奎などの同人が創設した学会で、一九二九年七月から機関誌『民俗学』を発行していた。その中で、序章で述べたように、一九三一年から一九三三年十二月に休刊するまで、当時中国民俗学の中心であった広州中山大学、そして杭州にある中国民俗学会などと一時交流関係を持っていた。しかし、柳田は民俗学会の活動には一切関与せず、雑誌にも寄稿はしなかった。この講演は唯一の接点であったといわれている⁽⁴⁷⁾。時期的にも、テーマ的にも、

この時点で独自の民俗学理論が確立できた自信が現れ、民俗学会の場を借りて自分のめざす民俗学の普及に努めた柳田国男の姿がそこにあった。

翌年九月十四日木曜日、柳田の書斎で、民間伝承論の第一回講義が行われ、出席者は後藤興善、大藤時彦、比嘉春潮、杉浦健一、大間知篤三の五人で、翌週の二二日の二回目から橋浦泰雄、山口貞夫、坂口一雄（一九〇一〜一九八六年）が加わった⁽⁴⁸⁾。講義は十二月まで計十二回行われ、その内容は後藤興善によって整理され、日本民俗学初の概論、『民間伝承論』として一九三四年八月に出版された。

講義が終わった後、参加者は研究会の常設を提案して柳田から同意を得た。おそらくその時点で補助申請中の山村調査が学術振興会に許可される結果（或いは見込み）をすでに知っており、調査の趣旨を理解する有能な調査者の育成が念頭にあったと思われる。こうして一九三四年一月十一日第一回例会が行われ、柳田民俗学の発展の上で中心的な役割を担う木曜会が誕生した。

この第一回の会合に、前年の講義参加者である後藤、大藤、比嘉、杉浦、大間知、山口など以外に、守随一、倉田一郎、島袋源七、金城朝永、萩原正徳の名前も見られる⁽⁴⁹⁾。以降、一九四七年三月二三日民俗学研究所の「談話会」に発展的に解消されるまで、木曜会の会合は三〇〇回以上行われており、木曜会は組織と理論の両面において初期の民俗学活動にあつて中核的な地位を占めていた。注意すべきなのは木曜会のメンバー（表1参照）の多くは、マルクス主義から転向して民俗学に入った者達であり、また東京帝大をはじめ、早稲田、慶応、国学院など、有名大学の学歴を有するエリート達であった。

柳田国男は民間伝承の豊富に残される地域に対して集中的に調査することを、すでに一九二〇年代の初めに考案していた。ジュネーブに発する前、啓明会への補助金を申請するため、折口信夫に執筆、提出させた「民間伝承採集事業説明書」において、民間伝承の濃淡の差にふれ、採集地として沖繩諸島、鹿児島湾、赤名峠、吉野川上流、琵琶湖、天竜川中流、奥羽六県の七箇所をあげている⁽⁵⁰⁾。自分と折口信夫の名もあげているが、想定した調

査者は主として佐々木喜善であった(51)。

一九三〇年代になると、組織的な調査活動によって全国範囲での資料収集が可能となってきた。一九三四年、当時農林次官である石黒忠篤と東京帝大図書館長・宗教学の権威姉崎正治の推薦のもとで、日本学術振興会から三年

表1 木曜会主要成員一覽

研究者氏名	出身・学歴	柳田との関連	政治活動	戦時中の動静	備考	山村生活主要調査地
比嘉春潮 (一八八三～一九七七)	沖縄・沖縄師範	大正十年柳田の沖縄旅行中知遇を得る	沖縄でエスペラント研究会を組織	改造社勤務	柳田のインフォーマントと自己規定	群馬県多野郡中里村
橋浦泰雄 (一八八八～一九七九)	鳥取・高等小学校	大正十四年個人的に師事	第二、三回メーデーで検挙、生協運動を指導	「民間伝承」の編集・発行「画家	戦後、日本共産党入党	宮城県伊具郡筆甫村 静岡県周知郡気多村 高知県高岡郡髙原村
瀬川清子 (一八九五～一九八九)	秋田・東洋大学専門部	昭和八年木曜会参加		東京市立一中教員	昭和十二年、日本民俗学講座婦人座談会を設立	長崎県南松浦郡久賀島村 愛知県北設楽郡振草村
関 敬吾 (一八九九～一九九〇)	長崎・東洋大学専門部	昭和五年、萩原正徳の紹介で柳田を訪れる	一時、唯物論研究会に参加	民族研究所嘱託	昔話研究の領域に業績	滋賀県愛知郡東小椋村 大分県玖珠郡万年村
最上孝敬 (一八九九～一九八三)	東京・東京帝国大学(経済)	昭和八年頃木曜会参加		庶民金庫勤務	早くから民俗調査での統計資料を重視	三重県飯南郡森村 長野県上伊那郡美和村 新潟県東蒲原郡東川村
後藤興善 (一九〇〇～一九八六)	兵庫・早稲田大学	大正二一年に訪問し、言語学の研究を勧められる		早稲田大学教員	講義「民間伝承論」の筆記を担当	青森県西津軽郡赤石村 大分県南海部郡東中浦村
大間知篤三 (一九〇〇～一九七〇)	富山・東京帝国大学(独文)	昭和八年講義「民間伝承論」に参加	新人会会員、共産党員「三一五事件で検挙	国民思想研究所員 満洲建国大学教授	戦後、社会学手法を導入	茨城県多賀郡高岡村 広島県山県郡中野村 愛媛県宇和郡御楨村

佐々木彦一郎 (一九〇一～一九三六)	秋田・東京帝国大学(地理)	昭和八年木曜会参加	新人会会員	東京帝国大学地理学講師、病没	遠縁である石田英一郎を柳田に紹介	埼玉県秩父郡浦山村 福井県丹生郡城崎村 静岡県加茂郡中川村
大藤時彦 (一九〇二～一九九〇)	山口・早稲田大学中退	昭和八年講義「民間伝承論」に参加		大橋図書館勤務	晩年の柳田が最も信頼をおく	東京府西多摩郡檜原村
桜田勝徳 (一九〇四～一九七七)	宮城・慶応大学(史学)	昭和五年「明治大正史」の編纂を手伝う		アチック・ミュージゼ アム所員	朝鮮総督府への就職を柳田が引き止める	鹿児島県肝属郡百引村
金城朝水 (一九〇五～一九五五)	沖繩・東京外国語学校	「南島談話会」を通じて交流を始める	沖繩一中時代、方言撲滅運動に反対	大橋図書館司書、三省堂編集員	伊波普猷に終生師事	山梨県西八代郡上九一色村
守随 一 (一九〇四～一九四四)	東京・東京帝国大学(経済)	父親が柳田と一高で同級。十代の頃から出入	新人会会員、満鉄調査室業務主任、出獄直後病死	武蔵高校などで講師、満鉄調査部新京支社員	日本エスプレント会会	長野県東級郡信級村 京都府北桑田郡知井村
杉浦健一 (一九〇五～一九五四)	愛知・東京帝国大学(宗教)	昭和八年木曜会参加	民族研究所嘱託	警視庁衛生課勤務、のち中学校教員	戦後、東京大学文化人類学科初代教授	島根県仁多郡八川村 福島県大沼郡中川村
倉田一郎 (一九〇六～一九四七)	富山・日本大学高等師範部	昭和九年守随の紹介で木曜会へ	警視庁衛生課勤務、のち中学校教員	明治大学地理学講師、病没	資料を採集	和歌山県日高郡上山路村
山口貞夫 (一九〇八～一九四三)	京城・東京帝国大学(地理)	昭和八年、佐々木彦一郎の紹介で出入り	民族研究所嘱託	明治大学地理学講師、病没	焼畑に関する先駆的業績	山形県最上郡安楽城村 鳥取県東伯郡小鹿村
鈴木棠三 (一九一〇～一九九三)	静岡・国学院大学(国文)	昭和六年、国学院大学国文大会への講演依頼が機縁で師事	社団法人更生協会勤務	藤田徳太郎らと『民謡研究』刊行		栃木県安蘇郡野上村

(出典：鶴見太郎『柳田国男とその弟子たち』一九九八年、三四～三五頁。一部加筆)

間各三千円の助成金を得て、五月、各府県一ヶ所を目安に、主として木曜会を中心とした若き民俗学徒によって、共通の百項目の『採集手帖』に基づいて日本民俗学の初の全国統一調査が行われていた。正式に「日本僻諏諸村に於ける郷党生活の資料蒐集調査」と称するこの調査は、「努めて連絡の少ない山間地帯の、やや孤立した村落を物色した」⁽⁵²⁾故、普通、山村調査といわれる。

調査が始まった一九三四年五月に、柳田国男は『郷土教育』四三に「今日の郷土研究」という一文を寄せた。この文章では山村調査は学問の一環であると同時に、「日本らしさ」、「日本文化」、「日本精神」を再構成し、「日本人に特有の心意」を明らかにする行動でもあったことが如実に示されている。

最近の世相に結びつけても云へる所であつて、公の機関までが非常時非常時と云ひ出してこの方、我々にひびくものは、形は無いが或一種の日本らしさである。抽象的に日本文化とか、日本精神とかいへばよいやうだが、一寸説明の出来ぬものである⁽⁵³⁾。

近頃自分が計画して居る山村生活に関する調査（中略）僻陬の地にはまだまだ旧習は意外に存し、日本人に特有の心意は予想以上に残つて居るかも知れない⁽⁵⁴⁾。

民間伝承の研究に、「今見るいつさいの生活事実から、過去の変遷の痕が尋ねられる」⁽⁵⁵⁾希望だけではなく、「日本人のみが持つてゐる美質と思はれる性情」を「今日古風と謂はれてゐる村人の生活様式の中から、出来るだけ具体的にその根原を探り出す」⁽⁵⁶⁾願望も託されている。

調査地は正式に五二村⁽⁵⁷⁾に上り（初年度二二村、次年度目十五村、三年度十六村）、一村一人、二回ないし三回に分けて調査し、平均二〇日ほど滞在したという。調査結果は随時木曜会で報告され、新聞雑誌にも発表された。一九

三五年三月、一九三六年三月に中間報告書が一冊ずつ公表され、助成期間が終わった後の一九三七年六月に、正式な報告書として『山村生活の研究』（民間伝承の会編）が発表され、当時盛んだった農村研究に重要な影響を与えた⁽⁵⁸⁾。

一九三七年五月から、山村調査に準じる形で「離島及び沿海諸村に於ける郷党生活の研究」通称海村調査が始まったが、日中戦争の勃発と長期化により調査が難しくなり、助成金も打ち切られたため、第二年度が終わる一九三九年四月、三〇村を調査できた時点で中断し、報告書『海村生活の研究』（日本民俗学会編）も戦後の一九四九年四月になって初めて出版された。

中央の「熱心な旅行家団」による「同時採集」⁽⁵⁹⁾は大きな成績を収めたが、全国的な資料蒐集は、地方人の協力が不可欠であった。資料の質が「採集者の資質」に左右されないように、研究の目的や基本的な心得などについての教育が必要となってくる。これまで柳田が各地に旅し、講演する形が唯一であったが、木曜会が代表している中央の組織的基盤が形成されるにつれ、中央での集中的な講義が可能になった。

木曜会のメンバーのうち、守随、大藤、山口、佐々木を中心に、最年長の橋浦と連絡を取りながら、各府県からなるべく一人の聴講者を得るべく、聴講無料、参加者に対する旅費の一部補助を打ち出すなど、講習会の準備が入念に行われた⁽⁶⁰⁾。

一九三五年七月三一日から八月六日まで、「最初地方五十人在京廿人の予定を百五十名にならざるを得なかつた程の盛況」⁽⁶¹⁾を誇る第一回日本民俗学講習会が行われた。八月三日に全国から集まった講習会参加者六〇余人が柳田の自宅に招かれ、全国的な連絡機関の設置と機関誌の発行が決定し、この件は最終日の六日に参加者の承認を受け、全員入会という形で民俗学研究の全国組織「民間伝承の会」が結成された⁽⁶²⁾。

九月十八日に「各地の採集記録や研究報告とは独立して、どこ迄も連絡の任務の為に働く」、日本民俗学の研究のための「用心深い水先案内」⁽⁶³⁾として、機関誌『民間伝承』が発刊された。橋浦は雑誌の編集体制について「先

生の意向をもとにして発行名義人は守随一君にし、編集所、発行所も彼の自宅で、月二回ないし三回の会合をしました。編集委員は専ら木曜会の中心メンバーがあたりました。大藤、桜田、大間知、倉田（一郎）、杉浦、瀬川、それに私などでした⁽⁶⁴⁾と回想している。

『民間伝承』一九三五年十月の第二号に会名、目的、会報、会員、会費、世話人などの項目からなる「本会小規」を載せている。世話人の顔ぶれは東京の木曜会の中心メンバー、そして民俗学研究が活発な地方の有力研究者であった。柳田―東京の木曜会―地方世話人―地方民俗研究団体という日本民俗学の組織上の特徴を現している。全国組織の成立に伴って、「郷土は手段なのであります」「研究物体は日本人の生活そのものである」ことを強調し、互いに没交渉の「郷土研究」と一線を画するために、柳田は意図的に従来使われてきた「郷土研究」に代わって「民俗学」という言葉の使用を勧めるようになった⁽⁶⁵⁾。

2 日本民俗学と中国——『旅と伝説』と『民間伝承』から

1 『旅と伝説』の位置

『旅と伝説』は一九二八年一月の創刊号（図1）から一九四四年一月戦時下の統制によって自主休刊を宣言する通巻一九三号まで、ほぼ毎月刊行していた。柳田国男に「この雑誌の如く、初号から終刊まで十六ヶ年以上、一月も抜かさずに読通したものは私にも他には無い⁽⁶⁶⁾」と言わしめたこの雑誌はその名がよく知られている。従来民俗学研究では、特定テーマに即した事例報告の資料集としてしか使用されておらず、学史上での位置づけも、民俗学色の強い一般誌で、民俗学に関係する特集などが編まれていたというものに留まっている⁽⁶⁷⁾。しかし実際、当誌は一九二九年『民族』が休刊して以降、一九三五年『民間伝承』が創刊されるまで、柳田の指導の下で中央の民俗誌として民俗学の普及と研究の発展に重要な役割を果たしていた。

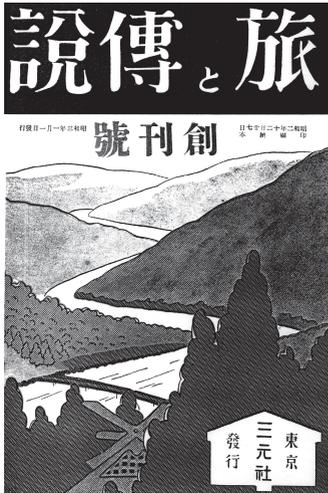


図1 『旅と伝説』創刊号（1928年1月）表紙

『旅と伝説』は、萩原正徳⁽⁶⁸⁾を編集発行兼印刷人として東京市京橋区尾張町二一・二〇にある三元社（一九二九年八月から東京市神田区西今川町五番地に移転）から発行され、鉄道省から補助金を受けて創刊したものとされている。鉄道省の本意は、観光案内のような雑誌にして、鉄道の利用を宣伝する方針だったらしいが⁽⁶⁹⁾、同誌創刊号に載せられている「郷土紹介 伝説民謡並に写真募集」の知らせを見れば、『旅と伝説』が最初から違う志向を持っていることがわかる。

余りに、泰西物質文明に陶醉した揚句誇るべき我大和民族固有の面目が刻々失はれんとしつつあるのであります。それにつれて吾々の祖先が残して呉れた尊い芸術や伝説も次第に滅亡に瀕してゐるのを真に遺憾に思ふ次第であります。これがために一部の識者は伝説保存のために奔走されつつありますが、各地の人々が相集まつて保存しようとする、民衆的なものはありませんでした。それで本誌はその意味に於て全誌面を開放し、読者と共にその支持と隠れたる伝説の研究に努めたいと思ひます。その方法として読者諸君に伝説（広い意味に解釈して、民謡、風俗、名物、名所旧跡記事やそれに関した写真等）を募集します。（後略）

すなわち雑誌の目的は日本固有文化への回帰にあり、しかも「一部の識者」つまりエリートによる上からの行動ではなく、各地の人々による「民衆的な」運動をめざしている。そして伝説の蒐集という啓蒙的な役割とそれに関する研究という学問的な役割を持ち合わせた性格が想定されており、手段として広い意味での伝説や写真を重視している⁽⁷⁰⁾。

この募集は、『旅と伝説』の立場や特色をよく表している

表2 柳田国男『旅と伝説』寄稿本数

年別	本数
1928年	4
1929年	3
1930年	8
1931年	3
1932年	2
1933年	9
1934年	7
1935年	1
1936年	3
1937年	2
1938年	1

出典：『旅と伝説』各号より作成。

此外郷土芸術の各方面へ大いに発展して行くべく準備して居ります」との編輯後記が見え、本格的な研究への意欲が強くなり、対象の範囲も拡大していく方針を示している。これらの動きを積極的に支持した「大家」とはすなわち柳田国男であった。

八月号に、柳田の「木思石語」の連載第一回が始まり、しばらく姿を消した募集の知らせは「伝説、民謡、口碑並びに写真募集」として再び登場し、「何に限らず研究上有益な物、又世間に知られて居ない物」、そして「郷土芸術（舞踊、造形）」「余り知られて居ない各地の方言、コトワザ、謎」「珍しい土地の紀行文」などについて募集をしている。

「口碑」という用語が加えられたのは、柳田の文章と呼応している。前述のように、柳田はこの「木思石語」の第一回目では、「口碑」「体碑」「心碑」という民俗事象の分類を提言しており、後の三分類への模索を始めていた。その後、柳田国男は一九二八〜一九三〇年最初に「木思石語」など伝説の研究⁽⁷¹⁾、一九三〇年以降の昔話の研究⁽⁷²⁾から、一九三三年からの「年中行事調査標目」⁽⁷³⁾など精力的に寄稿し続けていた(表2参照)。それだけではなく、執筆者として中山太郎や早川孝太郎などを紹介し、地方での人脈を生かして多くの特集を企画、編集していた(表3を参照⁽⁷⁴⁾)。

『旅と伝説』の柳田への寄稿依頼は前からあった⁽⁷⁵⁾が、柳田の寄稿は一九二八年八月が初めてであった。実はそ

が、しかし初期の内容からみれば、その趣旨は必ずしも貫かれておらず、民俗学と共通項を持つとはいえ、基本的に文学的なものや好事的なものが多かった。しかしその状態は長く続かなかった。創刊半年後の七月号で、「采月号には皆様が伝説を研究なさる上に其扱ひを如何にすべきかに付いて大家の意見を發表致す積りです。(中略)

表3 『旅と伝説』郷土玩具以外の特集一覧

特集テーマ	掲載号数	刊行年月	柳田の寄稿
昔話特集	4-4	1931年4月	「昔話採集者の為に」
婚姻習俗特集	6-1	1933年1月	
誕生と葬礼特集	6-7	1933年7月	「生と死と食物」
盆行事特集	7-7	1934年7月	「神送りと人形」
昔話特集	7-12	1934年12月	「昔話の分類について」
民間療法特集	8-12	1935年12月	
食制研究特集	9-1	1936年1月	「食制の研究」
昔話特集	14-5	1941年5月	

出典：『旅と伝説』各号より作成。

表4 三元社出版単行本一覧

1929~30年	菅江真澄著・柳田国男校訂『真澄遊覧記』
1930年	日本放送協会東北支部『東北の土俗』
1930年	室谷邦夷『極北秘聞』
1931年	佐々木喜善『聞耳草紙』
1933年	喜納緑村『琉球昔噺集』
1933年	日下承二『人間は二也』
1936年	中市謙三『野邊地方言集』
1941年	田村栄太郎『板倉伊賀守』
1941年	山下謙一『山西通信』
1942年	野間吉夫『シマの生活誌：沖永良部島探訪記』
1942年	柳田国男『木思石語』
1942年	宮尾しげを編『風俗画報綜覧』
1943年	宮武省三『九州路の祭儀と民俗』

出典：『旅と伝説』各号広告、新刊紹介より作成。

同時に、『旅と伝説』は、当時民俗学会の一件で柳田国男との間に確執があつた折口をはじめとする国学院大学や、高橋文太郎などアチック・ミューゼアムの学者も執筆陣に取り入れ、さらに交歓台、新刊紹介などを通して、地方研究団体・研究家の活動や出版物を紹介し、全国の民俗学活動の連絡役を務めていた。三元社は一九三二年十月号から隔月に南島談話会の機関誌「南島談話」を『旅と伝説』に併載し、一九三二年数ヶ月間一旦終刊していた『民俗

の前の七月、『民族』三二五への寄稿を最後に、柳田はその編集から離れ、孤立の中で民俗学独自の理論や方法を模索し始めたが、それと同時に、『旅と伝説』に自分の足場を移したのである。『旅と伝説』も、柳田の文章に読者の注意を促し、その論旨に合わせて読者からの報告を求め、柳田の活動や出版物の最新情報を随時報告するなど、常に柳田国男を中心としていた。

発展の重要な一端を担っていた。

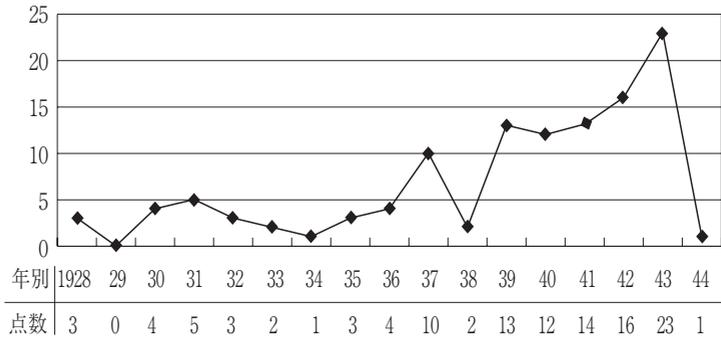


図2 『旅と伝説』中国関係記事変化図

出典：『旅と伝説』各号より作成。表紙、新刊紹介、後記などを含む。1943年までは各年12号、1944年は1号。

芸術』の編集も引き受けていた。同時に民俗学関係の出版にも次々に着手した(表4参照)。

一九三〇年四月号から十二月号にかけて、長期購読者として計九四九名の名簿が載せられたが、十二月号の編輯後記によれば、これは読者全体の五分の二にあたるという。当時の読者は凡そ二五〇〇名前後と推定できる。民間伝承の会の会員数は会が創立されて十年後、驚異的な増加を見せた一九四四年でようやく二〇〇〇名を越えた⁽⁶⁾ことを考えれば、民俗学が世間一般に普及するにあたって『旅と伝説』が果たした役割は決して軽視すべきではない。

『旅と伝説』は柳田国男主導のもとで創刊されたものではなかったが、一九三五年『民間伝承』発刊以前、柳田の大きな影響と支持のもと、民俗学運動の最大の発信地であり、同時に『民族』と『民間伝承』の間に柳田の活動を支えた中央誌としての地位を有していたといえよう。

一九三五年『民間伝承』が発行されてからも、三元社から『昔話研究』(一九三五〜三七年)が出版され、『旅と伝説』は山村調査の報告や長編の民俗学論考の主要な発表の場であり、「一国民俗学」の枠を堅く守ろうとする『民間伝承』と異なる独自の立場で、日本における民俗学

2 『旅と伝説』における中国記事

日本民俗学と中国の関わりをまずこの『旅と伝説』に即して見てみよう。一九二八年一月から一九四四年一月まで『旅と伝説』に掲載された中国関係の記事(表紙、新刊紹介、後記などを含む)の本数を年別に整理すれば、一九三二年(五本)、一九三七年(十本)以外低い数値で推移しているが、一九三九年を境に急速に増え、毎年十数本も見られ、さらに停刊前の一九四三年に二〇本を超えピークに達したことがわかる(図2参照)。

■ 満洲への視線

民俗学関係ではないが、『旅と伝説』において最初の中国への言及は第二号の大笹吉次郎「切符の話」であった。文章の最後にこう書かれている。

以上の話は日本国内の話ですが、満洲地方へ旅行さるゝ方の便法として日満連絡の切符があり、遠くは中華民国、欧州、アジア連絡の切符まで制定されてゐます。芸術に国境なくと言ひますが、切符にも国境がなくなつたわけです(77)。

時は一九二八年であり、満洲は中華民国の領土であった。しかし日露戦争の結果、日本は朝鮮半島の權益を確保できた上、ロシアから東清鉄道の南半分の鉄道と付属權利を譲り受け、関東州の租借權を獲得し、以降、満洲での勢力を拡張していった。一九一二年にジャパン・ツーリスト・ビューローは半官半民の非営利的な旅行斡旋機関として発足したが、同年十一月満鉄の運輸部にビューロー大連支部が設立され、さらに一九二六年に規模を拡大し会計を本部から独立させた。記念すべき日露戦争の戦跡地として、さらに鉄道や観光旅行などの制度によって、満洲が中国でも日本でもない地域という認識は一般に広がっていった。

一九三〇年一月から四月までの会員名簿には、日本以外の地域の会員は、朝鮮から十一名、台湾から十名、そして満洲からも「安東県池田義雄、大連市岡操、奉天市北島栄太郎、營口菅野九十九」の四名が見られ、他に「南洋」として「ヤートル」と「サイパン」から一名ずつ会員の名前が記されている⁽⁷⁸⁾。満洲は当時植民地であった台湾と朝鮮に次いで、密接な関係がある地域であった。

『旅と伝説』の編輯後記は学問以外の社会・政治情勢についてよくふれているが、しかし満洲事変、満洲国建国などにはまったく言及せず、一九三三年三月号で初めて「外では国際連盟問題が喧しいが、この皮膚の色の同じな隣同志がどうしてかういがみ合はねばならぬかを悲しむ」とふれている⁽⁷⁹⁾。

満洲事変の時にあまりそれにふれなかった『旅と伝説』は日中戦争勃発の直後、早速それに言及した⁽⁸⁰⁾が、一九三八年には桑江常夫の「満洲の履物」(二月)と小寺融吉「満支とところどころ」(十月)以外、中国に関する内容は少なかった。しかし一九三九年一月太田陸郎の投稿「進軍中にみた支那習俗」を皮切りに、中国関係出版物の広告、「日満支交通統一なる」や「日満支の輸送強化」などの交通関係記事⁽⁸¹⁾などを含めて中国関係の内容が一気に増えていった。

一九三九年以前の中国関係記事計三七点のうち、満洲関係は二三点にも上り、満洲への関心は圧倒的に強かったといえる。それに対して、一九三九年以降満洲以外の記事が大幅に増え、満洲の占める比重は次第に低下していった。一九三九年から一九四四年までの中国関係記事約八〇点のうち、満洲関係は十点未満であった。

■ 藤原相之助の比較的視線

満洲についての記事が多い中、一九三〇年十一月「絵姿女房につき」、一九三二年二月「奥州の仙人伝説―枸杞に関する仙話」、九月「おしら神考証」など、満洲以外の中国について積極的に投稿したのは藤原相之助(二八六七―一九四七年)であった。藤原は秋田県生保内の生まれで、医者であり、『河北新報』の主筆を務め、東北の郷土

史研究家として名が知られている⁽⁸²⁾。

藤原の投稿は常に比較的な視線を持つている。たとえば「絵姿女房につき」では、藤原は「中部南部支那の民俗伝説と、日本のそれとは、どつちが元祖か或ひはどつちも元祖ではないのか、その点は分りませんが、相似たのが多いやうです」⁽⁸³⁾と昔話の相似を指摘している。そして「おしら神考証」では、以下のように民族移動を背景として日本、中国、朝鮮との民俗比較を唱えている。

兎も角も今の朝鮮や支那から日本へ渡つて来て帰化したものも、日本から支那朝鮮地方へ行って子孫を残したのも、案外に多く、しかもそれは所謂書契以前からであるらしい。(中略)これを仔細に還元してそれからそれと遡つて行くと、極東に於ける民族転移の事跡と、その各民族固有の当初の習俗とを伺ふことが出来る⁽⁸⁴⁾。

私は先年支那の浙江地方を歩いて居た頃、その俗信の、我が東北地方のそれに近似して居ることをつくづく感じたことがあつた。唯々それ等のことを詳しく記した地方誌料を手に入れることが出来ぬので其の儘にし、之と対比すべき朝鮮方面は忙しい旅行を続けたので採訪の余裕もなかつたが「おしら神」ばかりでなく、いろいろの民俗研究に於て、将来開拓すべき方面は差当り支那と朝鮮にあると思ふ⁽⁸⁵⁾。

その後、しばらく関連する論考は見えなかつたが、一九四〇年六月の「馬蚕神話の分布—オシラ神との関係—」で、藤原は再びかつて提示した課題を取り上げ、『遠野物語』以来、民間信仰史の一大テーマである「オシラサマ」を、中国の神話と関連付けて考察している。そしてかつての歴史背景としての民族移動という主張も一九四二年以降、「大東亜民族」の強調という形では再び登場するようになる⁽⁸⁶⁾。藤原は一九三五年十月に早くも宮城県から民間伝承の会に入会しており⁽⁸⁷⁾、『民間伝承』にも日本東北の民俗について会員通信などを寄せているが、その比較

継承されている。

対象は民俗事象であるが、桑江の視点は当時の日本民俗学との間に大きな距離がある。日本民俗学は外来の影響

表5 桑江常夫『旅と伝説』投稿一覧

掲載年月	表題	備考
1936年9月	「満洲習俗娘々祭」	1936、5、2、煙台にて
10月	「満洲習俗『焼紙』」	
12月	「『由比、伊比、結び廻る』の語源」	1936、7、煙台にて
1937年2月	「満洲と琉球の習俗(一)」	1936、6、満洲、煙台にて
3月	「満洲と琉球の習俗(二)」	
4月	「満洲の迎春行事」	1937、2、16、煙台にて
8月	「帝政ロシアの蒙古調査」	1937、3、21、煙台にて
6月	「満洲の葬礼習俗」	
12月	「満支と琉球の竜神思想」	
1938年2月	「満洲の履物」	

出典：『旅と伝説』各号より作成。

研究の提言や文章などに対して『民間伝承』はまったく反応を示さなかった。

■ 桑江常夫の満洲・琉球風習比較

満洲事変以降の数年間、中国関係の内容が劇的に増えることはなかった。一九三七年には十本を数えているが、しかしこれはこの年七月に勃発した日中の全面戦争と無関係なことであり、中国の民俗誌『孟姜女』の受贈(三回)以外は、ほぼ満洲に関する文章を多数寄せていた桑江常夫という人物の活躍によるものであった(表5参照)。

桑江については当時煙台在住、沖縄の歴史と文化に詳しいということ以外、多くは知られていない。彼は投稿の第一弾「満洲習俗娘々祭」では「土俗研究はまつたくの畑違ひ」と断っており、満洲では九五箇所といわれる「娘々祭」の中、最も規模が大きく歴史が長い大石橋の状況を、当年六月七日春季例祭に参加した経験を踏まえて、口絵を含め六枚の写真を入れながら記述し、さらに沖縄の風習との比較を行っている。ここで示されている実体験に基づく写真入りの紹介や、沖縄との関連への注目などの特徴は以降の投稿にも

を極力排除し、「日本固有」の一面を見るのに対して、桑江はまず現実を見ようとしている。たとえば、彼は当時満洲において日々進行していた生活の「日本化」についてしばしば言及している。「満洲習俗娘々祭」の最後に彼はこう述べている。

娘々祭は大体以上の様なものです。此の祭は満洲で郷土色の最も豊かなものとして知られて居ますが、驚いた事に郷土色を忠実に遺存して居ると思はれるものが少なく、神体は別として替身人、土製人形、農具其他二三の食料品位のもので、他は大部分日本品か、或はその影響を受けて居ます。食料品(飯品の)も出来上りこそ満洲品ですがその主要原料である麦粉は、是又日本品が多いのです。(中略)とにかく日本の商品が、満人の生活に大影響を与へつつある事は争へない事実です。何れその事に就いては後に書き度いと思ひます⁽⁸⁸⁾。

その後、「満洲習俗『焼紙』」では「日本商品」との一節を設け、衣類、反物、アサヒ靴(黒布製の運動靴のような靴)、ゴム靴、玩具仮面、ボロ古着などを取り上げている。

そしていわゆる「琉球文化」には大陸的な要素が濃厚に認められるが、当時日本の「南島研究」ではそれを意図的に無視し、もっぱら「日本文化の原型」として捉えようとしていた。満洲を参照軸としている桑江はそのような姿勢を厳しく批判している。

従来の琉球古代文化史の研究は主に日本との比較研究に限定されて来た。それは琉球古代文化史を全面的に研究するための一段階として真に有意義な事で、これなくしては琉球の古代文化史の全面的研究は不可能である。(中略)がそのために日本的なもののみが琉球文化であり、琉球の古代文化が直に日本古代文化であると考へる事も又不可能である。故に琉球諸島に現存する古代文化を以て直に日本の古代文化を律し、それを再現

して見せんとするが如き試みは危険と云ふよりも無謀に近く良心ある学者の取る可き方法ではないと思ふ⁽⁸⁹⁾。

しかし、柳田を中心とした日本民俗学は『旅と伝説』と密接な関係を持ちながら、そこに載せている内地以外の記事にはまったく関心を示さなかった。桑江のこうした日本民俗学にとって重要であるはずの批判も無視されてしまった。桑江の合計十本の投稿のなかでは、唯一『民間伝承』で取り上げられたのもっぱら日本のことを論じた『由比、伊比、結び廻る』の語源であった。そこで桑江は琉球などの例をあげて日本語の「ユヒ」は支那語の「徭役」が語源であることを説いている。一九三七年二月『民間伝承』二一六で、橋浦泰雄はこれを安易な語源説として厳しく批判した。

その直後の四月に桑江は「南満洲」から民間伝承の会に入会した⁽⁹⁰⁾が、しかし『民間伝承』にはついに投稿することなく、一九三八年二月を最後に『旅と伝説』からも姿を消した。

3 『民間伝承』における中国記事

『民間伝承』は「一国民俗学」のための機関誌として、国内の収集、整理、分類、比較こそが課題であり、中国との関わりは理論上必要ではなく、一九三五、三六年中国関係の記事がほとんどなかったことはその現れである。

日中戦争が始まってから、積極的ではないが戦争関連の記事が現れてきた。最初の段階では中国との関係よりは、日本各地の戦争関連の民俗事象が関心の所在であった。しかしそれは倉田一郎の「かかる時代には千人針や守護札の心意を論考することを以て、この学術当面の課題・貢献と考へるが如き愚かなる儉安と末梢的なる流行とは努めて之を排除せねばならぬ」⁽⁹¹⁾という厳しい批判を受けて一気に姿を消していった(表6参照)。日本民俗学は戦争という現実を学問の対象から切り捨てたのである⁽⁹²⁾。

一九三八年十一月の『民間伝承』四一三では「学の基礎となるべき資料を全国的に洩らすなく蒐集する」ための

表6 『民間伝承』戦時下習俗関係記事

号数	刊行年月	登載欄	執筆者	表題・内容
2-12	1937年8月	会員通信	神戸・山田良隆	「千人結び」
3-1	9月	会員通信	栃木・榎戸貞治郎	「弾丸除」
3-1	9月	会員通信	東京・鈴木棠三	「鉄砲祭」
3-1	9月	編輯雑記	大藤時彦	大間知篤三「千人針」(『東京日々朝刊』)の紹介
3-2	10月	会員通信	秋田・寺田伝一郎	「神様の出征」
3-4	12月	会員通信	東京・鈴木棠三	「事変と信仰」
3-5	1938年1月	会員通信	下総・篠田定吉	「日支事変と俗信」
3-5	1月	会員通信	島根・岡義重	「千度参」
3-5	1月	学会消息	近畿民俗学会	戦争を中心とする習俗も話題
3-7	3月	会員通信	東京・安江正一	「千社詣」
4-1	9月	問題と資料	栃木・榎戸貞治郎	「風祭」
4-6	1939年3月	巻頭言	倉田一郎	「時局下の民俗学」

出典：『民間伝承』各号より作成。

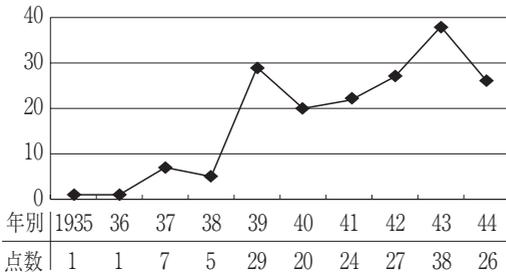


図3 『民間伝承』中国関係記事変化図

出典：『民間伝承』各号より作成。会員通信、新刊紹介、後記などを含む。1935年は4号、1943年は11号、1944年は7号。

合と同じように、一九四〇年以降年々右肩上がりに増加し、停刊にてピークを迎えた(図3参照)。

「最終網」を確立すべく、全国各郡単位の会員獲得の呼びかけが見える。そこで「未だ会員を有せざる郡名」として長野県五郡、愛知県八郡、石川県二郡、福井県八郡、栃木県三郡、埼玉県六郡、神奈川県三郡、千葉県八郡をあげており、「一国民俗学」の基礎作りを急いでいる。

一方『民間伝承』においても、一九三九年を境に中国関係の内容が大きく増加してきた。そして『旅と伝説』の場

表7 『ひだびと』外地関係記事一覧

号数	刊行年月	執筆者	表題	備考
6-12	1938年12月	杉本寿	「中北支那に於ける農業性 —農政経済的」	巻頭
7-3	1939年3月	杉本寿	「中北支那に於ける農業性」	
7-3	3月	三浦薫雄	「揚子江」	
7-9	9月	杉本寿	「中支だより」	巻頭
7-12	12月	三浦薫雄	「支那人と月」	巻頭
8-4	1940年4月	杉本寿	「安徽省山境」	
8-5	5月	八幡一郎	「南洋だより」	
8-8	8月	大間知篤三	「満洲の端午節」	
10-9	1942年9月	沢田瑞穂	「神巫記」	
11-6	1943年6月	長岡博男	「北満の民俗(一)」	
11-7	7月	長岡博男	「北満の民俗(二)」	
11-10	10月	直江広治	「北京東郊民俗聞書」	巻頭
12-5	1944年5月	周作人	「ツブラと茅葺家」	巻頭(訳文)

出典：『ひだびと』各号より作成。

田以外の中央や他の地方の代表的な民俗学者から多数の寄稿を載せているところである⁽⁹³⁾。この雑誌においても一九三九年前後、中国に関する内容が数多く現れてくる傾向が確認できる(表7)。

柳田国男を中心とする全国規模の民俗学会の機関誌『民間伝承』、民俗学発展の重要な一翼を担う中央の民俗誌

3 一九三九年——一つの変わり目

1 日本民俗学の一九三九年

興味深いのは、地方民俗誌『ひだびと』である。この雑誌の前身は『飛騨考古学会会報』(一九三三年四月～一九三四年一月、一、二、二一―号)であり、のち一旦『石冠』(一九三四年五月～十月、二―二、三、四号)と改名したが、一九三五年一月から飛騨考古土俗学会(岐阜県高山町)の機関誌として再出発し、一九四四年五月まで毎月刊行されていた。主な執筆者は江馬三枝子、江馬修、山田白馬、福田夕咲など飛騨考古土俗学会のメンバーであり、柳田は巻頭論文「団子浄土」(五一―三、一九三七年三月)を始め、「飛騨と郷土研究」(五一―八)、「耳たぶの穴」(六一―八)、「女と煙草」(七一―二)、「文化と民俗学」(十一―十)などを寄稿している。この雑誌の特徴の一つは、地方民俗誌として珍しく柳

『旅と伝説』、地域を越えた広い視野を持つ地方民俗誌『たびびと』などでは、ともに一九三九年頃を境に中国関係の内容が多くなり、日本民俗学と中国との関わり方においてここに明らかに一つの変わり目があった。

一九三九年、柳田個人の中国への関心の一斑は、同年二月『科学知識』一九一二（科学知識普及会）のアンケート「最近読んだ書」への返答として、六冊をあげた中で二冊が中国関係のもの（内藤湖南『支那絵画史』、梅原末治『支那考古学論攷』）であったこと⁹⁴からも窺える。当時、中国を主な対象とした『アジア問題講座』（全十二巻、一九三九年一月～一九四〇年四月）が創元社から刊行されており、柳田はその編集顧問の一人でもあった⁹⁵。

2 占領と中国調査の展開

日本の民俗学と中国との関わりに関して一九三九年が一つの変わり目であったことは、戦局の変化、そして戦争を支える諸体制面での動きとも一致している。

一九三八年末の武漢作戦以降、日本は中国の華北、華中、華南地域において鉄道や河川など交通沿線にある重要都市を押さえたものの、その奥地及び西北や西南の広範な地域が支配外にあった。即決戦と予定していた中国との戦争は長期戦に入った。

日本の中国研究は長い歴史を持っているが、しかし歴史、制度、文章、典籍に関するものが多く、中国に渡った人々の紀行文や日記などはあっても、現代中国への関心による実地調査は、近代国家の形成をめざす明治以降のことであった。早くも一八七五年に勸業寮により清朝の物産についての調査が行われ、その後大陸政策のもとで、政府や民間諸機関による各種調査が行われるようになった。しかし中国との戦争が長期戦に入ってから、上の政府や軍部から下の研究者まで、中国を知っているつもりでいて実はよくわからないと改めて思い知らされ、実地調査による現実の中国を理解、把握することが急務となった。

中央において占領地の事務を一元的に管理する部門、現地において外務省駐在機関以上の職能を持つ出先機関と

して一九三八年十二月に興亜院が、そして翌年中国各所に連絡部、事務所が設置された⁹⁶。その後興亜院は早速中国関係の調査活動の整理、統合に取りかかった。

一九三九年四月に興亜院華中連絡部（事務所は上海）が設置されると、「事変処理機関として中支の新政権保育、文化、経済等の各建設に邁進することとなつたが、其の第一着手として官民各調査機関を統合して『中支調査聯合会』を創設⁹⁷」し、「中支那にある官民主要調査機関の相互協力の下に、我国の中支那に対する政治、経済、文化諸方策の確立に必要な現地調査を行ふこととなつた⁹⁸。

同時に張家口においては、一九三九年、蒙古自治聯合政府、興亜院蒙疆連絡部、滿鉄張家口經濟調査所、北支那開發会社、蒙疆銀行、華北交通会社張家口鐵路局、蒙古善隣協会などの活動を、軍を中核に統合する動きが現れ、その結果一九四〇年一月「蒙疆調査機関聯合会」の設立を見た⁹⁹。ほぼ時期を同じくして、興亜院華北連絡部（事務所は北京）のもとで「華北聯合調査委員会」、青島において「青島調査機関聯合会」も設置された¹⁰⁰。

日本においても在京の中国調査機関の連携のため、興亜院の提唱で一九四〇年十月「支那調査関係機関聯合会」が発足した¹⁰¹。興亜院、北支那開發会社、台湾銀行、台湾拓殖会社、台湾南方協会、東亜海運、東亜研究所、中支那振興会社、日本興業銀行、日本銀行、日本商工会議所、三菱經濟研究所、滿鉄、横浜正金銀行などが結集し、十二月に興亜院、朝鮮銀行も入会した¹⁰²。

同時に一九三九年には東亜研究所¹⁰³第六調査委員会によって華中商事情行調査や華北農村慣行調査（以下「慣行調査」と記す）などの計画が立てられ、慣行調査に関して東京で末弘敏太郎など東京帝国大学の関係者を中心する研究チームが作られた。一方、滿鉄調査部北支經濟調査所第三班（一九四一年に慣行班と改称）も一九三九年から十年計画で華北土地慣行調査の準備作業を展開していた。一九四〇年に杉之原舜一をリーダーとする陣営をもって、最初の三年間は東亜研究所に資料提供することとなり、東京の帝大での學術研究、華北での滿鉄の資料収集というシステムが確立された¹⁰⁴。

また、外務省は一九三五年以降対支文化事業の一環として支援してきた永尾龍造¹⁰⁵の中国民俗研究の業績出版もサポートすることを決め、一九三九年に文化事業部内に支那民俗誌刊行会を設立し、印刷と販売に関して大日本印刷、丸善会社との交渉を終え、各巻六〇〇頁と索引一卷の『支那民俗誌』全十三巻の刊行事業を始めた¹⁰⁶。

3 日本民俗学徒と中国

戦争が始まってから多くの民間伝承の会の会員が中国と関わっていったが、日本の民俗学徒は前述のような上からの組織的な動きに直接関わることはなかった。中国との関わりはまず個人の中国民俗に対する興味関心として現れ、それはまた民間伝承の会への要望にも現れて来た。研究の必要に関する最初の提言は『民間伝承』四一三（一九三八年十二月）大阪の大橋富枝による会員日より「支那の民俗を」であった。

去る八月上旬から約一ヶ月に互り新京から北京の方へ旅行いたしました支那の民間伝承は我国のそれに比して可なり奇怪なものが多い様に聞きました、私は研究の時間が少なくて残念ですがどなたがこれに就いて誌上に発表して戴ければ大幸です。

あたかもその要望に応えるかのように、一九三九年一月、『旅と伝説』に太田陸郎による中国民俗に関する文章が掲載され、その後、『旅と伝説』『民間伝承』などに中国民俗関係の会員通信や投稿が多く見られた。このような要望や実際の行動と比べ、柳田や木曜会など上層部の意見はまだ保守的だと言わざるを得ない。

『民間伝承』四一六（一九三九年三月）は倉田一郎による巻頭言「時局下の民俗学」を載せている。倉田はこのように述べ始めた。

昨日まで民俗学の将来を愉しきうに語らつた青年が、今日は心機動揺の口調を以て、この激動期の時局下に悠長に民俗を研究してをられない、若人の関心は大陸に在るといふ。

「激動期の時局」とはもちろん中国との戦争を指している。戦争の状況に関心を持つ若者にとつては、民俗研究が時局にそぐわない「悠長」なものに見えた。担い手として期待されている対象であるからこそ、民俗学にとつて事は重大である。

そういう「心機動揺」に対する倉田の答えは明快である。民俗学の貢献は決して「千人針」のような個々の民俗事象の詮索にはなく、民俗学は「日本民族生活の凡ての方面の根本的な研究」をめざす「国学」であり、そして「直ちに応用」できるものでもある。それは「東亜再建の大業」の一環である「事変処理」にも、「爾後の植民政策」にも大きく寄与する。即ち悠長どころか、民俗学こそ学芸の時局貢献の最適な道である、と倉田は説いている。

従来、「民俗学がいわば実学として国民生活や植民地支配に役立つべきことが熱烈に説かれている」⁽⁹⁷⁾、或いは「植民地政策の重要な指針を提供し得る学問としての民俗学の重要性」を主張したものとされている⁽¹⁰⁸⁾この文章は、確かに民俗学の時局寄与の可能性を最初に説いたものである。しかし同時にまた民俗学が無用だと思ふ人の目を民俗学に向けさせるための文章であった。日本についての根本的な研究という目的、社会や時代への寄与という実用性を説く論理は、柳田が好事的態度を批判し、民俗学の意味を強調する際と共通している。

大陸への寄与を述べるときでも、「彼此両国の民俗学に依る両民族の生活の究明比較に俟つ」と、「一国民俗学」の理解から外れておらず、実践的な問題については踏み込んでいない。「一国民俗学」が「実」、「世界民俗学」が「虚」であるのと同じく、ここでは国民生活への寄与は「実」であり、植民地政策への寄与は「虚」であると理解されるべきであろう。

一九三九年三月、柳田国男が『アジア問題講座一 政治・軍事篇（一）』に寄せた序言「アジアに寄する言葉」についても同じである。柳田はこう結んでいる。

支那は驚くほど豊富な昔話の貯蔵地であるが、往来久しく親しいものがあつたにもかかわらず、われわれは西洋人に先鞭をつけさせて傍観して来た。しかもあの四角い字だけは、はるかに容易に読み得たのである。独り支那とは言はず、常民の心の最も奥にひそむものを、これによつて突合せて見るといふことは、五族協和の理想のためにも、必要な仕事であつた筈だ。東亜の新しい秩序の礎石も、案外かやうな処にあつたかも知れないのである⁽¹⁰⁹⁾。

一九七五年藤井隆至の「柳田国男のアジア意識」⁽¹¹⁰⁾以来、よく引かれる箇所であるが、ほとんどの場合、柳田この発言を一九四〇年『朝鮮民俗』への寄稿「学問と民族結合」及びその草稿「比較民俗学の問題」と合わせて柳田の比較民俗学への期待と昂揚感として理解されている⁽¹¹¹⁾。しかし果たしてそういいられるのか。

4 柳田国男の昔話比較発言

この『アジア問題講座』の序言は、同年一月に丸善の情報誌『学燈』の依頼を受けて兔年に因んで執筆した「続かちかち山」⁽¹¹²⁾を基礎に加筆修正したものであつた。前作の「一昨年英訳せられて出たW.Eberhardの支那民話集」という具体的な内容を「西洋人に先鞭をつけさせて傍観して来た」という表現に変えている。

一九四〇年『朝鮮民俗』への寄稿とその草稿と合わせてみると、何れも話題を昔話に限定しており、表現は異なるが何れも「W.Eberhardの支那民話集」が登場していることがわかる。

此頃芬蘭のF・F・Cから出した、エーベルハルトの支那の民間説話の分類を見ても、よく似た話は亦中国に幾らもあります〔学問と民族結合〕¹³⁾。

最近に芬蘭のF・F・Cから、独逸の或学者の研究した支那の民間説話の総索引のやうなものが刊行せられた〔比較民俗学の問題〕¹⁴⁾。

その外、一九三九年三月の「猿と蟹」にも「一昨年五月に英訳せられた独逸人エーベルハルトの支那民話集を讀んで見ると(後略)」¹⁵⁾とある。柳田の一九三九、四〇年の昔話比較に関する発言は時局によるものというより、昔話研究の新しい成果に刺激されてのものというべきであろう。

一九三二年に杭州で結成された中国民俗学会は積極的に海外との提携を進め、日本では折口が主宰した『民俗学』と交流があったが、同じ時期にドイツ人エーベルハルト(W. Eberhard)は中国の学者と密接に連絡して中国の昔話神話研究を進めていた¹⁶⁾。彼は日中戦争が勃発した年に、名著『中国昔話の型』*Typen chinesischer Volksmärchen, Folklore Fellows Communications 120* (Helsinki, 1937) を世に出した。

柳田はFolklore Fellows Communications (FFC) の出版物を数多く所持していたが¹⁷⁾、一九三六年以降戦後までの号はなかった。この著作について柳田はしばらく把握できなかつたと思われる。日本民俗学において初めてこの本にふれたのは管見の限り、『民間伝承』三一―一一(一九三八年七月) 関敬吾による李献璋『台湾民間文学集』の紹介であった。

最近独逸の学者の手になつた支那の昔話のタイプを見ると吾が国のそれとの実に驚くべき多数の類似せるものを発見する。台湾の伝承にも多くのかうした類似を見出すのであらう。吾が国の伝承を明確にするためには近

隣の資料との比較の必要のあることは云ふまでもない。

関敬吾が昔話研究を本格的に始めた理由には鍾敬文の中国民譚のタイプ研究からの刺激があった⁽¹⁸⁾。そして昔話の世界的な共通性は当時すでに常識であり、「近隣の資料との比較」は関の一貫した主張であった。とくに関にはドイツ語の能力が高く、一九三五年すでに『民族学研究』と *Das Siegfundemotiv im Märchen der germanischen Völker* (ゲルマン諸族のメルヒェンにおける継子モティーフ) の書評を書き、一九三六年『昔話研究』の「独逸に於ける昔話研究」以降、ドイツにおける民俗学、昔話研究の紹介を続けていた⁽¹⁹⁾。彼でさえこの時期初めてふれたので、柳田がこの本の存在を知ったのはおそらくほぼ同じ時期だと思われる。柳田にとって、中国は民俗の宝庫であるが、その研究はあくまで中国人自身の努力に待つという態度をとっていた。しかしドイツ人はこの宝庫を利用して素晴らしい研究をなし遂げた⁽²⁰⁾。この事実は西欧の民俗学、民族学に強い対抗意識を持つ柳田国男にとっては大変な衝撃に違いない。

欧米人にできたことは我々にもできる。しかも我々には文化的交流関係や共通の漢字があり、もっと有利なはずである。ここには明らかに世界学問体制における日本の地位を日頃から気にする柳田の勝負心が見て取れる。昔話には世界的な一致が見られ、それに対してまだ説明できるような仮説がないことを、彼は誰よりもわかっているからである⁽²¹⁾。序言「アジアに寄する言葉」だけではなく、『アジア問題講座』への関与の背後に、学問の対象としての中国をめぐる柳田の欧米対抗意識があったとも考えられるし、この段階での昔話比較の言説は、東アジアにおける実践活動の提言ではなく、柳田一流の負けず嫌いの発露として理解されるべきであろう。

可能性ばかりほのめかし、実践的な意欲を示さなかつた柳田や『民間伝承』の論調と比べると、社会的な要請や各方面の動きがもっと積極的であった。たとえば『旅と伝説』の記念すべき通巻一五〇号(一九四〇年六月)の巻頭言は「支那大陸の民俗調査の必要」であった。「支那民俗の調査といふやうなことも、日本ではまだ全然問題に

表8 一九三七年以降民間伝承の会内地会員中国経験（一部）

氏名	民間伝承の 会入会号数	入会地域	中国にいる時期	中国での活動場所	身分・活動	出典	関連著述・「民間 伝承」会員通信
石田英一郎	一一一	京都	一九四二年夏	華北、内蒙古、北京	帝国学士院東亜諸民族調査委員会嘱託、 回族調査	『民間伝承』八一五、『石 田英一郎全集・年譜』（二 九七二）	『中国との出会い』 『人間をもとめて』 『文化人類学三十年 』（一九六七）
石田英一郎	一一一	京都	一九四四年～一九 四六年	内蒙古、北京	西北研究所次長	『石田英一郎全集・年譜』 （一九七二）	
井上昇三	不明	不明	一九三九年	北京	不明	『民間伝承』五一三	
太田陸郎	一一三	兵庫	一九三八年七月～ 一九四一年七月	中支（上海～漢口）	中支派遣軍太田部隊 隊長（少尉、のち中 尉）、水上輸送	『民間伝承』四一〇、一 二、五一、三、五、六、 八、一〇、一一、六一二、 三、四、六、七、一一、 七一、二、三、八、五	『支那習俗』（一九 四三）、通信一九通
大間知篤三	一一一	東京	一九三八年二月～ 一九四六年	満洲、北支	建国大学講師（のち 副教授、教授）	『民間伝承』四一七、八、 一一、五一、三、四、 一一、六一六、一一	『満洲民族雑記』（一 九四四）など、通 信十通
折口信夫	一一一	東京	一九四一年八月～ 九月	北京、南京、蘇州、 杭州、上海	神祇講座講師	『民間伝承』七一三	『折口信夫全集』三 四所収友人宛葉書
河本正義	一一四	兵庫	一九三七年	不明	従軍記者	『民間伝承』三一―	
岸田定雄	一一一	奈良	一九三九年八月～ 一九四〇年	南支	南支派遣軍兵士	『民間伝承』五一、三、 五、六一三	通信四通
小島勝治	一一二	大阪	不明	中支	中支派遣軍兵士	『民間伝承』九一四、『橋 浦文書』	

小玉曉村	不明	秋田	一九四〇年五月 六月	北満、北支	秋田県囀託慰問演芸 団の引率	『民間伝承』五二一〇、九 一一	
小寺融吉	東京	一九二九？	満洲	旅行	『旅と伝説』三一	『満洲と朝鮮』	
小林伝十	島根	一九三七年～一九 三八年	不明	兵士	兵士	『民間伝承』四二二	
沢田四郎作	大阪	一九四一年七月～ 一九四五年	満洲黒河省、小神府、 熊岳城	満光六〇〇四部隊軍 医（少尉、のち中尉）	『民間伝承』七一、三、 八一七、九一四、五、一 〇一一、五、『沢田四郎作 博士記念文集』（一九七二）	『五倍子雑筆』二一、 一一二（一九四九、 五一）、通信七通	
守随一	東京	一九三八年一〇月 ～一九四四年一月	満洲	満鉄新京支社（のち 調査室業務主任）、経 済調査	『民間伝承』四一六、七、 八、九、一一、五一三	通信六通	
関口泰	神奈川	一九四四年	舟山島、上海	不明	『民間伝承』一〇一五		
多田貞一	兵庫	不明	北京、河北	北京大學医学院専任 講師	『民間伝承』一〇一一	『北京地名誌』（二 九四四）	
橘文策	大阪	一九三九年八月～	満洲	満洲国通信社記者	『民間伝承』五一一		
玉岡松一郎	兵庫	一九三七年～	不明	兵士	『民間伝承』三一、四一 六、五一		
千葉徳爾	宮崎	一九四二年～	満洲興安北省	一九四四年中尉、海 拉爾（兵要地誌作成）	『民間伝承』七一五、『炭 焼日記』		
直江広治	東京	一九四一年七月～ 一九四六年	北京、山西、華北山 東	北京日本中学校教師、 北京輔仁大学講師	『民間伝承』六一一一、七 一三、八一五、九一五、六、 七、八、一〇一一、一〇 一五	『中国の民俗学』（二 九六七）など、通 信八通	

長岡博男	一四	東京	一九四一年夏	滿洲	滿第四六三二部隊軍 医(少尉)	『民間伝承』七―三、九― 一、九―二、「橋浦文書」	
野口長義	一一	東京	一九四〇年秋	北支、滿洲	東亜研究所副調査員、 回族調査	『日本民俗学大系』二	
早川孝太郎	二二	東京	一九四〇年一〇月 十一月	朝鮮、 滿洲	不明	『民間伝承』六一―三	
早川孝太郎	二二	東京	一九四二年春	北京	北京大学講演	『直江書簡』	
丸山学	一一二	広島	一九三七年八月 一九四一年一月	中支(上海、 南京)	兵士、兵团司令部参 謀部附、支那派遣軍 総司令部報道部、占 領地区民俗調査	『旅と伝説』一三一―一、 『丸山学選集・民俗学篇』 (一九七六)	『野戦風情』(一九 四〇)、『大陸の思 想戦』(一九四二)
丸山学	一一二	広島	一九四三年九月	滿洲	視察旅行	『旅と伝説』一六一―一	『滿鮮民俗の瞥見』 『旅と伝説』前掲
和歌森太郎	六一七	東京	一九三九年一二月 一九四〇年九月	河南、山西、 華北、 北京、天津	北支派遣軍兼重部隊	『和歌森太郎著作集・年譜』 (一九八三)	『年中行事より見た る東亜歴史圈』『史 潮』一〇―三・四 (一九四一)など
玉置正美	五一―一	東京	一九四二年	北支	不明	『民間伝承』八一―五	
斉藤甚兵衛	不明	福井	一九四一年	滿洲	不明	『民間伝承』七一―一	
大橋富枝	一―八	大阪	一九三八年八月 九月	新京、 北京	旅行	『民間伝承』四―三	

出典：『民間伝承』各号、「民間伝承の会会員名簿」(一九四四年十二月)により作成。

なつてゐない。之は既往の日本の学界の態度が、為政者の対支政策を反映してゐたこと」として、「支那民俗の研究調査に早く意を注ぐことを希望してやまない」と主張する巻頭言に呼応して、中国との比較を内容とする前記藤原相之助「馬蚕神話の分布―オシラ神との関係―」を巻頭論文とし、さらに「編輯後記」で「藤原先生の馬蚕神話は、もうとつくに誰かに論じられてゐてよい筈のものであるが、比較が限定せられすぎてゐる日本民俗学が、今まで閉却してゐたところであつた」と日本民俗学の中国進出を促している。

このような状況を考えれば、柳田を中心とした意見は保守的であつたと言える。しかし柳田が朝鮮との関係で「比較民俗学」という言葉を使い、その可能性について論じたことは重要である。結論は否定的であつたが、「世界民俗学」から「比較民俗学」への言葉の転換は、太平洋戦争段階の、実践を前提とした論理の転換のために素地を準備したといえよう。論理を転換させるためには、漠然とした「時局の影響」ではなく、具体的な契機が必要であつた。

一方、中央、地方の民俗学者と中国の関わりはさらに増えていった（表8参照）。彼らの存在と活動は、そうした具体的な契機の形成に大きな役割を果たしていた。次章以下は、その中で太田陸郎、大間知篤三、直江広治を取り上げ、具体的に検討していく。この三人はともに柳田に直接指導を受け、弟子として高く期待された人物であつたが、ともに比較的長期にわたつて中国に滞在し、学問的調査や研究を続け、その活動は日本民俗学の組織や理論と行動に重要な影響を与えていた。

第2章

太田陸郎——文化的關心

一九三九年一月、『旅と伝説』（二二二）に「進軍中にみた支那習俗（二）」という一文が載せられている。執筆者は「中支派遣軍 片村部隊、北尾部隊気付太田（陸）部隊、太田陸郎」であった。

「以下は武漢攻略戦に参して進撃した一兵たる、自分の触目した中支奥地方面のゆきづり、否より以下の触目した機会の随筆にすぎない」と断りながら、九頁にわたって「都鄙文化の差」「農村雑感」「植物雑抄」「動物雑抄」「漁業寸記」「埋葬見聞小記」などの内容を、手描図五枚と写真二枚を入れながら記している。

この号の「後記」では、「遙かの第一線から太田陸郎氏の寄稿がありました。感に耐へません。早速本誌と諸雑誌をとりまとめ、慰問品として送つて置きました。各位も何卒心がけてやつて下さい」という読者への呼び掛けが見られ、さらに翌月、『民間伝承』四一五の「紹介と批評」においても、倉田一郎が「兵馬倥傯（びょうまこうげん）の間の観察乍ら興味ふかく、いはばフオーコロリックな『麦と兵隊』として注目されよう」と会員の注意を促している。

その後、太田陸郎は三月に「進軍中にみた支那習俗（二）」、五月に「中支奥地の鵜飼」を次々と投稿し、一九四

二年十一月まで『旅と伝説』に文章や通信を十二回も寄せていた。一方、一九三九年六月『民間伝承』に「戦地にも春がまわりました」との初通信を寄せて以降、ほぼ二ヶ月に一回の頻度で通信を送っていた。その回数と文章の長さはともに会員の中でトップであった⁽¹⁾。

太田陸郎は軍人として中国に赴いたが、それまでは地方公務員、何より民俗学者として活躍していた。柳田国男最晩年の回想録『故郷七十年』には、「太田陸郎君のこと」という一節がある。「播州出身の太田陸郎君は、惜しいことに戦争中、台北で死んでしまつたが、播州のためにかなりつくしてくれた人であつた」と惜しむ気持ちを隠さなかつた。

『故郷七十年』は単行本として発行される前『神戸新聞』で連載されており、播州出身者があげられたのは自然ななりゆきかもしれない。しかし、その前に柳田は既に、太田の遺著『支那習俗』のために序文（一九四三年九月）を寄せており、戦後まもなく刊行された『新国学談第二冊 山宮考』の「帰らざる同志」（一九四六年六月五日）にも、太田のことを悼んでいる。柳田によつて回想された者は大勢おり、「帰らざる同志」と言わしめた者も、他に小林伝十、小島勝治などがいるが、文章という形で合計三回も回想された例は、管見のかぎり太田が唯一であつた。

あれほど柳田に深く惜しまれた太田陸郎は戦後、川島右次「太田陸郎」（一九五一年）⁽²⁾、沢田四郎作「太田陸郎伝」（一九五八年）⁽³⁾などの紹介があるものの、六十年代以降、次第にその存在が忘れられていった。一九九〇年代に再び思い出され、吉田隆英の「長江中流域の生活と民俗…太田陸郎の中国民俗の研究について」（『姫路独協大学外国語学部紀要五』一九九二年）と加茂幸男の『太田陸郎伝——民俗学者太田陸郎を語る玄圃梨の記』（私家版、一九九二年）などの先行研究が現れた。この中でとくに加茂の著作は、太田の長男・泰の岳父が保存していた「太田資料」を駆使し、太田の経歴、家族や友人関係を中心に記述しており、太田の人となりを窺わせるエピソードや貴重な一次資料などが数多く盛り込まれており、本論はそれに負うところが多い。しかし太田の記念に重きを置いたこ

これらの先行研究では、太田の業績と時代との関連、とくにその中国研究の日本民俗学にとっての意味などについて、まだ十分な分析に至っていない。

本章は、太田の『兵庫県民俗資料』から『近畿民俗』を中心とした活動、及び軍人として中国に赴いた後に『旅と伝説』や『民間伝承』に寄せた報告や通信などから、太田が郷土の先覚者から日本の民俗学者に変わる経緯、及びその中国経験の意味を検討する。

1 郷土史から日本民俗学へ

1 太田陸郎（おおた・ろくろう）⁽⁴⁾の略歴

一八九六年八月、六男として、夢前川上流域の兵庫県飾磨郡置塩村の役所所在地糸田に生まれる。父・名倉次は柳田の長兄松岡鼎と御影師範での同窓の友人であり、地元姫路で自由民権運動を展開し、県議会、衆議院議員、県と郡の農会会長などを歴任した名士である。

一九一一年、地元の名門校である兵庫県立姫路中学校（兵庫県立姫路西高等学校の前身）に入学し、寄宿生活を送り始め、キリスト教徒になる。

一九一六年、二七期生として卒業し、京都のキリスト教系の同志社大学政治経済部⁽⁵⁾に入学する。考古学に強い関心を示す。

一九二一年、法学部経済学科を卒業⁽⁶⁾し、四月に株式会社富島組に入社した。富島組は一八八四年に大阪商船会社専属運輸会社として設立されたもので、本部は大阪にあり、当時神戸、東京、若松にも支店をもち、国内外にわたる港湾運送事業を展開していた⁽⁷⁾。

同十二月、一年志願兵として福知山工兵隊⁽⁸⁾に入隊し、一九二三年三月除隊して富島組に復職したが、健康を

害して九月に退社帰郷することになる。その間、一九二三年一月に、揖保郡網干町（現、姫路市網干区）興浜の太田勝治の養嗣子となる。

一九二四年七月、兵庫県庁学務部社会課社会事業主事補となり、地方公務員生活を始める。

一九三三年、県史跡名勝天然記念物調査事務が囑託され、また県史調査員として活動し、内務省より就労統制員にも任命される。

一九三六年四月、主事となり、新設の学務部職業課に勤務する。

一九三八年七月には召集に応じ、陸軍少尉として武漢作戦に参加し、中尉に昇進する。その後中国の華中地域を中心に軍隊生活を送っていた。

一九四二年、内地帰還が決まったが、南方戦線に志望転出し、数ヶ月マレー半島で勤務する。

同十月二九日、シンガポールより日本へ帰任する途中、台湾上空の事故で遭難する。陸軍大尉、正七位勲五等が贈られる。

2 太田陸郎の業績

県庁勤務以前の太田の業績⁹⁾については、卒業論文をベースとした「播州土師の竈址と寺址」（署名は名倉陸郎、『民族と歴史』六一三、一九二一年九月）以外、遺された資料が少なく、その詳細を明らかにすることはできない。県庁での仕事については、たとえば二〇〇三年に刊行された資料集『日本近代都市社会調査資料集第六集―神戸市社会調査報告書（含兵庫県）』（近現代資料刊行会編）に、一九一八―一九四三年に刊行公開した神戸市と兵庫県の社会課を中心とした諸部局の調査報告が集められており、そこから太田の仕事の一角を窺うことができる¹⁰⁾。

県庁での忙しい本職以外、太田は多くの研究や発表を行っている。管見の限り、太田の新聞雑誌への投稿は一九二七年に始まったようである。この年の八月十四日付『大阪朝日新聞神戸版』に「俺が村の盆踊」を寄せており、

また『神戸詩歌』の八月と十一月号にも「民謡礼讃」と「播磨古民謡抄」を發表している。一九三八年中国に赴くまでの投稿は主として『民俗芸術』、『考古学』、『兵庫史談』、『兵庫県民俗資料』、『近畿民俗』、『旅と伝説』などに集中している(表9参照)。

この中で、太田が深く関わったものは『兵庫史談』と『兵庫県民俗資料』(図4)であるが、特に後者に対して柳田は「太田君の事業は、まだ此外にも幾つか残つて、我々の学問を益して居る。兵庫県民俗資料といふ数年間の雑誌などは、大部分がこの人の努力の痕であつた」と高く評価している⁽¹⁾。創刊号(一九三二年五月)の「編輯雜記」によれば、雑誌の創刊に最初に関わつたのは河本正義、川辺賢武、桜谷忍であり、太田はその席上には居合せなかつたが、「こゝろした企画からは離すべからざる関係にある」から「発起人の一人」にきめられ(桜谷)、しかも雑誌の「兵庫県民俗資料」の題は、太田さんが名付親⁽²⁾(河本)であつた⁽¹²⁾。

『兵庫県民俗資料』の初期の同人は他に福橋茂樹と宮武省三がおり、翌年には五十崎夏次郎、川島右次、鷲尾三郎も加わり、一九三五年まで合計十八号を發行した。当雑誌は「兵庫県の民俗文化を総合的に解明すべく企画されたもので、郷土を識る手掛かりとしてその利用価値は非常に高い」⁽¹³⁾にもかかわらず、現在では入手が甚だ困難⁽¹³⁾なため、一九八二年国書刊行会より合本二冊として復刻された。太田の積極的な姿勢は、全十八輯の中の十五輯に対して四〇本近く投稿している(表9参照)ことから窺えよう。

現時点で確認できた太田の編著書は以下のとおりである。

- 一、『播磨民謡攷』一九二九年八月、太田陸郎
- 二、『兵庫県下百姓一揆史話』一九三〇年九月、太田陸郎
- 三、『新注 峰相記微考』一九三二年六月、兵庫県民俗研究

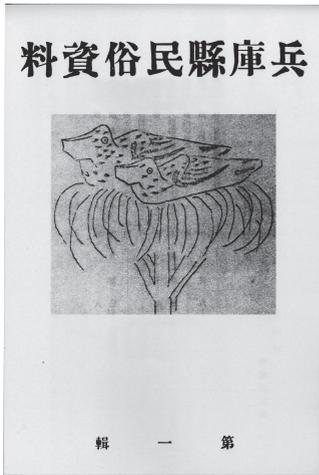


図4 『兵庫県民俗資料』創刊号
(1932年5月)表紙

- 四、『兵庫県下百姓一揆関係史料解題』一九三二年十二月、太田陸郎
 - 五、『兵庫県下の五人組制度に現はれる道徳律』一九三三年、太田陸郎
 - 六、『絵本大和詩経』一九三三年八月、清文堂書店
 - 七、『稿本播磨鑑(二)』一九三三年、兵庫県郷土史料刊行会
 - 八、『朝鮮人來聘一件』一九三四年、兵庫県郷土史料刊行会
 - 九、『宗門家数人数改目録』一九三四年十一月、兵庫県郷土史料刊行会
 - 十、『兵庫県金石年表』一九三四年十二月、兵庫県郷土史料刊行会
 - 十一、『稿本播磨鑑(一)』一九三五年、兵庫県郷土史料刊行会
 - 十二、『吉備見聞落穂集』一九三六年、太田陸郎
 - 十三、『但馬出石燒窯元古文書』一九三六年十一月、兵庫県郷土史料刊行会
 - 十四、『支那習俗』一九四三年、三國書房
- 手稿一、『考古備忘録』(一九二八年丹波アサカ塚調査記録)

二、『禁札考』(年代不明)

なお、『西讃府志綱干之部抄』、『利神城由来』(一九三三年)、『姫路城隸郡二十四孝廉伝』(一九三四年)などの復刻出版に関わったことも確認できた。

編著書以外の投稿についても、太田は役所勤務の傍らとはいえ、実に数多くの業績を残していることがわかる。その業績を時期と内容から考えると、以下の四点が指摘できよう。

まず、一九三五年頃まで、太田の主な関心は播磨を中心とする兵庫県下の郷土史料の収集、校訂、注釈、解説、

表9 太田陸郎投稿略表（一九二八〜一九三八年）

『民俗芸術』月刊／一九二八年〜一九三三年／地平社書房↓民俗芸術の会
一九二八年
「播磨の昔踊」『民俗芸術』一一八
「酒造業者の歌」『撰州灘五郷』『民俗芸術』一一二二
一九三〇年
「播磨書写山の追儺」『民俗芸術』三一一
「撰津長田神社の追儺」『民俗芸術』三一一三
「網干音頭」『民俗芸術』三一一八
「美田八幡宮の神の相撲」『民俗芸術』三一九
「くつ草鞋とつまご草履」『民俗芸術』三一九
『考古学』隔月刊／一九三〇年〜一九四一年／東京考古学会
一九三〇年
「丹波アサカ塚踏査略報」『考古学』一一一
一九三一年
浅田芳郎と「但馬出石神社」近傍発見威骨器」『考古学』二一三
「有鱗埴輪円筒」『考古学』二一四
一九三二年
「神戸市の史前遺跡」『考古学』三一一
『兵庫史談』月刊／一九二六年〜神戸史談会
一九三二年
「播磨古瓦譜」『兵庫史談』一一四
一九三三年
「播磨鑑の草稿本と其著者平野庸修」『兵庫史談』二一三
「兵庫県下刀匠雜記」『兵庫史談』二一六
一九三四年
「池田輝政検地の一史料」『兵庫史談』三一九

出版に集中していた。編著出版書のほとんど、及び『兵庫県民俗資料』の多くの論考はこれに入る。実は多くの編著書の出版元である兵庫県郷土史料刊行会と『兵庫県民俗資料』の主体である兵庫県民俗研究会は住所が同じであった。

次に、郷土史を明らかにする手段として、太田は郷土史料の蒐集と並行して考古学にも興味を持っていた。たとえば『考古学』への一連の投稿や『兵庫県金石年表』などの研究がそのことを示している。

太田は民俗学的事象について早い時期から関心を示している。表9を時系列で見ると、初期の論考はもっぱら民謡に集中していたが、次第に出身地付近の民俗、たとえば糸田のすぐ南にある曾左村の追儺儀礼（播磨書写山の追儺）『民俗芸術』一九三〇年）、置塩村の牛の民俗（牛に関する方言と俗信（播磨飾磨郡置塩村付近））『兵庫県民俗資料』一九三二年）、夢前川の漁獲習俗

- 「兵庫県金石年表」「兵庫史談」三一―一九三五年
- 「兵庫県金石年表補遺」「兵庫史談」四―一
- 「摂津壳布神社発見銅鏃」「兵庫史談」四―三
- 「有馬郡道場に於ける石劍の発見」「兵庫史談」四―七
- 「高田屋嘉兵衛関係史料」「兵庫史談」四―八
- 「兵庫津明細帳抄」「兵庫史談」四―九
- 「兵庫津北濱会所古文書」「兵庫史談」四―一
- 「天明七年兵庫津打潰」「兵庫史談」四―二
- 一九三六年
- 「石峯寺記録」「兵庫史談」五―三
- 「神戸妙法寺村年中行事」「兵庫史談」五―四
- 「兵庫津、慶長・寛政地子その他に就いて」「兵庫史談」五―六
- 「但馬出石焼窯元古記録（一、二）」「兵庫史談」五―一〇、五―一一
- 「遠州引左郡滝沢村記二」「兵庫史談」五―一一
- 一九三七年
- 「兵庫県下藩時代の漁政史料（一）―（三）」「兵庫史談」六―七―六―九
- 『兵庫県民俗資料』／一九三二年―一九三五年／兵庫県民俗研究会
- 一九三二年五月 第一輯
- 「播州白国村旱魃雨乞願開歌音頭 雨乞唄解題」
- 「丹波沢田八幡鯉切祭」
- 「播磨飾磨郡置塩郷昔踊歌」太田氏所蔵天明写本、解説
- 一九三二年六月 第二輯
- 「文久本 昔踊哥 昔踊解題」名倉家所蔵資料
- 「兵庫県下の手鞠歌」大阪朝日新聞神戸附録記事より転載、注
- 「丹波水上郡地方のこと祭り」図あり
- 「播磨動植物方言抄」

（「夢前川漁獲習俗雜記」「播磨」一九三三年）などに拡大し、踏査の記録も散見する。

最後に、地元の評価では太田は「郷土史研究家として夙に令名あり、ひさしく神戸史談会ならびに兵庫県民俗研究会によつて神戸史蹟の研究紹介に没頭し、その大なる功績斯界の矚目を唆つてゐる隠れた篤学の¹⁴⁾人」であり、「神戸史談会の重鎮、古いことならここへ持つて行けば何でも分るといふ権威者、何か史蹟など発見されると、きつと同君の名が出てゐる」¹⁵⁾という人物であつた。しかし全体の傾向として一九三五年以降『近畿民俗』や『旅と伝説』に発表した論考は初期の郷土史的なものがほぼ見えなくなり、古い文献資料に依拠する手法ではなく、現地調査により精力的に取り組むという姿勢の変化が認められる。

ほぼ同時に、太田は自分の研究の整理作業を始めている。たとえば民謡については、初期から関心を持ち続け、資料の紹介

- 一九三三年七月 第三輯
 「牛に関する方言と俗信」〔播磨飾磨郡置塩村付近〕
 「播磨民謡小記」
 一九三三年八月 第四輯
 「表紙写真説明 豊岡盆踊」
 「但馬の親方子方制度」
 「播磨盆踊に関する一考察」
 一九三三年九月 第五輯
 「北摂鈴蘭台盆踊見物記」
 一九三三年十一月 第六輯
 「淡路由良湊神社の鈴」図と解説
 「播磨神崎郡船津村八幡神社の秋祭と屋台」
 「但馬河すそ祭（予報）」
 「津ノ宮御旅提灯」
 「播磨の秋祭りと屋台」
 一九三三年か一九三三年 第七輯
 「但馬牛と伝説」
 「但馬方言雑俎並補遺」
 「遍臭後気」
 一九三三年二月 第八輯
 「播西摂地方田園関係俚諺」
 「但馬方言雑俎並補遺（二）」
 一九三三年五月 第九輯
 「加古郡加古川町鶴林寺の追儺
 あまこえおどり歌解題（歌詞八集所収）」
 一九三三年九月 第十一輯
 「美囊郡大畑の虫送り」
 「淡路順礼」

や採集の報告など度々発表してきたが、一九三五年十月にその理論化を図り、「今日まで兵庫節に関して発表した小論に対して補正すると共に、研究上の新基礎を」築く研究として、「兵庫節遺存の確認によるその再検討」という一文を発表した⁽¹⁶⁾。そこで従来の民謡研究が「主として史的考察に止つて現代流布の歌謡関係とはあまりふれられなかつた」ことを指摘し、「兵庫節調の実体を把握することによつて」その流行下限や流行地域、変転期等を把握すべきだと指摘し、初歩的な結論を提示している。

また一九三六年の「但馬の親方子方制度」⁽¹⁷⁾においては、三〇年代初期から関心を持ち、折りあつて研究の進捗を報告してきた⁽¹⁸⁾このテーマについて、より精緻な分析がなされている。

「夏の農民と土俗」

一九三三年十二月 第十二輯

「兵庫県採集俚謡文部省報告書」 兵庫農務課民謡調査記録

一九三四年四月 第十三輯

「古形式をもつ民家津門前田氏邸」

「高砂附近漁撈抄記」

一九三四年十一月 第十五輯

「西神戸における遊戯唄の覚書」

「但馬の民家に関する一統計」

一九三五年五月 第十七輯

写真「わ」と「こぐつ」の説明

「妙法寺の年中行事（一）」

一九三五年十月 第十八輯

「兵庫節遺存の確認によるその再検討」

「葬制雑記」

『近畿民俗』隔月刊／一九三六年～一九三七年／近畿民俗刊行会→近畿民俗学会

「播但山林のたきもん」 「ジンキとシラメの話」 『近畿民俗』 一―

河本正義、玉岡松一郎と「但馬養父郡大杉村民俗記」 『近畿民俗』 一―

「遠州引左郡滝沢村記」 「もちやそびの追想」 『近畿民俗』 一―

「但馬の親方子方」 『近畿民俗』 一―

森下賤男と「播磨奥吉川村若宮八幡宮座」 『近畿民俗』 一―

「無足人に就て」 『近畿民俗』 一―

「よばし・ひきわり・桜麦」 「正月を中心とした食物の調査」 『近畿民俗』 二―

「農業関係俚謡の地域性」 『近畿民俗』 二―

『旅と伝説』 月刊／一九二八年～一九四四年／三元社

3 郷土から日本へ

太田の活動の背景には、当時全国規模で民俗学の学問組織を樹立しようとして、積極的に動きだした柳田の影響が大きく認められるだろう。兵庫県庁に勤務していた頃、「上京の度毎に時間をつくつては先生をお訪ねして色々御教へ戴いてゐた様で、帰つてはその時のことを楽しさうに話してゐました」と太田の妻幸子が戦後に回想している⁽¹⁹⁾。

『民間伝承』の第三号（一九三五年十一月）で新入会員として「宮武省三 太田陸郎」の名前が見える。兵庫県では、第一回日本民俗学講習会に出席した西谷勝也、石田太兵衛や、十月七日までに入会した辰井隆、玉岡松一郎、吉井太郎、落合重信、後藤宗弘に続いて、二人は『兵庫県民俗資料』の初期同人の中で一番早く入会した者であった⁽²⁰⁾。

全国に会員を持つ民俗学の中央組織が発

- 一九三六年 「九州人吉に遭るウンスン歌留多」『旅と伝説』九一二
「名月姫伝説を訪ねて」『旅と伝説』九一六
一九三八年 「撰津、但馬に残る二三の市に就て」『旅と伝説』一一一一
その他（一部）
一九二八年一月十日「民謡を訪ねて」『県下民謡私考』、『大阪毎日新聞
神戸版』
一九二八年九月 「播磨国神種発見の銅鐸」『考古学雑誌』二八一—九
一九二九年一月 「酒造作業歌」「酒造関係係人調査」付録、兵庫県学務部社
会課
一九三一年 「西撰古謡考稿抄」『民謡レビュー』一二号
一九三二年八月 「淡路由良附近の盆踊」『上方』第二〇号『上方盆踊号』
一九三二年八月 「播磨国飾磨郡置塩村の牛のはなとおし、はなるろ（鼻環）
の図」『民俗学』四一八
一九三三年三月 「夢前川漁獲習俗雑記」『播磨』二二二『民俗号』
一九三三年五月 「カウベ風土記」『神戸新聞』
一九三三年七月 「兵庫県の盆踊」『郷土風景』《諸国盆踊号》
一九三四年三月 「丹波沢田八幡豊切祭」『郷土芸術』三三三
一九三四年四月 「姫路藩に於ける救護施設」『方面』
一九三四年八月 「出稼と民謡」『職業紹介』二一八
一九三五年四月 「但馬の横行路」『土の香』一五一—
一九三六年四月 「夢前川流域食用植物の方言と俗信」『郷土文化』創刊号
一九三六年八月 「土版塔婆に就いて」『史跡と美術』七七八
一九三六年十一月 「オンザ小記」『民間伝承』二一三
一九三七年十一月 「孝子伝瑣談」『兵庫県社会事業』一一四
一九三八年 「兵庫農山村食物の二三の事例」『兵庫県社会事業』二一三

出典：諸雑誌、加茂幸男『太田陸郎伝』一九九二年、日本民俗学会編『民俗学関係雑誌文
献総覧』一九八〇年などを参照した。

足してから、柳田は早速十月二二日から十
一月九日にかけて、長野、愛知、奈良、大
阪、京都、滋賀、岐阜、神戸、鳥取など各
地に足を運び、各地の民俗研究会や学校な
どで講演し、地元の研究者と懇談した。

柳田が提唱する「平民の過去を知るこ
と」⁽²⁾を目的とする「郷土研究」は、「郷
土を研究しようとしたので無く、郷土で或
ものを研究しようとして居」り、その「或
もの」とは「日本人の生活、殊にこの民族
の一团としての過去の経歴」である⁽²²⁾。
郷土の歴史を明らかにする郷土史の態度と
は大きく異なっている。柳田が民俗学の組
織化に積極的であったのは「地方の割拠」
を避けるためであり、その働きかけは、郷
土研究が最も活発な近畿地方に特に力を入
れている。一九三六年一月十七日から二一
日にかけて、柳田は木曜会为中心的メンバ
ーである橋浦泰雄、大間知篤三を連れて再
び関西に向かい、大阪民俗談話会に出席

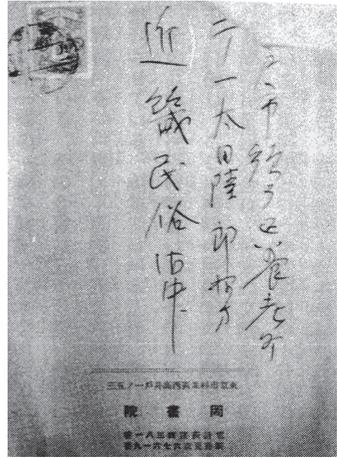


図5 太田陸郎方『近畿民俗』
編集部宛郵便物

出典：加茂幸男『太田陸郎伝』1992年、
35頁。

し、『近畿民俗』の発刊などについて地元の研究者と話し合った。

大阪民俗談話会は『民間伝承』が創刊されてから、誌上に談話会の活動を積極的に報告しているが、一九三六年一月の第五号では、「兵庫県民俗資料が、近畿民俗と改称されて全関西の民俗報告誌と拡張されるにつき太田、河本（兵庫）、水木、藪（大阪）、玉岡、平山（京都）の六氏が編輯委員となり、大阪京都の民俗学徒は全的に支持することになった。この雑誌は逐次近県の同志によびかける考である」と報じている。同号の「近畿民俗刊行会会規抄」によれば、予定された会の活動は「年六回会誌『近畿民俗』を発行し、また講演並に民俗関係図書を刊行」するとう内容であった。この号では会員二〇人以上の地方では支部の設置が可能とし（「雑報」）、「大阪では支部設置について、早くから熱心でしたが、今回京都、神戸等と連絡を緊密にして近く『近畿民俗』が発刊される事になりました。祝意を表すると共に会員諸氏の御声援を切望します」と記している。柳田の「御尽力と御徳薄」⁽²⁵⁾の下で京阪神各地方の民俗研究団体が統合されようとしていた⁽²⁴⁾。

太田陸郎の名前が次第に知られるようになったのは、この『近畿民俗』によるところが大きい。彼が中心的な役割を果たした『兵庫県民俗資料』は、当時、まだ広く知られていなかった。たとえば、同じく兵庫県出身で、かつて播磨郷土研究同好会の同人であった玉岡松一郎は、機関誌『播磨』休刊後の一九三五年春、西谷勝也と一緒に兵庫県民俗研究会に加入した⁽²⁵⁾が、その彼でさえ、『民間伝承』一―四で同雑誌を紹介するとき、その由来を「もと播磨民俗資料」と間違えたほどであった⁽²⁶⁾。

一九三六年二月、『民間伝承』一―六では『近畿民俗』創刊号が紹介され、目録も掲載されている。「寄贈書誌」

の欄に、「近畿民俗 創刊号 神戸市須磨区養老町二ノ一太田方 近畿民俗刊行会」とあり、太田が編集を引き受けていたことがわかる(図5)。この創刊号には、柳田の「成長は自然」を巻頭として、藪重孝、高谷重夫、桜田勝徳、河本正義、宮本常一、小谷芳明など当時近畿地方で活躍している面々の名前が連なり、「地方の会誌がややもすれば陥りやすい仲間うちの道楽誌的傾向を抑えて、つとめて寄稿者の学問的意識をたかめ、言うべくんば学界の中央機関誌ともなるべき意気込み」²⁷が窺える。

一九三〇年代後半から、各地で多くの民俗同好会が組織され、前にふれた岐阜の『ひだびと』(一九三五年一月～一九四四年五月)以外、新潟に『高志路』(一九三五年一月～一九四五年八月)、福岡に『豊前』(一九三五年九月～一九三七年二月)、鳥取に『因伯民談』(一九三六年一月～一九三八年十二月)など多くの民俗雑誌が発行されたが、柳田の関与から見れば『近畿民俗』は明らかに別格である。『近畿民俗』は柳田が『民間伝承』に次いで巻頭文を寄せた雑誌で、また休刊するまで柳田から数多く寄稿されている²⁸。

『近畿民俗』創刊号の巻頭文「成長は自然」では柳田はこう述べている。

是まで人があまり気づかなかつたことは、フオクロア見たいな新らしい地方の学問が、首都を中心としなければならぬ理由は一つも無く、又その中心を是非とも一つにする理由も無いことであつた。(中略) 標題は前にも申す如く、現在は思ひ切つて日本民俗資料と改められても、何等の故障もでない時代ではあるが、それではちとばかり大胆過ぎるといふ御斟酌があるならば、やがてはさうする位の抱負の下に、今は先づ近畿といふ程度にまで、領分を拡げて置かれんことを希望する。

当時、柳田は近畿に日本民俗学のもう一つの中心を構想しており、『近畿民俗』に多大な期待を寄せている。その柳田の思いを形にする責任者が太田であつた。『近畿民俗』一六(一九三六年十二月)の編輯後記では、太田は

「前号は近畿二府五県の農山村の小学校に五百部を寄贈することが出来ました。それに添付した共同採集項目『子供組』に就ては予期の成果を得ませんでした。項目の不適だったためかとも考へます。本号には改めて食物に関する項目を添付して重ねて配布致します」と報告しており、近畿での民俗学中心を建設するための努力を示している。

『兵庫県民俗資料』が停刊してからも、その主体である兵庫県民俗研究会は暫く存在しており、『民間伝承』第六号（一九三六年二月）、第八号（一九三六年四月）での例会報告によれば、『近畿民俗』の編集が大きな話題となっていたことがわかる。『近畿民俗』一―四（一九三六年八月）に「従来ノ名称ハ単ニ雑誌刊行ノミヲ事業トスルノ感アリ」を理由に、近畿民俗刊行会は近畿民俗学会に改名した。以降、兵庫県民俗研究会の名称は見えなくなり、近畿における民俗学の統合が一応の完成を見せたといえよう。

近畿民俗学会の活動は神戸での『近畿民俗』の発行と大阪での連続民俗講習会の主催とに大きく分けることができる。太田は「一方で雑誌の編輯をされつつ、又よくこの会（民俗講習会）にも出て来られて面倒を見て」⁽²⁹⁾いた。日本民俗学の初めての連続講習会は、近畿民俗学会主催・大阪府及び大阪朝日新聞社の後援で一九三六年九月十九日より一九三七年三月二〇日まで二五回にわたって毎週土曜日の午後、懷徳堂において行われており、普通講義の第八講が太田陸郎による「親方子方」であった⁽³⁰⁾。

一方、太田は一九三六年二月、『旅と伝説』（九一二）に「九州人吉に遺るウンスン歌留多」を初投稿し、これより一九四二年亡くなるまで同誌にしばしば原稿を寄せていた。

地方支部の設置やその運営と活動に多大な情熱を注いだ太田は、一九三六年八月頃に民間伝承の会の世話人に推薦され⁽³¹⁾、地方有力研究家の沢田四郎作⁽³²⁾と並んで、近畿での民俗学の組織者という役割が確認された。

以上見てきたように、太田は民俗事象について早い段階から関心を持ち、地方において地道な研究活動を積極的

に展開していたが、やがて日本民俗学のもう一つを中心として期待される近畿民俗学会の指導者の一人として自ら

の視野を全国に広げたと理解できる。

ところが、一九三七年六月『民間伝承』二一〇での太田「農業関係俚諺の地域性」(『近畿民俗』二二二)の紹介を最後にして、ほぼ一年間、論文紹介や関連学会活動の報告から、太田の名前が見えなくなった。彼が編集の任にある『近畿民俗』も、これ以降休刊となった。翌年一月になって初めて「発行所を京都帝国大学国史研究室内、近畿民俗学会に移し、年四回の刊行にて、創刊号を本年四月に出すことに略々決定した」(『民間伝承』三一五)とその復刊が報告されているものの、実際の復刊は戦後の一九四九年二月を待たなければならなかった。

今、その理由を明らかにすることはできないが、戦争の進行と役所の事務の多忙などが考えられる。しかし、太田の民俗学に対する情熱は冷めることなく、宮本常一は中国の太田から「近畿民俗の事は気になつて居られた様で、何とかして続刊してほしいといふおたよりもあつた」⁽³³⁾と回想している。

2 「中支」での観察

一九三七年七月十八日、兵庫県郷土研究会の第五回談話会は神戸三菱クラブで開催され、栗山一夫、太田陸郎など六人が出席した⁽³⁴⁾。

『民間伝承』の創刊とほぼ時期を同じくして『兵庫県民俗資料』が停刊し、主宰の太田が近畿地方の中心人物として日本民俗学の全国規模の組織化に取り組んでいたが、民間伝承の会の都市とくに東京を中心とする状況を批判し続けたマルクス主義民俗学者・栗山一夫(赤松啓介)は兵庫県で地域研究的民俗学を試み、兵庫県郷土研究会をつくり、ほぼ独力で機関誌『兵庫県郷土研究』⁽³⁵⁾を発行し続けていた。太田は直接投稿していなかったようであるが、機関誌創刊の二月に娘を連れて、はるばる同研究会が組織した大部村王子での第二回実地演習に参加する⁽³⁶⁾など、栗山の研究会を最初から支持していた。

表10 『民間伝承』 会員応召関係記事一覧

号数	刊行年月	登載欄	内容
3-1	1937年9月	近畿民俗学会	河本正義が従軍記者、玉岡松一郎が兵士として中国へ
3-3	11月	編輯雑記	例集会は応召その他の影響を受けた
3-10	1938年6月	近畿民俗学会	玉岡は再召集され、5月中旬中国前線へ
3-12	8月	近畿民俗学会	幹事太田陸郎が7月召集され、中国へ出発
4-2	11月	学会消息	前年中国戦線に赴いた島根の小林伝十は戦傷死
4-6	1939年3月	大阪民俗談話会	玉岡は病気で帰還、ほぼ失明状態に
5-1	10月	大阪民俗談話会	橘文策が満洲国通信社に入社、太田の所属が変更、玉岡は快癒して退營、岸田定雄が応召される

出典：『民間伝承』 各号より作成。

この第五回談話会では、考古学の和島誠一による講演の後、太田の話題を中心に民俗談が繰りひろげられた。話題は勃発したばかりの戦争に転じ、太田は同席した玉岡松一郎が召集されるだろうと冗談で言ったが、その予言は的中し、八月四日に玉岡は入営した³⁷。玉岡の中国行きは、近畿民俗学会の名義で『民間伝承』でも報じられ、同種報告の第一号となった（表10参照）。

それから一年経たずして予言者の太田も召集され（一九三八年七月一日）、まもなく中国へ出発した（八月六日）。『兵庫県郷土研究』は七月十五日早速このことを報告した³⁸。『民間伝承』ではその後の三一一二（八月）に「近畿民俗学会」の名義で報じられた。なお、太田の不在によって、近畿民俗学会は実質機能停止となり、これ以降大阪民俗談話会はそれにとつてかわり、大阪を中心とした民俗学活動を『民間伝承』に報告するようになった。

太田の中国行きに先だって、五月に一旦帰還した玉岡は再び召集され、中国に赴いた³⁹。一九三七年十二月日本軍は南京を陥落させ、翌年一月には国民政府との和平交渉を中止、四月に不拡大方針を放棄し、徐州を占領した。その後、戦局の早期終結のために武漢攻略が決定され、七月に作戦の準備が進められていた。玉岡の再召集と太田の召集には、このような背景があった。

武漢攻略の主力は岡村寧次中将が指揮する遼江作戦の第十一軍、及びそ



図6 軍服の太田陸郎

出典：沢田四郎作「太田陸郎伝」『日本民俗学大系』6所収、1958年、393頁。

れに協同し、大別山側から進軍する第二軍である⁽⁴⁰⁾。太田の戦地からの最初の投稿によれば、当時彼の肩書きは「中支派遣軍 片村部隊、北尾部隊気付太田（陸）部隊、太田陸郎」であった。

七月十四日上海より発令された「中支作命甲第一号別紙第二 第十一軍司令官ノ指揮下ニ入ルヘキ部隊」の戦列部隊に「波田支隊」が見え⁽⁴¹⁾、七月二二日に波田支隊が九江攻略の第一線として作戦を始め、その後、瑞昌、馬頭鎮に進軍した。この波田支隊は近藤少将が指揮する海軍の揚子江部隊と直接協力すべき遼江部隊⁽⁴²⁾であり、その管下は大佐北尾龍英が指揮する北尾碇泊場司令部があった⁽⁴³⁾。武漢攻略のため、軍隊の区分が調整され、第十一軍直轄の遼江船舶隊が組織され、陸軍少将片村四八が指揮に当たり、北尾碇泊場司令部がその配下になった⁽⁴⁴⁾。神宮皇学館の漢学者近藤空による墓誌には太田が「水上輸送隊」に属するという箇所があり、「片村部隊北尾部隊」は、間違いなくこの遼江船舶隊の北尾碇泊場司令部のことであろう。ちなみに遼江船舶隊の任務は「揚子江二沿フ作戦ノ進展ニ伴ヒ所要兵团ノ作戦ニ協力スヘシ 又長江及鄱陽湖ニ沿フ軍ノ補給運送」⁽⁴⁵⁾であった。

太田は少尉として前線に向かったのであるが⁽⁴⁶⁾、『大阪朝日新聞神戸版』（一九三八年十月二五日付）の現地記者の報道によると、太田部隊は太田以下、准尉一人、曹長一人、上等兵一人、二等兵八人からなっている。同年十一月二三日付太田部隊所属の二等兵本玉元治より太田の妻・幸子宛の軍事郵便⁽⁴⁷⁾では、「吾々揚塔隊」という表現が見え、この部隊の具体的な任務は、兵器、弾薬、資材、兵員の輸送と上陸補助とされる。

太田の「進軍中にみた支那習俗（二）」は武漢作戦が終って間もなく、十一月ごろに書かれたものだと思われる。この第一回の通信では、まだ軍の検閲がそれほど厳しくなかったのか、後になると「○○」と伏字になるはずの地名がそのまま出ている。それ

を連れれば、南京、九江、黄梅、瑞昌、武穴、田家鎮、大冶、鄂城、漢口、武昌、漢陽、大別山などで、まさにタイトルの「進軍中」というのにふさわしく、軍の進行路線とほぼ対応している。これ以降、『旅と伝説』及び『民間伝承』には、たびたび太田の名前が見られる。

太田は一九三五年あたりから、古書文献の蒐集整頓から現実社会の実情に関心の重心が移り、自分の研究の整理にも着手し始めたことは前にふれたが、そういう「愈々その知識の整頓に着手しようといふ、ちやうど油の乗りきった箭先に」⁽⁴⁸⁾、彼は中国に渡った。そして一九四二年に南方のマレーに志願転出するまで、四年近くの歲月、すなわちその生涯の研究生活の約三分の一を中国で送っていた。彼の中国に関する様々な文章は、死後一周年にあたる一九四三年十月に出版された『支那習俗』という一冊にまとめられている。『民間伝承』九一八（一九四三年十二月）では、橋浦泰雄が「本書はその五ヶ年間の採集の一部を選抜したものであつて、専ら中支の習俗五十種余を収めてある」と紹介している。

『支那習俗』は、「進軍中に見た支那習俗」「揚子江の魚と漁法」「中支奥地の鵝飼」「城壁遺存の陶磁瓦片」（一九四二年、推定、以下同様）「揚子江と倭寇」「中支の印花布」「中支奥地の旧曆歳末」「字蔵と陶磁片工芸」「金鈴盒子」（一九四一年）「金陵棲霞山仏教美術と六朝遺物」「戦地より趣味通信」「陣中随想」「闘蟋蟀」（一九四〇年）「陣中花信」（一九四一年）「支那の口碑」（一九四一年）「中支賞花習俗」（一九四二年）「中支こども習俗」（一九四一年）「娘々祭参拝記」（一九四一年）「横槩余稿」「煙塵漠々」「鄭衛余音」の全部で二一章からなっている。文章の初出などが明記されておらず、確認できた『旅と伝説』以外は、未発表のものがほとんどである⁽⁴⁹⁾。

『旅と伝説』の文章は、郷里の山窩についてのもので中国とまったく関係ない「中支より」（一九四〇年十二月）以外全部収録され、第一、二、三、五、六、七章をなし、分量も全書二〇〇頁中八四頁を占めている。『支那習俗』は長文で充実した内容を有するものほど先頭にくるように配置されていることから、『旅と伝説』で発表されたものが太田の中国研究の成果の主体と理解されよう。

収録にあたって、「進軍中に見た支那習俗」の(一)と(二)が合併されて第一章となり、一九四〇年一月の「中支より」が「中支の印花布」と改題された。本文はほぼ発表当時のままであるが、首尾の通信調の部分が削除され、一部の図や写真も外された。

太田は、最初は片村部隊北尾部隊、後に片村部隊檜垣部隊（一九三九年八月より）、田村部隊檜垣部隊（一九四〇年三月より）、田村部隊光井部隊（一九四〇年十二月より）、馬來派遣暁二九五八部隊（一九四二年七月）と、その所属が転々とした（八九頁、表11参照）。

『帝國陸軍編制総覧』（芙蓉書房、一九八七年）を参照すれば、太田の所属変化の背景がわかる。太田はまず中支那碇泊場監部（片村四八少将、一九三八年七月十五日）のもと北尾碇泊場（第二〇碇泊場）から檜垣貞勝少将を司令官とする第一〇五碇泊場司令部に転属した。それから中支那碇泊場監部の場監が田村節蔵少将（一九四〇年三月九日より）に変わった。一九四〇年九月に船舶輸送司令部（司令官が佐伯文郎中将、一九四〇年九月二八日より）ができると、中支那碇泊場監部がその隷下部隊となり、その下に第一〇二碇泊場司令部（光井一治大佐、一九四〇年十二月十四日より）が設置された。一九四二年七月七日、軍令陸甲第五二号により船舶輸送司令部を復帰させて佐伯文郎を司令官とする船舶司令部「暁」が新しく編成されたが、太田はこの「暁」部隊に所属した。

軍務任務の関係で地名が明記されなかったか削除された箇所が多く、その所在を特定することが困難であるが、しかし『支那習俗』に出ている地名には、上海、蘇州、鎮江、揚州、南京、蕪湖、安慶、彭沢、景德鎮、湖口、九江、瑞昌、黄梅、武穴鎮、田家鎮、大冶、鄂城、黃州、武昌、漢口、漢陽、黃陂などの市鎮、そして太湖、鄱陽湖、廬山、大別山、淮河、洞庭湖などの山川が見え、とくに安徽省、江西省、湖北省の揚子江沿岸を中心としたものが頻出している。太田やその指揮下の隊員による軍事郵便や戦地記者の報道に出る地名⁵⁰などと照合しても、太田の活動の中心はこの地域と見てよい（図7参照）。

太田の目に映ったこの「中支奥地」は、地図上では大都市である中心地の多くが実際にはまったくの田舎町で、

そこから一里も離れると農村であり、耕地も山間利用が多く、農家が川湖の漁も行い、ほとんど大陸的な感じがしない土地であったという(註)。太田はこの地の特徴をどこか故郷の置塩村の状況と重ねて見ているのだろう(図8参照)。

1 日本研究の延長

太田陸郎は、一九三九年九月『民間伝承』四―一二に三回目の通信(七月十日付)を寄せている。

民間伝承御送付下され有難く応召以来一年ぶりになつかしく炎暑下で拝見致しました。支那奥地に来れば来る程、あまりにも日本の習俗と類似の多いのに驚きます。勿論日本のその原始形がこちらにあるべきは当然とも思いますが——だから日本をよく知る者程また支那を明かに見、かつ研究する事が出来るのではないかと考

へます。だが戦争と研究とは別個のもので、小生の現在は只御奉公あるのみであります。

中国に赴いてから一年、戦争の長期化に伴い、軍隊の任務の重心は占領地の拡大から占拠地域の治安回復と維持に変わり、太田隊長も忙しい軍務の中、次第に落ち着いて考えることが出来るようになったらしい。なぜなら、太田は具体的な事象を描写するこれまでの投稿と異なる



図8 太田陸郎出身地糸田位置図

出典：『飾磨郡全図』飾磨郡教育会『飾磨郡風俗調査書』付録、1912年より作成。

り、はつきりと自分の中国認識や研究姿勢などを打ち出しているからである。

「奥地に来れば来る程」両国間の民俗レベルの類似の多さに気付いて驚いた。つまりかつて漠然と日本と中国との異質性を考えていたが、その想像は現実によつて修正を余儀なくされたのである。そこで太田は、日中の相似について中国の方に「日本のその原始形」が「あるべき」という理解を示し、すなわち習俗の類似を両国の歴史的交流、もつといえは中国から日本へという前近代における文化の流れの結果として認識し、それゆえに日本のことをよく知れば知るほど中国研究の可能性が大きいと判断している。そこには、民俗学を通して日本をより良く理解するために努めて来た一人の日本民俗学者としての、中国研究に対する自信が見え隠れする。

この文章は短いながら、太田の中国研究の性格を理解するための重要な点を示唆している。中国は太田にとつてまったく異質な国ではなく、昔の日本の姿を再現してくれる親しみを感じる土地であった。その論理の構造から言えば、逆に「中国をよく知る者程また日本を明らかに見、かつ研究する事ができる」ともいえる。中国研究は太田にとつて外側からという視角の違いがあるものの、日本を理解する点では、これまで視野や関心を郷土から日本に広げたことと一致しており、その意味で彼の中国研究は、これまでの日本での研究の延長線上にあるといえる。

それを証明するかのように、太田が『支那習俗』で取り上げた対象の多くは、これまでの日本で研究・発表されたもの、特に『兵庫県民俗資料』での発表と重なっている。たとえば、動植物と「播磨動植物方言抄」、水牛の利用と「牛に関する方言と俗信」「但馬牛と伝説」、娘々祭と「播磨の秋祭り」と屋台」、仲秋・盂蘭聖会と「夏の農民と土俗」、棲霞山の仏教美術と妙法寺の仏教美術調査、埋葬見聞と「大覚寺所蔵墓所関係古文書」「葬制雜記」、漁法と「高砂附近漁撈抄記」、揚子江の魚と「兵庫県淡水魚俗名集」、食用植物と「夢前川流域食用植物の方言と俗信」、陶片古拓と「播磨古瓦譜」などに、その密接な関連が窺える。

太田の論考では中国と日本の民俗学的な比較が随所に見られるが、その一つの到達点は、最後の長文「揚子江の魚と漁法」である。揚子江流域は重要な農業地帯であり、太田の駐在した地域には湖や川が多く、特に淡水魚の漁

撈習俗が豊かである。夢前川の畔にある農村に故郷を持つ太田は最初から当地域の漁業について留意し、たびたびふれているが⁵²⁾、一九四二年十二月二日に執筆された「揚子江の魚と漁法」は、これまでの総まとめという性質を有する論文である。太田は次のように綴っている。

まず農業についてはその所要器具と農耕法のあまりにも日本と相似点の多いことである。殊に水稲の挿苗から収穫までの行程、施肥の差と揚水関係を除くと故郷の田園生活と等しいといつても過言ではあるまい、其他器具もまた同様である。

農業、農具における中国と日本の近似性については、たとえば「支那輿地に来て農業を見る時まったく内地と相似て」（一九三五年七月）、「幼年時かすかに記憶にあるこれらの諸具を今眼前に展示されてその作業を見る時、何だか歌舞伎の田舎の場面でも見る心地がします」（一九四〇年一月）、「当地目下内地の二番草程度の稲であります。田草のとり方、コブリ方内地と同様です。農村の所々で、日本でいふトウス、あの木板の歯を入れ、土をつめた臼を秋の準備に作つてみますが、実に寸分変らぬ様子に驚きます」（一九四一年九月）、というように、最初から気付き、またたび論じてきたことでもある。しかし、「揚子江の魚と漁法」では、印象や感覚を理論的に整理する努力が見られ、しかも農業を漁業との対比で考察することによって、中日間の文化交流史について大きな問題提起をすることになった。

これに反して漁業についてはよほどの差を認める、凡てが幼稚なことも否めないが根底に差があるのではない。方法の多くが古態であり器具の凡ても原始的なものが多い。日支両国の差は勿論魚類、地形差にもよるだろうが、農業の両者交流に反して漁業には別個の発達を考えてみたい。（中略）日本古来の漁法についても考

えてみたい。

太田は漁業においても農業と同じく中国の方法や器具が「古態」であり「原始的」だと認めている。しかし、漁業において中国と日本の間には、農業の場合のように文化発展の段階によって理解し得る程度を超えた、根本的な差異があると感じ取り、それを説明するために農業交流説と漁業独自発展説ともいべき一対の仮説を打ち出している。その仮説が成立するか否かを論じることが本論の目的ではない。ここではただ、この発想法は日本という枠以外に立つことよって初めて得られたということ、言い換えれば太田は中国を通して日本を再発見し、それをきっかけに日本を考え直す志向を示していることを指摘しておきたい。

2 中国文化への沈潜と認識上の制約

太田にとつて、中国への理解と日本への理解は、絶えず互いに深め合う関係にあるため、中国文化への沈潜によって理解を高める必要がある。『支那習俗』から見れば、日本での研究にはないが中国では対象とされたものには、面子・叩頭（額を地面につけるお辞儀）・看熱鬧（野次馬）（「横槩余稿」）「煙塵漠々」など中国独特の文化現象以外、二つ性格の違うものが入っている。一つは先に述べた農業農具のように、日本の原型、古い姿を見ようとするものである。たとえば、藍について、太田は「又藍房があつて藍がめを見かけた、草藍が耕作されて手織木綿でそめられている、要するに日本より半世紀或いは一世紀おくられている」⁽⁸³⁾と論じている。

もう一つは、最初はまったく対象にはならなかったが、中国経験年数の増加に従い、次第に関心や理解を持つようになつたものである。茶、花、虫など中国で独特の発達をとげ、中国人の感覚と密接な関係のあるものがそれぞれある。

たとえば太田は亡くなる前年の一九四一年秋からとくに虫に対する興味が湧き出てきたようで『民間伝承』の通

信の中で連続して三回ふれている。

念願してゐた蟋蟀を闘はず遊戯を見る機会がありさうです（一九四一年十月）。

目下虫のシーズンで支那人が虫を小さな盒子に入れてポケットに入れているのを興味あるものと感心して、私も金鈴盒子というのを一具買って虫を飼っています（同十一月）。

寒さに向うとともに支那人の愛虫家達は小さな器に虫を入れポケットにしるばせています。多くは金鈴です、体温によつてあたためられて静かな音を聞くなど、中々風流な人達です（同十二月）。

さらに花の香が移つたお茶に関する記述から、太田の考え方、感じ方が変わっていく様子を窺うことができる。

「最近になつて茶をよく見ることが出来る、だが吾等はどうな場合でも支那茶はのみたくない、何処迄も日本の茶がほしい、茶葉がなければむしろ白湯ですましたい」⁽⁵⁴⁾（一九三九年三月）というように、太田は最初中国のお茶をまったく拒絶していた。しかし、それは次第に変化し、一九四二年春になると、「ただ茶のみは今宵も支那茶を喫しつづ筆を執つていますが、四年の歳月は花の香ある茶にすつかりしたしみが出来ました。何故にこの種香茶が日本に流布しなかつたか自分の疑問とする所であります」⁽⁵⁵⁾と、むしろ中国茶に愛着を持つようになった。

中国に対する理解が深まるにつれて、太田は「要するに支那といふ国は広大でどこ迄も不可解であり三年五年あて支那を解しようなどは、大きな誤りである」⁽⁵⁶⁾と自覚するようになった。

自分の中国理解を制約するものがあると太田は認めている。たとえば日本では熱心に研究していた民謡や口碑などの口頭伝承について、太田は「支那に来て四年、各地を踏んではきたがそれは軍人としての行動で単なる旅行者

でないために支那の民俗学的な事象については留意はしたものの、それは単に外面のみで、民衆の持つ内在的な口碑伝説には、あまりふれる機会に今日迄めぐまれていない」(一九四一年)⁽⁵⁷⁾と自ら反省している。しかしそこには軍務による時間の制約以外、言葉の障壁もあった。『民間伝承』五一一(一九三九年十月)に載せた通信の中で、太田は「色々と支那の風俗について聞きたいと存じますが、まったく教育が普及してゐない為め簡易な筆談も困難」である」と述べている。

中国理解を深めていこうとした時であったが、まだ中国語の会話はできず、研究は故郷農村での生活経験、長年の調査で培った感受性と観察力、また中国と日本で共通している漢字⁽⁵⁸⁾に頼っていたことが想像できる。日本民俗学の民俗語彙重視という方法が、言語の障壁にぶつかったことになる。それゆえ太田は漢口江岸の魚市の場面が描けても、そこにおける支配権の分析は出来ず、鵜飼のやり方がわかっても、行き先での漁業権の問題には手を出せなかった。

もちろん、太田は日本の民俗学の動向や中国研究について、常に最新の情報を求めており⁽⁵⁹⁾、隊長である身分で通訳を付ける便宜などもあったのだろうが、しかし調査対象と直接にコミュニケーションすることによって情報を獲得するのが民俗学研究の手法で、言葉が充分通じない太田の研究は、より視覚と直感に頼らざるを得なかった⁽⁶⁰⁾。独学で何とか会話ができるようになった太田は中国滞在の後期、昔話の翻訳(「支那の口碑」)や民謡の収集(「鄭衛余音」)にも努めていた。柳田の提唱する採集の三分類から言えば、「寄寓者の採集」に近づけようとする「旅人の採集」にあたるのであろう。しかし、心意の奥を探るといふ最終目標にはまだ遙かな道のりがある。

さらにそこには言語以前の問題も存在する。太田の中国研究は軍人という身分ゆえできた側面があったが、またそれゆえ大きく制約された一面もあった。一九一〇年に奉天会戦で戦死して靖国神社に祭られている長兄⁽⁶¹⁾を持つ太田は、通信に「昭和十四年三月十日 陸軍記念日の夜十二時」や「十二月二十二日太平洋の大捷を聞き喜びつつ」とわざわざ記すほど、自分の軍人という身分に自覚を持っている。太田は一貫して船舶輸送部隊に属してお

り、真正面から血まみれになって戦う経験がなかったように思われるが、彼の戦争認識を見れば、まず進軍中では「皇軍の進む所、彼等（国民党の圧迫下の民衆―筆者）の幸福が進むわけに外ならない」⁽⁶²⁾との理解を示し、任務が守備に変わった後も「戦争には勝たねばならぬことを痛切に感」⁽⁶³⁾じ、さらに「聖戦幾年、山村に至るまで酒旗に代るに日章旗と和平建国の旗が翻翻として春を謳歌している」⁽⁶⁴⁾と占領中の江南を描写している。この対中国戦争の性格についての認識は決して太田一人だけのものではなく、当時軍部と政府の総力戦政策下で、軍隊ないし国民の中でかなり共通した認識であろう。

しかし本人には侵略の認識がないとはいっても、日常生活においては常に中国人の敵対する態度に出会わずにいられなかったようである。『民間伝承』五―三で太田は子供が生まれて三〇日の行事「弥月」について報告しているが、そこで「こんな時ヒゲは大したもので、集まつた小供達はまつたく小生を伯叔父なみにヂヤレック有様で、小供には何の異国人否敵国人としての感念もありません」と述べている。逆にいえば、この「異国人否敵国人」という緊張関係は、無邪気な子供以外には常に感じていたのだろう。それは、たとえば中国を離れて南方に移転してから寄せた初通信の冒頭で太田が「馬來に来て感ずることは人々の皇軍に対する好感」⁽⁶⁵⁾と述べているところからも裏付けられる。

民俗学は心意の奥に接近することを究極の目標とするが、軍人でもある研究者と支配される村人との間に、軍事的強制力への配慮による協力はあっても、調査に必要な信頼関係は築かれにくい。一九四〇年末、太田は『宗』と『家』との二つの区分による制度に大変意義のあることを感じます。これが或は支那人の起返る一つの大きな原因をなすものがないか等もすこし研究してみたい」⁽⁶⁶⁾と述べ、「本年は当地方も不作に属する様です。一畝（我国の七〇％）の佃料（小作料）が一担（約五斗五升）の由（中略）すこし農村の様子も知りたいとつとめています」⁽⁶⁷⁾と抱負を語り、中国の宗族制度や農村の経済制度にも関心を抱くようになったが、しかしこれらのテーマについての研究は結局進まなかったのも、それが一つの理由だと思われる。

3 日本への発信

以上のような制約があるにもかかわらず、柳田は太田の中国研究を高く評価している。

一九四三年九月、柳田は『支那習俗』の序で、当時中国に関する出版が多い中で太田の中国研究の「二三の特長」として、第一に「此著は細心なる実地の観察に基づき、しかも色とりどりの都府の風流には目を仮さず、大むねくすみ切つた片田舎の、貧しい生産者たちの毎日の営みを、倦まず軽んぜず堅からも横からも、見て取り写して残さうとしたことに、先づ我々は一つの価値を認めて居る」こと、第二に「搜しても他には似たものが無からうと思ふ一事は、此書が日本の民俗学の学徒によつて専心に書き綴られたといふ点」をあげている。

前者はまさに柳田が主張している民俗学の研究方法そのものであり、後者ははっきりと太田の業績を民俗学の内部から受け止めている。つまり太田の中国研究は、対象こそ中国であるが、日本の民俗学者が日本民俗学の方法をもつてなされたものだと柳田は位置づけている。

実際、太田の中国研究が当時の日本民俗学の一部であったことは、『支那習俗』の出版を待つことなく、彼の研究が最初から機関誌『民間伝承』と民俗学の有力誌『旅と伝説』に掲載・紹介されていることや、これらの雑誌が戦地に届けられ、それによって、太田は常に日本国内の民俗学研究と緊密な関係を持っていたことから見てもはっきりしている。

彼の最初の報告に対して、『旅と伝説』の「後記」や『民間伝承』では、わざわざ取り上げて読者会員の注意を呼びかけていることは既に述べた通りである。しばらく後の「中支奥地の鵜飼」についても、同号の『旅と伝説』の「後記」に「又遙か戦地から太田氏が第三回目の中支奥地の鵜飼を寄せられました」とあり、『民間伝承』でも「戦塵中の報告。豊富な写真を入れたスケッチであり、漁法の大要を尽くしてある弾雨下の氏の学問愛を沁々と感ぜしめられる。武運長久を祈つてやまない」と紹介されている。

表11 『民間伝承』と『旅と伝説』に見られる太田陸郎関係内容（一九三八～一九四三年）

年月	雑誌・号数	主な内容	備考（頁数、写真・図点数、所属変更など）
一九三八年 八月	『民』三一―二	近畿民俗学会による太田応召の報告	
一九三九年 一月	『旅』一―二―一	「進軍中にみた支那習俗（一）」、「後記」 倉田による上の報告の紹介	九頁、図五、写真二、中支派遣片村部隊北尾部隊
二月	『民』四―五	倉田による上の報告の紹介	九頁、手描図一、写真十一
三月	『旅』二―二―三	「進軍中にみた支那習俗（二）」、「後記」	四頁、手描図一、写真六
五月	『旅』二―二―五	「中支奥地の鵜飼」（昭和十四年三月十日、陸軍記念日の夜十二時）、「後記」 倉田による上の報告の紹介、通信・戦地に春、鷺通信・記録困難、食、農業、藍麩、薪、竹縄	中支派遣片村部隊北尾部隊 一年ぶり『民』を拝見
六月	『民』四―九	倉田による上の報告の紹介、通信・戦地に春、鷺通信・記録困難、食、農業、藍麩、薪、竹縄	中支派遣片村部隊檜垣部隊
七月	『民』四―一〇	通信（七月十日）…中日の習俗が類似	一年ぶり『民』を拝見
九月	『民』四―一二	通信…孟蘭聖会、筆談困難、参考文献皆無	中支派遣片村部隊檜垣部隊
十月	『民』五―一	通信…弥月、子供習俗	
十二月	『民』五―三		
一九四〇年 一月	『旅』一―三―一	「中支より」（昭和十四年十一月二十二日）	三頁、写真四
二月	『民』五―五	「参考文献」で上の報告にふれられる	
三月	『民』五―六	通信…薬のふとん、綿、ことばの一致	五頁、写真八
四月	『旅』一―三―四	「中支奥地の旧暦歳末」もう二日すれば正月	中支派遣田村部隊檜垣部隊
五月	『民』五―八	通信…正月、春聯を一つ紹介	
七月	『民』五―一〇	通信…孤猿随筆読了、犬のこと	
八月	『民』五―一一	通信（六月十七日）…雨乞、スッポン、炎天下	
九月	『旅』一―三―九	通信（八月八日）…暑さ、ゴザ、市街地の繁昌	『民』九号拝受
十一月	『民』六―二	通信…今日中秋節、贈答品、博打、食物	『旅』拝受

十二月	『民』六一三	通信…「宗」と「家」の制度に興味	二頁
十二月	『旅』二三一―二	「中支より」（山窩のことども）	
一九四一年			
一月	『民』六一四	通信…小作料、小作人の地位	
三月	『民』六一六	通信…今日旧正月三日、旧暦使用、内地との相違	
四月	『民』六一七	通信…若草摘み、種類、食べ方	
七月	『旅』一四一―七	「揚子江と倭寇（現地検閲済）」（昭和十六年孟春）	
八月	『旅』一四一―八	便り（七月十二日）投稿遅延。「後記」	
九月	『民』六一―二	通信…農作業、寸分変わらぬ	
十月	『民』七一―一	通信…稲刈り、蟋蟀を闘はず遊戯	
十一月	『民』七一―二	通信…仲秋、虫を飼う金鈴盒子	
十二月	『民』七一―三	通信…冬服に蚊帳、愛虫家達の風流	
一九四二年			
二月	『旅』一五一―二	「揚子江流域の魚と漁法（現地検閲済）」（十二月二十二日、太平洋の大捷を聞き喜びつつ）	十二頁、手描図五、写真十八
九月	『民』八一―五	通信…皇軍に好感、村の団結、宗教、言語、昔話	於馬来
十月	『旅』一五一―〇	通信…暇なし、民話、ドリヤン、魚類。「後記」	馬来派遣、暁二九五八部隊
十一月	『旅』一五一―一	通信…手紙不便、興味多い、文字、禪、果物	同前
十二月	『旅』一五一―二	「後記」	十一月十八日作成
一九四三年			
二月	『旅』一六一―二	宮本弔文	一九四二年十一月二日作成
五月	『民』九一―一	敬弔	
十二月	『民』九一―八	橋浦による『支那習俗』紹介兼弔文	
十二月	『旅』一六一―二	『支那習俗』紹介	要目あり

註…『旅と伝説』は『旅』、『民間伝承』は『民』と略記する。年月欄は雑誌の発行年月である。

一九三八年から一九四三年まで『旅と伝説』及び『民間伝承』に見える太田の投稿、通信及びその紹介、後記やその他太田と関連する内容は表11を参照されたい。

太田は雑誌への投稿以外に、展示会に写真を出品するなど、積極的に中国研究の成果を示していた。一九三九年十月、関西学院大学創立五〇周年の記念活動の一つとして、年中行事・民間信仰・民俗芸術（子供の世界）・民具及び生活・郷土資料など五つの展示室からなる日本最初の民俗展覧会が行われ、各地郷土研究会から機関誌や刊行物が寄贈され、近畿とくに兵庫を主として、岐阜、徳島、新潟や東京からの出品があった。目を引くのは、当時中国にいた橘文策⁶⁸と太田からも出品があったことである。郷土資料という展示室に、国内外の出土品、日本民俗学の発達を語る文献、地方郷土研究雑誌、方言分布図、日本と世界の頭上運搬・父親分婉習俗分布図や柳田の著作書と並んで、「中支戦線の太田陸郎氏の、写真出品あり、中支の民俗と、日本の相似を理解することが出来た」⁶⁹と報告されている。

3 太田陸郎の中国経験と日本民俗学

太田陸郎は、大学出身のエリート知識人であり、また郷里の生活の細心な観察者であり、郷土史料の熱心な蒐集者でもあった。一九二〇年代後半、彼は早くから民謡や方言など民俗学的な事象に関心を持ち、しばしば新聞雑誌などに投稿した。兵庫県庁勤務の傍ら、三〇年代前半で、彼は地元の神戸で兵庫県民俗研究会を組織し、良質な地方民俗雑誌『兵庫県民俗資料』の編集に精力的に取り組み、郷土史関係の古い資料を多数復刻して解題をつけ、また多くの論文、報告を発表し、貴重な民俗資料を残した。

一九三〇年半ばから、柳田を中心とする日本民俗学の組織化の過程に積極的に参与した太田は、『近畿民俗』の編集に携わる傍ら、民俗講習会や例会など近畿地方の民俗学会の活動にも取り組み、日本民俗学の地方組織者とし

ての役割を果たした。そこで太田は、その視野を郷土の西播、兵庫県から次第に日本に広げ、文献史料より調査を重視する方向に研究の重点を移し、さらにそれまでの研究の整理総合にも手を付け始めた。

日中戦争の拡大によって、軍曹として召集された太田は、自分にとってまったく新しい中国の土地に踏み入り、長期滞在を余儀なくされた。しかし彼はむしろ最初からそれを良い機会として受け止めているかのよう、行き先の土地を民俗学的な視線で観察し、その成果を積極的に日本の学界に向けて発信し続けていた。太田は自分の中国研究を日本研究の延長線上に位置づけており、そこには強い文化史的な関心がみられ、かつて兵庫県で地域の文化史を究明すべく活躍していた太田の姿と重ねるところが多い。

軍人という身分や言語の障壁などの問題で彼の中国経験は限定されたものとなったが、日本での経験との比較と中国文化への沈潜によって、日本を改めて認識する可能性を獲得した。彼の中国研究は、当時既に一人の軍曹による道楽的な研究ではなく、「日本民俗学の最も忠実なる学徒の一人」⁷⁰によるものと理解されており、整備されつつあった日本民俗学の研究の一部として評価されている。

「太田陸郎君は中支の或小さな守備部隊の長になつて、飽きるほど一つの土地に滞陣し、其間に実に熱心な観察をして居る。この人のやうに細かに故郷の生活を知つた上で、更に向ふの農民の実情を、理解しようとした人も稀なのである」と柳田国男が最大の賛辞を送る背景に「沢山の通信を私たちの処へも送つて来て居るが、ただ雑誌に公表した一小部分のみが、遺稿となつた⁷¹という事実があつた。

こうしてみると、日本民俗学にとって太田陸郎の役割は中国の「現地レポーター」に譬えられよう。太田が軍務の傍らで書いた文章そのものは研究のためのノート、ヒント集という性格が強く、今日では研究と見なされない可能性がある。しかし彼は「熱心な観察」をし、そのときどきの様子、自分の感想を含め、通信、寄稿あるいは民俗展示会への写真出品などの形で、積極的に日本民俗学界に向けて発信し続けていた。彼はその先駆者であると同時に、また最も積極的な人物であり、こうした彼の活動はよく取り上げられ、多大な注目を集めていた。たとえば、

南方熊楠の絶筆の一つは、太田の文章に呼応しての「太田君の進軍中に見る支那習俗（二）を読む」であった。この未完成の原稿は、南方の弟子雑賀貞次郎によって発見され、遺稿として『旅と伝説』一七一〇（一九四二年十月）に掲載されたが、柳田は『支那習俗』の序文でも太田に対する南方の高い評価にふれている。太田陸郎と国内の日本民俗学の間交流は、『民間伝承』『旅と伝説』だけでも表11のように、その数は驚異的なものであった。こうした密接なレポートとコメントが、いつも目にふれやすい形で展開されていた。中国において日本人研究者による民俗学の研究が、時代の要請であると同時にまた実行可能なことでもあるというイメージを日本民俗学に与えた存在として、太田陸郎が果たした役割は大きいと言えよう。

第3章

大間知篤三——民族学と民俗学

一九三九年一月、太田陸郎の中国民俗に関する最初の文章が『旅と伝説』の読者の目にふれたとき、大間知篤三の満洲建国大学（以下、「建国大学」と記す）赴任は既に決まっていた。二月に大間知は満洲に渡り、一九四六年八月博多に引き揚げるまで、七年余り満洲で生活していた。

大間知篤三は日本の民俗学、なかならずく婚姻、家族など、後に社会伝承と称されるようになった分野において重要な業績を残した人物である。東京帝国大学新人会（以下、「新人会」と記す）の幹事長、共産黨員、柳田国男の弟子、建国大学の助教授、教授という経歴に加えて、晩年独自の調査研究法を確立し、師・柳田への批判を展開したことで、早くから注目されてきた。

大間知の民俗学研究の特色については上野和男「大間知篤三——その研究と方法」（瀬川清子・植松明石編『日本民俗学のエッセンス』一九七九年）、新人会での活動や柳田の門弟としての異色ぶりについては鶴見太郎「柳田民俗学と東大新人会——大間知篤三を中心に——」（『史林』七七一四、一九九四年七月）、満洲での活動については竹田亘「解

説」(『大間知篤三著作集六』一九八二年)などの先行研究がある。一九七五年～一九八二年、『大間知篤三著作集』全六巻が未来社より刊行され、その第六巻には満洲に関する大間知の文章、そして妻・千代と竹田且による大間知の略年譜と著作目録が収められている。なお『民間伝承』三四―一(一九七〇年七月)は「大間知篤三先生追悼記念特集」(以下、「追悼特集」と記す)であり、関係者による回想には重要な情報が数多く含まれている。

本章では以上の先行研究と基礎資料を参考にしながら、大間知の民俗学創立期での活躍、及び満洲赴任後の活発な活動や研究を明らかにし、その中国経験の意味を検討する。

1 新人会から民俗学へ

1 大間知篤三(おおまち・とくぞう)の略歴

一九〇〇年、富山県富山市の裕福な呉服屋の次男として生まれる。父親は富山銀行頭取。

一九二三年四月、金沢の第四高等学校を卒業し、東京帝国大学文学部独文学科に入学する。

一九二四年、新人会に入会、文学創作活動も続ける。翌年より運動に専念する。

一九二六年、一年卒業を延ばして新人会幹事長となり、学連の指導にも当たる。労働農民党本部で書記を勤め、上司浅野晃の指令で日本共産党に入党する。

一九二七年末、一年志願兵として金沢歩兵第七連隊に入営する。翌年、三・一五事件で検挙され、三年間の実刑を言い渡される。

一九三一年、出所して新人会の友人であった大宅壮一の翻訳団に参加する。ドイツ小説の翻訳を出版し、結婚する。

一九三三年、民間伝承論講義に参加し、柳田の指示で婚姻習俗語彙の編纂を始める。

一九三四年、木曜会発足当初からの同人となり、三年間の山村調査に（後、一九三八年に海村調査にも）参加し、『旅と伝説』に民俗学の処女論文を発表する。

一九三五年より、大孝塾研究所（後、国民思想研究所）の研究員として日本家族制度を担当する。傍ら、柳田出張の随行、民俗学講習会での講演、『民間伝承』の編集など、民俗学の組織化に尽力する。

一九三九年二月、金沢連隊当時の上官辻政信の推薦で新京にある建国大学に赴任し、ドイツ語、後民族学を担当する。傍ら満洲各地で諸民族の調査を行う。

一九四六年、日本に引揚げる際文献と現地調査の資料を失う。日本民族学協会協議員になる。翌年から、富山高校でドイツ語を教える。

一九四八年、民俗学研究所嘱託、五〇年同代議員、五一年同理事になる。

一九五四年、結核で同所を退職、同所及び日本民俗学会と疎遠になるが、調査と研究を続ける。

一九七〇年二月、東京の自宅で病没。

大間知と多くのところで共通点を持ち、これからもしばしば登場してくる守随一の略歴も以下に併記しておく⁽¹⁾。

守随一（しゅずい、はじめ）の略歴

一九〇四年、東京市麹町の稗の家元に、長男として生れる。浦和高校在学中、寮歌「緑の丘辺」⁽²⁾を作詞する。日本エスペラント学会の会員である。

一九二五年、東京帝大経済学部に入學し、矢内原忠雄に師事した。在学中、新人会に入会する。エスペラントの翻訳や学会の評議員も務める。

一九二八年、卒業。講師として武蔵高校や頌栄高等女学校、浦和高校などで法制、経済を教える。

一九三四年、木曜会発足当初からの同人となり、三年間の山村調査に（後、一九三八年に海村調査にも）参加し、『旅と伝説』に民俗学の処女論文を発表する。

一九三五年、民俗学講習会での講演、『民間伝承』の編集など、民俗学の組織化に尽力する。一時大蔵省で外国租税制度の調査に参加する。

一九三八年十月、満鉄調査部の新京支社に赴任し、経済調査に従事する。のち支社調査室業務主任になる。

一九四三年、満鉄事件の第二次検挙により奉天で入獄する。

一九四四年一月、未決で釈放されるが、獄中で罹ったチフスにより新京の友人宅で病没。

2 新入会と民俗学

木曜会の主要メンバーの中で、新入会成員だった人物は三人いた。大間知の外に、佐々木彦一郎（一九〇一～一九三六年）³と守随一である。三人は共に一九三三年木曜会の活動が本格化した当時から関わりを持ち、山村調査に中心メンバーとして参加し、民間伝承の会が結成されてからその維持委員となった。そして各自の活動以外、佐々木は山口貞夫（一九三三年）と石田英一郎（一九三四年）、守随一は倉田一郎（一九三四年）など、のちに民俗学の有力な推進者となる人物を木曜会に紹介した功績も大きい。地理専攻の佐々木は中国と出会うことなく日中戦争前に亡くなったが、大間知と守随が共に日中戦争が勃発した後の一九三八年末から一九三九年初に満洲に赴いたことは興味深い。

新入会は初期（一九一八～一九二二年）において、H・スミスが指摘したように、全世界に広がる革命の潮流に巻き込まれる感情的な国際主義の精神が顕著であった⁴。とくに吉野作造や宮崎龍介によって、中国との絆は強かった。一九一九年に宮崎を始めとする新入会の四人が北京大学を訪問し、また新入会の招きによって、一九二〇

年五月中国学生運動の中心的な組織少年中国学会の幹部五人が訪日したこともあった⁽⁵⁾。しかし吉野の影響の後退や宮崎の卒業などにより、「ナロード宣言」を経て学内団体となった新人会には、こうした国外の学生組織との交流が見られなくなった。一九二〇年代を通じて新人会はもっぱら国内問題に集中し、国際問題とくにアジアの問題に関心を持たなかった⁽⁶⁾。

大間知は四高時代から文学活動に熱心であり、新人会に入会してからも文学雑誌の編集を続けていたが、一九二五年から運動に集中するようになった。新人会の幹事長になった一九二六年は、いわゆる福本イズムの時代（一九二六―一九二八年）であり、再建共產党にすでに入党した学生運動出身者は雪だるま式に若い仲間を引き入れていた。大間知もその中で共產黨員となった⁽⁷⁾。

新人会時代が彼に与えた影響は以下の二点において大きいと思われる。一つは少人数が定期的に集まり定められた文献を読み、討論する研究会活動⁽⁸⁾であり、もう一つはこのエリート団体の組織者の一人として得られた人脈である。

木曜会の柳田宅での集会は柳田国男の指導を受ける講義の性格が強いが、その中心メンバーである大間知、佐々木、守随、杉浦健一、山口貞夫や橋浦泰雄、大藤時彦などは「成城での話題を更に掘り下げ」るために自発的な研究会を続けていた⁽⁹⁾。満洲に赴いてからも、大間知は新京民俗同好会などの自主的な研究会の活動に積極的であった。そして戦後の一九四八年から亡くなるまで彼は浅野晃、中平解、大森志郎らと「古典輪読会」を続けていたことも、徹底的に文献を理解することによって自己思想の改造⁽¹⁰⁾を図るといふ新人会時代の研究会経験と無関係ではないだろう。

後者に関して、民俗学関連だけで言えば、柳田門下入りの仲介役と思われる橋浦泰雄とは、新人会のメンバーとして『無産者新聞』編集室に赴いたとき初めて会った⁽¹¹⁾。そして木曜会の守随と佐々木以外、新人会から民間伝承の会に入会した者の中で、福間敏男（一九三五年十月『民間伝承』一―二入会。以下同様）は当時大間知と大宅壮

一翻訳団での同僚であり、中平解（同前）は大間知と同じく一九二七年に卒業した者で、生涯の友人であった。浅野晃（一九三六年四月『民間伝承』一七八）は大間知を通して柳田と面識を持ち、さらに水野成夫（一九三七年十二月二〇日『民間伝承』三一四）を柳田と引き合わせた¹²⁾。中平と浅野は戦後『民間伝承』の世話人であり、水野は一九四〇年、軍部の協力を得て大日本再生製紙会社を創立し、終戦までその重役であったことは、戦時下の用紙統制中で柳田国男を中心とする民俗学関係の出版にとって有利な条件であった。

3 民俗学創立期での活躍

大間知と柳田との出会いは鶴見太郎の指摘によると、当局による思想善導の思惑や柳田周囲にいた若干の知己という条件の下で生まれたものであったという¹³⁾。柳田との付き合いからいえば、守随一の方が古い¹⁴⁾、木曜会は大間知は守随を「新顔」¹⁵⁾と言えるほどの先輩であった。守随は一九三四年木曜会の第一回例会に、同じ高輪教会に通っていた倉田一郎を連れて参加したが、大間知は一九三三年九月に始まった民間伝承論講義の初回からの出席者の一人であったからである。しかし、その後『民間伝承』の編集や世話人の指定、乃至満洲行は、すべて守随が大間知に一歩先んじていた。

民間伝承の会が結成されてその機関誌『民間伝承』の編集発行名義人として柳田に指名されたのが守随であった。守随の親とは一高、帝大の同級生という関係で、若くして亡くなった友人の子供への気遣いがあると思われる。そして柳田と守随とともにエスペラント学会評議員であることも親近感を増す要素である。さらに実際、『民間伝承』の編集所はまた民間伝承の会の事務所も兼ねており、裕福な家庭に生まれた守随には、編集作業に集中するための環境や経済的条件がある¹⁶⁾という判断もあろう。

雑誌の編集は木曜会の同人が担当していたが、まとめ役として輪番制で一年ごとに編集責任者が決められていた。当然、編集名義人である守随は、初年度の編集責任者となった。九月発行の雑誌創刊号によれば、民間伝承の

会の最初の世話人は青森、新潟、長野、愛知、大阪、山口、熊本など地方の有力研究家以外、東京では柳田国男、岡正雄、橋浦泰雄、桜田勝徳、大藤時彦、山口貞夫と並んで守随一の名前が見られる。

表12 大間知篤三山村調査地一覧

初回調査年月	調査地	再調査年月
1934年5月20日～28日 11月	茨城県多賀郡高岡村 広島県山県郡中野村	同7月19日～25日、8月18日～29日 1935年3月
1935年6月21日～29日 11月	岩手県九戸郡山形村 愛媛県北宇和郡御檜村	同8月11日～22日 1936年2月
1936年5月	鹿児島県出水郡大川内村	同10月
1937年3月	奈良県添上郡瀬村・宇陀郡曾爾村	なし

出典：大間知千代・竹田旦「大間知篤三略年譜」(『大間知篤三著作集』6所収)より作成。

守随について編集責任者となったのが大間知であった。それに伴い『民間伝承』二一三(一九三六年十一月)に兵庫からの太田陸郎、鳥取からの蓮仏重寿と並んで、大間知も世話人として追加された。

初期民俗学において守随は『民間伝承』の編集など縁の下で努力する形をとったとすれば、大間知はまず調査研究活動においてその力を見せた。

木曜会の成立に先立って、一九三四年一月六、七日、大間知は佐々木彦一郎と一緒に千葉県白浜で初めての民俗調査を行い、その報告を『島』第二巻(四月)に投稿し、二月に伊豆神津島に赴き、その報告を『東京朝日新聞』(三月二二～二三)に投稿した¹⁷⁾。山村調査の中で大間知が行った調査(図9)を年譜によって整理すると、表12になる。

守随一も長野県更級郡信級村と京都府北桑田郡知井村を調査しているが、大間知が三年間で調査した村は実に七村にも上り、その内の五村について再調査を行い、最初の調査地である高岡村についての調査は三回で合計二八日間にもわたった。その結果は後に全国民俗誌叢書の一冊として出版された『常陸高岡村民俗誌』(刀江書院、一九五一年)に結晶した。

海村調査の中で大間知は一九三八年三月十五日～二十五日、八丈島末吉村を調査し、戦後の大著『八丈島』での研究のきっかけを作った。これ以外、大間知は自

直系親族に到るまで世代別に竈を分つて生活する隠居制が、遙かに広い範囲にわたつて分布して居ることは大きな問題であり、所謂末子相続の問題も亦是と關聯して考へられなければならない」と主張している。



図9 大間知篤三 1934年度山村調査手帖・茨城県
 出典：福田アジオ他編『日本民俗大辞典』下、2000年、口絵より。

的に伊豆大島、神津島（一九三四年二月）、岐阜県大野郡白川村（一九三五年五月）、甌島（一九三六年五月）についても調査を行った。

大間知は木曜会の会合でこれら調査の結果を数多く報告しており⁽¹⁸⁾、調査や表現の方法などについて同人と議論した。同じく山村調査のメンバーである最上孝敬の回想によると、当時、細かい表現方法などの討議や決定の際に大間知が進行をつかさどることが多く、大間知の報告書は「いつも精細克明に記されている最上級のものであった」だけではなく、「いつも何か新しい問題の展開があった」⁽¹⁹⁾という。対象を理論的に把握、分析する能力は、かつて大間知が学生運動の中で労農党の活動方針に関する新聞の社説を鮮やかに論評したときにも窺える。初期の木曜会では、大間知も他の同人と同じように、調査方法と研究方法においては、基本的には柳田の指導にそつていたが、山村調査の最初の調査地である高岡村（図9）は「偶然にもいわゆる隠居慣行の著しく濃厚な地であった」⁽²⁰⁾こともあり、隠居など後に大きく自分の研究の基礎をなす民俗事象にも出会うことになった。

たとえば彼は『民間伝承』一―二（一九三六年八月）に「隠居」という一文を寄稿し、「日本の家族制度を考察する場合に、傍系親族をまで一家族に包容し且つ一つの竈の飯で生活する大家族が一方にあるに對して、

表13 大間知篤三日本民俗学普及活動（1938年まで）

年 月	場所	内 容
1935年8月5日	東京	日本民俗学講習会で「冠婚葬祭の話」を講演
10月28日	大阪	大阪民俗談話会主催柳田遷歴記念民俗学講演会で「民俗学ノ産屋ヨリ」を講演（西田直二郎、折口信夫、柳田国男、W.シュミットと）
1936年1月18日	大阪	大阪民俗談話会に出席し、大阪連続民俗学講習会の計画に関して協議（橋浦泰雄と柳田に同行）
4月末	長崎	長崎郷土振興会講習会で「村落と協同生活」を講演。（柳田も講演、杉浦健一と現地参加）
5月9日	京都	京大民俗学会で甕島の家族・婚姻習俗を話す
9月26日	大阪	大阪25回連続講習会で「民俗採集技能と採集者」を講演
1937年3月2、9日	東京	第1期日本民俗学講座第7、8回として「婚姻と家庭」を講演
3月29、30日	愛知	愛知県教育会と民間伝承の会共催の講習会で「村の交際」を講演（折口と）
4月5日	奈良	奈良市加藤玄智博士歓迎講演会で「同齡感覚」を講演（沢田四郎作、野村伝四と）
5月15日	金沢	金沢民俗談話会に出席（大藤時彦と）
5月18日	岐阜	飛騨考古土俗学会の会員との座談会に出席
10月5日	東京	第3期日本民俗学講座で「墓制」を講演
1938年2月15、22日	東京	第4期日本民俗学講座で「産育の民俗」を講演
12月13日、20日	東京	第6期日本民俗学講座で「家族制度に於ける二三の問題」を講演

出典：大間知千代・竹田旦「大間知篤三略年譜」（『大間知篤三著作集』6所収）より作成。

大間知は『民間伝承』に自分の調査についての会員通信を寄せる他、新刊の紹介書評^①や欧米とりわけドイツの民俗学の紹介^②にも積極的であった。また流行にも敏感であった。日中戦争が始まってまもなく、彼は『東京日々新聞』（八月二七日朝刊）に事変下の街頭風景である千人針のことについて分析を試みている。それが『民間伝承』三一一（一九三七年九月）の編集雑記に紹介され、その後の戦争に関係する民俗への注目に影響を与えた。

大間知は研究者であると同時に、また運動家でもあった。彼は一九三五年の日本民俗学講習会から満洲行きの直前まで、各地で行われる民俗学講座、講習会や民俗学関係団体の活動に積極的に関与し、持ち前の組織的な活動力を遺憾なく発揮していた（表13参照）。

大間知の研究や組織活動は基本的に民俗学の範囲内であったが、同時に『東京人類学会・日本民族学会聯合大会第一回

大間知は『民間伝承』に自分の調査についての会員通信を寄せる他、

紀事』(一九三六年十一月)によると、四月初めに行われる同大会に、大間知は日本民族学会の会員として参加していた⁽²³⁾。さらに一九三八年四月に「『隠居』について」を『年報社会学』(第五輯)に投稿している。大間知は民族学、社会学とも積極的に接点を持っていたことがわかる。

2 「満洲」での調査

1 満鉄そして建国大学

日中戦争に入ってから、外国理論の吸収、関連学問の成果への留意を含め、『民間伝承』誌上は活況を呈していた。発刊四年目に入った四一(一九三八年九月)の編輯後記には以下の内容が載せられた。

事務所も本会創立以来犠牲的に引き受けてゐられた守随氏の処から左記別項へ移転しました。この三ケ年にあたる永い間の同氏の並々ならぬ苦勞と御尽力とに対して会員諸氏と共に茲に深甚なる感謝の意を表したいと思ひます。

抑制の筆触で書かれたこの簡単な知らせは多くの情報を含んでおらず、当時多くの会員はさほど注意を払わなかったかもしれない。しかし会の事務所の変化は、決して個人的な理由にとどまらず、社会のより大きな変化の一部であり、またこれからの変化を暗示していた。

下って『民間伝承』四一六(一九三九年三月)では「守随一氏又昨年末急遽満鉄調査部へ転職の爲めに大連へ移り大間知篤三氏又急に新京へ聘せられて本月下旬中には出発の予定。新鋭の参加ありとは云へ残留部隊は大いに緊張を感じて居る」と報じている。その前の一九三六年に最初からのメンバーであった佐々木彦一郎は病没したし、

彼によって木曜会に紹介された山口貞夫も療養のため東京を離れていた。

守随や大間知の満洲行きは、海村調査が切上げられたことが象徴するように国内での調査が次第に難しくなったことや、戦争の継続によって国内の政治的な閉塞感が高まったのを、かつて学生運動に身をおいた青年エリートの敏感さをもって感じ取ったことによる一面があると思われる。当時の満洲は新天地として多くの人々、特に若き知識人の憧れの地となっており²⁴、日本の大陸経営もまたそのような考え方の持ち主を吸収するような機関を準備しておいたのである。

■ 守随の調査

守随一が勤めたのは満鉄調査部であった。

満鉄本社の調査部は満洲事変後、軍の調査機関として経済調査会に改組され、経済統制を主旨とする政策立案に尽力したが、満洲国成立後、産業部に改組される（一九三六年）など縮小傾向に入っていた。日中戦争後、満鉄全体の経営が縮小されていく中で当時の総裁松岡洋右によって大調査部が構想された²⁵。正式決定は一九三八年十一月の重役会議においてであったが、その前からすでに中途採用が始まっていた。七月に新人会出身の石堂清倫は大連の本社に赴任し、十月に守随が新京支社に就職した。満鉄新京支社に調査室が新設されたのは翌年の一九三九年四月であり、守随は業務主任となった。一九四〇年度に「日滿支ブロック・インフレーション及びその対策」という統一課題が決められると、新京支社調査室は満洲の部を担当した。

『民間伝承』四一六（一九三九年三月）に大連から守随の初めての通信が載せられており、これ以降調査に関する通信が三通あり、そこから満洲での守随の調査状況を垣間見ることができるといえる。

明日から吉奉線の背後地経済調査に出かけます。零下三〇度といふのに恐れをなして居ます。山村調査の経験

を買はれて農業問題を担当することになり、早速手始めに農村に入つて見ることにしました。これから陰暦の正月にかけてが一番生産物の動きの多い時といふので、実地に見て来やうと思ふのです。毛皮のシューバーに毛皮の防寒靴、毛皮の帽子といふ物凄いいで立ちです。約一月村々を廻る筈なので、用意も楽ではありません。通訳は連れて行くのですが、覚束ない、『日満会話』の本に、病気除けのクレオソートと、毛布五枚と、写真機と、南京虫は免疫になるまで噛まれる予定です。

一九三九年の陰暦正月は二月十九日からであった。おそらくこの通信は一月に執筆されたものだと思われるが、北の冬はかなり厳しい。満鉄調査部での担当は専門でもある経済に関する調査で、通訳同行のもとで一回一ヶ月ほどの長い期間で、数箇所を回る形のものである。

満支に於ける突工挿具のこと報告したいと思ひますが暇がないので残念です。突工は手間替え、挿具は牧畜や大農具の利用交換です。いづれ報告の機会を得たいと思ひます〔民間伝承〕四一九、一九三九年六月。

「挿具」は正確には「挿靱」であろう。「靱」は運搬や耕作の時、畜力を数える単位であり、「挿靱」とは大型家畜を持つ者と、犁や耙など大農具を持つ者との間の利用交換である。労働交換は普通「換工」というが、「突工」という言葉はよくわからない。「満支」という用語は、民俗レベルでは、「満洲」と「支那」が密接につながっていることを物語っている。

土着資本の実態調査といふことで北満の僻境の町に来てゐるのですがつい僻趨山村調査のくせが出てしまつて仕事の上から必要なものよりも成るべく旧式なもの成るべく余り数字的ならざるものについて目がひかれて弱つ

てゐます。雑貨商、糧機（穀物売買商）、焼鍋（焼酒屋）、油坊（豆油、豆粕製造）などの経営の実態について調査してゐますが、それ等の対農民関係はまつたく内地山村の間屋の太り方と同じ様で誠に興味深いものがあります。農事合作社の活動に依つて漸次改善されつつありますが。ハルピンから松花江を船で下ること三日、国境に近い町です。内地では言葉によつて採集したのに、ここでは通訳によつてやるのでまつたく歯がゆいものです。滞在既に旬日余不潔な水と蠅と暑気で腹をこわしてへばつてゐますが山村調査のねばりを以てもう一週間頑ばる積りです（三江省富錦にて）（『民間伝承』四一一、一九三九年八月）。

辺鄙な農村に赴いて調査するということに、日本での山村調査と満洲での経済調査は共通性を持つており、随の第一信にあるように彼の採用は日本での山村調査の経験が買われた面があつた。しかし現場では守随は否応なしに両者の相違を感じさせられた。つまり、山村調査は「成るべく旧式なもの成るべく余り数字的ならざるもの」を重視していたが、しかしそれは「仕事の上から必要なもの」ではない。

山村調査の目的は『郷土生活研究採集手帖』（一九三四年）の趣意書によれば、「日本人のみが持つてゐる美質と思はれる性情（中略）を知るため、今日古風と謂はれてゐる村人の生活様式の中から、出来るだけ具体的にその根原を探り出すことであり」、「直接の採集に依てその比較研究を行ひ、（中略）日本人特有の精神生活がどんな筋道を通つて発達したかといふことを闡明」するところにあつた。

「古風」な生活から「根原」を探り出すから、当然「成るべく旧式なもの」に注目することになり、「性情」「精神生活」の研究を掲げる以上、「成るべく余り数字的ならざるもの」に関心がいくことになる。一方、守随の仕事は経済統制に直接貢献すべき「土着資本の実態調査」である。その名のように、あくまで経済の「実態」の把握が目的であり、そのためにむしろ数字が中心であつた。仕事を全うするために民俗学的視線を抑えたためか、経済慣行のような報告があつてもよいものの、これ以降、守随から調査内容に関する通信が途絶えた。

第一信では、調査に持っていく最低限のものとして、薬、毛布、カメラとともに、「日満会話」もあった。通訳がいるが、「覚束ない」という。異国ではまずぶつかる壁は言語であり、実地調査を行おうとする者にとってはなおさらである。「内地では言葉によつて採集するのに、ここでは通訳によつてやるのでまったく歯がゆいものです」というのは、日本と違う調査方法が必要であることを示している。

山村調査の経験は、目的の違いや言葉の問題で、満洲では多くは生かせなかったようだが、そこで培った「山村調査のねばり」は大いに役立ったようである。山村調査は、最上孝敬の回想によると「交通困難な僻地へしばらく入りこんで前後二十日以上にわたる滞在は、肉体的並々ならぬ苦痛を伴うものであった」⁽²⁶⁾からである。そうした個人行動の能力や精神的な逞しさを、木曜会の仲間のなかでも、一番持っていた大間知は、守随より数ヶ月遅れて同じく満洲に赴任してきた。

■大間知の赴任と調査

一九三九年二月下旬、大間知は日満連絡船「熱河丸」（大阪商船所属）に乗り、大連に向かった。これまで勤めていた国民思想研究所に提出する報告書『日本家族制度の研究』（一九三九年三月）の「後書」はこの熱河丸にて執筆されたものであった。そこに大間知は「私は満洲において、満洲の『家』を研究するとともに、大陸から日本の『家』をもっと深く考えてみたい」⁽²⁷⁾とこれからの抱負を語っている。

間もなく『民間伝承』四月号に大間知と守随からの通信が載せられていた。

（大連にて大間知篤三）到着早々友達と一緒にどうも大陸へ来てゐる気になれないで困ります。温いのに驚いてゐます。

（同 守随一）御無沙汰してゐます。愈々民間伝承の会満洲支部が出来さうです。新京で岡上栄蔵氏に逢つた節

にも是非共柳田先生に一度来て頂かうと話合ひました(『民間伝承』四一七、一九三九年四月)。

「岡上栄蔵」は、おそらく岡川栄蔵の誤りであろう。岡川は満洲移民の専門家で⁽²⁸⁾、宇都宮高等農林学校農政経済科卒業、一九二八年満鉄に入社した。満鉄経済調査会にいた⁽²⁹⁾一九三六年二月(『民間伝承』一六)に民間伝承の会に入会しており、満洲最初の会員となる。通信当時は新京支社業務課第四係主任であった⁽³⁰⁾。満洲の農村経済研究にあたって日本の農村に詳しい柳田からの助言が期待され、可能なら柳田にも満洲の農村を見てほしいという気持ちは岡川、守随二人の間で共有されていることがわかる。満洲では日本民俗学の研究手法ではなく、農村経済調査としての応用が求められていたといえよう。

次号の五月号の通信でも、大間知と守随はハルビンや大連でよく会っていると報じている。下って五一三(一九三九年十二月)にも、守随は土着資本実態を調査するとき、吉林で偶然大間知と出会い、シャーマンの調査に同行したことも伝えている。理由は不明であるが、それ以降は守随からの通信が途絶えた。

大間知が赴任した建国大学は名義上「満洲国」の「国立大学」であるが、実際には関東軍が直接計画して設立したもので、運営も関東軍参謀部第四課の「内面指導」のもとに行われていた⁽³¹⁾。「五族協和」を掲げているが、『建国大学要覧 康徳八年度』(一九四二年七月)⁽³²⁾を見れば、入試や講義がすべて日本語で行われ、教授の大半も日本人であった。学生も日本人が半数を占め、中国人が半数弱、朝鮮、蒙古、ロシアなどの学生は少数であった。創立に奔走したのは辻正信など関東軍の若い参謀達であったが、大間知がかつて一年志願兵で入営したときの中隊長が辻正信であった。大学の人事に大きな発言力を持つ辻の推薦で、大間知が招聘されたのである⁽³³⁾。

大間知が赴任する一九三九年は大学創立の二年目にあたるが、作田荘一は副総長事務取扱から正式に副総長に任命され、九月二日が創立及開学記念日と決められ、第一回記念式典が行われるなど、大学がいよいよ正式に軌道に乗る年でもあった。当時、一期生一五〇名と二期生一四六名が在籍しており、大間知は第二言語としてドイツ語の

授業を担当した。

大間知は赴任早々大森志郎を訪れた。大森は満洲教育専門学校を経て満鉄の大連図書館に勤め、師である山田孝雄の推薦で建国大学の助教授となり、初年度の入学試験から関わり、主として日本語教育を担当していた。大学の教科書として『日本文化論纂』（拓文堂、一九三九年）の編纂にあたり、柳田の『明治大正史・世相篇』から「小鍋立と鍋料理」（第二章第二節）を収録するため³⁴、柳田と書簡の往来があった³⁵。大森の名前は柳田が大間知に教えたのだろう。

柳田は満鉄の株を相当数持っており、戦後反古になったと述懐したことがあったようだ³⁶が、このことから満鉄調査部や守随の調査部行きに対する態度を推測することはできない。それに対して、かつて自分の文章を建国大学の教科書用に提供し、そして大間知赴満の直前に「満洲国の最高学府」に台湾と朝鮮の総督府の旧慣調査のように「永く後代に遺るやうな立派な仕事」を期待する³⁷と発言している柳田は、大間知の赴任に対して少なくとも反対はしなかっただろうと想像できる。

大間知は一九三九年の夏休みに満洲での初調査を行った。『民間伝承』四一二（一九三九年九月）に調査地から送られた彼の通信を載せている。

（札幌屯にて 大間知篤三）ハルピンを経て興安嶺山麓の此の町へ来ました。沿線幾十里咲き盛る女郎花と桔梗の大群落でまことに壯観です。ここは省公署の所在地ですが大層静かで樹木多く水清く、ロシア人も多く住んでヨーロッパの田舎町へ来たやうな感じですよ。

調査地は興安東省布特哈旗札蘭屯であり、ハルピン―満洲里鉄道のほぼ真中に位置しており、風光明媚なところである。ここでの調査目的は不明である。大間知は満洲にあるダウール族を宗教生活の差異によって四群に分けて



図10 1943年建国大学の学生を率いて山東調査中の大間知篤三（黒コート）

出典：『大間知篤三著作集6』1982年、口絵より。

おり、札蘭屯をその中の一つ「布特哈群」の中心地としている⁽³⁸⁾が、しかしその後ダウル族についての調査はもっぱらここよりさらに西へ、新京からさらに遠い「海拉爾群」で展開されており、しかも時期も下って一九四三、四四年に集中していた。或いはこの札蘭屯の調査は観光に近い旅であったかもしれない。

それに対してこの夏のもう一カ所の調査地・黒河省瑯環県にはその後もたびたび訪れ、目的も満洲族の調査とはっきりしている。大間知が満洲族を調査する際、参照にしたのはシロコゴロフの研究であった⁽³⁹⁾が、シロコゴロフにとって満洲北部の瑯環地域こそ満洲族の「文化の独特の性格をきわめて純粹に保持してきた」場所であった⁽⁴⁰⁾。大間知の調査地選定は明らかにシロコゴロフの論に依拠したといえる。

この夏をきっかけに、大間知は満洲で多くの調査を行った（表14参照）。新潟県生まれ、長岡中学校卒業の建国大学一期生である小熊勢記（文教学科専修）は、建国大学では新しい時代の指導者を育成しようという熱意に燃えた若い教師や、日本の自由主義的な大学教育に批判的な教師が多かったが、大間知は「そういう教育的熱意はなかった」と回想している⁽⁴¹⁾。学生を引率しての調査もあったが（図10）、大間知の満洲での多くの時間はもっぱら個人の研究調査に費やされていた。

2 民俗学から民族学へ

大間知のかつて日本での調査とのもつとも大きな違いは、満洲では民族調査であった。

前述したように、大間知は最初、満洲の家の研究によって、日本の家を考え直す意欲を示していた。満洲に赴いて最初に発表した「支那の婚姻」⁽⁴²⁾において、大間知は中国の結婚制度の整理分析を試みた。そこで通婚範囲（同

表14 大間知篤三満洲調査一覽

調査地	対象民族	調査年	月	報告・言及 文章題目	登載誌	執筆・ 発表年	月	備考（交通宿泊、主な内容など）
吉林省長春 県	漢族			「土地神覚書」	『建国大学研究院月報』	一九四三	五	学生泉水厳、劉沛泉と二、三年間断続的に調査。日本の氏神との相違材料不足で研究困難。
吉林省長春 県	漢族			「春の神娘娘」	『満洲日報』連載	一九四四	五	漢族大衆の信仰。原始母神信仰に満洲諸民族の共通性。
吉林省長春 県	漢族			「漢族巫素描」	『書光』	一九四三	七	学生泉水厳、劉沛泉の援助。調査の困難・警戒感、言語感覚。漢人研究者を期待。
吉林省長春 県金家溝屯	漢族			「屯長訪問記」	『満洲日日新聞』	一九四一	五	新京―カ倫駅、歩行。警戒感。
長春県カ倫 村金家溝区 高懷玉城子 屯を中心に	漢族	一九四一	六	「民族編 七 漢民族」	『満洲風土記』中巻	一九四四	十一	『満洲日々新聞』一九四二年八月からの連載の一部、江頭恒治「大間知さんの追憶」（追悼特集）の説明により一九四一年六月と判断。執筆まで八回調査、区長王璽宅に数回宿泊。
新京南郊	漢族			「新京南郊採訪記」	「觀光東亜」	一九四一	七	満洲農民信仰、土地神、龍神、竈神、正月儀礼、山東からの移民。警戒感。街頭採集。
吉林省吉林 吉林省吉林	漢族	一九四〇	六	「満洲の端午節」	「ひだびと」八一八	一九四〇	八	大連の友人宮川精一郎などと見物。長良川の鵜飼との比較。
吉林省吉林 県大藍旗屯	漢族	一九四四	六	「鵜飼初見」	未発表	一九四四	六	十二 シャーマン。
吉林省永吉 県大藍旗屯	満洲族	一九三九	夏	「會員通信」	「民間伝承」五一三	一九三九	六	閩帝の普及。屯長の案内で十戸を調査。シャーマン関景春を訪れ、祭祀規則などを見る。
吉林省永吉 県大藍旗屯	満洲族	一九四〇	夏	「大藍旗屯の信仰」	未発表	一九四四	六	いったん吉林に戻り、再訪して祭祀規則を写す。

吉林省永吉 県大藍旗屯	満洲族	一九四一	三	「大藍旗屯の信仰」 未発表	一九四四	六	屯長の知らせて二日間の関氏宗族祭祀を調査。
吉林省永吉 県大藍旗屯	満洲族	一九四四	六	「大藍旗屯の信仰」 未発表	一九四四	六	祭祀再調査を希望、秋にあるから案内するという返事を得る。
黒河省瑯 県大五家子 屯	満洲族	一九三九	夏	「黒龍江紀行」 「東京日々新聞」	一九四一	六	黒河から貨物自動車、協和会青年訓練所泊、汽船で移動。富察氏宅で十日滞在。満鉄の慰問船、築堤工事、満洲語授業進言（年月記載なし、瑯の初回調査か）。『民間伝承』五一―一通信。
黒河省瑯 県大五家子 屯	満洲族	一九四〇	夏	「立杆祭神伝承」	一九四五	一	単独に行われた天神祭。『民間伝承』五一―一通信、翻訳兼助手一名、一ヶ月余の予定。
黒河省瑯 県	満洲族	一九四四	十二	「訳者序文」	一九四四	十二	
新南嶺 立博物館分 館	満洲族	一九四三	三	「満洲族関大巫」 「一」	一九四三	五	黒河省瑯琿泉紅旗営屯から満民、満日文協、電々が招聘、写真あり、撮影は三枝朝四郎。前出江頭の説明により一九四三年三月と判断。
瑯、吉林、 齊齊哈爾 興安東省札 蘭屯	満洲族	一九三九	七	「立杆祭神伝承」 「北方圏」一	一九四五	一	論文。
新京放送局	ダウール 族、ホー チンバル ガ族、ソ ロン族	一九四一	十二	「テニへ印象記」 「芸文」	一九四四	八	竹田旦「解説」（『大間知篤三著作集』六）によれば満洲で最初の調査。その後瑯の調査を。
興安北省索 倫旗テニへ 族、ソ ン	ソロン 族、ソ ン	一九四三	七	「テニへ印象記」 「芸文」	一九四四	八	三人のシャーマンの録音に同席、聞き書きをする。撮影は三枝朝四郎。
							旗職員ソノンスルン同行、海拉爾―シャロムテ駅、馬車で移動。国民学

興安北省索倫旗シニヘト族	グース族	ブリヤー	一九四三	七	「シニヘラマ廟の夏祭り」	『滿洲公論』	一九四四	八	校一泊、シャーマン訪問、教員宿舍工事。
興安北省索倫旗南屯族	ダウール	一九四三	夏	「南屯迎春譜」	未発表	一九四四	三	南屯から自動車で移動。盛川警長宅一泊。ラマ教の盆の仏事を調査。	
龍江省龍江景塔哈村庫木屯	ダウール	一九四三	七	「庫木屯のオボ祭」	未発表	一九四三	十	藤井正義が斡旋。斉齊哈爾から貨物自動車で移動。屯長宅で一泊。関帝廟会、オボ祭り。	
龍江省龍江景塔哈村庫木屯	ダウール	一九四三	七	「庫木屯のオボ祭」	未発表	一九四三	十	庫木屯調査翌日、半日調査。	
興安北省索倫旗南屯族	ダウール	一九四四	二	「南屯迎春譜」	未発表	一九四四	三	興亜塾職員独身寮泊。旧曆新年。公署日本人職員の遙拝、誓願文斉唱。ダウール族の年末祭。	
興安北省索倫旗南屯族	ダウール	一九四四	二	「ダウール族巫の正月祭」	『北方圈』二	一九四五	二	正月祭参加。	
興安北省ホロンバイル地区	蒙古族他	一九四四	一	「ホロンバイルの民族と宗教」	海拉爾国民学校での講演	一九四四	一	ラマ教、シャーマン、オボ。日本民族の優秀さ、民族研究、博物館建設の勧め。	
興安北省海拉爾、索倫旗南屯、墨和爾凶屯	ダウール			「ダウール族巫考」	海拉爾国民学校での講演	一九四四	一	ラマ教、シャーマン、オボ。日本民族の優秀さ、民族研究、博物館建設の勧め。	
三江省富錦県富錦鎮	ホチヨ族	一九四一	七	「魚皮を纏いし人々」	『芸文』	一九四三	七	論文。	
三江省富錦県上街基村大屯	ホチヨ族	一九四一	七	「魚皮を纏いし人々」	『芸文』	一九四三	七	廣野治郎が斡旋。地元最大の地主何文広宅で一泊。漢化と日本の使命。	
三江省富錦県富錦鎮	ホチヨ族	一九四一	七	「魚皮を纏いし人々」	『芸文』	一九四三	七	廣野治郎が斡旋、学生劉沛泉通訳。大屯調査後、富錦で約十日間滞在、	

三江省富錦 山東、蒙疆、 北支 山東	ホチヨ族 不明 不明	一九四一 一九四二 一九四三	夏〔会員通信〕 秋〔訳者序文〕	〔民間伝承〕六一―一二 〔満洲族の社会組織〕一九四四	一九四一 一九四四	九 十二	開書き。 学生五名を引率して調査。 北京でシロコゴロフ夫人に訪れる。 直江書簡にも言及される。 坂東勇太郎「建国大学教授大間知篤 三先生」(「追悼特集」)の説明によ れば建国大学文教学科学生「北支旅 行隊曲阜班」を引率、陸軍守衛隊で 一泊、座談会、本格的な支那料理を 頂く。
-----------------------------	------------------	----------------------	--------------------	-------------------------------	--------------	---------	--

出典：『大間知篤三著作集』六（一九八二年）、『民間伝承』各号、「大間知篤三先生追悼記念特集」（『民間伝承』三四―二、一九七〇年）より作成、調査民族順。

姓不婚）、婚姻の締結と解消（「定婚と出妻」、夫婦の関係（「妻と妾」という三つのテーマを設定しており、比較研究によって日本の「家」の解明へと第一歩を踏み出したようにも見えた。

しかし、その後に婚姻や家族制度には目を配っているものの、それらについては大間知の満洲での主要テーマにはならなかった。これは前記「支那の婚姻」が大きく専門外の法制史の研究に依拠しており、その意味で大間知の中国の家や婚姻についての認識が頗る観念的なものであったということにも関係するが、それより「永く島国に立て籠もり、一民族一国家という有難い生活をつづけてきた」⁴³⁾日本と、「五族協和」が建国理念として掲げられたように複数の民族が生活している満洲という、研究環境の相異があった。

民族と国家が同一であるという前提のもとにおいて、内地での具体的な民俗事象の研究は、地域や対象、テーマを問わず、「日本民族」の研究に寄与できると理解されていた。しかし満洲ではそうした前提は存在しない。具体的な民俗事象を検討する前、まずその母体である民族を把握する必要があった。「支那の婚姻」の延長として考えるなら、たとえばもっぱら漢民族を対象に、その婚姻慣行、家族制度を研究するのが一つ可能な道であったが、し

かし、当時の満洲では、「新興国家」としての独自性を打ち出すために、なにより「支那」との関連を切断する必要がある、漢民族より他の少数民族を重視し、それら民族の識別及び実態把握が急務であった。国策大学としての建国大学では、基礎学科の「国家学」の中では最初の科目が「民族学」であった⁽⁴⁴⁾。文科系諸科学の総合研究機関として創立された建国大学研究院でも、当初から民族の研究が建国原理の研究と共産主義批判の研究と並んで重要な課題であり、大間知は赴任当初から「民族研究班」に所属した。

大間知篤三の満洲での研究について、上野和男はその特徴として「まず第一に関心の中心が家族・婚姻からシャマニズムに変化した点であり、第二に民俗語彙中心の調査法から事実と事実との関連に焦点をあてた研究法に変化した点である」⁽⁴⁵⁾と指摘している。それに対して竹田且は、シャマニズムなど信仰伝承の研究も、満洲の社会組織を析出するための方法で、そういう意味で家族・婚姻が日本の社会組織を析出するための方法であると通底しており、社会伝承から信仰伝承へと研究分野が変更したのではないと反論している⁽⁴⁶⁾。

竹田の主張は日本と満洲での大間知の研究の違いを家族、婚姻かシャマニズムかという対象レベルで捉えるべきではないという意味では正しい指摘である。しかしもし彼のように問題を方法論レベルに回収するのなら、上野の場合と同じく満洲での大間知の研究を理解する重要な視角を見失う恐れがある。なぜなら、その最も根本的な相違は何より研究の目的にこそあり、すなわち日本の「家」から満洲の「民族」に変わったのである。これは同時に大間知の研究は民俗学から民族学へと変わったことを意味している。

一九四三年七月に大間知は「民族学と民俗学」⁽⁴⁷⁾を発表した(図11)。「大東亜民族学の樹立が焦眉の急として要求せられてきた」状況の中で、この文章の主眼は二つあり、一つは「樹立さるべき大東亜民族学の内に日本民俗学は如何なる地位を占むべきものであらうか」を明らかにすることで、もう一つは満洲における民俗学と民族学の位置関係を論じることであった。

そこで大間知は、日本民俗学は「日本の常民生活の伝承を根本資料とし、民間の生活文化の変遷の跡を其の全領



図 11 大間知篤三「民族学と民俗学」
 出典：『満洲民族学會報』1-1、1943年7月、1頁。

域にわたつて闡明せんことを第一目標におき(中略) 彼の如何なる文化科学にも優つて、日本国民の国民性を、従つてまた日本民族の民族性を具体的且つ根本的に調査し研究した学問」であり、「これ以外にまたこれ以上に日本民族性の特質を諸種の部面から分析し研究した学はなかつた」とする。「日本民族学樹立のため最大の基盤を整えたものであり、その正道を開拓したものである」という意味で、「主観的には日本民俗学であるにしろ、客観的には日本民族学」であり、「柳田学は単なるフォクロアの学では決してなく、實質的には寧ろフォルクス・クンデと近い」と説く。

満洲を調査地とし、「国家学」としての民族学の研究を進めることによって、大間知は、柳田の「一国民俗学」は「民俗」の学より「日本民族」の学という性格が濃厚であり、「その性格に最適の呼称として、今日、日本民族学を採るべきもの」と鮮やかに指摘しえたといえよう。

その論を踏まえて、彼は「日本民族が大東亜諸民族の中心であるといふ事実ばかりからではなく、『日本民俗学』が最大の学として存在してゐる」の理由に、「大東亜民族学」の内に日本民俗学が「最大の席を占むべきである」と主張している。

しかし、日本での民俗学の意義を強調しているのに対して、大間知は満洲での民俗学の可能性については否定的であった。「満洲に於いては、民俗研究は、しかし畢竟、民族研究の一部分として取り上げんとする極めて積極的な意図の下になされて、初めて効果をあげ得る種類のものであると私は考える」というのが彼の結論であった。

その理由は満洲の諸民族と日本民族の相異にある。即

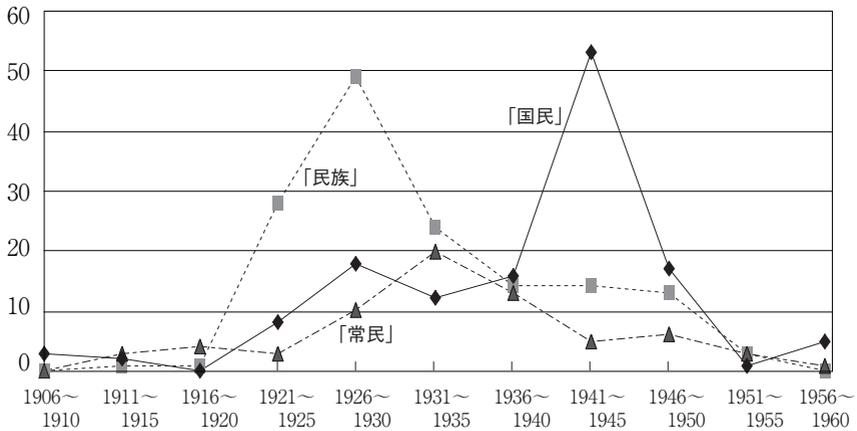


図12 柳田国男「民族」「常民」「国民」使用頻度変化図

出典：伊藤幹治「民族・常民・国民の使用頻度表」『柳田国男と文化ナショナリズム』2002年、112頁より作成。

ち、柳田民俗学の慣用例では「民」が上層に対する「常民もしくは庶民」という「下級階層」を意味するが、そうした伝承の二重性は満洲において少数民族の間では確認できず、漢民族や蒙古民族に関しても日本よりはるかに乏しいからだと大間知は説明している。

この論述にはいくつかの問題がある。柳田において「常民」概念は確立当初「ごく普通の農民」を意味していたが、少なくとも『民間伝承論』の段階から既に有識者にまで拡大していった⁴⁸⁾。とくに日中戦争以降、「常民」に代わって「国民」という語りが圧倒的に多く(図12参照)、下級階層の伝承という狭い範囲に限定する主張は当時の日本民俗学の現状と食い違っているとわざわざ得ない。

そして単に文章の流れからみても、「フォルクス・クンデ」として日本民俗学を評価する前半の論理なら、「満洲国」において満洲の人々によって国民としての共通性を、主要民族を中心に民俗レベルで説明する満洲の「フォルクス・クンデ」としての「満洲民俗学」が当然主張されてしかるべきであった。しかし大間知はそれについてふれず、満洲での研究は民族学であり、民俗研究はその一部分であるべきことだけを強調している。

この「民俗研究」はもはや日本民俗学を論じるときとまった

く異なり、風俗習慣など個々の民俗事象についての研究というほどの意味しか持たない。日本を語るときと満洲を語るときこの姿勢の差は、日本では民俗学、満洲では民族学という大間知の位置づけが、決して単純な学理の問題ではなかったことを示している。

当時日本民俗学の素養や経験を持ちながら内地以外で調査研究を行った者は少なくないが、正面から日本民俗学と調査研究地域との関係を論じた文章は多く見られない。大間知篤三の「民族学と民俗学」は先駆的な試みであるといえる。これは大間知が本格的な調査研究活動を展開していた大学の研究者であり、新人会時代から強い理論的志向の持ち主でもあったことによると思われる。しかし、日本と日本人研究者の優位性を無条件に認めているため、大間知は日本民俗学と満洲での民族学を互いに無関係のものとして論じてしまい、両方とも深く関わる者として獲得できるはずの、二者とも相対化し、民俗学と民族学の真の関係性について考える可能性を失ってしまったといえる。

3 民族学とその政治性

大間知の満洲での民族調査は、一九三九年七月に原住民である満洲族についての調査をもって序幕を開いたが、その直後の十月に、彼は朝鮮の京城帝国大学宗教及社会学研究室に訪問し、赤松智城、秋葉隆を訪れた⁽⁴⁹⁾。同研究室は一九三二年に設置された後の初仕事は帝国学士院に補助された「朝鮮及び満洲における巫俗の研究」であり、その後、外務省文化事業部の助成や関東軍の要請によって研究範囲を拡大し、一九三三年から一九三八年まで前後十回満洲と蒙古のシャマニズムの調査をしていた⁽⁵⁰⁾。

その調査の時期は、ちょうど一九三二年の「満洲国建国」から一九三八年建国大学創立までの空白を埋めるような形をとっており、それ以降は目立った満洲調査活動はなかった。このことを考えれば、大間知の京城帝大訪問は満蒙民族研究の主導権が、代行していた朝鮮の京城帝国大学から満洲国自身の大学に移ったことを象徴している。

同時に、研究対象などの選定にそうした研究の伝統を受ける面もあると思われる、大間知の民族調査がシヤマニズムを中心としたことも、またすべて個人の関心によるものではなかったのであろう⁽⁵¹⁾。

『民間伝承』五―一―(一九四〇年八月)に大間知からの長い通信が載せられている。

(新京にて大間知篤三(前略) 小生は來滿以來先約履行の爲め書いたアジア問題講座の拙文以降全然発表したものはありませんが、これからは民間伝承誌上に問題となつてゐることと関連したことを時々短く寄稿致したいと考へて居ります。

瑗瑠地方の満洲族について二回目の調査中であつた。今回は前年末上海で購入したシロコゴロフの『満洲族の社会組織』を持参しての調査⁽⁵²⁾であつた。通信の中でこれから日本民俗学での問題と関連させて投稿する意向を示している。

しかしこれ以降、一九四一年末に上京し、十一月九日の木曜会第一七八回で満洲を中心としたシャーマンや諸民族の話をした⁽⁵³⁾が、二、三回調査の行程に関する短い通信以外、『民間伝承』へは予告しているような寄稿は見えなかつた。一九四三年までその他新聞雑誌での発表を含めても幾つかの短文しかなく⁽⁵⁴⁾、彼の主な精力は満洲族、ホチヨ族、蒙古族(とくにダウール族)などの少数民族を対象とする調査や、調査民族に関する先行研究の整理に注がれていた。

■少数民族の漢化と日本の使命

満洲族の主な調査地は二ヶ所で、黒河省瑗瑠県大五家子屯、そして吉林省永吉県大藍旗屯である。前者は三回、後者は四回も訪れている。

大五家子屯にダウール族や新来の漢族の家々もあったが、大間知は「日々旗人の家を訪れあるいは訪れられつつ、各氏族の族譜、来歴、結合の状態、信仰、冠婚葬祭、年中行事、伝説、民謡を調査すべく努力した」⁽⁵⁵⁾が、しかし「その結果、固有の祭神祭天の宗教儀礼と固有の満洲語の現存とを除くあらゆる伝承の、漢化の度合い甚しくかつ速かなるにいまさらながら驚いた」⁽⁵⁶⁾という。そこで調査地は「日常語としての満洲語のはなされて聞き得る」僅かの地域の一つであることに鑑み、大間知は「帰途黒河で省及び県の枢要なる地位の人々に瓊瑯県下、ことに大五家子屯を中心とした数屯の国民学校に固有満洲語の科目を置くことを」⁽⁵⁷⁾提案したという。

大藍旗屯では「この旗人の屯で最も古い信仰は、彼らに固有のいわゆる祭神祭天の礼であつたらう。しかし今は、その固有信仰の上に、漢族道教信仰が強く覆いかぶさってきている」⁽⁵⁸⁾と大間知は嘆く。そして満洲族の居住地帯で盛んである関帝信仰について「それにしても、よくもこれまで普及しえたものだと不思議の感を抱かされる場合がしばしばあり、また同時に、清朝は何故に自民族の祖先から武神を求めずして、もっぱら漢民族の武神をそのまま採用せざるをえなかつたかという疑問も折々湧く」⁽⁵⁹⁾と述懐している。

実際、大藍旗屯では満洲族は全部八〇戸うち半数の四〇戸しかなく、大間知が描いた小祠の神名をみても漢族のそれと変わらず、果たしてまだ「旗人の屯」といえるかどうか甚だ疑問である。満洲族固有の姿を求める大間知にとってはけつして最適な調査地とは言えないだろう。親切なシャーマン関景春との出会いがなかつたら、ここに何回も足を運ばなかつたに違いない⁽⁶⁰⁾。

満洲族より漢化が進んだホチヨ族の調査は、一九四一年七月の一回だけであつた。調査地である三江省富錦県上街基村大屯は四十年前まで七〇―八〇戸のホチヨ族ばかりの部落であつたが、調査当時一二七戸中ホチヨ族はわずか十一戸しかなかった。大間知は大屯で数軒のホチヨ族の家を訪ねたが、大きな収穫はなかつたようである。かつて三人もいたシャーマンの最後の一人が三年前亡くなり、その子供は跡を継いでいなかった。現場での調査よりは、むしろその後、富錦県城で畢光遠というホチヨ族の者から話を聞く時間が長かつた⁽⁶¹⁾。「漢族による同化が、

死滅か、離散か、そのいずれかが彼ら近年の選ぶべき宿命であった。一言もつて形容すれば、富錦近郊のホチヨ族は、澎湃たる漢族の潮流の中に消え失せんとする末期の相を示している⁽⁶²⁾というのが大間知の結論であった。

満洲族と「満洲族に最も近縁の民族」であるホチヨ族を通して、満洲の原住民族として固有の姿を発見しようとする大間知は、その漢化という現実を否応なしに痛感させられた。そこで日本の使命が見えてくる。彼はこう述べている。

満洲建国は彼等（満洲族―筆者）を被圧迫民族の境遇から解放した。（中略）過去三百余年間に發揮された偉大なる武人的政治家的才能を抱いたまま、彼等は漢民族の間に眠つてゐる。彼等の眠りを揺り醒し、我等と手を携へて大東亜共栄圏北辺の興隆に進むやう、その途を拓いてやる必要がある⁽⁶³⁾。

この独特な歴史と伝統とを共有しかつ特異な性格を備えた一民族（ホチヨ族―筆者）が、漢族のうちに没入消滅するにまかせることは策の賢明なるものではなく、またそれ故に当局としても種々育成指導の途を講じつつあるのであらう（中略）弱小とはいえ、国境地帯に住み、東亜共栄圏北端の一民族であり、彼らにもまた共栄圏拡充のためにさらに積極的な一役を担わすべきである。日本人に縋つて、よりよき生活を打ち建てたいという気持は、この単純な人々の言行からも顔色からも明かに読み取られるのである。彼らにも一層深く皇化潤い、その所得を得しめ、その途を進ませたいものである⁽⁶⁴⁾。

つまり漢民族は少数民族を「同化」、「死滅」、「離散」させる「澎湃たる潮流」であり、それに対して日本は、これらの民族を、「揺り醒まし」「一層深く皇化潤い、その所得を得しめ」る救世主である。しかも少数民族の「彼ら」も日本に期待していると大間知は主張している。

太田陸郎は中国に対する戦争を、民衆を国民党の圧迫から解放し幸せにするものとして理解していることは前章で述べたが、「民衆」を「少数民族」に、そして「国民党」を「漢民族」に置き換えれば、そのまま満洲での日本の支配に対する大間知の理解になるといえよう。戦争や植民地支配の正当化はいつも同じような論理構造を持っている。

■「東亜共栄圏の北辺」

しかし、その目的は満洲諸民族の幸せにあるのではない。「揺り醒まし」たら、「我等と手を携へて大東亜共栄圏北辺の興隆に進む」ことが期待されているし、「一層深く皇化潤い、その所得を得しめ」るのも、「弱小とはいえず」という考慮があった。居住地域がモンゴル、ソ連など広範な地域にわたる蒙古族に対しては、その期待は一層大きかった。

満洲族の調査は一九三九年七月～四四年十二月と長期にわたって行われたのに対して、蒙古族のそれは一九四三年の夏と、翌年の始めに集中している。龍江省龍江県塔哈村庫木屯と両半屯はその調査の帰りに関帝廟会とオボ祭りを見学に一泊した程度であり、海拉爾より南の興安北省索倫旗南屯を中心とする呼倫貝爾地区が主とした調査地であった。

当地は「かくの如く錯雑した民族構成を有し、かくの如く多様な宗教を持つ地方は（中略）満洲国内に類例がなればかりか、世界にもおそらく珍しいことだろう。したがって興安北省（呼倫貝爾―筆者）は民族学並びに宗教学にとつて真に宝庫ともいふべき地域である」⁶⁵という環境であるが、大間知の関心は主としてダウール族にあった。

大間知は蒙古族にハルハ族、プリアード族、オイラート族、ダウール族という四つの分派があると論じ⁶⁶、この中で特にダウール族について多くの文章で取り上げているが、ダウール族の四つの群の中で、ここは海拉爾群に

あたるといふ⁽⁶⁷⁾。

「ダウール族は、蒙古民族のうちきわめて重要な一分派であるばかりでなく、満洲国内諸民族のうちでも種々の点よりきわめて重視さるべき民族である」⁽⁶⁸⁾と大間知はいう。蒙古族の中で「すべて定住して農耕生活」を営み、「シヤマン教との関係深く、その生活は喇嘛教と結びついてゐない」⁽⁶⁹⁾というのもダウール族の重視されるべき特徴かもしれないが、それより大間知にとつて重要なのは「ダウール族は満洲国内を主とし」⁽⁷⁰⁾ているところであるに違いない。なぜなら「満洲国を構成する諸民族は、唯一の例外たる満洲族を除いて、他のすべての民族がその基幹部分ないしは多数部分を満洲国以外の地に持っている」⁽⁷¹⁾からである。大間知の民族研究では満洲族とダウール族がもつとも重視されたのは、これらの民族については「満洲国」内で研究が完結できるのが大きな理由である。

ダウール族を含む蒙古民族を研究する意義を、大間知は以下のように述べている。

蒙古民族は（中略）数的に一小民族であるかもしれない。然し、彼等が過去において世界史上稀れなる大活動を成し遂げたアジア民族（中略）彼等は東亜共栄圏の北辺を占拠し、半数は我等とともに、半数は赤色政権の支配下にある。蒙古民族の繁栄を計ることは、蒙古民族自体のためばかりでなく、東亜共栄圏の北辺を固め、これを更に拡大しゆくためにも絶対必要である⁽⁷²⁾。

かつてヨーロッパまで攻めていた蒙古族、中国の広大なる国土を支配していた満洲族、これらの栄光ある伝統を有する民族の、眠っている潜在の能力を喚起して、大東亜共栄圏の北部辺境を固めることは時代の要請であり、また日本の使命であると大間知は強調している。

■漢民族の警戒感

しかし満洲では、日本と協力すべき少数民族以外、人口の多数を占める漢民族がいる。

満洲事変の一年前、芸能研究者小寺融吉は朝鮮や満洲を旅行し、「日本の都会文化」と対照的な「悠々たる大自然」や「原始的生活気分」にふれ、「東京に居ると、日本人、朝鮮人、支那人は一目見て区別がつく。向ふに行く」とわからなくなってしまう。そして私たちは東洋人としての意識が強くなる。朝鮮には朝鮮独特の山河があり、満洲には満洲独特の天地があり。而かも日本の自然と、此の三つを包括する東洋情調と云ふものが私たちの胸を打つ（中略）此の東洋人意識を持つことは、たしかに必要なと思ふ。満洲や朝鮮へ行くことは、決して珍らしい外国へ行くことではない。伯父さんや叔母さんの住んである山一つ向ふの村に行くことなのである」という感想を抱くようになった⁽³⁾。

彼はこう記している。

一歩満洲に入つて、私は支那人が偉大な国民であることを痛切に感じた。万里の長城は支那人なればこそ考へついたのでと思つた。孔子も孟子も老子も荘子も、支那なればこそ生まれたのである。老荘の哲学は日本の自然の中からは生まれては来ない。

ここに雄大な自然にふれた感動と中国の伝統文化への傾倒は見て取れるが、しかしここで指摘しておきたいのは、満洲には圧倒的に「支那人」が多く（民族的には漢民族が多いが）、文化面でも圧倒的な影響力を持つことは、初めてこの地に踏み込んだ人でもすぐわかることである。

満洲で調査研究を展開する学者として、大間知の漢民族に対する認識は当然問題となってくる。しかし、大間知の文章を改めて見ても、漢民族の調査はほぼ新京周辺に限定されており、しかも断片的な記述しかなく、まとまっ

た論考は見られない。その理由は一つではないが、たとえば漢民族の警戒感もその一つであろう。

建国大学は前後期各三年の六年制で、前期が予科に、後期が学部で相当した。一九四一年、前期を修了した一二名と入学者四名の計一二六名が初めての後期の学生として、政治学科、経済学科、文教学科の三つの専攻にそれぞれ進学したが、大間知はこの年から助教授に昇任し、担当もドイツ語から民族学に代わった⁽⁷⁴⁾。授業実習の一環として行うことになる総合実態調査村を選定するために、五月のある日、大間知と囑託で統計学を担当する黄道淵は新京から列車に乗ること三十分、卡倫駅から一キロ離れた町の中心卡倫街、そしてさらに四キロ離れた金家溝を訪れた。漢民族が主であるこれらの地域では大間知らが声をかけると子供が逃げだし、何か聞こうとすると警戒された。大間知はその経験を『満洲日日新聞』に投稿し、文章の最後でこう述べている。

以上は一日の経験である。何故われわれはかくも警戒されなければならないか。われわれはあらかじめ十分の細心をもつて彼らに接した心算である。官衙の人に対する彼らのかかる態度こそ、幾千年の経験を積んで本能的なものにまでなつておるのかもしれない。それだからといって協和服姿の日本人が、何時までもこんな待遇を彼らから受けてはならないはずだ⁽⁷⁵⁾。

民の官に対する警戒もあるだろう。しかし、それだけではないはずである。大間知の少数民族に対する視線からも推察できるが、「五族協和」のもとでは、日本が他に優越する存在であり、漢民族は人口が多く影響も大きいので、少数民族と「平等」にするため制圧されることが多い。そういう意味で「協和服の日本人」だから警戒されてしまう面が大きい。実際二ヶ月後の「新京南郊採訪記」でも大間知は「協和服姿の私に向けたその眼はひどく警戒的である」⁽⁷⁶⁾と記している。

このような環境において大間知も漢民族より少数民族の調査に熱心で、統計的に少数民族が明らかに優勢ではな

い村落についても少数民族の村として見なし、少数民族だけを対象に調査を行っていた。そして少数民族調査の中で、とくに「固有の」、「古い」とされる宗教儀礼、信仰面に力を入れていた。

■大間知の氏神認識

漢民族については、大間知が多くの関心を払ったのは屯の土地神である。「新京南郊採訪記」では、彼は屯の土地神に日本の村における氏神の姿を見出そうとしている。

それ（土地神―筆者）は屯という地縁集団の共同信仰の対象であり、日本内地の農村との比較においていて例を求めるとすれば村々の鎮守の神に相当するものと言いうべく、屯という地縁共同社会はこれらの神々を祀ることによつて、一応は信仰上の満足を得ているということができるのである。その他に虫害、水害、牛馬の流行病等の際にはまずこの廟に対して祈願をこめるといふことになるのである（17）。

しかし建国大学一期生の劉沛泉と泉水蔽の手伝いの下で長春県下において断続的に調査した⁽¹⁸⁾後、一九四三年、大間知は「土地神覚書―屯の宗教的性格の分析のために」を『建国大学研究院月報』に発表し、そこで「最小地域集団の守護神」として満洲の土地神と日本の氏神と比べ、農業との深い関わりにおいて類似を認めながら、両者の性格が根本的に異なっていると主張するようになった。その論点は以下のように整理できる。

一、日本では氏神が祖先崇拜と融合して国家に結びつくが、漢族の祖先崇拜は同族同姓に限り、土地神は祖先崇拜の意味を持たない。

二、日本では氏神は全体性と絶対性を持つが、漢族の土地神は信仰生活の中核ではなく、雑多な信仰と並存し

ている。

三、氏神は通過儀礼のすべてに関わるが、土地神は死だけに関わりを持つ。

四、屯の共同祭祀が少なく、屯民は土地神に対して深い敬虔の念を持たない⁽⁷⁹⁾。

ここで注意すべきなのは、この論文に現れている大間知の氏神認識である。

今日では、村々字々の氏神がその村人たちの直接的な祖宗の神霊である場合はむしろ乏しく、村人たちは彼らの祖宗の祖宗、国家的規模における祖宗の神霊を氏神として祀っているのである。しかも彼らは村の氏神の氏子であるばかりでなく、郷の神の氏子であり、国の神の氏子であり、村の氏神に参ることはすなわち同時に国の大御神に御参り申し上げることになる。ここに神道三千年史の進化の過程であり、三千年來築き上げられた万邦無比の国体がある⁽⁸⁰⁾。

つまり、大間知にとって日本の氏神は「万邦無比の国体」の現れである。比較という形式や論文という体裁を持ちながら、「万邦無比」は前提であり、また結論でもあった。この限りでは日本での民俗研究も満洲での民族研究も日本民族の優秀さを確認する場であった。

しかし、これは決して大間知の持論ではなかった。大間知は満洲に行く前、氏神は守護神としての氏共同の祖先を起源としながら、現実の村々ではその本来の姿と異なり、著名な神々の勧請、既にあった鎮守の継承、鎮守祭と祖先祭の並行、新しい村における複数系統の氏神の存在などをあげ、氏神の多様性を示している⁽⁸¹⁾。そこに国までつながる抽象的な氏神のイメージは認められず、「万邦無比の国体」の現れとしての氏神は満洲で形成されたものであった。

戦局が悪化しつつあった一九四四年、大間知は高らかに「神社奉祀の問題」を説き、満洲で日本人の住む所では、その最小地域単位において「適わしい自然の背景」を持つ神域を確保し、「朝飯前とか夜食後にも容易に参拝できるような距離」で神社をつくるべきだと唱えている。

そこで大間知は「県旗公署所在地に氏神を奉祀することは、単にそこに住む日本人のために欠くべからざるものであるばかりでなく、ともに住みともに働くもろもろの民族に神道への関心を昂めしめ、かつ崇敬心を抱かしめるためにもきわめて大切であり、それはまた建国元神に帰一し奉るための途を開くものである」⁽⁸²⁾と説いている。

これは南屯での経験に由来する。一九四四年の旧曆新年、大間知は索倫旗公署の所在地南屯へ二度目の調査に出掛けた。旗公署附属の興亜塾職員の独身寮に一泊した大間知は、大晦日の早朝に、日本人職員全員が遥拝し、誓願文を斉唱するシーンを目の前にし、感動を覚えた。

それは真にすがすがしい一日の出発である。(中略) 現在朝ごとに神聖の間に集まる者は日本人のみであるが、そこに他の民族の人々も自発的に参加するようになるのは何時の日か。さらに進んで、この地に神社が奉祀せられ、各民族挙つて祭礼に参加するのは何時の日か。私は南屯滞在中、折々このことに考え及んだ。南屯の一角に一日も早く神社を奉祀するの必要を思つた。それはそこに住む日本人たちが日本人として生きるために必要ならば、真の民族協和を実現するためにも欠くべからざることであろう⁽⁸³⁾。

漢民族の関帝を自発的に信仰する満洲族に対して疑問、ないし憤りを感じながら、日本の氏神への満洲諸民族の信仰の統合を、神社の創設によって促そうとしている。この二つは矛盾なく大間知の中で共存することができた。「万邦無比の国体」に対する確信、満洲における日本の超越的な地位はここに見て取れる。それは同時に大間知の民族研究を支える信念と条件でもあった。

4 新京民俗学同好会から満洲民族学会

民族学担当助教授になった一九四一年からの大間知の活動は一層活発になった。『民間伝承』六一―一（一九四一年八月）に以下のような学会消息が見えた。

新京民俗学同好会 最近、新京在住の同好者を糾合して民俗学同好会の設立をみた。七月五日、満日文化協会に於て、左の講演が行はれた（『民俗学』に就いて）大間知篤三氏。

大間知の回顧によれば、この会は岡部理（一九四三年七月当時蒙古自治邦政府で勤務）を中心に組織されたもので、会の名称については、「われわれは大手を振つて民族学という語を採ることを遠慮し、つましく民俗学同好会と名づけることが適わしい」という意見に一致した⁸⁴という。

発会式に参会した村岡重夫は、そこで「俗」と「族」の区別、民間伝承や伝説、昔話などの意義などについて大きな収穫を得られたと述べ、広義の農村実態調査に従事しており、数字を「生物の如く感じてゐる」自分の「民俗学は数字を取り入れないのか」という質問に対して、「数字から見る民俗学もある事にはある」という大間知の答えが、自分の民間伝承に対するイメージを変えたと回想している⁸⁵。発会式に出席した者には、当時興安局事務官兼総務庁調査官である山根順太郎もいた⁸⁶。彼らは一九四三年五月に民間伝承の会の会員となり、『満洲民族学会会報』にも民俗学的な研究報告を数多く発表している（表15参照）。

なお、一九四一年より一層精力的な調査や学会活動を展開したためか、『民間伝承』への大間知の通信はこの年の九月以降途絶えた。

新京民俗学同好会の結成とほぼ時期を同じくして、建国大学の民族学担当教授大山彦一によって満洲国民生部に

表15 『満洲民族学会会報』 村岡重夫、山根順太郎発表一覧

号数	執筆者	表題	備考
1-1	山根	「シヤンシン・モド」 と「オプゲン」	シヤンシン・モトは神木、オプゲン は翁の意味で、祭られる石のこと 守随一に応じて送られた実例 チヨゴラは集まりの意味
同 上	村岡	「小份銭」	
1-2	山根	「蒙古に於ける牧畜慣行」	
同 上	村岡	「蒙古夜話」	
1-3	村岡	「蒙古農村語彙三題」	
2-1	山根	「チヨゴラ慣行」	
2-5 ・6	村岡	「蒙古夜話 醬(耕す 蒙古人の食物 其一)」	

出典：『満洲民族学会会報』 各号より作成。

「民族研究所」の設立が提案された。当時の予算では実現が困難なため、代行する「民族学会」の設立案が現れた。新人会の先輩でもある大山は専門が社会学であり、大間知と仲がよかった。一九四〇年十二月中旬から翌年一月にかけて、二人は一緒に台北で行われた社会学第十五回大会に出席し、その後、台湾、沖縄を旅して鹿児島の大山の実家に泊まって満洲に戻ったこともあった⁸⁷⁾。民族研究所の創設も、二人の間で温めていたものであるようだ。

大山の提案と前後して、大間知は『満洲日々新聞』（一九四二年三月）に「民族研究所の必要」という一文を寄せており、そこから研究所の具体的な構想を知ることができる。

大間知はまず「大東亜聖戦勃発」による「南方共栄圏」に関する民族研究に立ち遅れる懸念を示し、「広大な東亜の大陸並びに島嶼に住む多種多様な民族の指導者として、光輝ある世界史的使命を双肩に担って戦っている」日本にとって、「大東亜諸民族の伝統、実態、動向に通暁する義務」があるとし、「民族を全体的に研究把握せんとする努力に欠けていた」満洲の研究現状を批判する。

続いて「満洲国の民族研究は、満洲国の領土内に局限されるものではなく、広大な隣接地域も必然的に包含せしめられる。そしてかかる広大な地域を一単位とすることによつて、満洲の民族研究は初めて成果をあげるのである」ということを指摘し、「民族研究は個々人もしくは個々の機関に分散せしめておかるべきではない。国家の事業として総合統一的に、最も企画的に進捗せしめらるべきである。そしてそのために大規模な民族研究所を設置

することが現実の急務である」と述べ、ドイツの民族学を「他山の石となすべき」と説く。

そして研究所の目的は「満洲国を構成する諸民族を満洲国民として編成するためばかりではなく、北方アジア全域にわたる民族政策を確立するために、さらにまた北方アジアの文化研究のために、基礎的資料を蒐集整備するものでなければならぬ」であり、そのための具体案として、日本民族、朝鮮民族、漢民族、蒙古民族、満洲・エヴェンキ民族（極北諸族を含む）、トルコ民族、ロシア民族など民族別の研究部門を設け、各部門にさらに信仰、社会、経済、衣食住、言語、歴史、総合などの研究室を設置し、詳細な調査研究項目の作成、計画的な現地調査、過去の各国語文献の蒐集と比較などに着手すべきだと提案している。

太平洋戦争の勃発によって南方での民族学研究が興隆する兆しを示すなか、大間知らは「満洲国建国」十周年の機会を狙って北方での民族研究所の必要性を高らかに唱えたのである。

結果的に、民族研究所の代案としての民族学会の相談が進み、この後まもなく、一九四二年五月に満鉄の調査機関、満洲国の治安部分室、協和会中央本部の企画調査部門、民生部其他政府部門、建国大学民族研究班、新京民俗学同好会など満洲の調査研究諸機関を統合する形で、民生部の補助金による満洲民族学会が正式に創立され、二五日、民生部講堂で発会式が催された⁽⁸⁸⁾。

満洲民族学会について、中生勝美「植民地の民族学―満洲民族学会の活動」(『へるめす』五二、一九九四年)という開拓的な研究があり、そして二〇〇二年、その機関誌『満洲民族学会会報』全九号が復刻され(山下晋司・中生勝美他編「アジア・太平洋地域民族誌選集」一九、クレス出版)、その全容が次第に明らかになってきた。

この学会は満洲国政府の補助金によって運営され、大学関係者を中心に、満洲国政府官僚や協和会、興農合作社の幹部などによって組織されている⁽⁸⁹⁾。一九四三年十月までの「会員名簿」⁽⁹⁰⁾で「新京の部」の会員がすべて日本人であることを考えれば、ここに統合される前の新京民俗学同好会も同様であったと思われる。

一方、東京では一九四二年国策機関として民族学研究所の設立が決定され、十月、研究所の設立、運営上の重要

表16 大間知篤三満洲民族学会での活動（一部）

年月日	内 容
1942年3～5月	学会設立準備会
1943年1月20日	満日文化協会にて幹事・主査会
5月15日	春季発表会で「屯の宗教的性格」を講演
5月	会報創刊号に寄稿「満洲族関大巫」、文献紹介「民族学研究」「民間伝承」「民俗台湾」「支那民俗誌（第六巻）」、『満洲語史』
7月	会報1-2に巻頭論文「民族学と民俗学」寄稿
11月19日	懇親会出席
1944年1月	会報2-1に「オボ調査標目」寄稿
3月4日	新京中央放送局にて「満洲族関来大巫一行の実体調査」
3月24日	主査、幹事会に出席する
7月21日	文教部講堂で人文学会聯合会の発会式にて神尾弼春、大山彦一と委員に選出される。
12月18日	本年度研究発表者を中心に学会関係者の懇談会

出典：『満洲民族学会会報』各号より作成。

人物岡正雄は民族学研究会で「現代民族学の諸問題」という講演をした。そこで彼は「民族学は統治の対象としての民族の現実態的性格及び構造を明確にし、或はその民族構造の制約に於ける民族感情では民族意識、民族意志、民族行動の性格、動向、偏向を究明して、民族政策を基礎づけなければならない」⁽⁹¹⁾と強調し、翌年一月創設される民族学研究所の性格を表明している。『満洲民族学会会報』

はこの東京での動きに呼応して創刊されたものであり⁽⁹²⁾、満洲民族学会は東京を中心とする「大東亜民族学」の一翼を担う新しい段階に入ったのである。

『満洲民族学会会報』を見るに、大間知の活躍ぶりは驚くべきものがある（表16参照）。

創刊号の文献紹介で大間知篤三は『民族学研究』に対して「大東亜共栄圏に於ける民族研究の中心機関」として「民族学の範囲、対象、方法等に関する基本的な諸問題を取り扱った論策を旺んに掲載して欲しい」と注文している。それに呼応して一九四三年以降、大間知の執筆が多くなり、その内容も感想から理論的な整理へと変わりつつあり、満洲での民族学の展開について熱心に模索していったことがわかる⁽⁹³⁾。

3 大間知篤三の中国経験と日本民俗学

大間知篤三は東大出身のエリート知識人であり、日本学生運動の中核である新人会の重要成員であった。そこで培われた研究会の習慣、理論的思考、そして組織的活動力は、大間知に優秀な研究者と運動家の素地を与えた。大間知は共產党員という身分で検挙されたが、出所してから転向者のための思想機構・大孝塾研究所（のち国民思想研究所）に勤めながら、柳田国男の門下となり、同門の他の若きエリート知識人と一緒に日本民俗学の中核組織木曜会を結成した。民俗学に開眼した彼は、精力的な調査と研究を行う一方、組織的にも持ち前の活動力を発揮し、中央の若き指導者の一人として初期日本民俗学の発展に大きな役割を果たした。

日中戦争が始まって中国との関わりが増えていく中で、大間知は、守随一に次いで新天地を求めて満洲に赴いた。しかし、建国大学では、満鉄調査部に赴任した守随と同じように、植民地支配に調査研究の経験と実力が直接動員されることになる。

大間知は満洲という土地で、柳田民俗学の「フオルクス・クンデ」としての性格を改めて認識するようになったものの、満洲での応用を否定し、満洲において民族を対象とする民族学が主であり、民俗研究（＝風俗習慣についての研究）はそれに包括されるべきと理解している。日本で柳田が民族学に対する民俗学の優位を強調した点と、大間知の満洲における民族学の優位の強調は、形式上の相違を超えて、日本人の優位を前提としている点で共通している。大間知は満洲で精力的に民族調査研究を行っていたが、しかしその民族調査は頗る政治的な視線を有するものであった。

日本民俗学にとって大間知篤三の役割は「現地組織者」として理解することが可能であろう。大間知は満洲赴任の当初、頻繁に日本民俗学に発信していた（表17参照）が、しかし一九四〇年の後半から少なくなり、一九四一年

表17 『民間伝承』 大間知篤三関係内容 (1939~1941年)

発行年月／号数	内 容	備 考
1939年 3月／4-6	「学会消息 木曜会」大間知新京へ本月下旬出発	守随通信：明日から吉奉線の背後地経済調査
4月／4-7	「大連にて」到着早々友達と一緒、温いのに驚く	守随通信：満洲支部できそう、岡川栄蔵と会う
5月／4-8	「大連にて」二人とも達者、大連新京間近く感じる	守随通信：会の寄書に感謝、大間知とよく会う
9月／4-12	「札幌屯にて」、女郎花、木多く水清し、ロシア人多い	
11月／5-2	「京城にて」京城帝大宗教学社会学研究室訪問、鶴、コ字型民家多い	
12月／5-3	「吉林にて」満族人がゆかしい、その落魄に感無量、候家祭、薩満調査、守随と偶然同宿	守随通信：土着資本実態調査で大間知に出会う、薩満調査同行、雪
1940年 1月／5-4	「上海にて」11月24日上海に、菊、河蟹	
8月／5-11	「新京にて」来満以来発表なし、『民間伝承』の問題と関連して投稿する予定、瑗瑗調査の準備	
1941年 3月／6-6	「始良郡加治木町にて」西表、石垣、竹富、宮古、那覇、首里、糸満、知念村、鹿児島の大山彦一の生家に、五年前霧島別れして同町薩摩屋一泊を回想	(第一信) 竹富第三夜 大山彦一通信：昨年末台北社会学大会後石垣、竹富で調査、大間知同行。
8月／6-11	「学会消息」新京民俗同好会設立、大間知の講演	
9月／6-12	「富錦城にて」夏に学生5名引率して松花江と黒竜江の合流点辺りを調査	
12月／7-3	維持会員に〔新京〕大間知、守随	直江広治通信：大間知中心の同好会と連絡する意欲 沢田四郎作通信：長岡博男と大間知の寄書を受け取る

出典：『民間伝承』各号より作成。

の行動がなかったものの、実際にはその行動がなかったのは、研究活動の本格的な展開に伴い、満洲での研究と日本での研究の異質性を感じ、その間の比較の可能性について否定的な認識を持つようになったためと思われる。

彼は満洲での民俗学の可能性について否定的であったが、新京民俗同好会や満洲民族学会の設立と活動に積極的に関わる中で、日本民俗学の影響を拡大していた。たとえば、彼は

九月以降、通信そのものが途絶えた。一時日本民俗学の議論と関連する形で寄稿すると言ったものの、

機関誌の創刊号に『民間伝承』を紹介しているが、そこで民間伝承の会の成立の経緯や一九四二年以降の変化などを紹介し、柳田の功績を讀え、「『民間伝承』は専ら日本の民俗、日本の民間伝承を対象としてゐる。然し我々満洲を研究対象とする者も亦、ここから無限の教示を得ることが出来る」⁽⁹⁴⁾と強調している。

『満洲民族学会会報』一一一の「民族学と民俗学」の論法はその典型である。日本民俗学の本質が「日本民族学」であるという言葉の転換が、「日本民族学」を中心に据えるべき「大東亜民族学」の一つとして展開される満洲での民族学にとつても、日本民俗学が高い価値があるという主張につながる。そして「数字から見ると民俗学もある」というように当時の日本民俗学では受け入れられない独自の民俗学理解を示すことによつて、満洲で農村実態調査に従事する人々の民俗学への関心を高めた。大間知の精力的な活動の結果、後述するように、満洲から多数の関係者が民間伝承の会の会員となり、内地以外に日本民俗学を發展させる際、満洲が最も有力な拠点の一つになり得るという認識を、日本民俗学の中心部に抱かせることとなった。

第4章

直江広治——民俗学への熱意

一九三九年三、四月に、東京文理科大学史学科教授有高巖の引率の下で、東洋史専攻十数名の学生が新潟から船に乗り、朝鮮の元山港を経て渤海、ハルビン、熱河、北京、天津、大連などを見学旅行した。学生の中に当時大学二年生の直江広治もいた。現地解散後、彼は一人で平壤、ソウル、慶州を経て、釜山から帰国した⁽¹⁾。これは彼の初めての中国経験であった。

直江広治は前年の深秋に高師の同級生千葉徳爾と柳田宅を訪れ、その後指導を受けたこともあるが、正式に民間伝承の会に入会したのはこの大陸旅行から戻ってきてからのことであった(『民間伝承』四一九、一九三九年六月号)。同期に入会した者には台湾の金関丈夫⁽²⁾もあり、同号の『民間伝承』には倉田一郎による太田陸郎の「中支奥地の鵜飼」の紹介や、大連の守随一による「突工挿具」に関する通信が載せられ、日本民俗学者の中国での活躍は始まっていた。

直江広治は、戦前から木曜会に参加し、柳田の弟子となり、戦後も、民俗学研究所の運営や東京教育大学、筑波

大学での教育活動を通して日本民俗学の発展に深く関わった人物である。とくに「八月十五夜考」などに代表されるような「比較民俗学」の提唱は、民俗学者の中で異色とされている。

直江については、有馬真喜子のインタビュー記録「直江広治氏―筑波大学教授（ひと）」（一九七九年）⁽³⁾、北見俊夫の整理「直江広治先生と民俗学」（一九八二年）⁽⁴⁾などの先行研究があるが、いずれも直江の民俗学への貢献を、もっぱら戦後の研究や活動をもって高く評価している。戦前の活動については、本人の回顧「あとがき―民俗学と私」（一九八七年六月）⁽⁵⁾、「柳田先生の思い出―民俗学研究所を中心として」（一九九四年）⁽⁶⁾などから一部窺うことができ、最近、鶴見太郎は柳田国男古稀記念会との関連で直江の活動の一部を取り上げている⁽⁷⁾。なお、直江の中国関係研究の多くは『中国の民俗学』（岩崎美術社、一九六七年）に収録されている。

本章では、以上の先行研究を参考にしながら、まず彼の民俗学や中国との出会い、日本民俗学確立期に受けた訓練を辿り、それから中国に赴いてからの様々な活動を検討し、日本民俗学にとってのそれらの活動の意味を考察する。

1 東洋史と民俗学

1 直江広治（なおえ・ひろじ）の略歴

一九一七年、青森県八戸市類家に生れる。東京府立三中（現両国高校）で正木助次郎の影響を受け、地理に興味を持つ。

一九三五年、東京高等師範学校文科第四部「地歴科」に入学する。自然地理から人文地理へ。佐々木彦一郎の研究に惹かれる。

一九三六年冬、「山の人生」で民俗学にふれ、これより柳田の著作を多く読む。

- 一九三七年、樺太に一人旅行中、盧溝橋事変を知り、衝撃をうける。
- 一九三八年、東京文理科大学史学科東洋史学専攻に進学し、有高巖、肥後和男に師事する。秋、同級生千葉徳爾と柳田宅を訪れ、以降出入りする。
- 一九三九年春、民間伝承の会に入会し、木曜会に出席する。一年後『民間伝承』に論文著作の紹介を書く。岐阜県で調査する。柳田の紹介で石田英一郎を訪ねる。
- 一九四一年七月、志願して北京の日本中学校の教師となり、中国人宅で下宿生活を送る。満鉄調査班の山本斌と知り合う。北京の日本民俗研究団体・民風会に参加する。
- 一九四二年、日本中学校を辞職する。五、六月、山西学術調査に参加し、風俗習慣の調査を担当する。九月、北京私立輔仁大学日本語文学部の新設に伴い、講師として赴任する。日本語、日本文学、日本民俗学を担当し、日本民俗学の普及に努める。
- 一九四五年七月、石田を次長とする西北研究所と泉靖一を中心とする京城帝大の蒙古草原調査に参加するが、ソ連の対日宣戦で調査団が解散。輔仁大学の宿舎で共同生活する石田と共産党軍を訪れ、残留して研究生活を続ける可能性について打診したが、その後共産党との連絡が途絶え、一九四六年六月帰国する。
- 一九四七年、東京文理科大学の講師として「中国古代伝承研究」を教える。財団法人民俗学研究所の理事として、社会科学教科書の作成事業に取り組む。
- 一九五二年、東京教育大学文学部助教授、のち教授となり、竹田且と史学方法論を担当する。九地域総合調査、「道教儀礼に関する調査」、「日韓共同民俗調査」などに参加する。
- 一九七六年、筑波大学歴史・人類学系教授、付属小学校校長となる。北見俊夫と日本民俗学を担当し、のち千葉徳爾、宮田登も加わる。「東南アジア華人社会の宗教文化に関する調査」に参加する。
- 一九八〇年末、都立大学「中国民話の会」を通して「中国民間文芸研究会」から交流の要請をうけ、白田甚五郎

らと日本口承文芸学会を代表して北京、上海を訪れる。

一九八一年、定年退職し、清泉女子大学教授となる。「わが国華人社会の宗教文化」調査に参加する。

一九九四年、死去。

2 民俗学、中国との出会い

高等師範での三年間は直江広治の人生にとって重要な意味を持っている。そこで後に彼の人生を貫く二つのテーマに出会ったのである。一つは民俗学、一つは中国であった。

一九三六年冬、『山の人生』に偶然に出会ったことは、直江が民俗学を志す直接的な契機となった。

「山の人生」という書名に惹かれてそれも借り出し、暗いスタンドの下でひもといた。読み進むにつれて、私はこういう学問の世界があったのかと、魂をゆすぶられる思いがした。その夜は閉館まで、時間の経つのも忘れて、この本をむさぼり読んだことを今に記憶している⁽⁸⁾。

その後直江は柳田の著作を多く読みあさり、民俗学を学ぶ決心を固めていった。当時の柳田は既に『山の人生』などに代表されるような「山人論」から離れ、マジヨリテイーとしての日本人を理解するための民俗学の確立に取り組んでいた。このような姿勢の変化は後に民俗学の可能性が切り捨てられたと評されているが、しかし『山の人生』に感銘を受けて民俗学に進んだ直江には、それに対して困惑や心残りなどはまったくなかった。社会的に考えれば、マジヨリテイーとしての日本人の研究は時代の要請を受けての結果であり、また日本民俗学が次第に認められ、独自の地歩を確立できた前提でもあった。

半年後の一九三七年の夏休みに、北海道での修学旅行の後、一人旅で樺太に出た直江は、盧溝橋事変のニュース

を新聞で読んだ。直江は後年、その時のショックをこう回顧している。

この事件が日本にとって、非常に重大な意味をもつことになるだろうということは若い私にも予感された。一方私は、地歴科に籍をおいて、中国の歴史について一通りの勉強はしてきたわけであるが、さて中国民衆の生活ということになると何も知らないと言ってよかつた⁹⁾。

地歴科では地理と歴史を勉強し、その中に東洋史の勉強も入っていた。中国について概論的な知識は持っているが、しかしその現実はわからないというのである。これは決して直江一人のことではないだろう。柳田は一九一七年三月の『郷土研究』四巻十二号で雑誌の休刊を宣言した後、二〇日より二ヶ月余りにわたって台湾・中華民国に旅をしていた¹⁰⁾。この記念すべき初めての海外経験の後、彼は「支那の将来は誰一人予言し得られない」¹¹⁾という感想を述べている。中国との出会いが直江にとって決定的なのは、これまで進学先として考えていた国史の代わりに、東洋史に進学したところにある。そして中国語の言語力を持つことによって、直江の中国との関わりは、他の民俗学者と異なる形をとっていた。

しかし、直江は東洋史の勉強には熱心ではなかった。「日本民俗学の方法をしっかり身につけておかなければと思」ったからであるという¹²⁾。つまり、中国を理解する道として、書物での研究より実地調査を選んだのであり、同時にその選択は、将来中国に赴く考えがこの時期から既にあつたことを意味している。

3 民俗学の訓練

木曜会に顔を出すようになる一九三九年は、ちょうど海村調査の締めくくりの年にあたり、調査から帰ったばかりの先輩たちの報告があつて刺激的であつたと直江は回顧している¹³⁾。実は、戦争の影響やそれに伴う調査費の

支給停止で調査は続けることができず、一九三八年に既に打ち切られていた。しかし「木曜会」の会合は月に一回か二回程度柳田宅で行われていたし、そこで海村調査や新たな自主調査に関する報告や議論が行われたと思われる。

直江は四月から六月、駿河台で行われた日本民俗学講座に積極的に参加し⁽¹⁴⁾、十一月には、和歌森太郎や千葉徳爾などと、高師と文理大が一丸となった「茗溪民俗研究会」を結成し、四回まで例会を行った⁽¹⁵⁾。翌一九四〇年の春に、初めてのフィールドワークを岐阜県武儀郡の板取川の上流地方で行い、その後、飛騨の高山で江馬三枝子⁽¹⁶⁾を訪問し、調査結果を早速『民間伝承』五一八（一九四〇年五月）に「板取雑記」として発表した。

独自で調査を行い、調査結果を報告し得たのは、一人前の学者へ第一歩を踏み出したことを意味する。『民間伝承』次号（五一九、六月）を皮切りに、十月までの短い期間に、直江は書誌紹介を六本も執筆した。この中で、六一（一九四〇年十月）の「支那民俗学に関する二書」、すなわち顧頡剛の『古史弁自序』（平岡武夫訳）と林蘭の『香売りの董仙人』（呉守礼訳）⁽¹⁷⁾についての紹介が注目される。

書評紹介は「木曜会では、研究会が終ると、柳田先生がこの一ヶ月の間に読まれた本や雑誌類のうち、民俗学的価値のあるものを、『民間伝承』誌上に紹介するようにと、名指しで手渡されるのが常であった⁽¹⁸⁾」というように、書誌の選定と紹介者の指定は多くの場合柳田の意思によるものであった。この二書もそうであったかどうかは定かではない。

同じく十月に、柳田は『朝鮮民俗』第三号「今村鞆翁古稀記念号」に「学問と民族結合」という一文を寄せたことは第一章でもふれたが、そこで「今まで我々はあまりにも内地の問題に没頭して居りました。又それ程にも新たに心付くやうな珍らしい事実が次々に現れて来るのであります。しかしもうそろそろ外部との比較といふことが、考へられなければならぬ時代になりました⁽¹⁹⁾」と述べてはいるものの、朝鮮の民俗の索引作成を勧めるに留まり、「二国民俗学」の枠はまだ揺るぎなかった。

それと比べると、若き直江の態度は積極的であった。彼は紹介の冒頭でこう主張している。

伸びんとするものは先づ力を内に蓄へねばならぬ。日本民俗学の現状は正にそれである。併し我々の学問が将来世界に向かつて自己を出張し得るためには隣国民俗学の成果に対して絶えざる注意を払ふ事が肝要である。

日本民俗学にとって「伸び」ることが必然な趨勢であり、その具体的な形は「世界に向かつて自己を出張」することである。かつて柳田によって「世界民俗学」という形で語られ、そして「一国民俗学」の実践の中で姿を消していた世界への寄与は再びその弟子によって語られるようになった。そして各国における「一国民俗学」の成立を待つという消極的な態度ではなく、「出張」、即ち日本民俗学の方から積極的に関与する実践的な姿勢が示されている。

この「出張」はまた中国と民俗学を選んだ直江が自分に課した任務でもあった。一九四一年「中国民間説話の民俗学的研究」を提出して大学を卒業した直江は、自ら中国行きを志望し、ちょうど北京の日本中学校から求人があり、即座に赴任することとなった⁽²⁰⁾。

2 「北支」での活躍

一九四一年七月、直江広治は日本で親しく付き合った留学生の紹介で北京市西城太平橋四八号郭宅⁽²¹⁾に下宿し、これより一九四六年六月まで五年間北京で生活していた。

到着早々直江は近況を『民間伝承』に報告しており⁽²²⁾、その後たびたび通信を寄せている(本章末の表24参照)。東京から『民間伝承』をはじめ、民俗学関係の新刊⁽²³⁾が届けられており、現地でも直江は柳田や木曜会の仲間の

著作を買いあさり⁽²⁴⁾、柳田を中心とした日本の民俗学と密接な関係を持っていた。

九月に新学期が始まり、直江は地理と歴史の担当教員として授業に臨んだが、その前の夏休み（中国では七月―九月）からすでに北京の朝陽門外にある六里屯という三〇〇戸前後の村落へ調査に出掛け始めた⁽²⁵⁾。

1 満鉄調査部と日本民俗学

この年の十二月、直江は再び『民間伝承』（七―三）に通信を寄せている。

当地では有志が集り民風会なるフオクロアのささやかな会を作つて居ります。熱心なメンバーが十五人ばかりで、大体会一回報告会を開いてをります。七月には満鉄の旗田氏の北支順義県砂井村の農村調査報告があり、八月には北京近くの豊出農事情の報告が、高木氏によつてなされました。九月七日は北京の神祇講座の講演のため御来燕中の折口先生を迎へ「民俗学の分類」に関するお話を聞きました。この報告会の外に北京近郊の調査に着手致し、八月以来休日毎に三四人で採集に出掛けて居ります。東郊の広軍屯には数回参り、次第に面白い採集が集つて来ました。十一月一日から三日間ここでは収穫祭があるので、遊びに來いと云つて来ました。泊りがけで行つて見るつもりです。新京では大間知さんを中心に同好会が生まれたようですが、そのうちにお互いに連絡をとつて調査を進めたいと思つてゐます。

やや長い文章であるが、重要な情報を多く含んでおり、当時の北京の民俗学活動、とくに「民風会」という民俗同好会に関して貴重な記録を残している。

国学院大学高等師範卒業後、一九四〇年に北京に渡つた沢田瑞穂によれば、民風会は同年の春、民俗に興味を持つ北京在住の日本人によつて組織された研究会であり、従来の「支那通」と違う態度と方法で北京及びその周辺を研

究し、やがて「大陸民俗研究」へと発展していく目的を持っている。その主唱者であり世話人の一人が当時満鉄調査部の山本斌で、研究会の調査も主として山本が当時従事していた華北農村慣行調査に便乗する形で展開されていたという⁽²⁶⁾。

確かに直江の通信にも民風会の報告会で「満鉄の旗田氏の北支順義県砂井村の農村調査報告」が行われたとある。そして直江は山本斌と達光と同行して宛平県河北村の調査に出掛けたという記録もある⁽²⁷⁾。直江や沢田の著作にあった調査資料の獲得地を慣行調査の地域⁽²⁸⁾と照合すれば重なる部分が多いことがわかる。民風会の活動と満鉄の慣行調査の間には密接な関係があったと言える。

二者を繋ぐ重要人物である山本斌（やまもと・はじめ）の略歴は、一九七五年に出版された彼の著作『中国の民間伝承』（太平出版社）の奥付によると、以下のようである。

一九〇七年、山口県阿武郡萩町（現萩市）に生まれる。

一九三一年、東京帝国大学法学部を卒業する。

一九三一～三三年、同大学院で近代中国政治史を専攻する。

一九三七～四三年、満鉄調査部中国農村慣行調査班（以下「満鉄慣行班」と記す）に所属。河北、山東省農村における小作、水慣行を中心に調査する。

一九四三～四五年、同調査部北支経済調査所に所属。青海、チベット地域調査資料を刊行する。

一九四六年、帰国、海燕書店を創業。

一九六一年、学術資料刊行会を主宰。

著書は『中国農村慣行調査』『東部チベット語辞典』（以上共著）、『中国辺境漢方薬材辞典』など、ほかにソビエト体育関係の訳書が多数である。

この直江の通信を載せた『民間伝承』の新入会員欄に「北京 生田中庸 山本斌」⁽²⁹⁾と見え、台湾、満洲以外、中国からの初めての入会であった。当時、民間伝承の会の入会は推薦制を採っており、山本の入会は直江による紹介だと思われる。入会の紹介だけではなく、直江は山本の原稿の日本国内での掲載も斡旋していた。

さて一緒に民俗研究をやつてゐる満鉄北支経済調査所慣行班の山本斌氏がかねてまとめられてゐた「河北省順義の歳時記」一寸面白いものですから、別便でお送り致します。御一読の上、「旅と伝説」にでも御掲載下されば幸甚と存じます。山本氏は調査所の方の関係で木戸斌といふ筆名を用ひて居りますが、右の点は何卒御了承の程願ひ上げます（一九四二年四月十二日橋浦泰雄宛書簡、傍点原文）⁽³⁰⁾。

橋浦は早速文章の掲載を斡旋したが、実際掲載されたのは『旅と伝説』ではなく、『民族学研究』であった⁽³¹⁾。『民族学研究』八一二（一九四三年一月）に載せられた「劉悦勤稿・木戸徹マツ訳」とある「北支農村歳時記―河北省順義県―」は、即ち山本斌の寄稿であった。劉に歳時記、伝説、民謡、農諺などの蒐集を依頼し、一九四一年六月に報告を受けた経緯や、この文章は劉の報告書の翻訳である旨が記されている木戸名義の序は「一九四二年四月」とあり、直江の依頼書簡に合わせて執筆したものだと思われる。

直江の同書簡では、さらに満鉄慣行班が日本民俗学に対して興味を抱き、中国調査に際して日本民俗学の理論と方法を参考にしようとする動きを示している。

尚、山本氏の慣行班の仕事は大分我々のやつてゐる事に近いので、伝承の会で発行致しました書物を慣行班として買い込みたいといふ希望があるのですが、甚だ御面倒でも左記書物若し有りましたら御送付の程願ひ上

一九四二年に調査資料をもって帰国し、故 柳田国男先生を訪れて調査法その他について教えを乞うた。それが機縁となって戦後の一九五七年には民俗学と歴史学についての『講演集』の整理などのお手伝いもした。本書執筆にあたっては、このときに柳田先生から学んだことが大きな支えと励みになった³⁴⁾。

山本と直江を通して、戦前代表的な大規模の中国実地調査は日本の民俗学と関係を持っていた。柳田に何を教わり、日本民俗学の知識と経験が如何に満鉄の慣行調査に反映されていったのかを考察することはこれからの課題であらう。

2 折口信夫の中国旅行

直江広治が『民間伝承』への通信で言及した折口信夫の「北京の神祇講座の講演」は、折口信夫にとって唯一の外国旅行でもあった。折口信夫年譜の一九四一年では、「八月、中華民国に旅。一日、北京到着。三日から北京で皇典講究所の講演会（三日間）。北京武道殿で『古代人の信仰』を講演。八日、部隊への学術慰問の後、山海関・南京・蘇州・杭州を巡り、九月上旬、上海より帰国³⁵⁾」となっている。

折口が中国旅行の旅先より知人に送った葉書八通³⁶⁾と、阿部正路・芳賀日出男「折口信夫の中国行」（一九九七年）³⁷⁾によって行程を訂正、補充すると、以下のようなものである。

八月二二日に東京大井警察署長より身分証明書を発給される（阿部）。

八月二七日に出発し、九月一日夜十一時北京に到着する（二五二番京翠明荘より東京高崎英雄宛絵葉書）。

九月三日～五日に皇典講究所華北総署（一九四一年三月に設立）が主催の短期神祇講座で講義をする。

六日に山海関を見学（二五三番北京華北総署より金沢第四九部隊附少尉藤井春洋宛絵葉書、二五四番北京翠明荘より埜

玉西角井正慶・富子宛絵葉書。

七日到北京武道殿で「古代人の信仰」を講演する⁽³⁸⁾。帰り道の変更で北支軍報道部より九月九日から十月十日の間に北京―南京―上海―東京を通行できる証明書を発給される(阿部)。夜、民風会で「民俗学の分類」の話をする(直江、沢田)。

八日に部隊への学術慰問(二五五番山西省太原教育庁中村浩・治枝宛絵葉書)。

日付不明、一人で南京に飛ぶ(二五六番東京金田一京助宛絵葉書)。

日付不明、蘇州の寒山寺、楓橋などを見物し宿泊(二五八番金沢江尻初枝様方藤井春洋宛絵葉書)。

日付不明、嘉興で三等車に乗換え、杭州に着き、西冷飯店に泊る(同前)。

日付不明、杭州見学(二五七番東京青池竹次鳥船社様・高崎英雄宛絵葉書)。

日付不明、上海に到着する(二五九番東京河合峻策宛絵葉書)。

帰国。年譜の次の条は九月二二日信州での講演であった。帰国は九月の中旬の後半であろう。

当時折口は五五歳であり、虚弱な彼にとつて中国の旅は体への負担が大きく(二五四番⁽³⁹⁾)、途中で一旦八日の学術慰問後に帰国することを考えた(二五三番)ほどである。しかし、彼はまたこの旅を望んでいた。

武漢攻略のために太田陸郎が召集されたのが一九三八年七月であるが、その一ヶ月後の八月、内閣情報部は、菊池寛、久米正雄など作家十三名を招集し、ペン部隊を組織して漢口攻略戦に従軍することを計画した。八月二八日付、長野県軽井沢より大阪鈴木金太郎宛の絵葉書で、折口は「漢口従軍連の仲間に入りそこねた。ここに居つたので、届け出が遅れました」(二三四番、一八八頁)と嘆いている。二週間後の九月十日、同じく鈴木金太郎宛の封書巻紙でさらに同伴にふれている。

漢口従軍（文士従軍のあれ）の願ひを出してあるので、何時、支那へ行けるかもしれません。行けば、恤兵部からです。まあ、たまたまの一つも受けて来れば、しつかりした歌でも出来るかと思ひます（二三六番、一八九頁、傍点原文）。

折口信夫は戦場に赴く兵士に心動かされる魂を感じており、前線の兵士を慰問しに行く志を前から持っている。北京到着後の絵葉書第一便にも「八日は学術慰問といふことを試みる。兵隊さんに喜ばれば幸福だと思ひます」（二五二番）と述べている。

それでは、折口は中国をどう見ていたのか。

一、中国は遠い。——「五日がかりで北京に到着、相当疲れました」（二五四番、前記）

二、中国は広い。——「北京に来ればあへると思うてゐた。地図の上で考へれば、何でもないが、時間を当つて見れば、三十何時間かかる。これではとても、えう来まいと思つてゐました。こちらがすんでも、太原はあまり遠すぎるので、残念乍ら南飛してかへる」（二五五番）

三、北方の気候にはなれない。——「当地のなかなか暑く、所謂北京の秋も杳かな心持ちがする」（二五三番）

四、所謂名勝は俗悪であった。——「寒山寺、楓橋など、俗悪の中に、まう少しとりえがあつてくれればよかつたのと思うた」（二五八番）

五、中国人はあまりいい人は多くない。——「嘉興は三等車ばかりだが支那でも、これにのる人々にはよいのである」（同前）

材料が少なく、折口の中国観というほどのものを抽出することができないが、その中国イメージは大よそマイナス的なものが多いことがわかる。中国は折口の唯一の海外経験であるにも拘わらず、戦前戦後通じて本人はあまり言及していない。折口にとっては隣の大陸は、戦争で日本人の軍隊があるのでなければ、まったく関係のない世界

であった。

折口は、北京滞在中、民風会で講演したことがある。沢田瑞穂によれば、その内容は「民族学と民俗学との方法上の異同」であり、民族学は異民族を、民俗学は母国をそれぞれ研究するものとし、民俗学の最終目的を「国民の心意情緒の内奥とその表現形式とを探索すること」⁽⁴⁾とする趣旨であったという。

自民族と他民族という対象の差は、柳田民俗学が二つの「ミンゾクガク」の区別に対するオーソドックスな説明であり、そして自省によって心意まで達する研究の可能性をもって民俗学の優位性が強調されるのである。しかし、この論理は民風会の中でそのまま受け入れられなかったようである。

折口講演の事実を述べた後に示された沢田瑞穂の理解は代表的であった。即ち中国に長い歴史があること、同じ東洋の隣国であること、そして同一国民でも世代の差によって異邦人の学と変わらぬものになりかねないことなどを理由に、中国での民俗研究は、ポリネシア、メラネシアなど未開人の風習を取扱う民族学と同一次元ではないと沢田は説いている⁽⁴⁾。

沢田の主張は、日本人による中国民俗の研究は、異民族を対象としながら、民俗学の研究であるといえる。とくに国民の世代差をあげて同国人の自省という言説を相対化するところが注目されよう。同じ国民であるから深く理解できるというのは可能性についての言説で、具体的な実践における必然とはいえない。中国で民俗調査研究活動を展開する日本人にとって、「一国民俗学」における「郷土人」の特権化は当然反論されるべき論理だといえよう。しかし沢田の関心はもっぱら中国での自分たちの行動を正当化するところにあり、中国は、日本での主流の理論、方法そのものを反省させる新たな現場や契機になりえなかったのである。

3 その後の民風会

一九四二年四月十二日付橋浦泰雄に宛てた書簡では、直江広治は北京の民俗学活動の近況を伝えている。

当地の民風会も其後ささやかな会合を続け、日曜を利用してはあちこち歩き廻つて居ります。何と言つても同志が少ないので心淋しく思つて居ります。大陸民俗叢刊と云つたものでも出して、少し呼びかけて見ようかなど内輪の者で話し合つて居ります。併し先日早川孝太郎さんが御来燕になつて北京大学で「日本民俗学」といふ講演をされたり、其他の研究所でも次第に此の学問に注意を向け出して来たようです。

同じ書簡では「輔仁大学には「⁽¹⁾ラマソン」、エーデル師等を中心に民族学の研究会が作られ、こつこつやつてゐるようです。又仏人が矢張り研究会を作らうと劃策して居りますし、我にも負けずに頑張らうとしてゐます」と報じている。民風会が活動し始めた一九四〇年代初め、趣向は異なるが、北京において後述する輔仁大学の付属東方人類学博物館を中心としたドイツ系の研究グループ、そしてフランスの中法漢学研究所⁽²⁾の活動があつた。中国におけるヨーロッパの研究団体の活躍は日本人による中国民俗研究への刺激となつたのである。

当時の民俗学研究は広範囲から集めてくる多くの民俗事例に依拠するので、とりわけ資料収集の初期段階では、まず運動でなければならなかつた。北京でも状況は同じであり、叢書の刊行は運動を促す方法として考えられたようである。「大陸民俗叢刊」という名は「大陸民俗研究へと発展する研究会」という民風会設立の目的を想起させる。沢田瑞穂の回想によると、一九四一年の末に、山本斌から北京の日本人経営の出版社と話がつき、自分が集めた昔話『戀城夜譚』を大陸民俗叢刊の一冊として出版する計画があつたが、発行直前、製本上の失敗により全部裁断されたといふ⁽³⁾。

同時に、既に日本では多くの成果を収め、社会的地位を確固にした日本民俗学の直接の関与とその積極的な影響が期待された。当時の早川孝太郎は柳田系統に属していないが、日本ではすでに名著『花祭』（岡書院、一九三〇年）などの業績により民俗学者としての地歩を固めていた。彼が一九四〇年十月から十一月にかけて朝鮮、満洲を旅し

たことは、〈在奉天 早川孝太郎〉という署名で『民間伝承』に寄せた通信によって知ることができる⁽⁴⁴⁾。その時のスケッチだと思われた絵は、『旅と伝説』の表紙(一九四一年七月号に「蒙疆南洋河」、一九四二年一月号から「輯安將軍塚ニテ(オボ)」を飾っていた。直江のこの通信によると、早川は一九四二年春にさらに北京に行き、北京大学で「日本民俗学」を講演したことになる。この北京の旅についてのどのような背景があったのかは詳らかではないが、一九四一年九月の折口信夫よりわずか半年後、早川も同じく北京で日本民俗学の概論について講演したことは、日本の民俗学者の中国との関わりが確実に増え、中国での民俗研究との関係もより直接的になったこと、そして現地では日本民俗学に対する関心が高まったことを物語っている。

4 山西学術調査

民風会の活動などで授業を休むことに起因して学校側との関係が悪化し、直江は一九四二年二月に日本中学校を辞めてしまったが、四月の末に、東京から山西学術調査団の一行が北京にやってきた。

東京帝大地理学の多田文男(一九〇〇―七八年)は一九四〇と一九四一年に隊長としてゴビ砂漠学術探検を実施したが⁽⁴⁵⁾、山西で現地派遣軍から資源調査の要望を受け、学術調査を行うことで軍との間に意見の一致を見た。一九四一年春に資源科学諸学会連盟が結成され、十一月に現地軍より学術調査研究団の派遣を正式に依頼され、準備が進められていた。その後一九四一年十二月八日に、「天然資源に関する基礎的研究に向かつて」の「国立の機関」として文部省直轄の資源科学研究所が設立されると、山西学術調査研究団が研究所最初の活動となった。

興亜院の援助のもとで、地理、地質、鉱物、動物・植物、人類の五研究部門と絵画部、庶務部、映画部、報道部からなる調査団は、四月二三日に東京で東海道線に乗り、瀬戸内海で半貨物船に乗換え、二八日深夜北京に着き、二九日午前十時北京神社で結団式が行われた。

調査団の地理班に直江の恩師でもある東京高師の花井重次教授が名前を連ねている。直江は調査団の宿舎である

翠明荘に訪れ、花井の斡旋で人類先史学班の一員となった。その理由は「民俗学を専攻しているということ、中国語が話せるという点」⁽⁴⁶⁾であったという。人類先史学班に班長谷口虎年（慶応）、成員は江口為蔵（慶応）、小野勝年（華北交通囑託）、野村正良（学士院囑託）などのメンバーがおり、専門は考古学や形質人類学、言語学などで、最初から風俗習慣を担当する者がいなかった。調査事項の「民俗学的調査研究（民間伝承）」という項目は⁽⁴⁷⁾おそらく直江が班員になってから加えられたものだと思われる。

この調査については、後援となった朝日新聞社の随行者・宮本敏行による『山西学術紀行』（新紀元社、一九四二年）及び「第一次山西学術調査研究団の編制及行程」（一九四三年四月）⁽⁴⁸⁾に詳しい。それらの記録によれば調査団の一員としての直江の活動を知ることができる。

五月一日の夜、調査団一行は太原に向かい、翌日の午後到着した。三日の午前には太原神社参拝、正午現地軍当局に申告、会食、午後二時半から準備会、各方面との打合、晚食、必要品の調達などをする。四日、五日には午前中に打合会を行い、午後博物館や太原製鉄所及び種畜場などを見学した。正式な調査は六日からであった。五月六日、七、八日、第一次調査として、潞安、垣曲、蒲州の三隊に分けて山西南部地区を調査するが、直江は第三班（蒲州地区）に所属した。

谷口虎年を班長とする第三班は他に地理学の花井重次、吉村信吉、木内信蔵、人類学の野村正良、東洋史・考古学の小野勝年、西亨、絵画部の田内駿士などがおり、中国で現地参加した「綿産改進」の鈴木堯司、平野三郎、葛長崑もこの班に入っている。班附として現地軍の古賀大尉、守永兵長、杉崎上等兵、衛生調査班長田軍曹、片岡兵長、鬼島上等兵、長井上等兵や『太原新聞』の亀田記者等の名前も見られる。

日程は太原―大谷（六日）―臨汾（七、九日）―運城（十、十一日）―虞郷（十二、十三日）―蒲州（十四、十六日）―風陵渡（十六、十七日）―運城（十七、十九日）―太原（二〇日）とある。特に蒲州では大雨の中で直江は谷口、野村などと共に県公署で伝説だと思われていた「冥婚」（死者結婚）がまだ現実として行われていることを知

り、大いに喜んだという。

五月二五日～六月十六日は調査団全員で参加する第二次調査を行い五台山地区を踏査した。太原から同蒲線で忻州、崞県に、日本館で宿泊してからトラックで繁峙に着く。

ここから分かれて自然科学を中心とした本隊が五台山中に赴いて踏査する一方、人類班として谷口の引率のもとで、江口（生体計測其他）、野村（言語）、小野（考古）、直江（民俗）、木内（人文地理）の一行は五台山麓一帯の町を調査し、繁峙―代県―原平鎮―忻県―定襄―五台県城と進む。当地では新民会の協力で地元生まれの男性五〇人、女性二〇人に対して生体計測を実施し、それ以外当地で一番家族の多い家を見学し、一番の物知りに会い、村の戸籍簿なども閲覧した。

六月十三日、全団員は五台県城の兵営に合流し、十五日、トラックで河辺村に移動し、そこから汽車で太原駅まで戻る。太原では現地軍、山西産業、太原市民を対象とする報告会を行った後、北京に帰り、支那方面軍、興亜院、その他官民各方面に帰還申告や報告をした。六月二五日から三日間で、朝日新聞北京支局の後援で「五台山絵画展覧会」が王府井の松坂屋において開催され、その最終日に北京飯店の屋上で打上げの晩餐会が催された。二七日、北京神社で解団式が行われた。

この調査については正式な報告書は出版されていない。一九四三年十二月執筆された北村四郎の「山西學術調査研究団採集キタ科植物」は、一九四九年十二月になってようやく発表された⁴⁹し、前記の『山西學術探検記』（一九四三年四月）も、その「序」に記されたように「調査団各班長の手記がここの一本にまとめられた」ものでしかなかった。

直江はこの山西調査の報告として『地理学』十月号に「山西の習俗」、「北支」十月号に「山西村落に文化を運ぶ人々」をそれぞれ投稿した。これは直江の中国に関する最初の調査研究発表であり、一九六七年『中国の民俗学』をまとめる際、「社会習俗」の主要なる構成部分でもある。この中で『北支』はこれから直江にとって重要な発表

機関であった。当雑誌は華北交通株式会社資業局編の月刊⁽⁵⁰⁾を考えると、直江と当雑誌の関係は、山西調査中で共同行動していた同社嘱託の小野勝年によるところが大きいと思われる。

5 石田英一郎との再会

一九四二年十一月十一日柳田国男宛書簡の追伸では、直江は『地理学』と『北支』への投稿を報告しているが、同じ書簡でまた大間知篤三や石田英一郎と連携する意欲を示している。

新京の大間知さんが学生を連れて山東から蒙疆を廻つて北京に寄られたので、今日久し振りに色々お話をすることが出来ました。新京には早く学会が出来ましたし、張家口にもその気運が高まつてゐるようで、お互いに連絡を取つて、こちらの民俗調査をやりたいものだと話し合いました。

大間知篤三を中心に新京民俗同好会が発足したのは一九四一年七月であったが、前述した直江の『民間伝承』への会員通信第二便(同十二月)では、すでに「そのうちに」と連絡する意欲を示していた。

直江と石田英一郎との出会いは、在学中の一九四〇年柳田の指示で紹介状を持参して「帝国学士院内の東亜諸民族調査室」に訪れたときであった⁽⁵¹⁾。周知のように石田と柳田の個人的な関係は決して親しいとはいえず、学問的な立場も大きく異なるものがある⁽⁵²⁾。前年の九月に石田がすでにウィーン大学での留学を終えて帰国したこと、そして東亜諸民族調査委員会嘱託になったのが一九四〇年七月であったことを考えれば、翌春に卒業を控える直江の就職斡旋を石田に求める思いが柳田にはあつたかもしれない。

その後直江の中国行きが決まったこともあり、石田との間には密接的な連絡が見られず、この一九四二年の夏に二人が再会したのである。石田は前年樺太の氏族組織調査に続いて華北と内蒙古での回族調査を終えたばかりであ

つた(53)。

石田には中国での調査はこれが初めてであるが、中国経験は前からあった。大学二年の一九二五年の夏休みに彼は京都帝国大学社会科学研究会の仲間である大田遼一郎と中国に渡り、満洲、河北、山東、天津、北京を旅し、中江丑吉、満鉄の伊藤武雄、中国革命論の鈴木言一や、建国後国家主席にもなった若き劉少奇を含む中国の学生運動の指導者に会った。その後一九二七年の二、三月に日本共産党から派遣され水野成夫に同行して神戸―台北―福州―上海―武昌、漢口を旅し、「中国の巨大さとその民族の底知れぬ潜在力といったものを、身にしみて感じ」たという(54)。

この一九四二年の夏は十数年ぶりの北京訪問であった。前回の自由活動とうって変わり、後年の言葉でいえば、「侵略者の武力で押えた点と線だけに沿い、その武力の保護を背景に行った調査研究」であった。

盧溝橋事変勃発後、日本は蒙疆自治を推進し、張家口は一九三七年九月に成立した察南自治政府の政府所在地となった。十一月に察南、晋北、蒙古の三つの自治政府の代表によって蒙疆聯合委員会がつくられ、張家口を委員会所在地とした。一九三四年に発足した蒙古善隣協会は一九三八年に在外本部を張家口に設置し、張家口は蒙疆地区の政治文化中心となるが、軍部の影響が大きく、最高顧問は満鉄出身の金井章次であった。善隣協会の張家口本部に調査部が設けられており、石田の回族研究にあたって調査部の助力が大きかった。調査部は後一九四四年一月に西北研究所と発展するが、石田が訪れた一九四二年夏、風俗習慣を含む総合調査の気運は既に高まっており、その情報は石田を通して直江に伝わったのである。一年前では「そのうちに」となっていた連絡の意欲は、この時期になると「話し合いました」と、実践に向けての議論が始まった。

3 民俗学普及の努力

1 輔仁大学と日本民俗学

満洲と張家口と連携して中国北方での共同民俗調査ともいうべき計画に強い意欲を示した背景には、直江がこの年の九月から輔仁大学講師という安定した職に就いたことは無視できない。

暫く自由な体でこつこつやつて居りましたが、九月から細井先生に捨(ツマ)(捨)はれて輔仁大学で勉強させて戴いて居ります。

日本政府の寄附講座として文学院に日本語言文学系といふのが新設され、細井先生が主任になりましたが、その専任講師といふ名目で日本文学講読を受持つて居ります⁽⁵⁵⁾。

細井は細井次郎(一八九七—一九七三年、図14)のことである。直江就職の具体的な経緯は不詳である。書簡にもあるように日本の言語、文学に関する学部の新設に伴う教師への需要が直接の理由であったが、直江が日本民俗学の関係者であることも関連すると思われる。輔仁大学や細井と日本民俗学との接触はもともと早くからあったからである。

直江の民間伝承の会入会を伝えたのは『民間伝承』四一九であるが、その前号四一八(一九三九年五月)に署名「北平輔仁大学 細井次郎」の通信を載せている。

御惠贈の図書は早速大学に引渡しました所、学長以下大感謝にて、殊にエーデル師は自ら抱き廻つて、使丁の

手に託さぬなど純情ぶりを發揮して居ります。燕京大学に一昨日訪問の際学長、Dr. Stewardに面会御趣旨を申伝へました処早速懇望の申出日支文化提携は次第にレールに乗つて来るか推測致します。

それに続き、両大学からの感謝の言葉も載せられている。

(北平、輔仁大学、M・エーデル) 細井君は沢山の日本民俗学の書物を持つて来ました。輔仁大学が更になにに沢山の重要刊行物を頂きまして、ラーマン校務長も私も深く感謝致してをります。

(北平燕京大学 J. Leighton Steward) 今朝細井君さんの訪問を受け、貴会御出版物を御恵贈下さいました。私達学徒にとつてよき贈物を得たことを幸甚に存じます。三月十六日

輔仁大学 (Catholic University of Peking. 一九二五—一九五二年) は戦前中国における数少ないカトリック大学の一つである⁽⁵⁶⁾。教会大学の中でセントジョン大学(前身が一八七九年)や嶺南大学(前身が一八八八年)などと比べると



図 14 中国服の細井次郎
出典：『輔仁年刊』1938年より。

立は遅いが、輔仁大学は短期間で急速に成長し、一九三〇年代には、北京大学、清華大学、師範大学、燕京大学と並び北京の五大名門と言われるようになった。世界的な経済恐慌の影響を受け、一九三三年に、ローマ教会の命令でアメリカとドイツの神言会 (Society of the Divine Word)⁽⁵⁷⁾に移り、その後、政治情勢に対応するため、ドイツ人ラーマン(中国名は雷冕、Rudolf Rahmann. 一九〇二—一九八五年)が校務長(一九三六年九月—一九四六年七月)に就任し、大学

年胡同五号に移るまで、細井は輔仁大学内に住んでいた。

表18 輔仁大学日本関係科目教員表 (1937~1944年)

1937年	魏重慶(5)、豊浮露(2-3)
1938年	細井次郎(12)、傅仲濤(21)、陳仲益(6)、*葉德礼(2)
1939年	細井(6)、八卷澄江(9)、陳(12)、傅(15)、王際憲(3)、魏(2-3)
1940年	細井(9)、嶋美恵子(9)、陳(12)、傅(12)、王(3)、魏(3-4)
1941年	細井(9)、嶋(6)、渡邊善次(4)、陳(3)、傅(6)、王(3)、魏(3)
1942年	細井、嶋、渡邊、酒井悌、川添達人、直江広治、上田辰之助、陳、王、魏、董文萃
1943年	細井、渡邊、川添、直江、藤原英夫、市川一郎、小林知生、山本捨三、伏木妙子、日名和子、陳、傅、王、魏、董
1944年	細井、渡邊、酒井、川添、直江、藤原、市川、小林、山本、伏木、日名、風巻景次郎、奥野信太郎、陳、傅、魏、白若愚、王汝瀾、劉迺鯨

註：1941年までは日本語だけ、括弧内は時間数。*葉は日本文史。

出典：「輔仁檔案」より作成。

の管理層や教員も次第にドイツ勢に変わっていった。

一九三七年盧溝橋事変後、大学は教会大学という立場を生かし、内地に移転した北京、天津、山東など華北地域の大学、そして戦争の進行で占領その他の影響を受けた他の大学の学生を收容していたが⁽⁵⁸⁾、日本の軍部の圧力を受けて日本語の授業時間も増やしていた⁽⁵⁹⁾（表18参照）。

一九三八年七月、「剿共滅党運動週間」の中で、日本軍の圧力の下で、輔仁、燕京両大学が日本人教員を雇うことを約束した⁽⁵⁹⁾。九月に細井次郎は輔仁大学に第二外国語の教授として招聘され、大月初の日本人教員となった。最初は一年と二年の日本語を担当し、毎週十二時間で月給は三〇〇元であった⁽⁶⁰⁾。一九三九年に鳥居龍蔵が燕京大学に招聘されたが、その背後に、輔仁大学の細井招聘の影響があったと考えられる⁽⁶¹⁾。

「輔仁檔案」によれば、細井の略歴は「第五高等学校英吉利法律科卒業、帝国大学文学部教育学科修業、東京成城学園教授、東京清泉学院校長代理兼教授⁽⁶²⁾」とある。一九三四年に來日した聖心侍女修道会（A.C.I.Sisters）は一九三八年に東京麻布三河台に現在清泉女子大学の前身となる清泉寮学院を創立したが、細井は教会関係の紹介で輔仁大学に入った可能性が高い。一九四〇年に徳内松樹街延

細井は赴任後、軍側が期待したような政治的な活動にはあまり積極的ではなく、一九三九年五月、日本大使館に輔仁大学図書館への図書寄贈を依頼するなど独自の文化的交流を図っていた⁶³。輔仁大学側での細井評価は概ね良好であった⁶⁴。

この『民間伝承』での通信では「御恵贈の図書」「日本民俗学の書物」「貴会御出版物」とあり、寄贈されたのは民間伝承の会の出版物であったと思われる。しかし、民間伝承の会側にはこの件に関する記録は見当たらず、歴年の新入会員にも細井の名前がなく、今のところ民間伝承の会と細井の関係が確認できていない。具体的なルートは不明であるが、しかし会員通信を見る限り、輔仁と燕京両大学は民間伝承の会からの寄贈だと理解している。戦時下日本民俗学の著作物が担った役割の一端を表している。

下って『民間伝承』六一―二（一九四一年九月）の「学会消息」に「ラーマン博士来朝」という記事がある。「在北京の輔仁大学総長R・ラーマン博士は過日、我国に来朝、その途に於て、柳田先生の書齋に訪れ、従来民俗学研究に携はつて来たが、今後特に指導提携を希望する旨、挨拶を述べる所があつた」とのことであつた。

総長は総務長の誤りであつた。一九二〇年代には中国側の教育権回収運動、教育宗教分離運動が起り、一九二九年に南京国民政府が『私立学校規程』で外国系学校では中国人が校長に当たるべきと決めた後、一九五二年大学が合併されるまで輔仁大学の総長は陳垣であつた。教会側の最高責任者が総務長と呼ばれ、校務の管理を補助し、大学を代表して国外関係の一切を処理する権限を持っている。一九三六年―一九四六年までドイツ人ラーマンはその任にあつた。ラーマンは民族学ウィーン学派の定礎者シュミットの弟子で、当時『華裔学誌』(Monumenta Serica)の編集長でもあつた。一九四一年の一月に柳田国男は日本民俗学の創立と発展への貢献で「朝日文化賞」を受賞していた。九月の柳田宅訪問は、表敬の意もあり、「従来民俗学研究に携はつて来た」という表現からみれば、一九三九年の図書寄贈の返礼という意味も含まれていたのだろう。

間もなく太平洋戦争が勃発したが、その直後の十二月十一日に細井が「校務長主席秘書」として招聘され⁶⁵、

開設され、週二時間で四単位、担当は直江広治であった（表20参照）。
 注目すべきなのは、一九四三年九月から、日本語文学部二年生の必修科目として「日本民俗学」という課目が

表19 1942年度輔仁大学日本語文学部科目一覧

甲: 専門必修科	時間	単位	教員
一年日本文学	4	8	酒井悌
日作文文	2	4	渡辺善次
日本文学略史	3	6	細井次郎
日本史概要(上)	2	4	陳仲益
日本現代戯曲選読	3	6	川添達人
夜班	1	2	細井次郎
中国文学史	2	4	孫楷第
乙: 普通必修科	時間	単位	
国文	5	10	
倫理学	2	4	
英文	3	6	
体育	2	4	

出典：『輔仁大学一覽』1942年度より作成。



図15 中国服の直江広治

出典：『輔仁年刊』1942年。

さらに一九四二年六月九日に「日本文学系」（日本語文学部）が増設され⁽⁶⁶⁾、細井次郎が主任に就任した。それまで輔仁大学の日本人教員は細井の外、一九三九年九月に八巻澄江⁽⁶⁷⁾、一九四〇年三月に八巻に代わって嶋美恵子⁽⁶⁸⁾、一九四一年九月に渡辺善次が加わった⁽⁶⁹⁾が、人数が少なく、課目もほとんど日本語に限定されていた。しかし日本語文学部の新設に伴い、日本人教員が一気に増え、科目も文学、歴史に広がっていった。直江広治はこの時期に講師として招聘されたのである（図15）。

2 民俗学教育普及の努力と効果

入学案内である『輔仁大学一覽』によれば、日本語文学部の科目設置はわかる（表19、表20参照）。残念ながら一九四四年の一覧が見つからなかったが、一九四二年学部開設以来の学生である崔玉卿、邱孝石、林象賢、王大錚、楊振韶の成績記録があったので、それによって整理することができた（表21）。

表20 1943年度輔仁大学日本語文学部科目一覧

科目名	科目種類	時間	単位	教員
一年生日本文学	一年必修	4	8	直江広治
日本文学略史		3	6	市川一郎
日本現代戯曲選読		3	6	川添達人
日文作文		2	4	山本捨三
東方精神史		2	4	細井次郎
日本史概要（上）		2	4	陳仲益
中国文学史		2	4	孫楷第
日本現代文学		二年必修	3	6
日本近世文学	3		6	山本捨三
日本民俗学	2		4	直江広治
日本学制史	2		4	藤原英夫
日本史概要（下）	2		4	陳仲益
日文作文	2		4	川添達人
国文	5			
日本文学演習	3		6	傅仲濤
中国戯曲史	二年選択	2	4	趙万里
中国小説史		2	4	孫楷第
唐宋代詩		2	4	顧隨

出典：『輔仁大学一覧』1943年度より作成。

表21 1944年度輔仁大学日本語文学部科目一覧

日本演劇史	万葉集研究
詩文漢訳法	日本文学演習
日本文学名著解題	日本文学研究法
日本上代文学講読	日本上代文学思想研究
日本中世文学講読	高等国文学
日本漢文学史	諸子選読
中日文学比較研究法	中国哲学史

出典：「輔仁檔案」巻467、巻450所収成績カードより作成。

科目新設の前年十一月、細井は二週間の予定で東京に行くことになり、その際、柳田宅を訪れる計画があった⁽⁷⁰⁾。それが実際に行われたとしたら、「日本民俗学」の新設にはその影響も考えられるだろう。いずれにしても、直江はこれを日本民俗学普及の好機と捉え、それに対する意気込みを『民間伝承』九一五（一九四三年十月）に寄せた通信で語っている。

九月新学期から一週二時間史学系と日文系の学生に日本民俗学といふ題目で講義することになりました。（中略）講義は支那語でやるつもりです。尚学校に補仁生活⁽⁷¹⁾といふ週刊新聞がありませんが、これに九月から昔話採集手帖を翻訳

して載せたいと思っております。

確認したところ、「日本民俗学」という科目は史学系の必修と選択科目のいずれにもなかった。おそらく直江は民俗学に関心ある史学系学生が個人的に聴講にくると想定していたのだろう。中国語で教えることにしたのは、まだ日本語で民俗学の授業を理解するほどの言語力がない学生も受講できるという普及への配慮と理解すべきであろう。さらに学内新聞に『昔話採集手帖』の訳文を掲載することで日本民俗学の手法の中国への応用を働きかけている。

一九四四年一月、石田英一郎は新設の西北研究所の次長に任命され、家族連れて赴任するに先立っての準備に一旦張家口に行き、帰りの六月初めに北京の直江宅に四日間泊っていた⁽⁷¹⁾。東京に戻った石田は柳田を訪れた。『炭焼日記』一九四四年六月十七日条に柳田は「石田英一郎君訪来（中略）北京の直江君より砂糖づけ、紙巻煙草及び雑誌、是には『昔話採集手帖』を訳載す」と記している⁽⁷²⁾。

一九四四年度三年生の科目に「日本民俗学」が見当たらないが、前年と同じように二年生を対象に行われていた可能性がある。なお一九四四年九月、輔仁大学の文科大学院に人類学部が新設され、ドイツ系の民族学が主な内容であった。

一九四六年五月二二日付、輔仁大学校長の名義で発行された直江広治の帰国証明書に「本校元日本人教師直江広治先生は、民国三一年九月に來任し、民俗学を教えていた。学問と人となりが優れており、三年間本学や学生との付き合いも良かった。」⁽⁷³⁾と書かれている。直江は日本文学や日本語も教えていたが、しかしその教育活動の主要な部分が「民俗学」であると認識されているのである。

直江の日本民俗学教育の効果を考えるには、学生の状況を把握する必要がある。一九四二年開設当時、学部は学生十四名の規模でスタートした（表22参照）。

表22 初年度（1942年）輔仁大学日本語文学部新入生一覧

氏名	年齢	本籍	出身校	備考
邱孝石	21	江蘇海門	天津私立達文中学	正式生
王大錡	19	河北天津	天津私立特一中学	正式生
楊振韶	19	山東栄城	青島私立礼賢中学	補欠生
林象賢	22	福建泉州	北京私立育英中学	転学部、41年9月入学*1
陳孝祖	26	山東昌邑	旅順工科大学予備科	特別生、43年末正規生*2、44年傍聴生*3
馮靖	21	山西平定	山西省立太原師範学校	特別生、43年も在籍*2
羅廉	22	河北大興	河北省私立潞河中学	特別生
孫彦章	22	山東牟平	吉林第一兩級中学	特別生
趙克明	20	河北薊県	北京私立北方中学	特別生
徐振林	33	吉林長春	輔仁大学教育学部	特別生乙
郭文秋(女)	20	大連市	大連市神明高等女校	正式生
崔玉卿(女)	21	山東青島	北京私立北方中学	補欠生
呉元秀(女)	21	浙江呉興	天津日本高等女子中学	特別生
謝儀貞(女)	21	福建閩侯	天津日本高等女子中学	特別生

出典：「輔仁檔案」巻130、巻223により作成。*1は同巻180、*2は同巻182、*3は同巻184による。

注意すべきなのは、数多くの「新入生」が見られるが、しかしその中で正式に在籍した学生（正式生、補欠生）の数が少なく、その年だけの特別生や聴講生が多かった。こうした特別生や聴講生がほとんど一年に集中し、正式

の在籍生にも途中で脱落した者がおり、二年、三年になっていくにつれてその学級の学生数が急激に減っていった。

一九四四年時点に、三年生は邱孝石、王大錡、楊振韶、林象賢、崔玉卿（女）、陳孝祖（聴講生）の六人で、二年生は沈彭年、李賡民、褚春榮、趙賢達、範琦、曲純懿（女）、于友文（女）の七人であった。それでも一年の新入生と合わせて日本語文学部の一賑やかな時期を迎えたが、しかし間もなく一九四五年日本が降伏するに伴い、九月七日に日本語文学部は停止し、日本語は第二外国語として保留されることになった⁷⁴。

輔仁大学の日本語文学部の存在は一九四二～四四年度のわずか三年間しかなく、この学部からの卒業生がいなかった。初年度一九四二年に入学した学生の内、五人だけは最終年度の一九四五年度に残り、男子学生四名（邱孝石、林象賢、王大錡、楊振韶）は社会学部、女子学生一名（崔玉卿）は哲学学部

表23 1946年度卒元日本言語文学部学生卒論一覧

氏名	本籍	住 所	卒論タイトル
邱孝石	江蘇海門	北平西城李広橋西街南口8号	「日本文学與外国文学及社会之關係」
林象賢	福建泉州	福建泉州東街支路101号	「近代日本社会」
王大錡	天津市	上海楊樹浦東西華徳路810弄87号	「日本社会对日本文学之影響」
楊振韶	山東栄城	青島市場二路19号	「日本上代社会與文学」

註：崔玉卿（女）は卒業生名簿に名前があるが、論文については不明である。

出典：『輔仁年刊』1946年度により作成。

それぞれ編入され、編入先の学部から卒業した。卒業アルバム『輔仁年刊』一九四六年度によれば、これら日本言語文学学部で三年間勉強した学生の論文タイトルは表23のようである。文学をテーマとするものが多く、民俗学関係のものはなかった。

短い授業期間（二年生必修として続けられたとしても二年間）と講義時間（週に二時間）、言語の障壁（学生の日本語理解力と直江の中国語表現力）、戦争による調査の制限（中国人学生の自由調査が困難）などにより、直江の日本民俗学教育は当時直接には目立った効果を収めなかったようである。しかし影響がなかったわけではない。

新中国が成立後、学問領域としての民俗学はしばらく姿を消していたが、一九七八年夏、七名の高名な教授ら⁽⁷⁶⁾が連名で民俗学研究の回復を提言し、それを受けて同年の社会科学計画会議で、民俗学が二九の学科の一つとして認められた。中国において民俗学はようやく復興を迎えた。翌年、中国民間文芸研究会に「民俗研究部」が創設され、一九八二年六月、中国民俗学会籌備会が開かれた。この籌備会の参加者（計十三名）には王汝瀾（一九二〇年〜）という名前が見られる⁽⁷⁶⁾。一九八三年中国民俗学会は正式に発足し、王は最初の会員となり、学会秘書処の初代成員でもあった⁽⁷⁷⁾。一九八三年七月二〇日から一ヶ月、中国民俗学会の初の活動として、民俗学講習班が開かれ、全国から九七名が受講したが、王は講師として「日本民俗学発展概述」を講義し、日本民俗学史を全面的に中国に紹介した最初であった⁽⁷⁸⁾。ほぼ同じ時期に、彼女は後藤興善『民俗学入門』（火星社、一九五〇年）⁽⁷⁹⁾、関敬吾編『民俗学』（角川書店、一九六三年）⁽⁸⁰⁾などの翻訳も手掛け、積極的に日本民俗学の成果を中国に紹介した。

その後の長い間、日本民俗学の翻訳者、紹介者として活躍してきた王はかつて日本に留学し、早稲田大学文学部史学科（東洋史）を卒業してから、東京帝国大学文学部史学科の研究生を経て一九四三年十月に輔仁大学日本語文学部の日本語専任助手として招聘された経歴を持つ⁽⁸¹⁾。専任助手の仕事内容は日本人教員の研究補助や講義要旨、レジメの翻訳などであったが、招聘された時期は「日本民俗学」という科目が新設された直後にあたり、彼女の日本民俗学についての関心と素養は当時積極的に日本民俗学の教育、普及活動を展開していた直江に刺激、影響された一面を持つと考えても不自然ではない。

3 東方人類学博物館、エーデルと『民俗学誌』

直江広治の輔仁大学での活動を考えるには、教育活動以外、当大学で一九四〇年に設立された東方人類学博物館（Museum of Oriental Ethnology）との関連も重要である。

一九四一年度の『私立輔仁大学一覽』によれば博物館は「葉徳礼主任、趙衛邦事務員⁽⁸²⁾、陳宗祥助理員⁽⁸³⁾」という小規模なものであった。その中心人物葉徳礼（エーデル、Matthias Eder）は、ラーマンと同じくシュミットの弟子で、かつてパリやベルリンなどで四年間日本学を研究していた。輔仁大学に赴任してから、日本語や日本文明史などの課目を担当し、琉球方言の翻訳も手掛けていた。

直江が輔仁大学に赴任した一九四二年は、ちょうど博物館の年刊として『民俗学誌』の発行が進められていた頃であった。雑誌の登録申請は十月で、当時の職員には、李慰祖助理員（輔仁大学大学院在学）の名前も見え、保証人は細井次郎であった。雑誌は英語、ドイツ語、フランス語などが混在し、一部英語及び中国語の要約を付けている。創刊号はエーデルによる序言を巻頭に、本文一〇九頁で、主な内容は以下のようなものである。

シロコゴロフ「中国の民族学研究」

趙邦衛「扶崑の起源と発達」、「中国現代民俗学研究（上）」

Josef Thiel「祈願成就のかたしる焼き」

陳祥春「驅邪符に関する幾つかの事例」

Karl Reitz「くはく・みづぐら・いへい（幣帛）」

エーデルによる二つの書評

雑誌の創刊は早速、直江より柳田に知らされ、そして関敬吾によつてで日本の学界に紹介された。

エーデル師の骨折りで大学の博物館には可成りの民俗資料が集つて参りました。又年刊のフォークロア・スタディズも出ましたし、（先生の御手許に参つて居りません時は早速御送り致します。）これから輔仁が支那民俗学研究の中心になる事と思ひます。私もこれから大いに勉強する積もりで居ります（一九四二年十一月十一日付直江書簡）。

本誌は北京輔仁大学人類学博物館に於て、年刊として本年創刊されたものであり、四六倍版約百頁余であり、編集者は八重山方言の研究者として知られる「アライマス・エーデル」である。投稿希望者は独仏英の何れかにより、出来るだけタイプライターによられたしといつてゐる（関敬吾、一九四三年一月『民間伝承』八一―九）。

なお、『民俗学誌』は一九四三年、柳田国男の記念特集号を出版した。

一九四九年五月、『民間伝承』一三一―五の「同人消息」に「北京輔仁大学教授エーデル氏来所、Folklore Studies（民俗学誌）の第八冊刊行の準備の為来朝せる由。」「四月四日エーデル氏を囲み座談会を開く。石田、江、大藤、

直江、和歌森、堀、関、神島の諸氏、それに先生も加はれて、終戦後の中国の学界の動向、比較民俗学に於ける日本民俗学の地位、日本民俗学への要望等を語り合つた」とある。その後、エーデルは日本に移住し、この雑誌の出版を継続しており⁽⁸⁴⁾、柳田文庫にも多数所蔵されている。

4 直江広治の中国経験と日本民俗学

直江広治は若い世代に属し、高等師範学校時代に民俗学と出会った頃、日本民俗学の全国的な組織は既に確立され、山村調査も展開されていた。民間伝承の会に入会したとき、海村調査が打ち切られ、国内の大規模な民俗学活動が次第に難しくなりつつあった。そのため太田陸郎や大間知篤三のように初期日本民俗学の組織化や民俗研究に大きく貢献することはできなかった。しかし、日本での活動を中断して中国に赴いた太田と大間知と異なり、直江の場合、中国は早くから研究対象となっている。

日中戦争の衝撃によって中国研究を志した直江は、専攻である東洋史より民俗学のアプローチを選んだ。柳田門下で受けた民俗学の教育と訓練はその意味で中国研究のための準備という側面を持っている。その自然な成行きとして、大学卒業直後、彼は北京に渡ったのである。

北京では早々、彼は日本人による民俗研究同好組織民風会の活動に積極的に参加し、満鉄の調査員山本斌との関係で、華北農村慣行調査に便乗する形で調査を展開しており、資源科学研究所による山西調査の一員にもなっていた。明確に判断できた直江の調査地を整理する結果は図16である。直江の主要調査地はほぼ鉄道沿線に限定し、さらに居住地である北京周辺以外、満鉄の慣行調査の主要地域（河北省、山東省）や山西調査団の行動範囲（山西省）に大きく依存していることがわかる。

戦前直江の中国研究には、太田陸郎のような壮大な文化史的仮設、或いは大間知篤三のような民俗学・民族学に

関する理論的な論考は見られず、中国語の能力を生かした口頭伝承に関する内容が中心であった。中国民俗学はその発端である歌謡収集から、歌謡、神話、伝説、昔話、謎などの口頭伝承（のち「民間文芸」という）が中心であった。直江は大学在学中、既に中国民俗学の成果に注意を払っており、その伝統に影響を受けた可能性が大きい。彼の卒業論文は「中国民間説話の民俗学的研究」であり、一九四二年九月輔仁大学で「日本民俗学」を開講すると同時に真っ先に翻訳したのも『昔話採集手帖』（柳田国男・関敬吾編、一九三六年八月）であった。口頭伝承に対する注目は首尾一貫していたといえよう。しかし戦前発表された文章は事例報告が多く、まだ系統的な研究という段階には達していない。

直江の中国経験の意味は、なにより彼の活発な活動にあると見るべきである。太田が「現地レポーター」、大間知が「現地組織者」とすれば、直江は若さと情熱を持つ「現地エージェント」といえる。

彼にとって中国と民俗学は最大のテーマであり、中国に向かって日本民俗学を出張することを自分の任務としていた。中国に到着早々、『民間伝承』に会員通信を寄せ、以降、たびたび会員通信を寄せる（表24参照）以外、頻繁に柳田や橋浦に書簡を寄せている（「直江書簡」）。その中で、彼は北京における学界の動向、特に民風会を中心とした民俗学活動の状況、そして自分の近況を詳細に伝えている。一方的な情報の伝達ではなく、これらの書簡は、時には柳田や橋浦への依頼状であり、時には紹介状であり、さらに後述するように、日本民俗学からの要望に対する報告書でもあった。

彼は日本民俗学の普及に真剣に取り組み、種々の制約で直接的な効果は弱かったものの、一九四〇年代に中国人学生を対象に「日本民俗学」という講座を持ったことが画期的なことであった。また戦後王汝瀾という日本民俗学の積極的な紹介者が生まれたことの背後に、戦時下、輔仁大学における直江の民俗学活動の影響があったと思われる。

北京では方々からみれば、直江は正統な日本民俗学の代表であった。満鉄の華北農村調査の関係者は、彼を經由

表24 『民間伝承』直江広治関係内容（1941～1944年）

刊行年月	号数	内 容	備考	
1941年8月	6-11	連日酷暑、昨夜雷雨、支那人雨に弱い、夏休み調査予定	会報届く	
12月	7-3	民風会の研究会、折口信夫来燕、北京近郊調査、大間知中心の同好会と連絡する意欲		
1942年9月	8-5	山西調査終了、石田英一郎とラーマンを訪れる。エーデル、細井次郎近況、北京の伝説 25 回休止。		
1943年1月	8-9	「批評紹介」で「民俗学誌」創刊の紹介（関敬吾）		
10月	9-5	9月から支那語で日本民俗学講義、輔仁生活に昔話採集手帖を翻訳、中国の民譚を収集したい。		
11月	9-6・7	「学会消息」に「東方民俗研究会」の紹介		
12月	9-8	「学会消息」に「北京 東方民俗研究会の成立」の報告		
1944年3月	10-1	山東益都調査、満洲城、回教徒部落、伝説・農諺・童謡、土地廟、高粱の刈り取り、明日中秋節		(九月十三日 益都にて)
7月	10-5	北京大会で大喜び、周作人のこと（方言調査に興味、「蝸牛考」「日本の祭」の翻訳を考案するが困難）		

出典：『民間伝承』各号より作成。

して日本民俗学の成果を吸収しようとしていた。山西調査では、それを理由に彼の参加が許可され、それに合わせてもともと設定されていなかった「民俗学的調査研究（民間伝承）」という調査項目が追加された。輔仁大学では彼を講師とする「日本民俗学」という科目が新たに開設され、彼の教育活動の主要な部分が「民俗学」であると認識されている。

一方、直江も日本民俗学に関心を持つ者を、積極的に東京の柳田へ紹介していた。満鉄の調査員山本斌、輔仁大学の細井次郎、エーデルなどの人物が彼の仲介で日本民俗学と直接関係を持つようになった。そして北京が華北占領地の文化的、交通的中心である関係もあり、石田英一郎、大間知篤三、折口信夫、早川孝太郎など日本民俗学において重要な地位にある者が相次いでこの地を訪れたが、いつも直江の迎えを受け民俗学に関する情報交換を行っていた。直江の努力で、後述するように、北京が、日本民俗学が内地以外へと発展する構想及び実践活動において重要な場所となったのである。

第5章

柳田国男先生古稀記念会——民俗学の再編成

以上、太田陸郎、大間知篤三、直江広治を事例に、日本の民俗学者が戦時下中国に赴き、中国を対象に学問的活動を続けながら、国内学界とも緊密な交流を持っていたことを見てきた。しかし一九三〇、四〇年代の日本民俗学と中国との関わりは決してこのような個人レベルに止まらなかった。

一九四三年七月『民間伝承』九―三の編輯後記では以下のような知らせを載せている。

明年は民間伝承の会も創立十週年を迎えますが、会は柳田先生の還暦記念を契機に創立されたので、先生もまた当然古稀の寿を迎えられる次第です。それで、日本民俗学界以外でも、此の機に先生の学恩を記念すべしとの声が既に高いので、本会でもそれに呼応して目下その具体案を協議中であります。むろん時局柄単なるお祝い騒ぎは厳禁、大戦必勝への学徒の奉公挺身でなくてはなりません。近く計画案を発表します故その節は御協力の程今から熱望致します。(橋浦)

ここで予告され、のち「柳田国男先生古稀記念会」（以下、「古稀記念会」と記す）と称された一大事業は、実は日本民俗学が中国を中心とした内地以外の地域に組織的に関わろうとするものであった。

思想史の角度から柳田国男のアジア意識を最初に問題にした藤井隆至（「柳田国男のアジア認識」「アジア経済」一六―三、一九七五年⁽¹⁾）は、大正期の柳田に一時期盛んだった「アジア意識」が、一九四〇年代に「比較民俗学」の提唱として、「アジア主義」（ここでアジア各国の連帯を指向する思想と定義されている）と呼ぶに値する思想性を獲得しつつあったが、「観察された事実」に裏打ちされていない故、結局思想性を獲得せず挫折したと論じている。

一九九〇年代になってこの問題は「比較民俗学」として再び注目を集めるようになり⁽²⁾、そこに大きく構想の思想的意味を重視するものと、比較という方法上の意味を問うものという二つ異なるアプローチがあった。前者についてたとえば鈴木満男は東アジアにおける中華文明圏の影響力を確認し、柳田国男を「典型的な熟蕃知識人」として位置づけ、「比較民俗学」の問題に注目している（「東アジア世界からみた柳田学」一九九一年⁽³⁾）。後者について、たとえば一九八〇年代後半から東アジア範囲での比較研究に関する成果が数多く現れた⁽⁴⁾ことを背景に、鳥越皓之は「柳田国男の比較民俗学の論理構造」（一九九〇年）⁽⁵⁾で、民俗学の方法として柳田国男における「比較民俗学」を検討している。この時期の議論の特徴の一つとして、同じ柳田国男に限定しながら、かつて藤井の場合で主として一九三九、四〇年の発言に限定されていた「比較民俗学」という言葉の射程を、一九二〇年代の「世界民俗学」から一九三九、四〇年の発言、一九四三年以降の積極的な姿勢、ないし戦後の『海上の道』まで広げたところにある。そして一九四三年以降の積極的な姿勢としてともに取り上げられたのは、『民俗台湾』の座談会であった。

この座談会は一九四三年十月、柳田宅で行われたもので、参加者は柳田国男、橋浦泰雄と『民俗台湾』の同人・岡田謙、中村哲、金関丈夫であった。座談会記録は「柳田国男氏を囲みて―大東亜民俗学の建設と『民俗台湾』の

使命」という題で『民俗台湾』三一―二二（一九四三年十二月）に掲載されている。

川村湊の『大東亜民俗学』の虚実』（一九九六年、前掲）は、焦点をこの『民俗台湾』座談会に絞り、そこに柳田の「大東亜民俗学」という構想が見られるとして、「比較民俗学を排除しながら、朝鮮や満洲や台湾をフィールドとした『大東亜共栄圏』内の個々の地域の民俗学を作り上げること。それは日本民俗学を中心とした『華夷秩序』としての植民地の民俗学を構想することであり、それはまさに植民地主義にほかならなかった」と激しく批判している。それに対する反論も戦争加担や植民地主義などの責任論で議論を展開していることは、既に序章で述べた。

実は、この『民俗台湾』座談会は古稀記念会事業の一環として行われていたのである。古家信平「まぼろしの国際共同研究」⁽⁷⁾は古稀記念会という文脈の中で座談会の内容を取り扱ったものであった。そこで古家は「国際共同研究」の試みに注目し、「国際共同研究課題」に抽象度の高い用語が使われているのは、すでに語彙に依存しない実質的な内容によって民俗事象を整理、分類する構想を持つようになった柳田の関与があったと主張し、柳田の民俗学が海外各地での民俗研究者に浸透していなかったことが当時の戦局と並んで国際共同研究が失敗に終わった大きな理由であったと論じている。「比較民俗学」のあり方を検討する際、柳田のテキストだけではなく、古稀記念会事業という実践の場に注目したところは評価できる。

二〇〇〇年以降、古稀記念会を正面から精力的に考察し続けてきたのは鶴見太郎である。「戦時下の民俗学」（『橋浦泰雄伝―柳田学の大きな伴行者』晶文社、二〇〇〇年）、「古希に集う」（『民俗学の熱き日々―柳田国男とその後継者たち』中公新書、二〇〇四年）、「戦時下の『モヤヒ』―柳田国男先生古希記念会に見る」（『人文学報』一四三号、京都大学人文科学研究所、二〇〇四年）など一連の研究は、主として橋浦泰雄の「モヤヒ」（ここで自生する研究会を尊重し、理解者による協力と共同研究と定義されている）という組織方式を評価している。二〇〇六年の「柳田民俗学の東アジア的展開」（前掲）になると、さらに積極的に古稀記念会を東アジア規模の民俗学構築の試みとして読み取

ろうとしている。従来、柳田個人の思想、理論として議論されてきた「アジア認識」「比較民俗学」の問題を、日本民俗学の組織的な活動として捉えなおす姿勢は重要であり、筆者も学ぶことが多かった。

本章は、以上の先行研究を念頭において、当事業の計画、計画形成の経緯、及び実施の具体的な経過を明らかにし、日本民俗学にとっての古稀記念会の意味を理論と組織の両面から明らかにする。

1 古稀記念会の計画

1 計画の全体像

事業計画の全体像は『民間伝承』九一四（一九四三年八月）において大文字見開き二枚にわたって華々しく披露されている。

「昭和十八年九月」^{〔8〕}付の「柳田国男先生古稀記念会趣旨」では「日本民俗学の創建と斯学後進の指導とに半生の情熱を傾倒」した柳田国男の学恩を讃え、記念事業の趣旨を「もとより大戦下单なる賀寿の挙は先生の固く辞まれる所で、我等も亦先生の意を体して飽く迄も学域に挺身奉公し、大戦の必勝を期するを大旨」としている。

趣意書に次いで「発企人」として「安藤正次、石黒忠篤、石田幹之助、伊波普猷、梅原末治、小野武夫、折口信夫、金関丈夫、金田一京助、今裕、洪沢敬三、新村出、東條操、戸田貞三、那須皓、西田直二郎、橋浦泰雄、橋本進吉、肥後和男、藤井崇治、和辻哲郎」と二一名の錚々たるメンバーが名を連ねており、柳田の関わる領域と人脈の広さを示している。

「実行委員（兼編纂委員）」は折口信夫を委員長として、木曜会の中心メンバー橋浦泰雄、倉田一郎、大藤時彦、関敬吾、そして小田倉一、小山栄三、今和次郎、高藤武馬、西角井正慶、平山敏次郎、宮本常一など十二名の名前が見られる。会計事務には橋浦、その監査には洪沢敬三・折口信夫の二名が当り、一九四四年早々より実行に移

り、一九四五年の上半期中にはすべて完了するとの予定が伝えられていた。
記念事業は大きく四つの内容からなっている。

一、日本民俗学地方大会の開催

行政上の新設地区たる九地方協議会地区を単位として開催すること。該地区内の民間伝承の会会員並に地方文化団体等の自主的主催たることを原則として、大政翼賛会其他の提携援助を仰ぐこと。

大会開催に伴う経費は中央部より派遣の講師の旅費は中央部の負担とするも、其他の経費は一切開催する地元
の負担とすること。

二、内地以外に於ける民俗学大会の開催

京城、台北、新京、北京、張家口等に於ける学会と提携連絡して開催すること。

一、二項の講師は中央及び地方より適宜選択するも、中央に於ては予め講師隊を編成して待機すること。

三、記念論文集の刊行

執筆依頼者日本民俗学内約七十名、学外約百名の予定にて、B六倍判四百頁前後のもの五、六冊以上刊行の
見込（一人原稿量四百字詰五十枚前後とする）柳田先生の年譜・著作年表・単行著書解説等を収録する。

四、雑誌『民間伝承』の特輯号連続発行

現時局下に最も必要とする主題を選定し、その資料の採集と論究とを組織的に行い、一ケ年間毎月連続して
特輯号を発行する。

国内の民俗学大会は一九三五年民間伝承の会が創立される契機となった民俗学講習会が最初であり、柳田が自ら
臨み、或いは折口信夫や木曜会の中心メンバーを講師として派遣しての地方講演会も、しばしば行われてきた⁹⁾。

共同主題を持つ『民間伝承』特集号の発行も珍しいことではなかった。計画の中で、組織的な関与という意味では、「内地以外に於ける民俗学大会の開催」が最も特徴的だと言える。

しかし、同号で民間伝承の会という名義で発表された「柳田国男先生古稀記念会の開催に当り会員各位に要請す」という「会告」においては三項目しかなく、国外民俗学大会に当たる内容は見あたらなかった。

従来、柳田民俗学の体制として調査と研究の分離、即ち指導者・研究者として君臨する柳田国男と、資料の提供者という二極システムがあると批判されてきた。しかし、木曜会は明らかにその他の会員と同じ存在ではなかった。ここに、①柳田を中心に、そして②彼の直接指導の下にある木曜会（橋浦が核心人物）を中核に、さらに③地方世話人を連絡センターとして、④各地の民俗研究団体や民間伝承の会の支部を傘下に収めるという、日本民俗学の組織的特徴をあらためて留意しなければならない。

組織面では、『民間伝承』の編集を含め、民俗学講習会や講座などの活動は実際木曜会の中心的なメンバーによって担われており、彼らは東京に在住しており、木曜会の例会を含め頻繁な交流があった。『民間伝承』での「巻頭言」「会告」や「編集後記」に見る働きかけは、その他の会員に向かつてのものと言っても過言ではない。「会告」に国外民俗学大会の内容がないのは、当時国外大会の実際の準備はもっぱら木曜会の中心メンバー、実際には橋浦泰雄によって進められていたことと関係すると思われる¹⁰⁾。

計画公表後、まず新潟の地方民俗誌『高志路』（九一〇、一九四三年十月）でそのことが伝えられ、さらに『民俗台湾』（三一一一、十一月）や『旅と伝説』（二六一二、十二月）などにおいて日本民俗学の大事業として報じられている。

2 計画の経緯

古稀記念会について、一九四三年六月二六日から十一月六日までの準備、進行状況を記した資料として、計画の

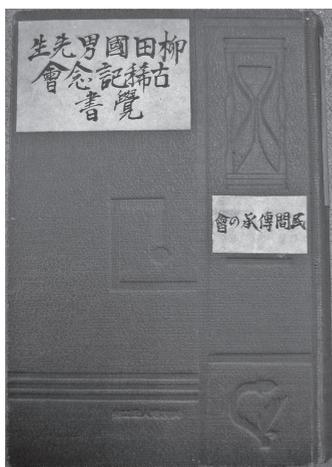


図 17 「柳田国男先生古稀記念會覚書」表紙

出典：「橋浦泰雄関係文書」所収、成城大学民俗学研究所蔵。

中心人物橋浦泰雄による「柳田国男先生古稀記念會覚書」（以下「古稀覚書」と記す。図17）が残されている¹¹⁾。当資料及びその他の関連資料によって古稀記念會計画の決定、準備のプロセスを詳しく把握することができる。

一九四四年に柳田国男は古稀を迎えるが、その記念活動について、「まづ木曜会としての態度を決定する必要がある」として、一九四三年六月二六日、橋浦泰雄、大藤時彦、倉田一郎、関敬吾、及び当時ちようど上京していた鳥取の地方世話人蓮仏重寿による第一回協議會が行われた。そこで他学界の協助、柳田の諒解を必要としながら、記念事業として①「日本民俗学を一般に啓蒙宣伝する為め、且又民間伝承の会会員の学績向上をかねて」東京で日本民俗学全国大会、そして可能であれば九州、近畿、東北で地方大会の開催、②日本民俗学者を中心とする記念論文集の刊行（人選として二〇名内日本民俗学四六名）、③共同課題を内容とする『民間伝承』記念特集号の発行などの三項目による案について協議された。

注意すべきなのは、民間伝承の会を中心とした日本民俗学の大事業を企画する際、「まづ木曜会としての態度」を決めることが必要であり、それを実際に決定したのは、この場合橋浦、大藤、倉田、関の四人であった。古稀記念會全体の進行を見ても、この四人は当時木曜会の中心メンバーであったことがわかる。

七月十五日、橋浦、大藤、倉田（関欠席）はまづ折口信夫を訪ね、記念活動への賛同を得た上で、柳田を説得する必要がある場合、折口の口添えを頼んだ。そこで折口によって地方大会は三ヶ所に限定せず、各地で啓蒙の講演会を開催し、中央から講師を派遣する意見が提出された。この日、実行委員の人選も提案され、さらに記念論文集の執筆予定者として二五人が追加された。その中で、北京のエーデル、周作人と銭稻孫、青森のビンケンスタイン、朝鮮の

秋葉隆などの外国人や国外在住者も見られたが、この段階で計画はまだ柳田に明かしていなかったことに留意する必要がある。

七月三〇日、橋浦、大藤、倉田、関の四人は初めて柳田国男を訪ねて計画を告げ、お祝い騒ぎを避けること、事業の先頭に立たないことを条件に柳田より快諾を得た。さらに柳田によって時局柄全国大会は困難で、東京大会も関東大会即ち地方大会の一つとする案が提示される。本章の冒頭でふれた『民間伝承』九一三の予告はこの時点でのものであったと思われる。

八月七日、橋浦、大藤、倉田、関の四人による「実行委員会準備小委員会」が開かれた。発起人の予選が行われ¹²、各地の自主活動によること、大政翼賛会の援助を受けることなどが議決された。民俗学大会は全国行政八地方協議会を基準とし、「以上の外に出来得れば新京に於ても開催の事」が決められた。

八月二二日、橋浦は前日に開かれた第一回実行委員会の結果を柳田に報告する。柳田より「新京へ若し講演隊かけることとなるやうならば、朝鮮、北京、台湾等も可能ならむか」と提案された。これより国外各地との交渉が始まる。そして柳田の提案で、実行委員に小山栄三、宮本常一、発起人に那須皓、和辻哲郎、橋本進吉が加えられた。

九月三日、橋浦は渋谷敬三宅を訪ね、発起人になる快諾を得た。

九月十二日の第二一四回木曜会が開かれ、橋浦、大藤、今野円輔、和歌森太郎、今井武志、遅れて堀一郎が参加したが、そこで橋浦は改めて事業の計画を報告した。

大体発起人を十六名、その他に実行委員会を決めました。来年の一月早々から全国八カ所で地方の民俗学会、その他に新京、北京、台北、および朝鮮で大会を開きたいと思っています。これについては、折口先生ら非常に熱心になっておられ、どんなことでも先頭に立ってやろうと、おっしゃっているくらいです。記念論文

集は四六倍版で五、六冊になる予定です。もし計画どおりいきますれば、日本の学界未曾有の盛事だと思えます⁽¹³⁾。

そしてこの場で『民間伝承』特輯号のテーマについて、柳田は「一月は『氏神』、盆は『祖霊』、どっかで『葬制』を入れなければならぬが、始めは景気のいい方がいいから（中略）二月は誕生（後略）」と提示したという。

九月十五日、橋浦泰雄は大政翼賛会を訪問し、厚生部副部長小田倉一⁽¹⁴⁾から実行委員就任、さらに小田の斡旋で同会実践局長藤井崇治から発起人となる承諾を得た。メモでは二人とも会を代表せず個人名義の参加となっているが、実際のちに各地民俗学大会は「大政翼賛会其他の提携援助を仰ぐ」と趣意書では明記されている。

九月二一日東京神田学士館において第一回発起人会が催され、発起人、実行委員として折口、洪沢をはじめ二二人が出席した。折口より「外国との共同民俗学大会には、むろんこちらからの講師のみを押しつけるのでは無く、相方より選出のつもりなり」と提案された。そして那須皓は「北京にての大会は周作人氏に連絡すること最も有効なり。実は先達で同氏に会談せし節、柳田先生招待のことを語りしに大いに賛成なりし故、同氏より当局に話あれば可能なり」と提言した⁽¹⁵⁾。梅原末治はそれを受けて、近く北京にいく際周と会い、その他新京、京城へも立ち寄り連絡を取ってくる意向を示している。

この会場で折口の添削で記念会の趣旨書が完成し、記念会計画のすべての内容が議決された。以上のような緻密な準備のもとで、計画の全体像は『民間伝承』九一四に登場したのである。

3 「内地以外に於ける民俗学大会」の背景

以上の経緯をみれば、古稀記念会計画の中では、最初から内地以外で民俗学大会を開催する発想があったのではない。まず東京での全国大会と三ヶ所（九州・近畿・東北）での地方大会が提案され、そして地方大会の開催地を

増やすという折口の意見、東京大会も地方大会として催すという柳田の指示を受け、全国八地方協議会を単位に開催することが決められた。この段階で、木曜会中心メンバーの提案によって初めて新京が民俗学大会の候補地として追加された。その後さらに柳田の意見で開催予定地が朝鮮、北京、台湾へと拡大され、最後に張家口が加えられたのである。

それでは、なぜこれらの地域が候補としてあげられたのか、或いはこれら地域における大会の担い手はどのように想定されていたのか。

■新京―大間知篤三、守随一

『満洲民族学会会報』の創刊は一九四三年五月であったが、その前から大間知篤三を媒介に満洲民族学会と民間伝承の会との間に個人レベルの連携は既に始まっていた。『民間伝承』九―一に三月から四月の間の入会者として満洲から満洲帝国協和会と個人十一名の名前があげられている。満洲民族学会会員名簿¹⁶と照合した結果、村岡重夫、金沢覚太郎、山根順太郎、大山彦一、千葉幸雄、神尾式春、須知善一の七名が一致している。そして満洲民族学会新京会員の中で帝国協和会からの会員が大学関係者や行政機関に次いで多いこと、新京以外の地域で多くの会員が所属する興農合作社が帝国協和会と深い関係を有すること¹⁷を考えれば、団体会員である満洲帝国協和会も、満洲民族学会との関係で民間伝承の会に入会した可能性が高い。この時点で、満洲での民間伝承の会会員数はすでに二〇名を超え、一九四三年二月付の「小規」¹⁸で決められた地方支部の設置基準を満たしている。

木曜会の成立当時、『民間伝承』の編集などに尽力した守随一、そして理論的にも活動的にも優れた能力の持ち主である大間知篤三、この二人の存在は、木曜会の中で満洲の重さを増したに違いない。そして大間知の積極的な活動のもとで、満洲では多くの民間伝承の会会員を獲得することができたことも、橋浦ら木曜会中心メンバーが地方民俗学大会を構想するとき、内地以外の開催候補地として、「満洲国」の首都である新京が最初に入った大きな

理由である。

■北京―直江広治

直江広治は北京に赴いた一九四一年七月以来、多くの書簡や通信を寄せ、北京での状況、とくに民俗学を中心とする学界の動きを報じ続けている。一九四三年一月まで『民間伝承』に通信を四通、柳田や橋浦に書簡を少なくとも四通寄せており、平均二ヶ月前後に一通という頻度であった。古稀記念会の計画が議論され始めた一九四三年六月二九日にも手紙で近状を報告している。

当地同好者の研究会も、次第に盛んになり、何か発表機関を持ちたいと思つて居りますが、雑誌の発行は困難な事情の下にあるので、東京の東峯書房から叢書の形で、支那の民俗紹介を致したいと計画を進めて居ります。

エーデル師監修の民俗学誌第二巻も目下印刷中ですが、出来上りましたらお送り致します。

そして『民間伝承』九一五（一九四三年十月）の「音信一束」では、直江は九月から輔仁大学で中国語による日本民俗学の講義が始まることと、学内雑誌『輔仁生活』に『昔話採集手帖』を翻訳して載せる計画を伝えている。

こうした積極的な研究会活動、そして日本民俗学普及の努力が、華北地方の中心地・北京が海外大会の有力候補地と見なされた大きな理由であろう。

■台北―金関丈夫と『民俗台湾』

台湾の民俗学活動に対する日本民俗学の注目は『民俗台湾』創刊以前からあった。

一九四一年三月の『民間伝承』では橋浦泰雄による黄氏鳳姿『七爺八爺』の新刊紹介が掲載されている。

著者はまだ公学校の六年生で、本年十四歳になつたばかりの少女であるが（中略）出生地である艋舺の民俗を極めてすんなりと採録したもので作作的な修飾があるわけでもなく、殊に自国人でなくては味読する事の出来難い感情感覚が溢れ出てゐて、我が日本民俗学の基本として掲げて居る一国民俗学の方法の将に適正である事が此の一少女によつてすらも立証せられて居ることは驚くばかりである。民俗それ自体についても、我国との連関上興味あるものも少なくない。

黄氏鳳姿は小学校時代から、担任先生である池田敏雄の指導を受け、艋舺で伝わつた民間説話を子供の純粹さをもつて記録し続けた台湾少女であるが、ここで橋浦は彼女を「一国民俗学」の可能性を証明した者として、最大の賛辞を送っている。

日本民俗学大会の台湾で担い手として想定されたのはこの後、まもなく登場した金関丈夫（台北帝国大学医学部解剖学教室教授）、池田敏雄（総督府情報部）を中心とした半学術的な月刊誌『民俗台湾』グループであった。

『民俗台湾』は一九四一年七月に創刊し、一九四五年一月まで計四三号を発行され、毎号、民俗資料の採集記録、民俗研究の論文・随筆、質疑問答、文献紹介、書評などからなり、分野は民俗に限定せず、民族、考古、地理、歴史、自然など広くわたっている。雑誌は主として「本島人」つまり日本の植民地になる前に福建、広東から渡つてきて台湾人口の多数を占める漢族の民俗事象を対象としている。日本人執筆者は台北帝大などの学者をはじめ版画家、写真家、詩人などがおり、当時日本が推し進めていた皇民化運動によって消滅しつつあつた台湾の民俗を書き残そうという意図が強かつた。

『民俗台湾』の執筆者には台湾人は約三分の一を占め、特に知識人や若者からの寄稿が多かつた。当時内地以外

において『民俗台湾』の存在はこの分野に関心ある各地の知識人の憧れの的でもあったようだ¹⁹⁾。

主宰者金関は台湾を超える「東亜民俗学」の積極的な提唱者であった。彼は『民俗台湾』二一七（一九四二年七月）では柳田国男の『方言覚書』の書評で「阿也都古」を例に、単なる民間の風習ではなく、宮廷の儀式を見ると、「やはり支那大陸の風習と関聯があるものではあるまいか」と述べ、「柳田先生の一国民俗学の立場は筆者もまた十分に尊重し、理解してゐるつもりであるが、然しその他に、東亜民俗学と云ふやうなものの立場を固める必要がありはしまいか。そしてその必要は現下の時局からして益々痛感され、筆者の如き単純な者には、その機運さへ到来してゐるのではないかと考へられるのである。台湾に将来興るべき民俗学が、この部門に貢献し得ないとは考へられないのである」と「東亜民俗学」の必要を説き、台湾の民俗学がその一部として発展すべきであると主張している。

下つて『民俗台湾』二一〇（一九四二年十月）で彼は「T・K」の署名で以下の編輯後記を記している。

大東亜省設立の報道に接して「東亜は一つだ」と云われわれの信念が、益々ゆるぎなきものになつた気がする。今更云ふ迄もないが、台湾の民俗を研究することは、単に台湾のみに終始する問題ではない。台湾の民俗を研究することによつてわれわれは大東亜民族学（大東亜民族学）の完遂に一役を果たすことが出来るのである。（中略）大東亜の盟主たるわれわれ日本人は台湾民俗どころではない。支那民俗、南洋民俗、印度、濠州の民俗、あらゆる共栄圏内の民俗を闡明すべき必要と義務とに直面してゐるのである（四八頁）。

一方『民俗台湾』は『民間伝承』に寄贈されていたし、柳田もまた台湾の民俗学の動向に目をつけていた。一九四三年春、金関は柳田から前年末に出版された『小さき者の声』と『日本の祭』が贈られ、その礼状で「御著書は御出版の毎に缺かさず購読致して居りますので、此度賜りました御著はいづれも重複所持致すことになりましたが

いづれ最も有効に活用致す所存でございます」と述べ、返礼として自分の近著『胡人の匂ひ』（東都書籍株式会社台北支店、一九四三年三月）を贈呈した²⁰。植民地台湾の行政・学術中心である台北が内地以外の民俗学大会の開催地として計画に現れたのは、柳田の行動でこれまで付合いがなかった金関との交流が始まったことを背景としている。

■京城―『朝鮮民俗』

一九三二年、日本人と朝鮮人による「朝鮮民俗学会」が組織され、一九三三年一月宋錫夏を発行者として機関誌『朝鮮民俗』が創刊され、一九三四年五月に第二号が刊行されたが、その後活発な活動を見せなかった。一九四〇年十月に「今村鞆翁古稀記念号」としてようやく第三号が発行され、当時の会員は赤松智城、秋葉隆、村山智順、任哲宰、孫晋泰などがいた。柳田の「学問と民族結合」という寄稿は、おそらく発行者の任にあった秋葉の求めに応じてのものであろう。

そこで柳田は「朝鮮半島にも今までの調査の周到なる記録を留め、その要領を一目で見渡して、後々人が無益な重複の為に、時と精力とを徒費することの無いやうに、さうして又外部の誰にでも簡単に知ることが出来るやうに、計画せられてはどうかと思ひます」²¹と勧めており、日本民俗語彙集の作成を引き合いに出している。

一九四〇年時点では、まだ慎重であった論調は、国外民俗大会が決まった後、一九四三年九月の『文芸春秋』座談会（柳田国男、浅野晃、橋浦泰雄「民間伝承について」²²）になると、朝鮮の民俗についての系統的な整理より、その他の地域にもすぐ応用できるような、民俗事象の内実をはっきり伝えられる表現法の模索が問題となっており、そこに実践への展望や期待があった。

その後、朝鮮民俗学会との提携はうまくいかなかったようである。実際、古稀記念会事業の初期から、柳田国男と橋浦泰雄の間には、朝鮮での大会開催についての見通しが違っていた。それは前記『民俗台湾』座談会から垣間

見ることができる。

座談会で柳田は『民俗台湾』と並んで「朝鮮も同じこと」で『朝鮮民俗』という雑誌があつたし、蒙疆にもおそろく遠からず出来るでありましようし、満洲にも出来かかつておりますし、北京にも日本字で書いたものが出るだろう」と、各地の民俗雑誌の刊行状況にふれているが、ここであげられた地名は古稀記念会の国外大会の予定地と一致している。

別の所で柳田は「ちようど来年は橋浦君などが発頭人で各地で大会をやるということを考えておつたんです。少くも京城と台湾と新京、うまく行けば北京迄は此方から二三人行かれるように」と述べている。

しかし、それに対して橋浦は大会について「可能の問題なり共通の問題を予め選定して、その結果を例えば満洲、北京、台湾といった所で、お互に発表することが出来れば、大変有効で愉快だと思ひます」と提言している。実際、この発言を受けて、「国際共同研究課題」が設定されるようになったが、ここでは注意すべきなのは、橋浦は朝鮮に関してふれていないというところである。柳田は終始朝鮮を先頭に置いていることを念頭に置けば、橋浦の発言は単なる言い忘れではなく、あげられた地域とその順番を含め、独自の理由が考えられる。

国外大会最初の予定地は満洲であり、守随、大間知の存在が重要な要素の一つであつた。そして、年齢や木曜会での威信などにおいてやや劣るが、北京で活躍を見せている直江広治である。次に民間伝承の会の会員でもあり、『民俗台湾』をよく寄贈し、柳田との間に直接の連絡のある金関丈夫であつた。即ち、各地の民俗学団体の主幹と柳田や民間伝承の会との直接の関連が念頭に置かれていられると思われる。実際、橋浦による「古稀覚書」の中で、連絡が取れたと明確に記述しているのも満洲、北京、台湾の三ヶ所だけであつた。ここで図らずも当時の日本の民俗学と中国との関わりの大きさが鮮明に浮かんできた。

■張家口―石田英一郎・岡部理

二つの座談会での議論を見る限り、当時蒙古自治邦政府（一九四一年八月以降）の所在地張家口での大会開催の可能性については柳田も橋浦も積極的な見通しを持っていなかったようである。

張家口が候補地となった経緯は不明であった。九月十二日木曜会時点ではまだふれられておらず、それ以降、二日以前の間で追加された可能性が高い。追加された理由としてまず石田英一郎との関連が考えられる。

歴史が短いものの、今西錦司、石田英一郎、梅棹忠夫、中尾佐助、藤枝晃など戦後学界において重要な役割を果たした研究者が多数在籍した「まぼろしの研究所」である⁽²³⁾蒙古善隣協会西北研究所が張家口に正式に設立されるには、翌年の一月まで待たなければならぬが、一九四三年八月二〇日に、石田の蒙疆赴任が既に内定していた⁽²⁴⁾。下って一九四四年十月、直江は張家口での開催可能について石田と連絡していることを橋浦に報告している⁽²⁵⁾。しかし、青年時代のマルクス主義との関連により、石田は張家口でも監視を受ける立場にあった⁽²⁶⁾ので、組織的な活動を展開できる環境にはなかったと思われる。

もう一つ考えられるのが岡部理という人物である。新京民俗学同好会の中心組織者であった岡部理は一九四三年七月当時、既に蒙古自治邦政府総務庁計画課長という職に就いていた⁽²⁷⁾。大間知篤三は一九四三年七月四日付橋浦宛の書簡で、岡部は民俗学の造詣が深く、柳田の熱心なる崇拜者でもあり、もつとも活動的な民俗学をする人物であることを理由に、民間伝承の会会員として推薦するとともに、最初から世話人とすることを依頼している⁽²⁸⁾。それを受けて、古稀記念会の計画を載せた『民間伝承』九―四においては、七月以降の入会者として「岡部理」の名前が見え、蒙古から最初で最後の入会者でもあった。なお、一九四五年一月会規改定した時、岡部は、大間知、直江、金関と並んで民間伝承の会の評議員になっているところを見れば、蒙古での岡部の活躍が期待されていたことがわかる。

■太田陸郎への思い

興味深いのは、柳田が太田陸郎の遺著『支那習俗』への序文を執筆したのは一九四三年九月であった。古稀記念会の計画が既に固まり、国外民俗学大会は実行に向かつて着々準備されていた。

「此書が日本の民俗学の学徒によつて専心に書き綴られた」ものであると、太田の遺著を高く評価し、日本民俗学との関係で位置づけるとき、柳田はこれから台湾、満洲、北京、蒙古などの地に展開されていく「比較民俗学」を意識しているのであろう。或いはこれから内地以外の地域に展開される「比較民俗学」を意識しているからこそ、太田の遺著を日本民俗学との関係で高く評価してやまなかったかもしれない。

序文の最後では、柳田はかつて太田が武漢から送ってきたケンボナシの種が自分の庭に大きく成長していると述べ、こう結んでいる。

遺児が成長して父の跡を歩む日が来たならば、必ず一たびはこの小園に訪れ来り、東亜空前の大戦役のさなかに、心あつて中国の土から移して来たものが、どれだけ大きな立派なものになつて居るかを見ることであらう。その児もこの小さな著述も、共に太田君の予期した如く、末遠い人間文化の進路に於て、木高き一つの目標とならんことを、私は切に望んで居る。

ここの「東亜空前の大戦役のさなかに、心あつて中国の土から移して来たもの」は決してケンボナシの種だけを言っているのではなく、「末遠い人間文化の進路に於て、木高き一つの目標とならんこと」も、また太田の遺著にだけ寄った希望ではなかったであろう。太田によつて先駆的に試みられた内地以外の地域に対する民俗学的研究には、日本民俗学が組織的に関与していくことになったからである。

4 講演会から「国際共同研究」の場合

計画が公表された当時、内地以外の民俗学大会の内容は国内の各地大会と同じく、現地で啓蒙的な民俗学講演会を催し、東京の中央部から講師隊を組織し、出張して講演を行うというイメージであった。

一九四四年一月付の『民間伝承』は九一九であるはずの号数を一〇一一に改め、氏神特集号として刊行され、古稀記念会は正式に実施段階に入った。

巻頭言「柳田先生古稀記念会の出発にあたり会員各位に檄す」では、以下のように日本民俗学の時代的意味を説いている。

由来日本民俗学は日本文化の本質を究め、諸他の文化諸科学の正常なる日本的成長に寄与することが、大きな任務の一つであります。その探求の途次に於て当然集積せらるる我が祖先等の豊富なる生活経験は、又直ちに以て今日の我々の生活を利するものが至つて多大であります。従つてこれが探求は大戦下の今日に於ても極めて緊要であります。殊に大東亜圏の益々拡大する向後に於ては、層一層緊要の度を増すこと明白であります。それはただに自国文化の利害の問題のみにとどまらず、自国文化の確把なくして、他国文化の指導は期し得べくもないからであります。

この文章は「親愛なる全国二千余の同学諸兄姉」を対象にしているものであり、大東亜圏の拡大を意識しながら、あくまで自国文化の把握を強調する内容であった。対外的提携の主張は同号に掲載される「国際共同研究課題の提案」に譲っている。

当記念会では、かねて内地外の諸民俗学会と、提携連絡ののための民俗学大会を開催すべく準備を進めて居りま

すが、大戦の進行と共に大東亜圏内の諸民族が、今後一層緊密な協同団結をかためて行くことの必要を痛感すると同時に、それには是非相互の民族性を熟知し、互に齟齬を来たさぬことが重要であります故、まづその調査研究の第一着手として左記の三項目を選び、これを共同の研究課題とし、その成果を大会に於て発表交換することを、国外諸学会に提案しました。

「大東亜圏内の諸民族」の「協同団結」に寄与すべく、「内地外の諸民俗学会」との提携が唱えられており、国外大会はそのための「調査研究の第一着手」であると位置づけられている。ここにいたって国外民俗学大会は、もはや各地地方大会のように啓蒙的な講習や個々の主題についての講演会ではなく、「共同の研究課題」について「調査研究」の「成果」を「発表交換」する場となっている。

「提案」はこれ以降も一〇一三、一〇一四、一〇一五、一〇一六に登場し、当時の日本民俗学会のままならぬ意欲を示している。

共同課題を提示し、全国各地の会員から報告を求めるのが、柳田国男の研究法の一つである。これは、該当内容の事実を広範囲にわたって集める能率的な資料収集法だけではなく、同時に地方にいる研究者、愛好者の関心やエネルギーを、選定された大きなテーマに集中させる研究指導法でもある。

共同課題による『民間伝承』特集号の発行は古稀記念会の最初からの事業内容の一つであった。柳田は七月三日初めて計画を知り条件付で承諾したとき、『民間伝承』の特輯（連続）はやり方によつては或は好成績を収め得べくよい案を得られたし」との意見を述べていた。さらに九月十二日の木曜会では、六月二六日時点で「数号に亘り」発行すると漠然に考えられていた特集号は、柳田によつて十二ヶ月のテーマが提示され、一年間連続発行という形となった。

特集号の発行は一九四四年一月からであった（表25参照）が、それに先立って『民間伝承』九一五（一九四三年十

表25 柳田国男先生古稀記念会『民間伝承』特集号一覧

予定月	主題	締切	細目	発表号数
1月	氏神	11月20日	1 神名・社号 2 神地・祀所 3 祀る人 4 祭日 5 宮詣り 6 由来	10-1
2月	誕生	12月20日	1 妊娠の認知 2 ハラオビ 3 ウブヤ 4 ウブガ ミ 5 ウブメシ 6 ウブギ 7 乳合せ 8 初外出 9 氏子入り	10-2
3月	生死観	1月20日	1 生死の予測 2 魂の行衛 3 神として祀るか 4 再生の問題 5 仮死状態から蘇生した者の話 6 生と死の忌	10-3
4月	錬成と遊技	3月10日	1 錬成の目的 2 錬成の方法 3 錬成の種類 4 一人前の標準 5 成年式 6 晴の遊技 7 穢の遊 技	10-4
5月	生産方式	3月30日	1 篤農の家風 2 労力移動 3 開墾 4 休日	10-5
6月	家	4月20日	1 同族 2 相続 3 家の祭 4 家族 5 分家・隠 居 6 家長権	10-6
7月	社交と協力	5月20日	1 結合の相異（同村内に於ける同一血族と姻戚 と一般村民） 2 新移住者 3 滞在者 4 旅人	10-7・8
8月	祖霊	6月20日	1 盆の準備 2 祖霊の迎送 3 新精霊 4 盆棚 5 盆小屋 6 盆と神々 7 盆と家族	10-7・8
9月	家庭教育	7月20日	1 躰の眼目 2 躰と年齢 3 躰と性 4 躰と身分 5 躰の機会 6 躰の分担 7 躰の種類 8 躰の場 所 9 躰と口承	11-1
10月	お祭	8月20日	1 祭日 2 神迎 3 神役 4 頭屋 5 宮座 6 神幸 式 7 参籠 8 神饌 9 芸能	なし
11月	予覚と前兆	9月20日	1 吉兆 2 凶兆 3 顕示 4 預言者 5 一般予覚	なし
12月	婚姻	10月20日	1 婚約 2 婿入り 3 中宿 4 入家式 5 親取り 6 村人の承認 7 若者宿 8 通婚区域 9 婿いぢ め 10 杓子渡し 11 離婚 12 女の日	11-3再調 査で特集

出典：『民間伝承』各号より作成。

月)、一〇一(一九四四年一月)と一〇二(一九四四年二月)の三回に分けてテーマの趣旨が具体的に説明されている。そして寄稿については三千字以内、「名詞其他資料となる言葉はすべて村での発音通りに記載されたし」と規定しており、民俗語彙が重視されている。

これらのテーマは「現時局下に最も必要とする主題」であるという。その意味は、『民間伝承』九一五の説明によると、以下のようである。

是等の諸問題は、現下世界の諸民族、特に東亜の諸民族に対し、指導の地位に立つ我日本民族の、民族精神・理念、を具体的に明確

し確化するに不可分の問題であつて、將に今後我が民族によつて創建されねばならぬ、世界の新指標としての哲学・科学の如きも、実にかかる基礎的な探求なくしては、砂上の樓閣を描くに等しいと云わねばならぬ。

日本人らしき、日本人の美質を明らかにすることは一九三〇年代以来、「一国民俗学」の目標の一つとされているが、しかしここでは、「世界の諸民族、特に東亜の諸民族に対し、指導の地位に立つ我日本民族の民族精神・理念を具体的に明徴し確化する」ことに論理がすりかえられている。満洲にいる大間知もそうであるが、日本の民俗学はこの「指導の地位」に対してなんら疑問を持たなかつた。国外民俗学大会の地域はまさにこの「東亜の諸民族」を意識してのものであつた。それらの民族との「緊密な協同団結」に寄与するために新たに作成されたのが「国際共同研究課題」であつた。具体的なテーマは以下のものである。

一 異境人に対する款（歓）待

一 款（歓）待の有無 外来者を款（歓）待するか。外来者を尊敬したり、恐れたり、蔑視したりするか。

二 款（歓）待の方法 外来者を如何に接待するか。入村、送別の場合の挨拶作法。（接待者、食物、贈物など特定のものがあるか）

三 外来者と禁忌 外来者を拒否する場合があるか。外来者に対する禁忌があるか。外来者在村中の行動に対する禁制があるか。

四 警戒報知 外来者入村の場合に於ける報知及び警戒の方法。

五 外来者の種類 外来者の身分、職業、性別などによつて以上の各項は異なるか。異人種の場合是如何。

二 祖先に対する考へ方

一 靈魂 死後魂は何処へ行くと考えられているか。靈魂の他界に於ける生活。魂と神とは異なるか。

二 先祖祭 祖霊を祀るか。いつ誰が祀るか。祀る人のない霊に対してどう考えているか。
三 霊との交通 祖霊と子孫との交通が認められているか。祖霊が人界を訪ねる日があるか。それをどんな風に迎えるか。

四 霊の知らせ 祖霊が子孫を守護してくれる信仰があるか。禍などに対して警告することがあるか。
五 再生 祖霊が再びこの世へ生まれ変わるといふ信仰があるか。

三 結婚道徳

一 通婚範囲 同一血族間或は異(血)族間の結婚に禁則禁忌等があるか。他村人或は異人種との結婚は如何。
二 代償 結婚するのに代償は必要か。何を何処へ払うか。

三 夫・婦の数 一夫一婦・一夫多妻・一婦多夫いづれを標準とするか。群と群との結婚があるか。之等のうち異例の場合は如何なる觀念によるものか。

四 結婚前の禁忌 結婚の前後に特に守らねばならぬ禁忌、事柄があるか。

五 私生児 私生児も家族内或いは村内に於ける地位待遇。

六 離婚 離婚の主なる原因、離婚時の処置作法。離婚者は再婚し得るか。

「異境人に対する款(歎)待」、「祖先に対する考へ方」、「結婚道徳」の三つはあげられている。特にこの中で異境人の問題は、国内向けの課題にはなかつた項目であるが、自国外の土地を戦場とするとき、最初にぶつかる問題である。同じ文脈で考えれば、祖先意識は民族統合に関する核心的な問題であり、結婚は植民地・占領地化後の現実問題として理解することが可能である。意識しているかどうかは別にして、これらの「研究課題」は当時の政治的状况において、決して学問上の意味に止まらず、冒頭に掲げられた趣旨と呼応して「大東亜圏内の諸民族」の「協同団結」に寄与するための、現実的なものであった。

「国際共同研究課題」の提出に従い、一九四三年時点の「内地以外に於ける民俗学大会」に代わって「国際大会」という呼称が定着した。これら国外での大会に、内地での地方大会、そして共同研究課題という二つの項目に相当する内容を持つている。さらに開催候補地の有力研究者も同時に記念論文集の執筆予定者に加えられていることを考えれば、内地以外の地域は形式上、記念会事業四項目のうちの一項目にしか現れていなかったが、実際、一九四四年に入ってから構造的には隠然と内地と並列することができるようになったといえる。

2 北京大会の準備と挫折

周知のように、古稀記念会に計画された国外での民俗大会は結果的に実行できなかった。しかし戦争末期という時期の影響以外、その理由をめぐって①そもそも柳田を中心とした日本民俗学には実践の意欲はあまりなかった、②東アジア範囲の比較のための理論が未完成であった、③理論的に試みも見られたが開催地に浸透できなかったなど、種々の理解が見られる。以下、大会組織という実践の側面と、理論構築という方法の側面に分けてそれぞれ事実を辿り整理することによってこの問題を検討する。

全体の計画案が公表された後の一九四三年十月、橋浦泰雄は『民間伝承』九一五号の編輯後記で「柳田先生記念会の計画が一度伝わるや各地の同志から続々と激励の報が齎され台湾・北京ともに既に連絡が取れました。中央でも緊張し切っています」と進展が報告された。

国外大会の開催予定地として五ヶ所があげられていたが、『民間伝承』の誌面で進展状況が報告されたのは台湾と北京の二ヶ所だけであり、なかでも北京大会は直江の積極的な活動と北京の有力組織の支持によって最も着実に準備されていた。それに関連する情報が頻繁に『民間伝承』に登場し、北京大会は国外大会の代表的な存在として注目を集めていた。

九月一日付書簡で橋浦泰雄は直江広治に事業の概略を知らせ、協力を求め、十月二日に再び葉書を出して進展状況を確認している。北京ではその要請に依えて、十月三日に東方民俗研究会の発会式と第一回講演会が催され、その後、「東方民俗研究会一覽」(以下「研究会一覽」と記す)が民間伝承の会に送付された。「中華民国及東亞諸民族ノ言語・風俗・習慣・信仰等ノ科学的研究ノ發達ニ資スルヲ以テ目的トス」⁽²⁹⁾という研究会の趣旨は、古稀記念会への呼応、日本民俗学との提携を視野に入れているといえる。

それについて『民間伝承』九一六・七合併号では以下のように報じている。

本年七月に会は成立してゐたが、発会式は十月三日北京に於て催され、周作人氏の挨拶、橋川時雄氏の講演、中国の人形芝居等があつて甚だ盛会であつた。尚同会の顧問として周作人、坂本龍起、永井潜、柳田国男、折口信夫の五氏が当られ、月刊「東方民俗」を機関誌として発行される計画である。会費其他所用の方は事務所北京市東昌胡同一号東方文化総委会の同会内へ照会されるがよい。

そして『民間伝承』九一八号ではふたたび「北京 東方民俗研究会の成立」という長文が載せられた。「今からほぼ三四年も前から一部の有志によつて組織され、埋もれながらも真摯な調査研究を積んでゐた民風会といふのが遂に時を得て世間に出たものである」と同研究会が民風会の発展であることを断り、発会式の様子を詳しく伝えてゐる。場所は南池子の東華会館で、周作人をはじめ日中の学会や官界の名士が多数参加し「座するに椅子なしといふ盛況」だったという⁽³⁰⁾。会の活動については毎月一回の研究報告会のほか、北京松坂屋での民俗展覽会や周作人、折口信夫監修の叢書出版も準備中であるという。東京方面の事務は沢田瑞穂が連絡に当たることも説明されている。

会の事務所が所在する「東方文化総委会」は「東方文化事業総委員会」のことである(図18)。一九二三年に中

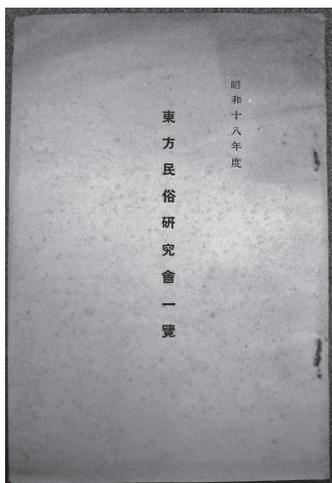


図 19 「東方民俗研究会一覽」
(1943年10月)表紙

出典：『橋浦泰雄関係文書』所収、成城
大学民俗学研究所蔵。

前出「研究会一覽」(図19)によれば、成立当時、東方民俗研究会は五五名の会員を有し、全員はすべて日本人であった。会長は当時北京大使館の一等書記官である別所孝太郎、幹事長は橋川時雄、幹事は多田貞一(北京医学学院)、直江広治、沢田瑞穂(国学院大学)、井上太郎(華北興亜翼賛会本部)、原田正己(華北産業科学研究所)、吉岡義豊(真言宗在支研究員)の六人である。会員の所属をみれば北京大学関係が最も多い九名、次いで北

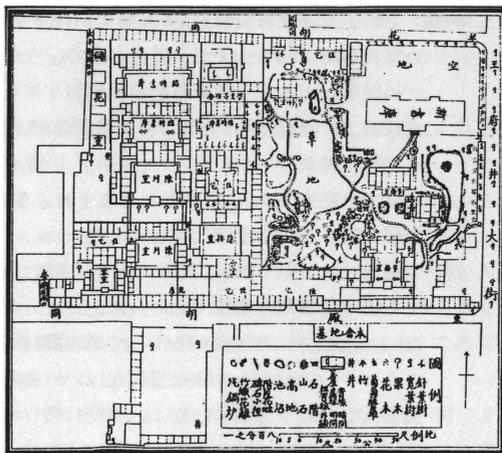


図 18 東方文化事業総委員会平面図

出典：『橋川時雄氏インタビュー記録』1981年、79頁。

国側の要請や欧米への対抗意識の下で、義和団賠償金を基礎とした「対支文化事業特別会計法」が制定・公布され、それに基つき、外務省対支事務局(後、同文化事業部、同東亜局、興亜院、大東亜省など)の管轄下で各種の「対支文化事業」が行われていた⁽³¹⁾。日中両国共同による学術研究事業、具体的には北京人文科学研究所・図書館及び上海自然科学研究所の設立と運営を管理する機関として東方文化事業総委員会が一九二五年に組織された。北京での主な仕事は統修四庫全書提要の編纂であり、その推進者は瀬川浅之進(一九二五—一九三三年、総務委員)と橋川時雄(一九三二—一九四五年、総務委員署理)であった。橋川は東方民俗研究会の幹事長である関係で、同会の事務所は東方文化事業総委員会の敷地内に設置されたと推察できる。

京大使館八名、華北交通株式会社四名、輔仁大学と満鉄調査部各三名、新民学院と華北事情案内所各二名と続き、その他の多くは北京の大学や研究所の面々であった。興味深いのは「東方民俗」に対応するかのように、当研究会は朝鮮から京城大学の藤本隆、満洲から建国大学の大間知篤三、日本内地から広島文理大学の今堀誠二、東京農業更生会の早川孝太郎、アチック・ミューゼアムの染木照、国学院大学の沢田瑞穂、藤村憲一郎、藤野岩友、民間伝承の会の関敬吾など、華北以外の地域からの会員も数多く見られる。

十月十二日の書簡で、直江は「当地での民俗学大会は今からもう皆様のお出をお待ちして居ります。なるだけ大勢で御越し下さる事をお待ちして居ります。お宿の方は当方で準備致して置きますから御心配なく」と北京大会に対する現地の大歓迎の雰囲気を伝えている。

同便で橋川時雄と吉岡義豊の民間伝承の会への入会を紹介している。さらにエーデルと相談した上で、月号柳田に寄贈している輔仁大学の『民俗学誌』で柳田記念特集を計画していることを伝え、柳田の写真、履歴、著作年表について橋浦泰雄の協力を求めている。

一九四四年に刊行されたこの記念特集（『民俗学誌』三一〇）は書齋で読書している柳田の写真と柳田への献辞を巻頭に飾り、全一五五頁の中でドイツ語に訳された「柳田国男…日本民俗学—起源・発展と現状」（序章でふれた一九四二年『学術の日本』に掲載された「日本民俗学」の全訳）が七六頁を占め、その他日本に関する論文が二本収録されている。『炭焼日記』の一九四五年三月三日条では、柳田は「北京よりの『民俗学誌』とどく。大藤君の書いた日本民俗学史の全訳の、エデル氏訳」と記している。

台湾は北京と同じく国外大会の開催予定地であり、『民俗台湾』の主宰金関丈夫は民間伝承の会の同期会員でもある。そしてかつて『民間伝承』で金関の論文を紹介したこともあるから、直江は『民俗台湾』との提携には積極的であった。

『民俗台湾』三一〇（一九四三年十月）の「編輯後記」では「又北京の輔仁大学日文系研究室よりも本誌に対し

て連絡を求めて来た」と伝え、三一一一では次号の主要目次として直江の「北支民俗通信」を予告している。

『民俗台湾』三一一二では、柳田邸で行われた『民俗台湾』座談会の記録を巻頭に、前年創刊した輔仁大学『民俗学誌』の紹介記事や直江の「北支民俗通信―宛平県河北村紀行」などで古稀記念会一色であった。直江は文章の中で南蛮子採宝譚を取り上げ、「台湾にもこれと同じタイプの話が残っていないであろうか」と台湾の事例を求めている。それに対して同号の編輯後記では「本号には北京より直江氏が稿を寄せられた。大東亜民俗学の提携に寄与せんとする本誌の使命の一端を果たし得たことを喜ぶ」と述べている。同月、直江は『ひだびと』にも「北京東郊民俗聞書」を寄せており³²、各地の連携のために積極的に動き出している。

十二月二日に直江は周作人、錢稻孫、エーデル、橋川時雄の柳田古稀記念文章は翻訳の関係で遅れ、一月末に届く予定を報告し、「当地で民俗学大会開催の件、当地の会員一同心待ちにして居ります。時期は何時でも、御地の皆様の御都合の良い時で結構ですが、九月頃ならば、北京は素晴らしい秋に入る時で、旅行も一番楽かと存じます」と大会開催の時期について打診している。滞在費は橋川と相談した結果、東方民俗研究会が全額を負担することとなり、会の基金千円以外、さらに千円捻出できよう計画されていることも伝えられている。

同便では、直江はさらに柳田国男古稀記念のために計画された「東方民俗叢書」の出版幹旋を橋浦に求めている。一九四四年に橋川時雄『へそくり』、吉岡義豊『呂祖信仰』、原田正己『河図洛書緯』についての一考察³³、多田貞一『大道芸人の隠語』、山本斌『河北省順義の民間伝承』、宮川貢『東オチト旗の伝承』、直江広治『南蛮子採宝譚』などの十数冊を出版し、印税を研究会の基金に繰り入れる予定であるという。

叢書の出版はのち新民印書館と決定した。新民印書館は曹汝霖を理事長に一九三八年八月に創立されたもので、周作人のもとで手伝いをしていた安藤更生が編集に当たった³³。新民印書館の月刊誌『月刊毎日』は東方民俗研究会の輪番発表の場でもあった。叢書は、第一冊多田貞一『北京地名誌』³⁴、第二冊吉岡義豊『白雲觀の道教』が刊行された後、三冊目沢田瑞穂編『蟠桃宮廟市』が上梓する直前に終戦を迎えた³⁵。

一九四四年一月、古稀記念会事業は正式に始まったが、同月の『民間伝承』一〇―一「民俗学大会」の項では「国外では北京で東方民俗研究会が主催と決定したが、日支両当局の支援が与えられるようである。台北でも交通事情の許す限り開催の予定で準備されて居る。国外の大会は別紙国際共同課題があるので、時季は秋になることと思える」と伝えている。

「日支両局」と称しながらも、実際の共同主催は「東方民俗研究会」「北京文化協会」「翼賛会北京支部」と、すべて日本側の組織であることは、下って七月三日付の直江の書簡からわかる。同便では「特に『北京文化協会』では非常に乗気で、北京だけでなく、済南、青島でも講演会を開いて戴きたいと申して居ります（この場合は研究交換といふよりも、寧ろ在留邦人への啓蒙的講演といふ事になると思ひますが、青島には日本人の小さな民俗研究会がある事を聞いて居ります）。交通費、滞在費は一切文化協会に負担」することも伝えられており、想定する参加者は日本人だけであった。

北京文化協会は、日本政府による文化工作の機関であった。当時の会長は、柳田、折口と並んで東方民俗研究会顧問の一人である坂本龍起であった。坂本は外務省の出身で、アルゼンチン公使（一九二五年）、廈門領事（一九二八年）、外務省通商局第三課長（一九三二年）、台湾総督官房外事課長（一九三七年）、ペルー公使（一九四〇年）³⁶、興亜院華北連絡部の文化局長など歴任した。北京文化協会の強力な支持を受けて準備は順調に進んでおり、民間伝承の会側が招聘される形で、交通費や北京での滞在費が全額負担されることになる。

これをうけて橋浦による『民間伝承』一〇―五の後記では「北地の国際大会もいよいよ此の十月上旬には実現の手筈が整い、続いて済南、青島等でも集會が持たれる筈です」と大会拡大案に乗じる意向が示されている。尚、この号の新入会員には「和田憲夫・華北総合調査研究所・橋川時雄・吉岡義豊・鳥居龍蔵」³⁷など東方民俗研究会を中心とした北京関係者が多く見られる。

十月十二日に直江は橋浦に招請状と渡支証明書を送付した。同便によって北京大会の決定案を以下のように整理

することができる。

名称…「日本民俗学講座」

主催…東方民俗研究会、興亜翼賛会北京支部、北京文化協会、皇典講究所華北総署

期間…十一月十日（金）～十二日（日）三日間（遅延の場合十七日～十九日）

場所…協和医院講堂（旧ロックフェラー医院）

形式…講習会の形式。毎日午後開催、毎日講師二名（講師一名は二日間講演）

現地講師…一名、エーデル予定。

開会の辞…周作人

閉会の辞…橋川時雄

現地交流会…①十一日午前中か夜、東方民俗研究会メンバーとの「研究交換」

②十二日午前中、中国側研究者との「意見交換」

予算…一万円

交通手段…北京華北事情案内所所長石原巖徹（研究会会員）の斡旋で折口信夫には華北交通会社東京支社より列

車のパスが出るが、交渉次第三人分貰える可能性がある。

旅費…往路は折口信夫は一等旅費、他の二名は二等旅費。復路は全部一等旅費。

滞在期間…北京では一週間、延長可能。

他の都市での講演…天津、濟南、青島が予定されているが、費用は華北興亜翼賛会、華北文化協会が負担。

北京では「日本民俗学講座」という名称を掲げることが啓蒙的な意味が含まれているが、皇典講究所華北総署の

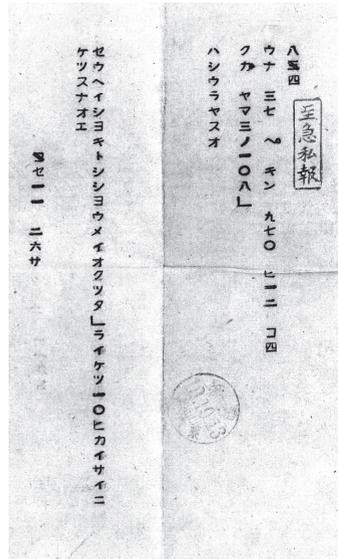


図20 直江広治より橋浦泰雄宛
北京大会日程決定及び所要書
類送付済を知らせる電報 (19
44年10月13日)

出典：「直江広治書簡」所収。

つ唯一の中国人でもあった。十二日に中国側の研究者との座談を予定しているが、北京の日本人研究者の場合の「研究交換」ではなく「意見交換」であった。その具体像は不明であるが、中国側との共同研究という姿勢は、少なくともこの計画から読み取れない。なお、開催地は済南、青島以外、天津も追加され、華北地域の大都市を網羅する形となった。

占領地の当局の支持を得ながら、北京大会の準備は完璧といえる。十月十三日、直江は北京大会の日程が決定されたこと、中国旅行に必要な書類を送付したことを知らせる電報を橋浦に送った(図20)。『民間伝承』一〇一六(十月)では、日本国内の状況として『ひだびと』の廃刊、用紙難の障壁による記念論文集出版の停滞、旅行制限や食料事情などによる大地区地方大会開催の困難などが伝えられた中、「いよいよ十一月中旬に迫」る北京大会は日本民俗学にとって貴重な明るみであった。

しかし、その後、日本側に変化があった。『炭焼日記』では以下のように記されている。

十月二〇日 「橋浦君来、北京行きの話又かはる。折口君一人飛行機、関・橋浦の二君は汽車で行かうかといふ

話、平山は故障出来たりと告げ来る由、此頃の交通状態まことに心もとなし。」⁽³⁸⁾

十月二四日「橋浦・大藤二君来る。支那行きのこと、雑誌のことなど話す。」

十月二六日「夕方関君来る、北京より招請状来り、やはり行くことに三人決定したとの話なり。」

十一月十七日「折口君来、北京行き延期した挨拶なり。」

事実戦前の最終号である『民間伝承』一〇一七・八（実際一九四四年末発行）では「北京大会の準備は日支双方とも全部整つたでしたが、派遣員の病気による交通難の為め残念ながら明年四月まで延期せざるを得なくなりまして」、そして「記念事業全体を矢張り新年度前半期へと持越さねばならぬ」ということが伝えられている。

「派遣員の病気による交通難」とは折口の飛行機手配の件であった。「折口信夫年譜」には「一九四四年十月頃、折口を引率者にした民間伝承の会主催の北支・満洲における民俗学講習会の計画が橋浦泰雄を中心に進められたが、実施直前に飛行機の手配が整わず中止となる」とある。しかし、満洲は当時すでに計画外であり、北京の大会も民間伝承の会が主催者ではなかった。そしてこの時点では正確にまだ中止ではなく、延期であった。一九四五年一月六日付書簡では、直江は計画再開のための連絡を行っている。

先便で申上げました通り民俗学大会は四月中頃に延期再開したいと思ひます。時局の関係で交通方面どうなるのか一寸見当が付きませんが、渡支出来る時期御地で御決定の上、早目に御通知下されば準備します。経済的方面は去年連絡つけてありますから、問題はありませぬ。

最終的に、戦局は次第に日本に不利な方向へ変わり、「渡支出来る時期」はついに得られなかった（記念会全体の経緯は表26を参照）。

表 26 「柳田国男先生古稀記念会」事業経緯

年月日	事項	外地関係
一九四三年 六月二六日	橋浦泰雄・大藤時彦・倉田一郎・関敬吾・蓮仏重寿三項目予備案。①	
七月十五日	折口信夫の賛同を得る。①	外国人、国外在住執筆者も加わる。①
七月三〇日	橋浦・大藤・倉田・関は柳田国男を訪ね快諾を得る。東京大会も地方大会扱い。①	
八月	『民間伝承』九・三で計画予告。	
八月七日	橋浦・大藤・倉田・関による実行委員会準備小委員会。八地方で大会、地方自主、大政翼賛会の援助が決められる。①	民俗学大会開催地に新京を追加。①
八月二二日	実行委員の柳田への報告会。柳田の提案で実行委員会。宮本常一・小山栄三・今和次郎、発起人に和辻哲郎・那須皓・橋本進吉が加えられる。①	柳田が朝鮮、北京、台湾の可能性を提示。橋浦によって交渉開始。①
九月	『民間伝承』九・四にて事業計画発表。趣旨、発起人、実行委員、内容四項目。「公告」(内容三項目)。	京城、台北、新京、北京、張家口で「内地以外に於ける民俗学大会」を開催することに。
九月一日	石田英一郎蒙疆赴任内定で実行委員辞退。	柳田、太田陸郎「支那習俗」序。
九月三日	第二・四回木曜会、橋浦、大藤、今野円輔、和歌森太郎、今井武志、堀一郎参加、事業報告。国内課題提示。柳田五〇〇円を資金としてだす。②	橋浦、直江に事業を知らせる。⑤
九月十二日	橋浦は大政翼賛会を訪問、厚生部副部長小田倉一が実行委員、実践局長藤井崇治発起人就任承諾。①	新京、北京、台北、朝鮮で大会開催案。②
九月十五日	東京神田学士館で第一回発起人会。①	
九月二二日		那須皓は北京大会のため周作人に連絡することを提言する。梅原末治は北京行き次いで、新京、京城にも連絡してくるといふ。①
九月二七日	柳田、月曜通信(四)を執筆、一・三月の課題について説明。「民間伝承」九・八	

十月	『民間伝承』九・五で趣旨、発起人、実行委員「会告」(内容三項目)再録。一〇三月主題説明。	東方民俗研究会より、橋浦宛に研究会一覽を送付。 台湾・北京ともに既に連絡が取れた。 ^⑤
十月	『高志路』(九・一〇)で事業が報じられる。	金関丈夫から書簡、安藤正次と承諾の旨。 ^①
十月一日		橋浦、直江に確認葉書。 ^⑤
十月二日		東方民俗研究会発会式、第一回講演会。 ^⑤
十月三日		金関より書簡、台湾の執筆者を紹介。 ^①
十月七日		直江、橋浦に進展状況報告。 ^⑤
十月十二日		柳田、「大東亜(圏)民俗学」発言。
十月十七日		大間知の京城よりの通信、協議中の由。 ^①
十月二〇日		沢田瑞穂より柳田宛書簡、研究会一覽、民俗展覧会目録送付。 ^⑥
十月二二日		「東方民俗研究会」、「民俗台湾座談会」報告(『民間伝承』九・六・七)
十一月		「民俗台湾」(三・一一)で事業が報じられる。
十二月		「民俗台湾」三・一二に座談会記録。
十二月	『民間伝承』九・八で趣旨、発起人、実行委員「会告」(内容四項目に)三回目掲載。	「内地以外に於ける民俗学大会の開催」項目補記。
十二月	『旅と伝説』(二六・一一)で事業について報じられる。	「北京 東方民俗研究会の成立」再報告。『支那習俗』の紹介。
十二月二二日		直江、橋浦に進展状況報告。柳田記念のため「東方民俗論叢」の出版計画。 ^⑥
一九四四年 二月か	『民間伝承』一〇・一「氏神号」。「柳田先生古稀記念会」の出版にあたり会員各位に檄す。四〇六月主題説明。大阪は市と朝日新聞社の共同主催決定。鹿児島・松江・広島・新宮・東北(仙台)等でも準備中。	「国際共同研究課題の提案」三項目公表。「北京では東方民俗研究会主催」と決定。

三月

『民間伝承』一〇・二「誕生号」。七、十二月主題説明。近畿地方（大阪・新宮）、九州地区（鹿児島・小倉）、中国地区（松江・広島）、東北地方（仙台）、東京外中部の高山・長野・山梨などで準備。北海道・北陸道・東海道・四国地方着手希望。会員名簿は三月中旬に。

三月十日

四月

四月

『民間伝承』一〇・三「生死観号」。大阪市と朝日新聞との共同主催で「戦時生活と日本民俗学」講演会四月六日開催、盛会。大阪、京都、兵庫の各支部以降連絡を密にし活発な研究会活動への意欲。兵庫県支部で五日辻川見学、折口ら六名参加、座談。熊野で卒業教育会主催民俗学講座、四月九日開催、支部設立は遠からず。

五月

五月

『民間伝承』一〇・四「錬成と遊技号」
『民間伝承』一〇・五「生産方式号」。会員大激増。広地域対象の地方大会開催は困難、狭い地域での研究会講座が各地で進行中。

七月三日

十月

『民間伝承』一〇・六「家号」。記念論文集第一冊編輯完了、出版困難。大地区大会困難、九月二四、二五日奥羽民俗研究会の記念会開催、十一月から十二

「国際共同研究課題の提案」再録。北京主催決定、「日支両当局支援」。台北でも交通事情の許す限り開催の予定で準備中。時期は秋に予定。

大間知より橋浦宛書簡。満洲学会、満洲心理学会との共催、講師は一人ずつ、九月予定。③

『民俗台湾』四・四「民俗採集の調査項目の作製」提言。台北大会決定、本誌と台大その他全面的に協力。十二月共同課題（細目なし）を転載、「国際共同研究課題」を予告。

「国際共同研究課題の提案」三回目掲載。

『民俗台湾』四・五「国際共同研究課題の提案」を原文掲載。

橋川時雄より柳田宛書簡、表敬、東方文化事業を紹介、歓迎の意。⑥

「国際共同研究課題の提案」四回目掲載。直江通信 周作人のこと。「北地の国際大会」十月上旬決定、済南、青島等も予定。

直江、橋浦に北京文化協会、翼賛会北京支部との共同主催、済南・青島も予定と伝える。⑤

「国際共同研究課題の提案」五回目掲載。「北京での国際大会」十一月中旬に、派遣員折口・関・橋浦等は準備忙殺。

一九四六年	八月	歳末
一九四五年	一月六日	二月
	十一月十七日	
	十月二十六日	
	十月二十四日	
	十月二〇日	
	十月十四日	
	十月十三日	
	十月十二日	

月にかけて札幌・小樽・新潟・高知・鹿児島などでの記念会開催予定。

京橋区泰明国民学校で柳田先生古稀記念懇談会、参加者約百名。折口司会、橋浦報告、柳田挨拶、石黒忠篤、橋本進吉、石田幹之助、小山栄三の回想談など。(『民間伝承』一〇・七・八)

十一月か十二月
 『民間伝承』一〇・七・八「社交と協力・祖霊号」。「会告」。「会則」。遅刊を取り戻すため努力中。古稀記念事業全体は新年前半期へ持越し。会員名簿が出来、実費頒布。新会則で十人で支部設立可。

柳田「窓の灯 民間伝承の会消息」で事業を回顧、「三つの事業」という発言。

『民間伝承』一一・一「家庭教育号」。「お祭」原稿焼

直江、橋浦に北京大会「日本民俗学講座」計画十一月十日より三日間などを伝える。招請状渡支証明を送る。⑤

直江、橋浦に電報、柳田履歴書頼む。⑤

橋浦、北京の電報につき折口、柳田と相談。④

橋浦、北京行について折口は飛行機、関・橋浦は汽車で行く予定を柳田に伝える。④

橋浦・大藤は柳田を訪ね、中国行きのことを話す。④

関は北京より招請状が到着、三人が行くことに決定したことを柳田に伝える。④

「北京大会」「日支双方準備完了」、派遣員の病気による交通難の為め翌年四月に延期。評議員に金関丈夫(台湾)・大間知篤三(満洲)・直江広治(北支)・岡部理(蒙古)。

折口は北京行き延期したことを柳田に報告する。④

直江、橋浦に『民俗学誌』柳田記念号出来を報告。四月延期のための手続連絡。⑤

『民俗台湾』五・二、柳田から投書。「重要な又興味のある語彙」の輸出を提言。

一九四七年 二月

失、「婚姻」と再調査。戦前最終号は東北の一部地域以外は焼失のため未発送。古稀記念文集はいよいよ刊行。

一九五一年十月まで『日本民俗学のために 柳田国男先生古稀記念文集』全十輯発行。

出典：「民間伝承」、「民俗台湾」以外、①橋浦泰雄「柳田国男先生古稀記念会覚書」、②今野円輔「柳田国男と研究会―木曜会を中心に」、③鶴見太郎「柳田民俗学の東アジア的展開」、④柳田国男「炭焼日記」、⑤「直江広治書簡」、⑥「橋浦泰雄関係文書」などによる。

大会設営という実践面において計画遂行の可能性は、積極的に有能な事務方、連絡役、そして経済面を含めて強力な支持者の有無に関わるといえる。北京大会の計画から延期までの過程において、東京にいる日本民俗学の中心部と現地北京にいる直江の積極的な姿勢、多大な努力、及び両者の間の密接な連絡が明らかであり、現地の有力機関の支持の下で大会は開催するためのすべての準備作業を完成した。大会の挫折は日本民俗学の意欲や理論とは関係せず、病気という個人的な状況、飛行機の手配困難という外在的な理由によるものであった。最初北京行き同行が決まっていた平山敏治郎（当時京都帝国大学文学部西田直二郎研究室の助手）は、西田の了解と文学部の許可を得て、予防注射まで済ませ、北京行きの準備を整えたが、「中止としまると、内心ビクビクしてはいたものの、大いに残念な気持ちをもったことは覆えなかった」と回想している³⁹⁾。

3 日本民俗学の再編成

1 「比較民俗学」——実践への模索

一方、理論構築、具体的には「比較民俗学」という理論面では状況はどうであったのか。

藤井隆至は一九二〇年代の「世界民俗学」の文脈で一九四〇年以降の「比較民俗学」発言を「アジアの各民族が

それぞれ自己の民俗学を確立し、その成果をふまえて各民族の民俗と民俗とを比較研究しようという提案」と理解し、それは日本人の自己認識からすれば異質であり、実際の研究がなく、指導態勢を構築しておらず「一時的な気まぐれ」⁽⁴⁰⁾であったという。

そして鈴木満男は、民俗学と民族学との関係において「比較民俗学」の構想を考察しているが、その第三段階つまり『民俗台湾』座談会段階を「大東亜比較民俗学」と名づけ、「大体此方の言葉の中から、簡単な覚え易い良い言葉をその目標として行つたらいい」という柳田の発言に実感が伴わなないとして「いかにも実のないもの、時局に対する」政治家、柳田のリップ・サービスに過ぎないもの⁽⁴¹⁾と総括している。

一九四三年の段階において、柳田の構想は果たして一九二〇年代の「世界民俗学」と同じように各民族各自の民俗学の確立とその成果を踏まえての比較研究であったのか。そして果たして実践に向けての姿勢が欠ける「一時的な気まぐれ」や「リップ・サービス」だったのであるうか。

■言葉の問題と柳田国男の模索

これを検討するには、言語の問題についての柳田国男の姿勢が重要である。第1章で論じたように、そもそも柳田の理論樹立には「民俗語彙」が重要な柱であり、言語の問題はいわば方法論と深く関わるからである。かつて一九三〇年代、柳田は言語の障壁が存するかぎり民俗学はナショナルなものではかならないと言っている。この問題を念頭におけば、戦時下の古稀記念会にみる柳田の言動は、決してリップ・サービスや一時の気まぐれではなかったことが明白である。なにより彼はこの言葉の問題の解決を模索していたからである。

柳田の理論的な構想を再現する資料として、一九四三年、古稀記念会の一環として行われた二回の座談会、すなわち柳田、橋浦、浅野晃による『文芸春秋』九月号座談「民間伝承について」と十月十七日柳田、橋浦と『民俗台湾』同人との座談会がある。

『文芸春秋』座談会において、現実に寄与できる問題について忌憚のない意見を柳田に求められた浅野はジャワでの経験から「在来の英米流の殖民政策とまつたくちがった行き方を確立して行く」には民俗学を常識にする必要があると答えた。すると、柳田は「私は大東亜圏内の文化の共通点というものを見つけて、それに近づけて両方から寄り合うことが非常に大事」だと主張しながら、しかしそこには言語の問題と、日本文化自身についての理解不足という二つの難関があると指摘している⁴²。

言語の問題について、「たとえば台湾とか満洲、朝鮮、これは今『民俗台湾』とか、『朝鮮民俗』という会誌ができてやつているんですが、言葉がちがつているから、よく読んでみると、両方同じものでも、まず言葉の説明に半分費やしているようなわけなんです」と問題を指摘し「この点早く整理がついて、簡単に問題の内容がパツと頭にくるようになるよ、たいへん都合がいい今後インドネシアのどの民族にもシナにも行けるんですからね」⁴³と述べている。即ち同じ内容をさす地域間の言葉の違いを超えた、理解しやすい指示法を開発すべきであり、それは台湾、満洲、朝鮮でまず考案されれば、中国のような長い歴史と高度な文化を持つ国にもインドネシアのような未開民族にも応用できるといふ主張である。

『民俗台湾』座談会では、さらに具体像を提示されている。柳田は「大東亜圏内」の「交通を、妨げているのは言葉」であると指摘し、その解決法として「あなたがちに言葉にはかかわらないで、実質的な内容上の標目を拵えて行く」方法が必要とする。具体的に以下のようなようである。

正確な記録としてタブー、或はトータムというものの索引を作ればいいが、まず最初の共同研究の共通題目としては、総括的な、例えば婚姻とか婚姻の約束、解消というような今風の（中略）言葉を使つてなるべく一般に皆がやれるようにしたい。

つまり方法は二つある。一つは共通な問題になれる題目、一つは「民俗語彙」から一般化した用語であり、この両者には段階の差があるということである。

共通課題は共同採集や意見交換のためのもので「なるべく一般に皆やれるやう」な「今風」の言葉が必要である。古稀記念会の「国際共同研究課題」はまさにその一つの試みであった。注意すべきなのは、この「今風」の言葉は決して「国際共同課題」に限つての措置ではなかった。たとえば『民間伝承』特集号十二月予定の「婚姻」を見れば、ここであげられている「婚姻の約束、解消」に負けない抽象的な用語「婚約」や「離婚」が使われている。

それに対して後者は資料を記録、整理、提示するためのものであり、共通課題と比べ学問の基本作業と関わっているだけに、もっと正確さ、洗練さと有効性が求められている。その場合想定されたのがまず「タブー」「トートム」のような欧米民族学・民俗学が一般化させた古典的な術語であった。しかし、欧米人類学に対して強い対抗意識を持ち、日本の現実に着した「民俗語彙」を生かそうと苦心してきた柳田にとっては、当然、これに対して不満が残る。前記鈴木満男が言及した「大体此方の言葉の中から、簡単な覚え易い良い言葉をその目標として行つたらいい」という発言には、日本の「民俗語彙」を精選し、他の地域に適用してみることによつて一般化の道を探る柳田国男の意図が読み取れる。

さらに、一九四五年二月、柳田は『台湾民俗』に以下の投書を寄せている。

自分は御教育を受けて是でも少しは台湾の言葉をさとり得る方であるが、なほ名称の難関が苦痛に近い。是こそ民俗学の世界提携の望み遙かなる原因であらう。勿論互ひの語を同程度にわかるやうにするのが、正攻法であるが、其前に編輯者も心がけられて、あまり数多く難易さまざまの語をはいやうに排列せず、殊に重要な又興味のある語彙の少々を輸出するやうに努められたい。タブーとか、トテムとか、マナとか、ポトラッチとい

ふ語などは少数民族の用語だが、世界の人が皆知つてゐる。(東京 柳田国男)⁴⁴

「台湾の言葉」というのは中国語であろうが、雑誌の場合漢字である。一九三九年の「続かちかち山」では欧米人より日本人の方が馴染み易い「四角い文字」は、ここでは「苦痛に近い」「名称の難関」となっている。一九三九年の文章は、「比較民俗学」の実践を意識してのものではなかったという本論第1章の説は、ここで一つの傍証を得た。

そして注目すべきなのは、「重要な又興味のある語彙の少々を輸出するように」という提言である。ここで「此方の言葉の中から」だけではなく、台湾においても能力ある者（ここでは「編輯者」、具体的に金関や池田をさしているが）に対して、地域の個性に密着する「民俗語彙」の中から、一般化することが可能なものを探し出し、意識的に普及させる努力を求めている。

台湾は日本の最も古い植民地であり、当時既に五十年を迎えた。中国文化と日本文化が長年混じり合う台湾の文化的環境は、柳田にとって中国大陆を主とした対象に比較民俗学という実践を展開して行くための絶好の「実験台」でもあった。

この投書の執筆は、古稀記念会が進行する只中ではなく、最も積極的に準備活動を進めていた北京での国外大会も延期となつてからのことである。しかも座談会のように応酬を必要とする状況ではなく、一読者としての投書であった。柳田国男の台湾民俗を理解する意欲、「比較」のために模索する真剣さが改めて了解されるだろう。

■「比較」への視線

方法論の角度で「比較民俗学」を検討している鳥越皓之は、柳田国男における「比較民俗学」を、①将来の可能性として想定されていた時代、②朝鮮や台湾すでに民俗学研究が行われており、比較民俗学が可能と考え、朝鮮

や台湾の研究者に勧めた時代、③戦後の『海上の道』の時代と区分している⁽⁴⁵⁾。同時に、同じ第二段階であるが、一九四〇年の『朝鮮民俗』寄稿と一九四三年の『民俗台湾』座談の間、柳田の姿勢が積極的になったという変化があるとするが、貴重な指摘である。しかし鳥越はその理由が不明であるとし、その間の三年の時間のズレが個人に変化を与えたか、或いは『朝鮮民俗』にくらべて『民俗台湾』の方は研究者の層が厚く場所的にも恵まれていたかもしれないという推測を述べるに留まった⁽⁴⁶⁾。

『民俗台湾』座談会とほぼ同時期の『文芸春秋』座談会において柳田が朝鮮と台湾に同じ位置づけを与えているところをみれば、鳥越の二番目の推測は成り立たず、三年間の時間の意味が大きかったという理解が有力である。しかし、それについて考えるには、柳田個人だけではなく、もっと日本民俗学の全体の動きを把握する必要がある。結論からいえば、「比較」という問題を真剣に考えるようになった動きは一九四二年以降に木曜会の中心メンバーの中で顕著になってきたのである。

もともと昔話など国際的な比較が進んでいる分野に関心がある関敬吾は、早くから日本の民俗を明らかにするために外国の例を知り、特に近隣との比較の必要を強調している。第1章ですでに一九三八年七月、関は李猷璋『台湾民間文学集』を紹介するに際し、「吾が国の伝承を明確にするためには近隣の資料との比較の必要のあることは云ふまでもない」（『民間伝承』三一―二）と主張していることにふれた。下つて一九四〇年四月も関は「何れも直ちに吾々の資料として利用することは出来ないが、比較研究上もつて両者の間に提携する必要はあらう」（『台湾の昔話』の紹介、『民間伝承』五一―七）と述べている。

師である柳田はまだ「比較」に言及しなかった、或いは言及するものの、否定的な態度を示していた頃の発言であった。当時の木曜会では関ほど国外との比較を積極的に主張する者は他にはいなかったが、日本以外の状況への目配りはあった。

たとえば、民俗語彙を活用しての民俗研究を展開し、その意味で「柳田民俗学の最も正統な後継者の一人」⁽⁴⁷⁾と

評された倉田一郎は、実は『民間伝承』でいち早く日本以外の民俗事象について紹介する人物でもあった。

一九三七年二月、彼は『民族学研究』三―一を取り上げ、「管轄の外には在るが、『大興安嶺東南部オロチヨン族踏査報告』泉靖一氏にはオロチヨンの宗教生活特に忌に関して参考になる資料がかなりある。この他祭団の生成発展を扱った『中部高砂族の祭団』馬淵東一氏、『オロチヨン民具解説』秋葉隆氏などがある」と紹介している。その後も、台湾や蒙疆についての民族学研究に注目している。

直接わが国の船おろしとの関連がないが、これによつて与へられる示唆は決して少なくない（鹿野忠雄「紅頭嶼ヤミ族の大船建造と船祭」の紹介、一九三八年五月）。

蒙疆^(マヤ)地区に住むソロン族のことは従来ほとんど知られてゐなかつたのであるが、本書に依つてほぼ明らかに知られるに至つたことは有難い。民族学方面の本ではあるが、随分日本人の生活と近いものを感じたので紹介する次第である（上牧瀬三郎『ソロン族の社会』の紹介、一九四〇年十一月）。

一方、紹介するに当つて「一国民俗学」への配慮があり、「管轄の外には在るが」、「直接わが国の船おろしとの関連がないが」、「民族学方面の本ではあるが」とあるように、必ず前置きをしていた。

しかし一九四二年八月の「新しき国風の学」⁽⁴⁸⁾になると、状況が変わつた。

倉田はそこで民俗学によつて「国風」を理解することは「日本の国ぶりを訊ねられるといふが如き、些々たる場合だけの用意ではない」として、「この広大な地域に於ける共栄圏の指導者として立つ日本民族」にとつては「之を明かにわきまへおく事に依つて、共栄圏諸民族の土俗を比較的に把握することが可能だからである」と主張している。すなわち「寔に民を治むの要諦はその俗を識るに在り、ひとの俗を知るは己がてぶりを知るに在る」という

ことであり、民俗学は「新しき国風学」と同時に「大東亜の教養学として」の意味もあると彼は説いている。

かつて「時局下の民俗学」（一九三九年三月）を発表した倉田は、一貫して民俗学の時局への寄与に強い関心を寄せているが、しかし、一九三九年のとき「彼此両国の民俗学に依る両民族の生活の究明比較に俟つ」と「一国民俗学」の枠を堅く守っていたのに対して、一九四二年は日本民族の研究を強調しながら、その先に展望されているのは「土俗を比較的に把握すること」になったのである。

下って一九四三年五月号（『民間伝承』九一一）ではあまり外国のことにふれてこなかった大藤時彦は『台湾民俗』三一二を紹介している。そこで彼は「内地の民俗と類似してゐるもののあるのは誰にも指摘出来る所であるが尚忠実なる資料の採集報告を第一歩としたい」としながら、「その上での両者の比較研究は彼我の間に意外の連絡のあるものの発見されるだらうことは今から想定なし得る」と展望し、最後に「本島語に出来るだけ読仮名と注解を付して貰ひたい」と注文している。真剣に比較を考えて、その言葉を理解しようとするからこそ、読み方の表記や詳しい説明がほしいのである。

一九三五年から一九四四年まで『民間伝承』は計十巻発行されたが、歴代編集責任者を整理すると、守随一（第一巻、一九三五年九月～一九三六年八月）、大間知篤三（第二巻、一九三六年九月～一九三七年八月）、大藤時彦（第三巻、一九三七年九月～一九三八年八月）、橋浦泰雄（第四、五巻、一九三八年九月～一九四〇年九月、第八、九、十巻、一九四二年三月～一九四四年八月）、倉田一郎（第六巻、一九四〇年十月～一九四一年八月）、関敬吾（一九四一年十月～一九四二年二月）の六人しかいなかったことがわかる。当時、守随と大間知は満洲で調査研究に従事している。残ったメンバーの間にも「比較」への視線がすでに熱くなっており、彼らによって古稀記念会を機に満洲で民俗学大会を催す案を提出されたのである。

柳田が「比較民俗学」に対して積極的な姿勢を示すようになったのは、古稀記念会の国外大会が決まった一九四三年後半からのことであり、その前にすでに彼の周りに「比較」へ進む雰囲気醸成が醸し出されていたことが重要であ

る。

そしてこの段階の柳田国男の「比較」に対する姿勢の変化を理解するには、彼独自の現実判断も重要な要素である。一九四三年初、『日本読書新聞』は「出版界新編成への期待」として、社会各界に国家総動員法に基づく出版統制令に対する意見を求めた。柳田は「著者にも当局にも考へてもらひたいこと」として以下の三つをあげている。

一、最も望ましい「読者」の三分の一が村に住し三分の一は海外にあるといふことです。都会に本を買ふ人が多いが大部分はなぐさみのため効果があとに残りません。

一、少壮有識者の将来に働くべき人が今陣営生活をしてゐて良書の手に入らぬのを淋しがつてゐます。

一、半分読んで見て又かと感ずるやうな同質同内容の本は成るだけ出させない方がよいでせう、それを見合わせるだけの労はそこで執つて下さい⁽⁴⁹⁾。

最も望ましい「読者」は自分の生活の実際問題に関心があり、書物の中で解決の手掛りを探そうとする人々であろう。内地の都市と農村だけではなく「海外」にもそうした読者が三分の一いるという認識は重要である。合わせて実際その多くが中国を中心とする内地以外で「陣営生活」を送っている「将来に働くべき」「少壮有識者」への配慮を促しているところを見れば、自分の学問がもはや「一国」で完結することができないという認識は社会使命感の強い柳田にはあつただらうと思われる。すると古稀記念会、特に満洲大会の提案は、柳田に内地以外に向けて学問を展開させる直接的契機を与えたといえる。

勿論、理論の形成は時間を要することである。柳田の「一国民俗学」の理論は十数年ないし数十年の模索の結晶であり、「比較民俗学」の理論も一朝一夕には望めない。実践への意欲があり、模索が始まったことが重要である。

2 国外世話人——組織上の变化

内地以外に日本民俗学を展開させるといふ実践の意欲は、研究者個人レベル、或いは民俗学組織の中央部だけに留まらなかった。一九四二年以降、比較の視線が強くなりつつあった時期は、同時に日本民俗学の組織面に変化が生じた時期でもあった。

『民間伝承』は会員専門誌として四六倍版四段組八頁から発足したが、二二二（一九三六年十月）以降十二頁に増頁し、七一五までこの形式を保っていた。七一六号（一九四二年三月）で表紙をつけ三段組二四頁にし、初めて定価を表示するなど⁽⁵⁰⁾、市販へと動き出した。この動きは六人社の戸田謙介の支持を得て、四月号を休刊して、五月の八一―一から菊版三段組六四頁という普通雑誌の体裁に形式を切り換えて再出發し、七月三〇日付で第三種郵便物として認可された。その後頁数の増減があるが、この形式を保っていた。

雑誌の体裁変更については、柳田国男はその第一号にあたる八一―一の巻頭言「新たな目標」において、「我々少数者の協同では、思ふように資料が集めにくく、是非とも外部の理解者を得なければならぬ」と、「もつと盛んに民間伝承の知識を利用しなければならぬといふことを、認める人が多くなつて来た」という「二つの刺戟」を受けてのことだと説明している。誌面をみればその後も民間伝承の会会員の投稿が主であるが、同号の「寄稿案内」で「本誌の読者は何人でも寄稿随意」とあるように、名目上はすでに会員専門誌ではなくなった。この普通雑誌への形式変更は民俗学が次第に市民権を獲得したことを示していると同時に、そのさらなる普及に大きく寄与することとなった。

民間伝承の会会員は日中戦争が勃発してから、様々な身分で中国をはじめとする日本内地以外の地域に赴いていたことは、すでに述べてきた。この傾向は太平洋戦争が始まって日本の占領地が拡大することに伴い、一層顕著になる。

なく会員を有することが理想」と協力を呼びかけている。

民間伝承の会の「本会小規」は、創立当時から度々『民間伝承』誌上に見られるが、しかし会の趣意書とセットで登場することはこれまでなかった。注目すべきなのは世話人の欄には、東北から九州まで列記し、東京の木曜会メンバーを載せた後、改行して「大間知篤三（新京）、守随一（新京）、直江広治（北京）」と記しているところである。

守随や大間知は会創立初期からの世話人であったが、中国に赴いた後、世話人の欄から消えていた。一九四一年十二月の『民間伝承』七一三に、「〔新京〕大間知篤三、守随一」という表記が見られたのも、「維持会員」としてであった。しかし、この一九四三年二月時点では内地以外の会員としてふたたび世話人となった⁽⁵³⁾。ここに「一国民俗学」を掲げた日本民俗学の海外進出に対する態度に根本的な変化が起こったと見るべきであろう。世話人は民間伝承の会の組織的活動を展開するときの要であり、この中に加えられた者は、日本民俗学に対する組織上の貢献が求められているからである。

一九四二年以降『民間伝承』の普通雑誌化、会員の国外行き増加、木曜会の二〇〇回記念（一九四二年十二月十三日⁽⁵⁴⁾）、会員の激増などを背景に民俗学再編成の機運が高まり、その中で国外の中心会員の活躍も視野に入ったのである。

『民間伝承』九一五（一九四三年九月）の「会告」では「会員名簿はややもするとこれを悪用する者のあるため、従来印行を差し控えていましたが、今日ではその虞れも薄らいだように思えるので、近く印行して現会員には洩れなくお送りします。最寄りの会員諸氏は研究会に其他に御活用あるよう希望します」と報じられている。

前号で古稀記念会計画が発表されたばかりである。この時期で会員名簿の作成が決められたのは、これからの発展に備えて民間伝承の会の全容を把握するためだと思われる。会員名簿は実際完成したのが一九四四年十二月であった。そこに二二一八名の会員の氏名及び住所が載せられており、内地以外、樺太八名、台湾八名、朝鮮三八名、

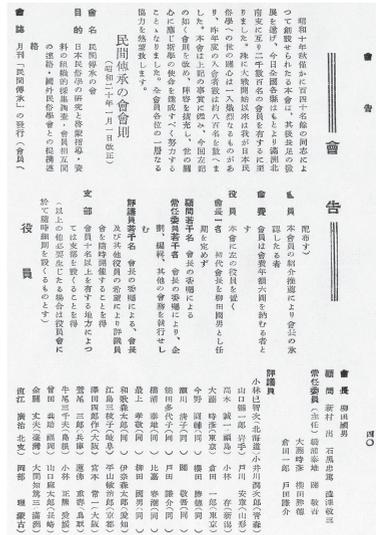


図 22 「会告・民間伝承の会会則」
(1945年1月1日改正)

出典：『民間伝承』10-7-8合併号、1944年
8月（実質年末発行）、40頁。

り二千数百名の会員を有するに至りました。殊に大戦開始以来は我が日本民俗学への世の関心は一入熾烈なるものがあり、昨年度の入会者数は約八百名を数へました。本会は上記の事実鑑み、今回左記の如く会則を改め、陣営を拡充し、世の関心に応じ斯学の使命を達成すべく努力することとなりました。

合わせて「(昭和二十年一月一日改正)」とある「民間伝承の会会則」が載せられている。

一九四三年三月時点で「千数百名」という会員数は大幅な増加を見せ、海外からの入会も急激に増え、一九四四年末にはすでに「全国各県はもとより満洲南北支に互り二千数百名の会員を有するに至」った。高まっていた民俗学再編成の気運は、この初の「会則」の作成、公布によって、従来緩やかな組織を、「学会」として制度化しているように追加され、そして役員、顧問、評議員などの形式も整えるようになった。

初代会長は柳田国男で、顧問は新村出、石黒忠篤、洪沢敬三の三人、常任委員は橋浦泰雄を主任として、関敬

満洲五二名、中華民国二〇名の計一二六名の会員
がいた⁽⁵⁵⁾。

一九四四年末に発行された『民間伝承』一〇一
七・八合併号には、「会告」が載せられている(図
22)。

昭和十年秋僅かに百四十名余の同志によつて
創設せられたる本会は、其後長足の発展を遂
げ、今日全国各県はもとより満洲南北支に互

吾、大藤時彦、倉田一郎、桜田勝徳、戸田謙介などが名を連ねている。評議員は従来の世話人とはほぼ一緒であるが、変化は二つあった。一つは従来地方を列記してから東京を記す形を変え、北海道、青森、岩手、山形、福島、新潟、東京、愛知、岐阜、京都、大阪、兵庫、鳥取、島根、愛媛、福岡、長崎と北から南へ順次掲載していること、もう一つは内地以外、「金関丈夫（台湾）、大間知篤三（満洲）、直江広治（北支）、岡部理（蒙古）」などの名前が見られることである。

しかも、これは一九四三年の踏襲でも拡大でもなかった。なにより氏名の下に記される地名は前回のように「新京」や「北京」という具体的な都市名ではなくなり、これからそれぞれ管轄すべき広域の地名、同時に行政上の単位でもある「台湾」、「満洲」、「北支」、「蒙古」となっており、それはまた内地以外の民俗学大会が予定されている台北、新京、北京、張家口と対応関係を有している。

これまでの民間伝承の会の地方世話人は、ほとんど日本民俗学で名前が知られている人物であった。それに比べ岡部理は大間知の紹介で入会したばかりの者であった。そして金関丈夫は古くからの会員ではあるが、台湾において専門は解剖学であることもあり、これまであまり日本民俗学に関わっていなかった。これら人選はあきらかに古稀記念会の国外大会と呼応しており、これまでの成り行きの結果ではなく、これからの発展のための布石であるといえよう。

日本民俗学は、柳田国男古稀記念会を契機に「一国」を越えて再編成を試みていた。理論面では、柳田によって「比較民俗学」の方法樹立に向けての模索が始まり、組織面では、台湾、朝鮮、満洲、北支、蒙疆などの近隣地域に積極的に関わろうとしたのである。

終章

まとめと展望

1 戦後——消えた国外

戦後、柳田は『先祖の話』や『新国学談』三部作に精力的に取り組んでいったが、『新国学談』に「窓の灯」という欄が設けられており、柳田はそこで自分の所感を書きとめている。「昭和二〇年の歳末」とある「四 民間伝承の会消息」という文章もその一部である。そこで柳田は古稀記念会についてこう書いている。

一番心苦しく感じたことは、その雑誌の中に、私の七十歳を記念する講演会や特輯号、大きな記念論文集の計画などが、花々しく公表せられたことである。結構なまた学問のためにも利用し得られる企てではあったが、自分はわざと前以て知らされず、其計画に口を出すことができなかった。聞いて喜んでそいつは痛快といつては見たものの、実はその頃にももう此計画は影が薄かった。(中略)善後策としてはこの三つの事業のうち、

国外にいる民俗学者が次々帰国し、日本民俗学も次第に活気を取り戻している。太田陸郎はすでに戦時中に亡くなり、大間知篤三は日本に引揚する際すべての資料、手記と書籍を失ったこともあり、帰国後、中国に関する発表はほとんどせず⁽³⁾、もっぱら満洲の民族調査で体得した調査法を駆使して、隠居を中心とした家族制度の研究に力を注いでいった。

三人の中で、中国に対する関心を保ったのは直江広治だけである。彼は帰国してから中国に関する文章を書き続けており、とりわけ戦時下北京での経験を生かした中国民俗学史の論文は関係学界で高く評価された。その後、柳田の理論に徹する姿勢で大著『屋敷神の研究』をなしたが、同時に「比較民俗学」の提唱者として知られている。

その代表的なものは「八月十五夜考」(一九五〇年六月二七日付)⁽⁴⁾である。そこで、南島、朝鮮の例をあげて、「内地の年中行事更にその背後の信仰生活を考えるには、どうしても水稲がこの国に持ち込まれた以前の、先々の土地での稲作行事を綿密に跡付けて比較してみなければならぬ。さしあたり南島、それから台湾、更に南方のマライシヤであるが、一方朝鮮から華中、華南更に印度支那へと、次々にたどって行くことも必要である。この仕事はもうエスノロジの領分になる。ここにもフォクロアとエスノロジとの提携が必要とする大切な領域がある」と述べている。

直江広治の「比較民俗学」の提唱は、方法というより、歴史的な人的移動、文化交流を背景とした対象の問題である。南島からマレーシアへ辿っていくルートでも、朝鮮、華中、華南、インドシナへのルートでも、いわゆる日本人の起源を意識している。しかし、民俗によって構成され得る歴史は上限があり、悠遠な起源まで辿りつくことができないし、文化要素の類似を持って直接伝播や影響関係まで論じることができない。実際それ以降、直江流の「比較民俗学」はあまり展開できなかった。

2 本論のまとめ

本論の研究によって以下のことが明らかになった。

近代学問としての日本民俗学は、その学問的関心は明治中期の土俗学に起源を持ち、民俗事象が人類社会の進化の「残存」であるという欧米人類学の学説に依拠していた。やがて日清、日露戦争を経てナシヨナリズムが高揚するにつれて、民俗事象は国民国家の民族生活や思想・信仰を理解する材料として重視されるようになった。

一九三〇年代初めに日本において民俗学の理論及び方法の体系を確立したのが柳田国男であった。その方法は日本を単一言語・民族の国家とし、郷土人によって各地から均質に収集した多数の民俗資料を分類し、「民俗語彙」によって索引を作り、各地に見られる地域差を時代差として理解し、国民全体としての生活、信仰の変遷を構成しようとするものであった。柳田は「世界民俗学」を主張しながら、具体的な経路を提示せず、実際「一国民俗学」の確立に力を注いでいった。

彼のもとで民俗学を学んだ直弟子は、木曜会として日本民俗学の研究、活動の組織的中核となり、初の全国規模の同時調査である山村調査、海村調査を行った。一九三五年に全国規模の民俗学組織・民間伝承の会が結成され、「一国民俗学」のもとで実践活動を展開していた。

一方、一九二八年に創刊された『旅と伝説』は『民族』以降、理論的模索を始めた柳田の活動を支え、また柳田の大きな影響と支持のもとで、『民間伝承』発刊まで民俗学運動の最大な発信地として活躍し、その後も独自の立場で日本民俗学の重要な一翼を担っていた。中央の民俗誌として『旅と伝説』と『民間伝承』はそれぞれ特色が違うが、ともに一九三九年を境に中国関係の記事が急激に増えていた。そうした傾向は地方民俗誌でありながら、地方を超える視野をもつ『ひだびと』においても確認できる。これは日中戦争が長期戦に突入した段階において政府

主導による中国調査の大規模な展開と時期を同じくするが、それに影響された結果ではなく、むしろ両方とも大きな時代の要請によるものであった。

この時期、柳田を中心とする日本民俗学の中心部には、民俗学の時局への寄与の可能性や国外への言及が増えたものの、日本国内に実践の場を限定する「一国民俗学」の枠は守られていたといえる。

しかし、日本の民俗学者は記者、軍人、調査員、学者、教育者など様々な身分の下で中国に赴いていった。中国に長期にわたって滞在し、中国に関連する調査研究やその他の活動を続けており、しかも日本国内との交流に力を入れた者として、戦前戦後民俗学の組織的發展に重要な役割を果たした者が目立つ。本論で取り上げた太田陸郎、大間知篤三、直江広治はそうした人々である。

三人はともに直接柳田国男の指導を受けた者であるが、中国との関わり方に関しては、各自の経歴や置かれた環境によってそれぞれ特徴を持っている。

太田陸郎は郷里の生活の細心な観察者であり、郷土史料の熱心な蒐集者でもあった。彼は県庁に勤めながら地元で郷土史の研究をめざし、『兵庫県民俗資料』という価値の高い地方民俗雑誌を主宰していたが、柳田の要請で東京以外の日本民俗学の第二の中心を作るべく、『近畿民俗』の編輯や近畿民俗学会の活動に積極的に携わり、日本民俗学の地方リーダーとして活躍した。武漢作戦のため中国に赴いた後、長く故郷と風土が近似する揚子江流域に滞在しており、最初から行軍地や滞在地の農村生活を細心に観察し、中国と日本の農業の近似と漁業の相異を文化交流史的に解明する着想を持つようになった。

大間知篤三は学生社会運動組織である新人会の重要成員で、共産黨員でもあった。転向者のための大孝塾研究所（のち国民思想研究所）に籍を置きながら一九三〇年代の前半から柳田のもとで民俗学に専念した。彼は『民間伝承』の編集や、山村・海村調査で活躍し、中央での講習会や地方の講演などの民俗学普及活動にも積極的に参加していた。関東軍の参謀の任にあった辻正信の推薦で、満洲建国大学に赴任した後、多民族環境の満洲においては民俗学

が民族学に含まれるべきだと主張するようになった。満洲での大間知の学的関心はもっぱら少数民族、とりわけ満洲の原住民とされる満洲族、そして満洲国内を主なる住居地とするダウール族などに向けられていたが、その精力的な調査研究活動の裏に日本人指導のもとでの満洲民族の統合という政治的な視線があった。

直江広治は、盧溝橋事変の衝撃で東洋史に進学し、大学在学中に木曜会の会合に参加し、柳田の指導のもとで民俗学の訓練を受けた。大学卒業後、志望で北京の日本中学校に赴任した。そこで日本人による現地の民俗研究団体民風会に参加し、当時華北地域で展開されていた満鉄の農村慣行調査に便乗する形で調査を展開していた。そして彼は民俗学者として資源研究所の山西學術調査団に参加し、日本民俗学と関連を有するドイツ系教会大学輔仁大学の日本言語文学部の新設に伴い講師として赴任した。大学で彼は日本民俗学を講義し、『昔話採集手帖』の翻訳に手をかけ、日本民俗学の教育普及に尽力しながら、ドイツ民族学の系譜を引く同大学付属の東方人類学博物館の活動にも積極的に関与した。

以上のように、三人の中国経験は互いに違うが、日本民俗学と中国との関わりにおいて重要な役割を果たしたことは共通している。

太田陸郎の役割は「現地レポーター」に譬えられよう。彼は中国に赴いた者の中で、民俗学的視線による観察文をいち早く日本国内の民俗学界に発信した人物であり、『民間伝承』や『旅と伝説』の積極的な寄稿者でもある。その文章は雑誌の編集者や木曜会の中心メンバーらによってたびたび紹介され、また南方熊楠のような民俗学の重鎮に取り上げられていた。そうしたレポートとコメントのやり取りは、頻繁に当時民俗学の最も重要な中央雑誌に登場し、中国においても日本人学者による民俗学の研究ができるというイメージを日本民俗学に与えた存在として大きな影響力を持っていた。

木曜会中心メンバーの守随一に次いで大間知篤三が満洲に赴いたことは、重要人物が二人も行っているという意味で、日本民俗学における満洲の存在感を高めたと言える。彼はまた『民間伝承』に多くの通信を寄せており、帰

国する機会を利用して中国での研究の一斑を木曜会で発表していたが、日本民俗学とって彼は「現地組織者」であった。新京民俗同好会、そして、満洲民族学会において指導的な地位に立ち、積極的な活動を展開する大間知は、満洲における日本民俗学の地位の向上、及び現地での民間伝承の会の会員獲得に尽力し、大きな成果を収めた。

直江広治は「現地エージェント」的な存在であった。滞在する北京において民風会、輔仁大学、東方民俗研究会などの活動に積極的に関与し、満鉄調査部の山本斌、東方文化総委員会の橋川時雄、輔仁大学東方人類学博物館のエーデル、華北総署督弁、華北総合調査研究所副理事長の周作人など多様な人物と接点を持ち、日本民俗学の影響拡大に努め、また柳田や橋浦と密接に連絡を保っていた。

この三人の活動は、柳田国男古稀記念会事業の構想上重要な役割を果たすことになる。柳田の古稀をきっかけとして、日本民俗学の新しい発展を意図する記念事業が木曜会の中心メンバーによって企画された。内地各地における民俗学大会と並んで大間知の活動によって数多くの民間伝承の会会員を有する新京が、まず内地以外の民俗学大会の候補地として提案された。そして直江が活躍する北京や、民俗学研究雑誌、団体をもつ植民地台湾、朝鮮、それに蒙古などの地域の中心地に、東京から講師を派遣し、当地の研究団体と提携する民俗学大会の計画が立てられた。講演会とイメージされていた国外民俗学大会はやがて「国際共同研究課題」の発表によって、共同研究の場となり、一九四二年以降周辺地域との「比較」という視線が強くなるにつれて、それはまた「比較民俗学」の実践を試みる場にもなるはずであった。これは同じ時期に高まっていた日本民俗学再編成の気運と軌を一にして、日本民俗学にしてその組織を東アジアまで拡大する構想を持たせたのである。とくに直江の積極的な活動によって北京では開催のための準備をすべて整えていたが、個人の事情で延期になり、さらに戦局の変化によって実行不可能となった。

3 日本民俗学と中国

■ 福田アジオの民俗学と植民地論

直江広治を含めて、何人もの柳田国男の門弟が「満州」さらには中国に赴き、そこに研究の場を発見しようとしたところに、柳田国男自身の判断を含めた、日本民俗学の植民地主義との関係が表出しているように思われる。それは大英帝国とインドやアフリカとの関係に擬えることができる、異なる世界の研究である。日本の一国民俗学とは抵触しない距離をおいた地域での民俗学として行われたことだけは明らかである(三三二頁)。

これは福田アジオの「近代日本の植民地と民俗学」⁽⁵⁾の結論の部である。福田の着目は表題にもあるように、植民地と民俗学の関係にあり、そこで民俗学を初期柳田国男の民俗学と確立期の一国民俗学という二つの段階に分けているが、とくに後者は本論の扱う時期と重なる。

福田の理解では、この第二時期において、「一国民俗学」によって排除された植民地が問題となり、柳田はアイヌ、台湾、朝鮮、満洲などの地に論理的に日本民俗学と別の民俗学が成立し、日本民俗学と「比較民俗学」の関係を構成すると認めるながら、朝鮮に関して態度が慎重であった。彼の直弟子がもっぱら満洲、中国で活躍していることに注目すれば、「一国民俗学と抵触しない距離」で民俗学研究を行うのは、「柳田国男自身の判断を含めた、日本民俗学の植民地主義」の表出であるという。

「比較民俗学」と植民地との関係に注目したのは卓見といえよう。しかし、福田の論はいくつかの難点がある。

第一、本論の第1章で整理したように、「一国民俗学」の理論形成は一九二〇年代末から始まり、少なくとも一

九三二年時点ですでに完成をみた。しかしその過程で排除されたものはすぐには問題とならなかった。柳田が明確に「比較民俗学」について言及したのは一九四〇年のことで、この時間の差はどう理解すべきなのか。

第二、太田陸郎のように、中国に「研究の場を発見しようとした」のではなく、召集され、軍人として赴いた柳田の門弟のことをどう理解するのか。大学や研究機関に就職した門弟とどういう関係があるのか。

第三、果たして、大間知篤三や守随一の満洲行、直江広治の北京行は「柳田国男自身の判断を含めた」のかどうか。これはまた柳田の意思とその弟子たちの行動との関係をどう理解すべきかという問題にもなるだろう。

第四、古稀記念会の国外大会の計画過程を見れば、最初の提案から、二つの座談会の発言まで、朝鮮と台湾が一貫して重要な対象であり、すでに日本の文化について理解のある現地研究者が現れた意味で、柳田はこの二つの地を、これから展開する「比較民俗学」の実験台として見ていたことが事実である。すると「一国民俗学とは抵触しない距離をおいた地域」という理解は果たして妥当なのか。

第五、一九四〇年朝鮮に関する発言に慎重な態度が見えたが、第5章で見てきたように一九四三年の古稀記念会関係の発言にはむしろ頗る積極的で、しかも実践の意欲が強かった。この態度の変化は重要である。

■ 日本民俗学にとっての中国

以下、福田の論を意識しながら一九三〇、四〇年代の日本民俗学と中国の関係を整理してみる。

一九三〇年代、柳田国男は「一国民俗学」の理論を確立させた。第1章で論じたように、その場合の「一国」はあくまで「一種族一言語一国」の「日本」をさしている。しかし理論形成の一九三〇年頃、日本は樺太、台湾、朝鮮という植民地を持つ「帝国」であったことを考えると、「一国民俗学」としての日本民俗学は実は「内地民俗学」でしかなかった。民俗学は内地以外の地域との関係にはふれないまま、組織的な調査と資料蒐集、整理に取り組んでいった。満洲事変、「満洲国」建国によって、「帝国」以外に日本と親密な関係にある地域が現れたが、柳田の姿

勢がそれによって変わることはなかった。やがて彼から直接教わった直弟子が「木曜会」として民俗学活動における組織の中核となり、全国的な民間伝承の会も発足し、柳田の理論的指導に従って民俗学の実践活動を展開していた。そこでは帝国内の外地さえ排除されており、中国もまた入る余地はなかった。

日中戦争によって、特に長期戦に突入した一九三九年以降、中国との関わりが大幅に増えるという事実が生じた。内地にいた日本民俗学者が満洲と関係を持ったのはこの時期において初めて現れた現象であり、それは日中戦争によって満洲以外の中国と深く関わるようになったことと時期を同じくすることは見逃せない。

その関わりは強制された受身的なもの、たとえば太田陸郎の召集、そして日本から逃げ出したいという半分消極的なもの、たとえば守随一と大間知篤三の赴任、さらにまったく自主的な積極的なもの、たとえば直江広治の北京行などいくつかのパターンがあるが、共通するのは、その赴く先は中国であるということである。一九三八年末以降というタイミングを考えれば、そこに主体的な選択より、時代の影響を大きく認めなければならぬ。中国との関わりを要求する時代であり、またそのための機会、条件が整っていた。日本の民俗学者が戦時下一番関わった地域は中国であり、これは個人の選択、学問の理論を越えて、まず時代が作り出した結果であったと認めよう。

次に、たとえ柳田は彼らの中国行には積極的な態度を持っていたとしても、確固したビジョンのもとで弟子たちを派遣したという理解はできない。むしろ直弟子を含める民俗学者が数多く中国に赴いた現実には、柳田にして日本民俗学と内地以外の地域との関係を考え直させる契機となったと見るべきである。一九三九年以降の言及はまさにその表れの一つとして理解されよう。しかし当時はまだ実践的に関わろうとする積極的な姿勢はなかった。

戦争の長期化に従って民間伝承の会会員と中国との関連は拡大していく。中国と関わった民俗学者には、高い文化史の素養のある太田陸郎、理論と組織の両面で木曜会の中心的な存在である大間知篤三、民俗学と中国に強い興味があり、青年としての情熱と活動力の持ち主である直江広治のような人物がいた。彼らは何れも長期的に中国に滞在し、学問的営為を続け、中国に関する論考を数多く発表していた。軍人である太田は行動に色々な制限があ

表27 戦前『民間伝承』掲載会員外地通信一覧

号数(年月)	守随	大間知	太田	岸田	其他	号数	大間知	太田	直江	沢田	其他
4-6(39.3)	●					6-6(41.3)	●	●			大山彦一
4-7(39.4)	●	●				6-7(41.4)		●			
4-8(39.5)	●	●				6-10(41.7)					周作人、方紀生
4-9(39.6)	●										
4-10(39.7)			●			6-11(41.8)	●		●		〈中島恒雄〉
4-11(39.8)	●					6-12(41.9)	●	●			〈中島恒雄〉
4-12(39.9)		●	●			7-1(41.10)		●		●	斉藤甚兵衛
5-1(39.10)			●	●		7-2(41.11)		●			
5-2(39.11)		●				7-3(41.12)		●	●	●	
5-3(39.12)	●	●	●	●	井上昇三	7-5(42.2)					千葉徳爾
5-4(40.1)		●				8-5(42.9)		〈●〉	●		〈清水常吉〉
5-5(40.2)			●	●		8-7(42.11)				●	〈押尾孝〉
5-6(40.3)			●			9-1(43.5)					長岡博男
5-8(40.5)			●			9-4(43.8)				●	小島勝治、 〈日野巖〉
5-10(40.7)			●								
5-11(40.8)		●	●			9-5(43.10)			●	●	
6-2(40.11)			●			10-1(44.1)			●	●	多田貞一
6-3(40.12)			●	●	早川孝太郎	10-5(44.5)			●	●	関口泰
6-4(41.1)		●									

註：複数通信者の中国滞在期間は太田陸郎（38.7～42.7）、守随一（38.10～）、大間知篤三（39.2～）、岸田 定雄（39.8～）、直江広治（41.7～）、沢田四郎作（41.7～）。〈 〉は中国以外：太田（「馬來」）、中島（「釜山」）、清水（「羅南」）、押尾（「仏印」）、日野（「マライ」）。

出典：『民間伝承』各号より作成。

り、組織的な研究活動は許されなかったが、大間知篤三は「新京民俗学同好会」「満洲民族学会」、そして直江広治は「民風会」「東方民俗研究会」などの学会活動に積極的に関わった。

彼らはまた頻繁に日本民俗学の中心部との連絡を図っていた。守随一の通信四一六（一九三九年三月）を皮切りに、大間知、太田、直江、沢田四郎作などにより『民間伝承』誌上、中国からの通信はほぼ毎号のように載せられている（表27参照）。七一五まで毎号あった会員通信欄は七一六以降、不定期になったので、中国からの通信が載せられていない号は『民間伝承』の休刊までわずか八号（五一七、九、一二、六一、五、八、九、七一四）しかなかった。朝鮮から

は三本、マライからは二本、仏印からは一本があるが、中国からの圧倒的な存在感を示している。彼らは多数の通信を『民間伝承』、そして柳田国男や橋浦泰雄に寄せ、自分の現状、学問的活動や中国の民俗事象についての所感を報告している。これは日本民俗学と現地にいる民俗学者を繋ぐ役割を果たしており、他方、また日本民俗学と内地以外の地域との関係に対する再考を促していたといえよう。

注意すべきなのは、内地以外の地域からの入会者は一―二（一九三五年十月）にある台湾の中島哲夫を最初とし、その後、樺太から大矢真一（一九三五年十二月）、大連から岡川栄蔵（一九三六年二月）、朝鮮から加藤孝市（一九三六年三月）と少なくとも一九三六年の早い時期にすでに内地以外の各地から会員があった（表28参照）。しかし会員通信には大矢真一以外、これらの地域からの通信がなかった。『民間伝承』誌上中国からの通信が多く載せられるようになり、そしてこれら内地以外の地域での会員数が大幅に増えていったときでも、情況はほとんど変わらなかった。多くの中国通信は、より正確に言えば、内地から中国に赴いた会員たちからの通信であった。内地以外の地域との関係において日本民俗学の理論及び組織のあり方が問われるようになったのも、とりもおさず、多くの内地民俗学者が中国と関わったという新たな現実によるものであった。

組織の中核としての木曜会は、東京に在住する連絡上の便利もあり、戦時下においても活動力を保った。その中心メンバーは、大藤時彦、倉田一郎、関敬吾、橋浦泰雄などであった。新京が開催地としてまずこの木曜会の中心メンバーたちによって提案された事實は、民俗学の大きな活動は何でも柳田の理論的思考の結果という従来の柳田国男論における暗黙の前提に修正を求めている。

同じ活発な動きを見せている北京が民俗学大会の開催予定地として最初の木曜会案には入っていないかった。その理由として二つ考えられる。一つは同じ木曜会のメンバーとして、木曜会結成当時から理論面と組織面で中心的な人物であった大間知篤三と、一九三九年に初めて入会し、日本では目立った活動をしていなかった直江広治とは、メンバーの中ではつきりと地位の差があったことである。もう一つは、提案された当時、大間知の活動によって、

四三、五	九一	糸井貫一	永海一義、高田哲太郎	滿洲帝國協和会、高敏権一、村岡重夫、金沢寛太郎、山根順太郎、大山彦一、千葉幸雄、神尾式春、上田利美、須知善一、菊川泰平、中島睦彦	閔天植、河内山豊、増田常久、蛭子ます、保田卯三男、黒岩和夫	岡部理	満洲の五人は重復
四三、六 四三、八	九一二 九一四	劉粹榮	白石元則、武田護、井上定雄、手塚孝、原敏夫、三浦郷雄	武田銳二 村岡重夫、金沢寛太郎、山根順太郎、大山彦一、千葉幸雄 石原勇、小林正吉、仲田豊順、古橋博、福島正夫、和田重雄	林静七、植村正雄、田口澄太郎、平田俊雄、喜連泰二、大邱神社々務所、赤司健之、原田進、平山喬、仁川専亮、局出張所、磯岡欣弥、三木弘、木下斉治、渡辺茂、勝本光六	会田源作、手島太郎、木下哲太郎、牧染林、武田照	
四四、四	一〇一四	江川武吉		小倉長太郎、畑中梅吉、湯浅一男、山名晃、椎名忠吉、林睦夫、山中鯉一、大郷四作、飯田巖、高橋権一、山口信男	和田憲夫、華北総合調査研究所、橋川時雄、吉岡義豊、鳥居龍蔵		
四四、五	一〇一五			高須清二、国立中央図書館、岡田藤太郎、加地(持)市郎、朝野武彦、長岡勉、中道太志、岩佐芳明、富沢文、岡野護、岩切寛、太田広実、大瀧栄蔵、滝沢俊亮、柏倉要吉、満洲帝國協和会中央本部調査	加藤孝市、薄木清人、保田素一郎、清水完治、野口幾一、首東邦栄、松林義三、千田直重、甲斐馬左也、閔天植、河内山豊、増田常久、蛭子ます、保田卯三男、黒岩和夫、林静七、植		
四四、十二		「民間伝承の会会員名簿」	金関丈夫、池田敏雄、齊藤義七郎、丸善詰所、劉粹榮、江川武吉、西村兵部、今井義忠	高須清二、国立中央図書館、岡田藤太郎、加地(持)市郎、朝野武彦、長岡勉、中道太志、岩佐芳明、富沢文、岡野護、岩切寛、太田広実、大瀧栄蔵、滝沢俊亮、柏倉要吉、満洲帝國協和会中央本部調査	加藤孝市、薄木清人、保田素一郎、清水完治、野口幾一、首東邦栄、松林義三、千田直重、甲斐馬左也、閔天植、河内山豊、増田常久、蛭子ます、保田卯三男、黒岩和夫、林静七、植		成城大 学民俗 学研究 所蔵 「橋浦 泰雄閔 係文 書」所

部図書資料室、高嶽権一、 村岡重夫、金沢寛太郎、 山根順太郎、大山彦一、 千葉幸雄、神尾式春、上 田利美、須知善一、菊川 泰平、中島陸彦、武田銳 二、石原勇、小林正吉、 仲田豊順、古橋博、福島 正夫、小倉長太郎、畑中 梅吉、湯浅一男、山名晃 権名忠吉、林睦夫、山中 鯉一、大郷四作、飯田巖、 山口信男、青木一雄、青 木実、姉川磐根、上野充 一、内堀斉、大間知篤三、 橘文策、千葉徳爾、矢島 直一	村正雄、田口澄太郎、 平田俊雄、喜連泰二、 大邱神社々務所、原田 進、平山喬、仁川専売 局出張所、磯岡欣弥、 三木弘、木下斉治、渡 辺茂、勝本光六、大原 裕(祐)平、高見直芳、 高橋浅治、多田芳江、 瀬尾一志、水原理学会、 新井馨、佐々 木五郎	石田英一郎、岡 部理、風巻景次 郎、瀬川良三、 多田貞一、直江 広治、永尾龍造、 西田重一、春原 孝平		

出典：『民間伝承』各号、「民間伝承の会会員名簿」（一九四四年十二月）より作成。

満洲では地方支部を設立し得る会員数を持つことになったのに対して、北京では新入会員はまだわずか三名しかいなかったという事実である。

しかし、それを受けて、柳田国男が朝鮮、北京、台湾を言い出したのは、明らかに木曜会と違う考え方を持っていた。朝鮮は延べ十八人、台湾は延べ十二人、ともに支部設置の人数に満たしていない。しかも台湾にも朝鮮にも、柳田直系の研究者がいらない。柳田国男の国外大会開催地の設定は、組織面の現状から生まれるものではなく、もつと理論的な問題、つまり「比較民俗学」の実践を意図しての戦略的なものであった。

一九四二年に入り、日本民俗学の再編成の気運が高まった。一九四三年初めて会員が「全国の各府県及満支の国外に亘つて」いることにふれ、内地以外、新京の大間知、守随、北京の直江が世話人として載せられた。この時点

収

表29 学問対外関係構想比較

	柳田国男1934年 「世界民俗学」	柳田国男1943年 「比較民俗学」	岡正雄1945年 「東亜民族学」
課題の性質	目標課題	実践課題	実践課題
設定の駆動力	学問の内的発展	社会の外的需要	学問の内的発展と 社会の外的需要
方法への要求	先延ばし可能	提示が必要	提示が必要
地域の限定性	無差別	実際に限定	限定
対他国同類学問の 関係	自発的な発展に依存	共通課題による 方向性の提示	超越的に存在
期待する担い手	ネイティブ	日本人も可	日本人による研究
課題の目的	人類の普遍性	限定地域間の共通性	対象民族の実態把握
設定の媒介	人類	中国	欧米

で中国以外の地域は入ってなかった。

しかし柳田のより戦略的な構想が打ち出され、当時東アジアにある内地以外の全地域で国外大会を開くという新しい試みが始まった。中国という新しい問題への対応が迫られた結果、従来未解決のままの植民地との関係という問題が浮かび上がったという結果になる。それは内地において「一国民俗学」の枠組みを保ちながら、内地以外の地域での民俗学研究を「比較民俗学」で結ぶ構想であった。同じく日本の勢力下にながら、当該地域に民俗学研究が認めない地域、たとえば樺太、南洋などはこの時点でも排除されている。この意味で柳田の「大東亜（圏）民俗学」（＝比較民俗学）は「大東亜共栄圏」と違うイメージを持っている。

この「比較民俗学」は決して一九二〇年代、「一国民俗学」の彼岸として提示された「世界民俗学」ではなかった。「世界民俗学」は自発的に発展を成し遂げた各国民俗学が持ち寄って、人類社会の普遍的な法則の発見へと進む学問として描かれている。しかし、『民俗台湾』座談会や「国際共同研究課題」などに見るように、当時の「比較民俗学」は当面の需要によって促され、隣接して密接な利益関係がある地域との間、共通項を濃くしていくための学問として構想されていた。

国外大会の候補地としてあげられた「台湾」、「満洲」、「北支」、「蒙古」は日本の支配上の区分であり、一部の地域では、実質日本が完全

に支配できる範囲はかなり限られている。そして担い手としての当地の民俗学組織を見れば『民俗台湾』グループ以外、構成員全員が日本人であった。以上のことを背景とした「国際的」展開はあくまで日本の軍事力に依拠した地域に限って、日本人中心の団体による「擬似国際的」展開でしかかなり得ない。

「世界民俗学」から「比較民俗学」への道のりは決して学問内の理論発展の問題だけではなかった。大きく言えば戦争による中国との遭遇という背景、具体的に言えば民俗学者の個々の関わりや活動から、その必要性と可能性が生まれた。古稀記念会事業はその実現の恰好の場となったのである。「民俗語彙」、共通課題、或いは実際の研究者養成の方法など、すべてはこの文脈において考えられ、また実行に移ろうとしていた。この理論的構想のもとで、初めての会則がつくられ、そこに「国外民俗学との提携連絡」を会の目的として明記され、さらに内地以外の各地域の有力研究者を評議員として置くようになった。

戦時下の日本民俗学の再編成は、中国によって大きく浮かび上がる日本民俗学と内地以外との関係という問題を「比較民俗学」の実現によって解決しようとしているといえよう。

当時、これらの地域はすでに植民地として帝国日本の一部になっているのか、或いは日本の軍事支配の下に置かれている状況を考えれば、内地以外でありながら、まさに拡張しつつある「帝国日本」内部の問題でもあった。台湾、朝鮮などを含め幾つかの異なる民族の文化を内地との共通点を濃くしていくことによって「帝国」のもとで矛盾なく統合できる道を、岡正雄の「東亜民族学」⁶と違うアプローチで独自に模索しようとしていた(表29参照)。

「一国民俗学」にとって、中国は最初から必要な対象ではなかった。戦争によって触発され、戦争の拡大や長期化によって存在が大きくなった中国は、日本民俗学にして「比較民俗学」の実践を始めさせたが、その構想や実践は間もなく戦争の終結に伴って終止となった。戦後、柳田国男古稀記念会そのものは続けられていたが、その中でいち早く国外大会という項目は消え、ある意味で学会として当然である「国外民俗学会との提携連絡」も消えてしまった。やがて日本の外にいた民俗学者が日本に戻り、日本民俗学は初めて純粹な「一国民俗学」となったのであ

る。それも学問内部だけの問題ではない。戦後は、すべての内地以外の土地を失い、内地だけの領域に戻ったことにより、「一国民俗学」の守備範囲が初めて国家領域としての「日本」と一致したという外在的な条件があった。またこれは、一九三〇年代の「一国民俗学」と戦後の民俗学を直結させ、戦時下中国との関わりによって触発された、植民地台湾、朝鮮なども組み込むような組織的、方法的な試みを、一時的な逸脱として忘れてしまう条件でもあった。

柳田以降、「個別研究法」「都市民俗学」から「いくつもの日本」などの提唱には「日本」という枠を取り払う志向が窺えるが、研究対象はもっぱら日本国内に限定されており、民俗学は依然「一国」のイメージが濃厚である。一方、日本以外の地域について「比較民俗学」の名で調査や研究が展開されているが、日本文化の特質、或いは日本人のルーツの解明を目的とするその姿勢は外に向けられるより日本に指向しており、その意味で限りなく「一国的」であると言える。日本民俗学は学問として日本以外の地域と関わる必要があるかどうか、必要であればどのように関わるべきか。グローバル社会と言われる今日においてもこの問いは依然として未解決のままであるといえる。

註

序章

- 1 柳田国男「わが国郷土研究の沿革」『柳田国男全集八』所収、二三七―二四八頁。
- 2 大藤時彦『日本民俗学史話』三一書房、一九九〇年所収、八五―一八頁。
- 3 『朝日新聞』一九四一年一月十日付朝刊、四面。
- 4 国民学術協会は中央公論社社長嶋中雄作の発意で一九三九年に発会、一九四〇年に設立者の寄付金をもとに財団法人として設立した民間機構である。桑木巖翼、三木清、清沢洌、長谷川如是閑などが中心人物で、柳田は最初からの会員であり、一九四二年から理事となった（柳田国男研究会編『柳田国男伝』三一書房、一九八八年、九一―三頁）。
- 5 大藤時彦『日本民俗学史話』前掲に収録されている（一一九―一六八頁）。
- 6 関敬吾『日本民俗学の歴史』『日本民俗学大系二』平凡社、一九五八年所収、八一―一九六頁。
- 7 同前、一三二頁。
- 8 ここで「柳田ブーム」とは柳田を主題とする各種記念イベント、座談会やシンポジウムの開催、雑誌の特集号や関連著作の出版が社会、思想状況によって一時期大量に現れる現象をさす。一九七〇年代より始め、一九九〇年代まで約十年ごとに現れてくる。

9 福田アジオ『日本民俗学方法序説―柳田国男と民俗学―』弘文堂、一九八四年、三頁。

- 10 益田勝実「炭焼日記」存疑『民話』一九五九〜一九六〇年。
- 11 橋川文三「柳田国男」『二〇世紀を動かした人々』世界の知識人』講談社、一九六四年。
- 12 たとえば、中村哲「柳田国男の思想」法政大学出版局、一九六七年、宮田登『原初的思考―白のフォークロア』大和書房、一九七四年など。
- 13 柳田国男研究会編『柳田国男伝』前掲、八九六―八九九頁を参照。
- 14 子安宣邦「一国民俗学の成立」『岩波講座現代の思想』思想としての二〇世紀』岩波書店、一九九三年所収。
- 15 たとえば、赤坂憲雄「書評『大東亜民俗学』の虚実」『中央公論』一九九六年十月、国分直一『民俗台湾』の運動はなんであったか―川村湊氏の所見をめぐって』『しにか』大修館書店、一九九七年二月、赤坂「一国民俗学を越えて」『創造の世界』一九九九年秋号（のち、同名の著作に収録、五柳書院、二〇〇二年）、後藤総一郎「柳田国男の『殖民地主義論』の誤謬を質す」（後藤編『常民大学研究紀要二 柳田国男のアジア認識』岩田書院、二〇〇一年）など。
- 16 佐藤健二・船曳健夫「対談・メイキング・オブ・柳田国男 複数の柳田国男がいる」（『ちくま』三三二〇、三三一―号、一九九七年）を参照。柳田国男の思想や行動を一義的に決め付けるのではなく、その複雑性を複眼的に理解すべきだという主張は重要である。
- 17 新谷尚紀「戦争と柳田民俗学」福井勝義・新谷尚紀編『人類にとって戦いとは五 イデオロギーの文化装置』東洋書林、二〇〇二年、一〇七頁。
- 18 福田アジオ「民俗学にとって何が明晰か」『柳田国男研究五』一九七四年四月、のち「研究課題としての方法論」に改題して福田『日本民俗学方法序説』前掲に収録されている。
- 19 同前、三頁。
- 20 鶴見太郎「柳田とその弟子たち―民俗学を学ぶマルクス主義者」人文書院、一九九八年、同『橋浦泰雄伝―柳田学の大いなる伴走者』晶文社、二〇〇〇年など。
- 21 周作人は中国民俗学草創期の指導者の一人である。日本留学中、柳田国男の初期民俗学著作『石神問答』『遠野物語』を購入し、一九一一年帰国してからも日本民俗学関係の出版物を積極的に購読していた。彼は歌謡収集と民俗学研究の積極的な提唱者であり、初めて中国で「民俗学」という言葉を使い、そして柳田や日本の民俗学を紹介した人物であった

(周作人「苦茶随筆」一 遠野物語) (一九三二年一月十七日付) 杭州中国民俗学会編『民俗学集鐫』第二輯所収、一九三二年八月、飯倉照平「周作人と柳田国男」、『柳田国男全集月報』二五、筑摩書房、二〇〇一年一月、王文宝『中国民俗学史』巴蜀書社、一九九五年などを参照。

22 江紹原は比較宗教学の出身であるが、迷信や俗信に関心があり、彼の『髮須爪』それらに関する迷信(開明書店、一九二八年)は中国における迷信研究を開拓した業績として高く評価されている。一九二八年、周作人の紹介で彼はこの著作を南方熊楠に贈呈し、両者の間にしばらく文通があった(小川利康「中国の民俗学者江紹原と熊楠」『文学』八一、岩波書店、一九九七年一月、王文宝『中国民俗学史』前掲を参照)。

23 何思敬(何畏)は日本留学中、中国の民俗学運動を日本に紹介した第一人者であった。一九二七年初に帰国し、国立中山大学法学部に就職したが、同大学の民俗学会の初期活動において重要な役割を果たし、日本民俗学との連絡役も務めていた(『中大週聞』創刊号、一九二八年一月、『民俗学』一三、一九二九年九月、同二一一、一九三〇年十一月などを参照)。

24 鍾敬文と妻子匡はともに杭州時代から中国民俗学運動の中心人物である。鍾は一九八〇年代中国民俗学が復興してから「中国の柳田国男」と言われるほどの指導者であり、妻は戦後台湾に赴いて一九七〇年代から戦前の中国民俗学関係の出版物を数多く復刻し、「中国民俗学の守護神」と言われている。

25 妻子匡「中国民俗学運動の昨日と今日」『民俗学』五一(一九三三年一月)、鍾敬文「中国民譚の型式」同五一(一九三三年十一月)、他に『民俗学』四一九(一九三三年九月)から五一二(一九三三年十二月)、『民俗学集鐫』第二輯前掲、『民間月刊』二一三(一九三二年十二月)から二一〇・一一(一九三四年)を参照。

26 『旅と伝説』一〇一から一〇四(一九三七年二月、四月)、『民間伝承』二一七(一九三七年三月)の寄贈書目を参照。
27 その前にたとえば一九八三年五月中国民俗学会が創立する大会に伊藤清司、飯倉照平、加藤千代などが出席したなど、個人的な繋がりは持っていた。林一白「中国民俗学会在北京隆重成立」中国民俗学会編『会刊』第二期、一九八四年三月、七五頁。

28 邱淑珍「柳田国男と台湾民俗学」後藤総一郎編『常民大学研究紀要』二 柳田国男のアジア認識(岩田書院、二〇〇一年所収)。

- 29 呉密察「『民俗台湾』発刊の時代背景とその性質」藤井省三他編『台湾の「大東亜戦争」―文学・メディア・文化』東京大学出版会、二〇〇二年所収。
- 30 崔吉城「日帝殖民時代と朝鮮民俗学」中生勝美編『植民地人類学の展望』風響社、二〇〇〇年所収。
- 31 最近鶴見太郎は柳田国男先生古稀記念会を取り上げている（鶴見「柳田民俗学の東アジア的展開」末広昭編『岩波講座「帝国」日本の学知 第六巻 地域研究としてのアジア』岩波書店、二〇〇六年）。当記念事業については本書の第5章で検討している。
- 32 中生勝美「植民地主義と日本民族学」中国社会文化学会『中国―社会と文化』八、一九九三年、「植民地の民族学―満洲民族学会の活動」『へるめす』五二、岩波書店、一九九四年、「民族研究所の組織と活動・戦争中の日本民族学」『民族学研究』六二―一、一九九七年、「内陸アジア研究と京都市派―西北研究所の組織と活動」中生編『植民地人類学の展望』前掲。
- 33 中生勝美「植民地人類学の射程」中生編『植民地人類学の展望』前掲、三八頁。
- 34 それ以前の著作集の試みとして「創元社選書」十七冊（一九三八―一九五一年）、実業之日本社『柳田国男先生著作集』十二冊（一九四七―一九五三年）があった。『定本』は新装版（一九六八―一九七一年）、愛蔵版（一九八〇―一九八二年）として再販され、さらにその普及版として単行本の口述筆記部分が追加されたちくま文庫版『柳田国男全集』全三二巻（一九八九―一九九一年）も発行された。
- 35 この資料は、橋浦泰雄のご遺族橋浦赤志氏が提供し、鶴見太郎氏が調査・整理したものである。その全体像について鶴見太郎「『橋浦泰雄関係文書』について」『京都文教大学人間学部研究報告』一、一九九八年。同（続）『京都文教大学人間学部研究報告』二、一九九九年を参照。
- 36 柳田国男は「帝国」と「日本」を使い分けているようである。「内地」をさす語として、後に「日本」或いは「国内」などが一般的であるが、一九三〇年代前半、「旧日本」（年中行事調査標目）の緒言『旅と伝説』七―四、一九三四年九月）や、「帝国の旧版図」（『葬制沿革史料』の緒言『宗教研究』新一一―五、一九三四年九月）などの表現も見られる（『柳田国男全集二九』所収、一三三八頁）。

第1章

- 1 渡瀬莊三郎「我國婚礼ニ関スル諸風習ノ研究」『人類学会報告』二、一八八六年三月。
- 2 各回のテーマは①各地新年の風俗、②各地贈答の風習、③各地若者の娯楽、④各地の育児習俗、⑤各地の食事、⑥各地の年中行事であった。
- 3 坪井正五郎「土俗調査より生じる三利益」『東京人類学会雑誌』九五号、一八九四年二月、一七三頁。
- 4 中蘭英助『鳥居龍藏伝・アジアを走破した人類学者』岩波書店、一九九五年。
- 5 高木敏雄「郷土研究の本領」『郷土研究』創刊号、一九一三年三月、二一―四頁。『郷土研究』は柳田国男と高木が協力して発刊したものであったが、一年後高木が退出し、柳田個人の努力で一九一七年三月(四―一二)まで刊行し、休刊を宣言した。
- 6 「本誌の任務」『民俗』創刊号、一九一三年五月、一頁。『民俗』は石橋臥波が編集したもので、坪井正五郎、医学・文学博士の富士川遊、東洋史の白鳥庫吉など錚々たる大家が名を連ねる日本民俗学会の機関誌であり、五冊しか発行しておらず、学会も活発的な活動を見せなかった。
- 7 福田アジオ『柳田国男の民俗学』吉川弘文館、一九九二年、二頁。
- 8 前者については例えば藤井隆至『柳田国男 経世済民の学』経済・倫理・教育』名古屋大学出版会、一九九五年を参照。後者に関して、「健全なナショナリズム」として評価する意見(伊藤幹治『柳田国男と文化ナショナリズム』岩波書店、二〇〇二年)と、近代日本の国民国家の成立と共犯関係を有するものとして批判する意見(子安宣邦『近代知のアルケオロジ』国家と戦争と知識人』岩波書店、一九九六年)が分かれているが、柳田が、国民国家・帝国と複雑に絡み合うナショナリズムの持ち主であることは間違いないだろう。たとえば彼は一九〇五年十月、長兄鼎と次弟静雄と故郷布佐の竹内神社に「旅順陥落之日建」と刻んだ「戦勝記念碑」を建立し、桜五百本を植樹している(柳田国男研究会編『柳田国男年譜』『柳田国男伝 別冊』三一書房、一九八八年、一三頁)。
- 9 柳田国男『故郷七十年』(『柳田国男全集』二)所収)。
- 10 柳田国男『Ethnologyとは何か』『青年と学問』所収(『柳田国男全集』四)一六〇頁)。

- 11 同前、一五九頁。
- 12 柳田国男「郷土研究といふこと」『青年と学問』前掲所収、一三四頁。
- 13 柳田国男「日本の民俗学」『青年と学問』前掲所収、一七〇頁。
- 14 柳田国男「青年と学問」『青年と学問』前掲所収、一五一―一六頁。
- 15 同前、二七―二八頁。
- 16 同前、二七頁。
- 17 柳田国男「Ethnologyとは何か」前掲、一六〇頁。
- 18 石田幹之助は始めはモリソン文庫の主任であり、一九二四年にモリソン文庫が財団法人東洋文庫となる際、その初代の主事として任命された。
- 19 石田幹之助は北京大学の民俗学関連出版物を網羅的に集め、東洋文庫で保管していたことについては何思敬「読妙峰山進香専号」(『民俗』国立中山大学語言歴史研究所、一九二八年四月)を参照。そして一九三三年一月より『民俗学』では四回にわたって、「民俗学」所載 支那の民俗学的雑誌目録 東洋文庫閲覧室に保管」として石田によって整理された中山大学の『民俗週刊』創刊号から第一一〇号まで各号(うち、計六号は欠本)の目次が載せられている。
- 20 柳田国男「交友録 エリセーフ父子」『神戸新聞』一九五八年(のち『故郷七十年』所収)、岡正雄「年譜」『異人その他』言叢社、一九七九年、石田幹之助「柳田先生追憶」『石田幹之助著作集四』六興出版、一九八六年。
- 21 何畏「支那の新中国学運動」『民族』一一五、一九二六年七月、一三一頁。
- 22 のち刀江書院より単行本として出版される(『柳田国男全集五』所収、一九一―一三三〇頁)。
- 23 柳田国男の方言論について、赤坂憲雄は詳しい検討を行い、特に方言における東西の差について意図的に言及を避けていることを指摘している(赤坂『一国民俗学を越えて』五柳書院、二〇〇二年を参照)。
- 24 一九二八年三月史学大会での講演「婚姻制の考察」を改稿したものである。初出は「史学対民俗学の一課題」という副題が付けられていた(『柳田国男全集十』所収、六二五―六六八頁)。
- 25 福田アジオは地域差を時代差に転換する比較研究法に見られた進化主義の影響を批判し、配列の根拠、多系統の可能性、変遷の理由、他の民俗事象との関連、変遷の性質などの点から、それが民俗研究に応用される際の問題点を指摘して

- いる（福田『日本民俗学方法序説』前掲を参照）。
- 26 R・モース「柳田民俗学のイギリス起源」『展望』二二〇、一九七六年を参照。
- 27 柳田国男「地方学の新方法」『青年と学問』前掲、一〇九頁。
- 28 初出『旅と伝説』一一八、三元社（『柳田国男全集十三』所収、二一九―二二〇頁）。
- 29 初出『人類学雑誌』四五―五（『柳田国男全集二八』所収、二七五頁）。
- 30 柳田国男『民間伝承論』（『柳田国男全集八』所収、一四頁）。
- 31 岡正雄訳『民俗学概論』岡書院、一九二七年、今泉忠義訳『民俗学の話』大岡山書店、一九三〇年、後藤興善訳『民俗学入門』郷土研究社、一九三二年など。
- 32 折口信夫「民俗学」『日本文学大辞典』新潮社、一九三四年。
- 33 柳田国男「郷土研究の方法」『青年カード』一九三四年十一月（『柳田国男全集二九』所収、二四一頁）。
- 34 柳田国男「郷土研究と民俗学」『肥前史談』一九三六年六月―十月（『柳田国男全集二九』所収、三八四頁）。
- 35 柳田国男『民間伝承論』前掲、八一頁。
- 36 同前、一〇三―一〇四頁。
- 37 同前、八一頁。
- 38 たとえば、柳田国男は「郷土研究の方法」（『青年カード』第三次第二部第八号、大日本聯合青年団、一九三四年十一月）では、「しかも、此の国土の中に一つの種族が行き亘つてゐることは、国として非凡であるといはざるを得ない」と述べている（『柳田国男全集二九』所収、二四〇頁）。
- 39 柳田国男『民間伝承論』前掲、四七頁。
- 40 同前、三七頁。
- 41 同前、三四頁。
- 42 柳田国男「食物と心臓」初出『信濃教育』（『食物と心臓』所収『柳田国男全集一〇』三六七頁）。
- 43 柳田国男『民間伝承論』前掲、六三頁。
- 44 同前、七二―七三頁。

- 45 同前、九七頁。
- 46 「柳田国男年譜」前掲、四〇―四二頁。
- 47 大藤時彦『日本民俗学史話』前掲、四五頁。
- 48 「柳田国男年譜」前掲、四二―四三頁。なお、他は民間伝承の会が創立されると同時に入会したのに対して坂口一雄はだいぶ遅れて『民間伝承』二一―〇（一九三七年六月）で初めて入会した。
- 49 「柳田国男年譜」前掲、四三頁。
- 50 「民間伝承採集事業説明書」『民俗学』三一八、一九三一年八月、四二八―四三〇頁。
- 51 具体的に柳田国男は五年各二ヶ月、折口信夫は五年各三ヶ月、佐々木喜善は五年各十ヶ月であった（同前参照）。なお、期待されていた佐々木は一九三三年に亡くなった。
- 52 柳田国男「採集事業の一画期」大間知篤三編『山村生活調査第一回報告書』一九三五年。
- 53 柳田国男「今日の郷土研究」『柳田国男全集』二九所収、一七九頁。
- 54 同前、一八三頁。
- 55 柳田国男『民間伝承論』前掲、四五頁。
- 56 「趣意書」比嘉春潮編『郷土生活研究採集手帖』郷土生活研究所、一九三四年。
- 57 このほか、山形、群馬、長野、岐阜、和歌山、愛媛、鹿児島などの地方研究者により、『採集手帖』に基づいた調査も行われており、『山村生活の研究』（民間伝承の会、一九三七年）では十四村をあげている。
- 58 たとえば、社会学的な観点から日本の村落調査を始めた鈴木栄太郎（一八九四―一九六六年）は、その主著である『日本農村社会学原理』（時潮社、一九四〇年）において、有名な「自然村」概念を提出し、「村の精神」を唱えているが、その基本データは『山村生活の研究』（前掲）によるところが大きい。福田アジオ「村落生活の伝統」『日本民俗学講座』二「社会伝承」朝倉書店、一九七六年を参照。
- 59 柳田国男「民俗学の三十年」初出『民間伝承』六一六、一九四一年三月（『月曜通信』所収『柳田国男全集二〇』一一二―八頁）。これは「日本民俗学の建設と普及の功により」第十二回朝日文化賞（一九四〇年度）を受賞した柳田の受賞記念講演会での挨拶である。

- 60 鶴見太郎『橋浦泰雄伝』前掲、一三九—一四〇頁。
- 61 「日本民俗学講習会記事」『民間伝承』創刊号、一九三五年九月。
- 62 柳田国男編『日本民俗学研究』岩波書店、一九三五年。
- 63 柳田国男「小さい問題の登録」『民間伝承』創刊号、一九三五年九月。
- 64 橋浦泰雄「インタビュー・柳田国男との出会い」『季刊柳田国男研究二』一九七三年。
- 65 柳田国男「郷土研究と民俗学」（一九三六年四月二〇日佐賀民俗講演会での講演、『柳田国男全集二九』所収）三八二—四〇五頁。なお、注意すべきなのは、「さうして疑惑が起つたとしても北海道や朝鮮に旅して集めねばならん事では無し、ちつともおおくふな事は無い」（四〇四頁）とあるように、研究対象には朝鮮のような植民地は勿論、北海道も含まれていなかった。
- 66 柳田国男「月曜通信——『旅と伝説』について」初出『民間伝承』一〇—三、一九四四年三月（『木思石語』所収、『柳田国男全集十三』三五—頁）。
- 67 小野博史「旅と伝説」福田アジオ他編『日本民俗大辞典』（下）吉川弘文館、二〇〇〇年、六〇頁。
- 68 萩原正徳は奄美大島名瀬村に生まれ、本業は写真製版であった。関敬吾は一九三〇年、彼の勧めと紹介で柳田宅を訪れることをきっかけに民俗学研究に転向したと回想している（関敬吾「萩原正徳さん」『日本民俗学大系八』平凡社、一九五九年、四二三頁）。
- 69 松本信広「日本民俗学界鳥瞰」松村瞭編集代表『日本民族』岩波書店、一九三五年十一月、二一—四頁。
- 70 写真などへの重視は、投稿するにあたって写真や絵葉書を添付してほしいと初期において雑誌の編輯後記などで再三注意を促していたことと、毎号大量の写真や絵図を載せていることからわかる。
- 71 柳田国男「木思石語」（五回連載、一七八—一、二二三）、「再び白米城の伝説に就きて」二一—〇、「伝説と習俗」（三一—一、二）など。のち『木思石語』（一九四二年）としてまとめられる。
- 72 「昔話新釈」（三一—四）以下、「瓜子姫説話」（三一—五）「田螺婿入譚」（三一—六）「隣の寝太郎説話」（三一—七）「絵姿女房説話」（三一—九）「昔話採集者の為に」（四—一四）「和泉式部の足袋」（四—一—）「昔話の分類について」（七—一二）「初夢と昔話」（一〇—一二）など。この中の多くはのち『桃太郎の誕生』（一九三三年）としてまとめられる。

73 十三回連載、『旅と伝説』六一三〜六、八〇〜一一、七〇〜一四。ちなみに、柳田国男の指導下で調査項目は多く作られたが、この「年中行事調査標目」はその先駆けであった。「山村調査項目」（『民間伝承』創刊号）以降、調査項目はすべて『民間伝承』で発表されていた。

74 郷土玩具の特集は創刊から一九三〇年代半ばにかけてほぼ年に一回のペースで計七回組まれており（『旅と伝説』一六、二一四、三一三、四一五、五一一、六一二、八〇八）、その中心的人物は有坂与太郎であった。

75 「編輯後記」『旅と伝説』一〇八（一九二八年八月）。

76 一九四四年十二月の『民間伝承の会会員名簿』では二二八名の会員の氏名と住所が掲載されている（成城大学民俗学研究所蔵「橋浦泰雄関係文書」所収。以下「橋浦文書」と記す）。

77 大笹吉次郎「切符の話」『旅と伝説』一〇二（一九二八年二月）七七頁。

78 「会員名簿」『旅と伝説』三一〇、一九三〇年十月。

79 一九三三年一月、日本軍は山海関を占領し、二月に熱河省を侵攻し始めた。それを受けた国際連盟は①満洲の主権は中国に属する、②現在の「満洲国」を承認しない、満洲は国際管理のもとにおくと勧告した。三月、「満洲国」不承認案に對して賛成四二・反対一（日本）・棄権一（シヤム）という総会決議の結果を不服し、日本は国際連盟を脱退した。

80 「いよいよ日支事変も大きくなつて来ました。大和民族が踏むべき当然の茨の道とあつてみれば全力を上げて突破するより外はないでせう。我々や我々の子孫を第二のエジプトや印度の境遇に墜すか墜さぬかは一つに今回の事変の結果に懸つてゐる様に思はれます。当面の敵は支那にせよその背後に○国のある事は最早常識となつてゐます（中略）軍事行動に就いては門外漢であつて見れば、我々はそれぞれの専門の方々の力に信頼して、銃後の固めを強めつつ吾々のめざす目的に向かつて邁進する事が又国家に対する責任でなければなりません」とある（「後記」『旅と伝説』一〇一九、一九三七年九月）。

81 『旅と伝説』二二一一（一九三九年十一月）七四頁、同一六一〇（一九四三年十月）二七頁。

82 藤原相之助については佐野賢治「東北民俗学からアジア民俗学へ―藤原相之助論（二）」『比較民俗学研究十七』二〇〇〇年三月、一〇一〜一二三頁を参照。

83 藤原相之助「絵姿女房につき」『旅と伝説』三一〇一、一九三〇年十一月、一八頁。

- 84 『旅と伝説』四一九、一九三二年九月、二二―二三頁。
- 85 同前、二〇頁。
- 86 藤原相之助「東方の卯生神話と南方海洋民族の伝説(一)」、同(二)『旅と伝説』一九四二年九月、十月、「大東亜民族と高天原文化」同一九四三年四月、五月、七月。
- 87 「新入会員」『民間伝承』一―二、一九三五年十月。
- 88 桑江常夫「満洲習俗娘々祭」『旅と伝説』九一九、一九三六年九月、五四頁。
- 89 桑江常夫「満洲と琉球の習俗(一)」『旅と伝説』一〇一二、四一頁。
- 90 『民間伝承』二一八(四月十日現在)の新入会員紹介では「桑江常八」とあるが、次号で「夫の誤り」と訂正された。
- 91 倉田一郎「戦時下の民俗学」『民間伝承』四一六、一九三九年三月。
- 92 川村邦光はこれについて指摘し、切り捨てられたものを改めて民俗学の研究対象とすべきだと説いている(川村「戦争と民俗/民俗学」『日本民俗学』二二五号、日本民俗学会、一九九八年を参照)。
- 93 初投稿の順で、橋浦泰雄、大間知篤三、有賀喜左衛門、鈴木棠三、最上孝敬、宮本常一、瀬川清子、高橋文太郎、倉田一郎、長岡博男、平山敏治郎、小寺廉吉、杉浦健一、能田多代子、大藤時彦、小林存、栗山一夫、山口寿々栄、大藤ゆき子、野口長義、宮本勢助、高谷重夫、角川源義、山口貞夫、関敬吾、牛尾三千夫、今野円輔、中山太郎、林魁一、山田隆夫、児玉幸多、千葉徳爾、藤間生大、沢田瑞穂、山口麻太郎、直江広治などの名前が見え、しかも数回投稿した者も多い。
- 94 『柳田国男全集三〇』所収、一七二頁。
- 95 藤井隆至「柳田国男のアジア認識」(『アジア経済』一六一三、一九七五年)、そして鶴見太郎「付録・創元社版『アジア問題講座』全十二巻の目次と執筆者・所属」(鶴見「柳田民俗学の東アジア的展開」前掲)を参照。
- 96 本庄比佐子・内山雅生・久保亨編『興亜院と戦時中国調査』岩波書店、二〇〇二年を参照。
- 97 上海日本商工会議所編『上海要覧 改定増補一九三九』一九三九年八月再版、一八九頁。
- 98 同前。
- 99 『陸軍省 陸支密大日記』S二五―二二六―二二二(防衛省防衛研究所蔵)。

- 100 『支那調査関係機関聯合会会報』一―二、一九四〇年十二月。
- 101 聯合会は独自の調査を行わなかったが、『支那調査関係機関聯合会会報』を発行し、加盟機関の連絡・調整に努めた。
- 102 研修所旧蔵記録／茗荷谷記録E一〇六、同E一〇八（外務省外交史料館蔵）。
- 103 東亜研究所は一九三八年九月、近衛文麿を総裁に企画院の外郭団体として設立され、政財界の有力者と新進気鋭の学者が結集した。敗戦に伴って解散し、その土地、建物、図書資料などは一九四六年に創立された政治経済研究所に継承され、人的資源の一部は満鉄など戦前の中国調査経験者と合流して中国研究所を設立した。柘植秀臣『東亜研究所と私―戦中知識人の証言―』勁草書房、一九七九年、原覚天『現代アジア研究成立史論―満鉄調査部・東亜研究所・IPRの研究―』勁草書房、一九八四年、江副敏生『幻の研究所―東亜研究所について―』『中国研究月報』六二〇、一九九九年十月などを参照。
- 104 慣行調査は報告書「北支農村慣行調査資料」を計一二三冊刊行したが、研究はできないまま一九四四年三月に調査班は解体を迎えた。戦後『中国農村慣行調査』全六巻が岩波書店から刊行され、その他研究者、調査者は個人研究の形で幾つの業績を見せている。内山雅生「中国史研究における実態調査と地域研究」神田信夫先生古稀記念論集『清朝と東アジア』山川出版社、一九九二年、中生勝美「『中国農村慣行調査』の限界と有効性」『アジア経済』二八―六、一九八七年七月、田島俊雄「日本人による戦前・戦後の中国農村調査」『中国研究月報』六〇〇号、一九九八年二月などを参照。
- 105 永尾龍造は東亜同文書院―満洲の師範学校―満鉄―満洲国官僚を経て一九三五年から本格的な中国民俗研究に取り掛かった。拙文「戦時下の中国民俗研究―永尾龍造の研究と『支那民俗誌』編纂刊行の背景について」(神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議編『年報 人類文化のための非文字資料の体系化』二〇〇七年三月)参照。
- 106 実際第一、二、六巻(一九四〇―四二年)を刊行したところで外務省の火事で中断され、事業再興が出来なかった。同前参照。
- 107 川村邦光「戦争と民俗／民俗学」前掲、三八頁。
- 108 小国喜弘『民俗学運動と学校教育 民俗の発見とその国民化』東京大学出版会、二〇〇一年、一一四頁。
- 109 柳田国男「アジアに寄する言葉」『柳田国男全集三〇』所収、一七五頁。
- 110 初出は『アジア経済』一六一―三。『柳田国男経世済民の学―経済・倫理・教育』前掲に加筆再録されている。

- 111 たとえば鶴見太郎「柳田民俗学の東アジア的展開」前掲、一一三—一四頁。
- 112 柳田国男「続かちかち山」『昔話覚書』所収、以下引用は『柳田国男全集十三』五八五—五八六頁。
- 113 柳田国男「学問と民族結合」『柳田国男全集三〇』所収、三二九頁。
- 114 柳田国男「比較民俗学の問題」『定本柳田国男全集三〇』所収、七二頁。
- 115 柳田国男「猿と蟹」『昔話覚書』所収（『柳田国男全集十三』五七〇頁）。
- 116 『民間月刊』二一五、二一六のエーベルハルト「伯林通信」、二一七の鍾敬文「エーベルハルト博士と中国神話を語る」、二一八のエーベルハルト「中国新年風俗志」を読む、二一九のエーベルハルト「伯林だより」、二一〇・一一合併号の「学界消息」などを参照。『民間月刊』は二一一（一九三三年十月）から中国民俗学会の名義となり、学会の中心雑誌である。二一〇・一一合併号（一九三四年四月）で停刊となった。
- 117 高木昌史編『柳田国男とヨーロッパ』口承文芸の東西』三交社、二〇〇六年三月を参照。
- 118 関敬吾本人の回想による（「中訳本序」王汝瀾・龔益善訳『民俗学』中国民間文学出版社、一九八四年）。
- 119 小沢俊夫「関敬吾」野村純一・三浦祐之・宮田登・吉川祐子編『柳田国男事典』勉誠出版、一九九八年、七六四—七六六頁。
- 120 同書はヨーロッパ中心のアアルネ・トンプソン（AT）分類と異なる、中国の昔話に即した独自の分類として今日においても中国昔話研究の基本文献として高い価値を有しているだけではなく、民族国家に即する分類の必要性と可能性を示した研究としてのちに日本、韓国での同種の分類を刺激したといえよう。
- 121 たとえば、一九三五年三月、柳田国男は「フィンランドの学問」という講演では、「どうして斯ういふ特色の多い昔話
が、世界の全面を蔽ふまでに分布して居るのか。学んだか借りたか誰が運んだか、是を説明し得るてが、りもまだ見つ
かず、しかもこの一致を以て種族の親近を推断しようとする、忽ちに世界は皆同胞となつてしまふので、是には却つて
他の証拠が附いて行けないのである」（『柳田国男全集二九』所収、二八四頁）と述べている。一九三七年六月十四日夕
方に放送された「鳥言葉の昔話」においても、「この驚くべき昔話の世界的一致は、まだ片端だけしか原因が明かになつて
居らぬ」と述べている（「放送二題」として『昔話と文学』一九三八年に収録、『柳田国男全集九』所収、四〇四頁）。

第2章

- 1 第1章の表8を参照。
- 2 川島右次・藤本槌重編『網干町史』網干町史刊行会（非売品）一九五一年、七六五―七六六頁。
- 3 『日本民俗学大系』所収、平凡社、一九五八年、三九二―三九三頁。
- 4 太田陸郎の経歴については、前述した先行研究以外、「著者略歴」（太田陸郎『支那習俗』一九四三年、三国書房）、柳田国男「太田陸郎君のこと」（『故郷七十年』所収『柳田国男全集二』）も参照した。
- 5 一九二二年四月専門学校令によって設立、当時神学部、英文科と政治経済部がある。
- 6 一九二〇年大学令によって同志社大学は大学に昇格、文学部に神学と英文、法学部に政治と経済などの学科がある。経済学科が学部として独立したのは一九四八年以降。
- 7 株式会社富島組編『株式会社富島組五十年史』一九三八年による。
- 8 一九〇三年から陸軍が姫路に第十師団を設置し、福知山工兵隊はその下の歩兵第二〇旅団第二〇連隊第十工兵大隊のことである（外山操・森松俊夫編著『帝國陸軍編制総覧』芙蓉書房、一九八七年）。
- 9 前述参考文献以外、神戸市立中央図書館（十四件）、兵庫県立図書館（九件）、国会図書館（八件）、姫路市立図書館（二件）などのデータベース、『考古学』、『旅と伝説』、『兵庫県民俗資料』、『民間伝承』、『近畿民俗』などの雑誌及び西谷勝也「兵庫県」（『日本民俗学大系十一 地方別調査研究』平凡社、一九五八年）などを参照した。
- 10 その中で太田陸郎が関係したと思われるのは、「智識階級雇用状況並卒業生就職状況調査」（社会課、一九二七年一月）、「酒造関係稼人調査」（社会課、一九二九年一月）、「奥丹後震災救援誌」（社会課内財団法人兵庫県救済協会、一九二九年六月三〇日）、「昭和一〇年現在神戸市不良住宅地区改良事業二閔スル経過概要（抜粋）」「特殊労働事情調査」（職業課、一九三八年三月）などである。
- 11 柳田国男「帰らざる同志」『山宮考』所収（『柳田国男全集十六』）。
- 12 『兵庫県民俗資料』第一輯、一九三二年五月。尚、柳田は一九三三年四月二五日、大阪朝日新聞社神戸支局会議室における兵庫県民俗研究会座談会に出席した（『柳田国男年譜』前掲、四二頁）。

- 13 「再刊にあたって」『兵庫県民俗資料』国書刊行会、一九八二年
- 14 『神戸新聞』一九三三年四月。
- 15 「二七会の記」『姫路中学校校友会会報』第九九号、一九三五年十二月。
- 16 太田陸郎「兵庫節遺存の確認によるその再検討」『兵庫県民俗資料一八』所収、一九三五年十月。
- 17 太田陸郎「但馬の親方子方制度」『近畿民俗』一四、一九三六年八月。
- 18 一九三二年八月「但馬の親方子方」(『兵庫県民俗資料四』)を発表し、一九三六年二月、「太田は目下調査中である但馬の親方、子方に関する一部蒐集資料を予報として発表」している(『兵庫県民俗研究会二月例会』『民間伝承』一六六)。
- 19 太田幸子「けんぼ梨」(『柳田国男追悼文』加茂幸男「太田資料」所収(『太田陸郎伝』私家版、一七一頁))。
- 20 第四号(十二月)に河本正義、第五号(一九三六年一月)に鷺尾三郎、福橋茂樹が入会している。
- 21 柳田国男「郷土生活の研究法」(『柳田国男全集八』二〇二頁)。
- 22 柳田国男「郷土研究と郷土教育」一九三三年十一月講演、『国史と民俗学』所収(『柳田国男全集十四』一四五頁)。
- 23 宮本常一「太田陸郎氏を悼む」(一九四二年十一月二日付)『旅と伝説』一六一二、一九四三年二月。
- 24 柴田実は一九二七年に京大の西田直二郎の講義を受ける国史や東洋史の学生によって民俗談話会が始まり、後京大民俗学会と改め、会誌『民俗叢誌』の発行を計画していたが、柳田の勧告で一九三六年大阪・兵庫の各民俗学会と協同したと回想している(柴田実「京都府」『日本民俗大系十一 地方別調査研究』一九五八年)。
- 25 桜谷忍「編集後記」『兵庫県民俗資料十七』兵庫県民俗研究会、一九三五年五月。
- 26 次号の『民間伝承』一一五に、橋浦泰雄による「編輯雑記」では、太田陸郎の注意によって訂正される旨が述べられている。
- 27 柴田実「京都府」前掲。
- 28 『近畿民俗』は休刊まで計八号が刊行されたが、柳田はその中で一一一から一一五及び二一一に、計六本も寄稿している。
- 29 宮本常一「太田陸郎氏を悼む」前掲。
- 30 「日本民俗学連続講習会」『民間伝承』二一一、二一五。

- 31 太田陸郎は一九三六年八月二四日柳田宛書簡（「橋浦文書」前掲所収）で、すでに橋浦に承諾の返事を出していると報告している。世話人の変化は『民間伝承』二一三（十一月）に公表されている。
- 32 小国喜弘の統計によると、民間伝承の会の会員の中、『郷土研究』第一期（一九一三～一九一七年）、『民族』、『郷土研究』第二期（一九三二～一九三四年）すべてに投稿していたのは、柳田以外、沢田四郎作、胡桃沢勘内、中山太郎、林魁一の四名に過ぎないという（小国『民俗学運動と学校教育』前掲、二九頁）。
- 33 宮本常一「太田陸郎氏を悼む」前掲。
- 34 「第五回談話会ニユース」『兵庫県郷土研究』一六（岩田重則編『赤松啓介民俗学選集別巻』所収、明石書店、二〇〇四年、二七八頁）。
- 35 『兵庫県郷土研究』は一九三七年二月創刊され、計二四冊発行された（同前所収）。
- 36 「第二回実地演習報告」『兵庫県郷土研究』一一二、同前所収、一二三頁。
- 37 「第五回談話会ニユース」〔会員の動静〕『兵庫県郷土研究』一六、同前所収、二七八～二七九頁。
- 38 「会員動静」『兵庫県郷土研究』二一三、同前所収、四四六頁。
- 39 「近畿民俗学会」『民間伝承』三一〇、一九三八年六月。
- 40 以下、武漢作戦や軍の動きにかんしては、防衛省防衛研究所戦史室『戦史叢書 支那事変陸軍作戦（二）昭和十四年九月まで』朝雲新聞社、一九七六年を参照した。
- 41 第十一軍参謀部「第十一軍（呂集団）作命綴」。
- 42 「漢口攻略準備ノ為遼江作戦並ニ鄱陽湖作戦ニ関スル陸海軍協定覚書」第十一軍参謀部作成『第十一軍機密作戦日誌』。
- 43 七月十九日「呂集作命第九号 軍隊区分」。
- 44 九月二三日「呂集作命第七十六号 軍隊区分」。
- 45 「呂集作命第七十六号 呂集団命令」。
- 46 沢田四郎作「太田陸郎伝」前掲による。前述した太田陸郎より柳田国男宛一九三六年八月二四日付の書簡によれば、七月末、太田は「後備少尉」として召集され、工兵隊の演習に参加していた。
- 47 加茂幸男「太田資料」前掲、一六〇頁。

- 48 柳田国男「序」『支那習俗』三國書房、一九四三年。
- 49 なお、主な内容がほぼ各章に吸収されたからか、『民間伝承』に掲載された通信は収録されていない。
- 50 一九三八年九月九日九江、十月二五日武穴鎮、三二日武昌駅、十一月十一日漢口、二〇日徳安、二三日漢口、一九三九年一月漢口など（加茂幸男「太田資料」前掲）。
- 51 太田陸郎「行軍中にみた支那習俗（一）」。
- 52 太田陸郎「行軍中にみた支那習俗（二）」の「漁業寸記」、同（二）の「網」及び「中支奥地の鵜飼」など。
- 53 太田陸郎「行軍中にみた支那習俗（一）」。
- 54 太田陸郎「行軍中にみた支那習俗（二）」。
- 55 太田陸郎「陣中花信」『支那習俗』前掲。
- 56 太田陸郎「陣中随想」『支那習俗』前掲。
- 57 太田陸郎「支那の口碑」『支那習俗』前掲。
- 58 一九四〇年三月『民間伝承』五一六の通信で、太田陸郎は漢字の一致で喜ぶことについて記している。
- 59 たとえば、前述太田陸郎「揚子江流域の魚と漁法」は一九四一年十二月に作成されたものであるが、そこですでに沢村幸夫「支那草木虫魚記」（東亜研究会、一九四一年）を参考している。その他、Common Foodfish of Shanghai by Bernard E. Read, Published by Shanghai, 1939. 木村重「世界の謎支那の川魚物語」『大陸新報』、陳嶸『中国樹木分類学』一九三七年なども参考書としてあげられている。
- 60 太田陸郎の研究は特に漁法や魚類、動植物、民具、花の習俗などについて詳細であり、その歴史の変遷や社会制度などについての記述がほとんど見られない。報告の中で多くの写真や図を盛り込ませている（本章表11を参照）のも、その一つの表れであるかもしれない。
- 61 太田陸郎「中支賞花習俗」『支那習俗』前掲。
- 62 太田陸郎「進軍中にみた支那習俗（一）」。
- 63 「太田陸郎氏の近信」『兵庫県郷土研究』三一二（一九三九年六月）、前掲、五五三頁。
- 64 太田陸郎「金陵棲霞山仏教美術と六朝遺物」『支那習俗』前掲。

- 65 太田陸郎「音信一束」『民間伝承』八―五、一九四二年九月。
- 66 太田陸郎「会員消息」『民間伝承』六一―三、一九四〇年十二月。
- 67 太田陸郎「会員消息」『民間伝承』六一―四、一九四一年一月。
- 68 橘文策はこけしの研究家で『民間伝承』五一―一によれば一九三九年八月五日に満洲国通信社に入社した。
- 69 山田隆夫「日本民俗学展覧会記録」『旅と伝説』一三一―一、一九四〇年一月。
- 70 橋浦泰雄「紹介と批評」『民間伝承』九一―八、一九四三年十二月。
- 71 柳田国男「婦らざる同志」前掲、二二―八頁。

第3章

- 1 守随一は戦中に亡くなったことに加えて著作や発表された文章も多くなり、彼についてまとまって取り上げたものは管見の限り、最上孝敬「守随一君」(『日本民俗学大系三』平凡社、一九五八年、三四―五頁)と『柳田国男伝』での記述(前掲、八二―一八二―四頁)以外見当たらない。
- 2 一九二三年作、吉田信俊作曲。
- 3 佐々木彦一郎は秋田県鹿角郡花輪の生まれで、東京帝国大学で地理学を専攻し、同大学地理学教室の助手、講師となる。柳田国男に師事して地理学と民俗学を結びつく分野を開拓した。小田島興三「噫! 佐々木彦一郎兄」(一九三六年十一月三〇日付)『鹿友会誌』第三九冊、佐々木梅『佐々木彦一郎…遺稿と追憶』白猫社一九三八年。大間知篤三「佐々木彦一郎君略伝」『日本民俗学大系四』平凡社、一九五九年などを参照。
- 4 H・スミス著、松尾尊兌・森史子訳『新入会の研究―日本学生運動の潮流』東京大学出版会、一九七八年、四九―一五〇頁。
- 5 酒井正文『先駆』時代の活動』中村勝範編『帝大新入会研究』慶応義塾大学出版会、一九九七年、一一〇―一二二頁。少年中国学会について呉小龍『少年中国学会研究』上海三聯出版社、二〇〇六年を参照。
- 6 H・スミス『新入会の研究』前掲、一五―九頁。

- 7 鶴見太郎「柳田民俗学と東大新人会―大間知篤三を中心に―」『史林』七七―四、一九九四年七月参照。
- 8 新入会ではこのような研究が盛んであったことに關してたとえばスミス『新入会の研究』前掲、一一五―一二二頁を参照。
- 9 橋浦泰雄「冥途の報告待っている」『大間知篤三著作集月報二』未来社、一九七五年九月、一頁。
- 10 H・スミス前掲を参照。
- 11 鶴見太郎「柳田民俗学と東大新人会」前掲を参照。
- 12 同前、九六―九七頁。
- 13 鶴見太郎「柳田国男とその弟子たち」前掲、九一頁。
- 14 守随一の父親の啓四郎は柳田国男と一高の同級生で、東京帝国大学を経て住友銀行に就職したが、守随はその關係で十代の頃から柳田のところへ出入りしていた（『柳田国男伝』前掲、八二―八三頁）。
- 15 大間知篤三「倉田一郎君の思い出」『日本民俗学大系二』平凡社、二七八頁。
- 16 橋浦泰雄「インタビュ―柳田国男との出会い」前掲によれば、守随一が満洲に赴いた後、大藤時彦は鎌倉に移っており、大間知篤三は家が狭いから、雑誌の編集も会の事務所も久我山にある自分の家が利用されるようになったという。
- 17 これは単独で行った調査の記念すべき第一弾で、大間知篤三の愛着も大きく、のちに日本での調査をまとめた著作に『神津の花正月』というタイトルを付けた。
- 18 大間知篤三は一九三六―三八年の間、第五〇回、五五回、六五回、七五回と第九四回木曜会で発表した。なお守随一は第六〇回と第七七回で発表している（『民間伝承』各号による）。
- 19 最上孝敬「神津の花正月」『追悼特集』一〇八一―一〇九頁。
- 20 大間知篤三「隠居」について（『大間知篤三著作集二』未来社、一九七五年所収、五一頁）。
- 21 その最初は『民間伝承』一―二の「紹介と批評」である。そこで大間知は全国山林会聯合会による『第一回山村実態調査報告書』（一九三五年三月）を「全国から十二山村を選定し、昭和八年以来の各村総合調査と世帯調査の一篇に分ち、夫々細部に互つた広汎な調査書である」と紹介している。
- 22 たとえば、大間知篤三は『民間伝承』三一―四（一九三七年十二月）で「独逸民俗学会の一斑」として国際民俗協会機関

誌「フォーク」第二号（一九三七年八月）フォン・ヘルベルト・ベルマンによる「独逸民俗学の諸組織」の概略を紹介している。守随一は三一九（一九三八年五月）に「独逸に於ける質問要項」としてマイヤーとヘルボークが整理した民俗地
図作成のための質問要項十項目の中から死と埋葬に関連するものを紹介している。

23 関敬吾も会員で接待係の仕事を担当し、四月二日の午後に発表を予定されていたが、とりやめられた。なお、参加会員名簿の中に民俗学関係者が多く、会員外聴講者として郭沫若、錢稻孫、シュミット、最上孝敬、直江広治、萩原正徳などの名前が見られる。

24 たといえば、宮本常一も建国大学の助手として満洲へ行くことを真剣に考えていたが、渋沢敬三のサポートで国内に留まった（宮本「民俗学への道」初出一九七四年、『宮本常一著作集四二 父母の記／自伝抄』所収、未來社、二〇〇二年、二〇九頁）。

25 満鉄調査部については、小林英夫「満鉄「知の集団」の誕生と死」吉川弘文館、一九九六年、末広昭「アジア調査の系譜―満鉄調査部からアジア経済研究所へ」末広編『岩波講座「帝国」日本の学知六 地域研究としてのアジア』前掲などを参照。

26 最上孝敬「木曜会創設当時の大間知篤三」『大間知篤三著作集月報一』一九七五年一月、二頁。

27 二月二五日付、「熱河丸船室にて記す」とある。『大間知篤三著作集一』前掲所収、五〇頁。

28 現在、確認できた岡川栄蔵の著作は『邦人農家労働調査報告』大連・満鉄経済調査会、一九三四年、岡川・春原孝平『邦人移民農家経済調査報告』（経調資料第八号満洲移民経済調査第二輯）満鉄経済調査会、一九三五年、「満洲農業移民と科学」『満洲特産月報』三一七、一九三八年、『満洲開拓農村の設定計画』（未開地拓植計画の研究 第一輯）竜文書局、一九四四年などがある。

29 一九三六年一月九日、満鉄経済調査会、衛生研究所、奉天の医大、満洲国文教部、関東州庁等からの共同調査員一行二人が「科爾沁右翼後期（旗か―筆者注）腰四不奎」という蒙古部落の調査が行われ、岡川もその一人であった（桑江常夫「満洲と琉球の習俗（二）」『旅と伝説』一〇一三、一九三七年三月）。

30 のち東京支社業務課、調査室を経て一九四二年十二月から北滿経済調査所所長兼ハルビン図書館長になる（中西利八編『満洲紳士録』満蒙資料協会蔵版一九三七年昭和十二年版、二二七〇―二二七一頁、一九四〇年第三版、五三九頁、一九

四三年第四版、四六〇頁を参照した。

31 山根幸夫『建国大学の研究―日本帝国主義の一断面』汲古書院、二〇〇三年を参照。

32 建国大学刊『建国大学要覧 康徳八年度』一九四一年七月（日本常民研究所蔵民族学振興会蔵書）。

33 大森志郎「大間知君の満洲」『大間知篤三著作集月報一』前掲三頁。

34 このことは『民間伝承』四一八（一九三九年五月）にも報じられている。

35 大森志郎「大間知君の満洲」前掲、四頁。

36 牧田茂の回想による。鶴見太郎「柳田国男とその弟子たち」前掲、二二六頁を参照。

37 引用は柳田国男「続かちかち山」（一九三九年一月）『柳田国男全集』十三、五八六頁。

38 大間知篤三の区分は「ダウル族巫考」『大間知篤三著作集六』所収、一七五―一七六頁を参照。

39 石堂清倫は大間知篤三が満洲に来てまず自分の所に二晩泊まり、そのとき満洲族の研究をするためにシロコゴロフの著作を集めたいと頼まれ、満鉄調査部資料室と大連図書館から借り出して大間知に持たせたと回想している。石堂「大間知君の思い出」『大間知篤三著作集月報六』一九八二年二月、二頁。

40 シロコゴロフ「緒論」『満洲族の社会組織』大間知篤三訳、『大間知篤三著作集六』所収、二八二頁。

41 小熊勢記「満洲時代の大間知先生」『追悼特集』前掲、一二六頁。

42 初出『アジア問題講座九 社会・習俗篇』一九三九年九月、『大間知篤三著作集六』所収。

43 大間知篤三「ホロンバイルの民族と宗教」（一九四四年一月）『大間知篤三著作集六』所収、一三〇頁。

44 『建国大学要覧』前掲、二八頁。

45 上野和男「大間知篤三―その研究と方法」前掲、二二六頁。

46 竹田聴洲「解説」『大間知篤三著作集六』前掲、五四九―五五二頁。

47 大間知篤三「民族学と民俗学」『満洲民族学会会報』一一一（一九四三年七月）一―三頁。なお、『満洲民族学会会報』一一一は二つあり、創刊号は五月、この七月号は事実上の第二号であった。

48 福田アジオ「常民概念と民俗学」（『日本民俗学方法序説』前掲所収）を参照。

49 『民間伝承』五一―（一九三九年十一月）に「十日の予定で京城、平壤へ参りました。京城帝大の宗教学社会学の研究

室を見せて貰ふことが一番大きな目的であります。秋葉、赤松両先生にもお会いして種々嬉しく思ひました」と京城からの大間知篤三の通信が載せられている。

50 全京秀「植民地の帝国大学における人類学的研究」岸本美緒編『岩波講座「帝国」日本の学知 第三卷 東洋学の磁場』岩波書店、二〇〇六年、一一〇—一二三頁、竹田旦「解説」前掲、五四四頁。

51 一九四一年七月に軍医として満洲に赴いた沢田四郎作は「私も渡満してからは、シヤーマンやオロツチヨンに興味をもつようになったと述べている（沢田「満洲の頃の思い出」『追悼特集』前掲、一二一頁）。

52 大間知篤三「訳者序文」『満洲族の社会組織』（大間知篤三著作集六）所収、二六五頁。

53 「木曜会」『民間伝承』七—三（一九四一年十二月）。

54 一九四三年まで五本しかなく、新聞での短文や連載が主であった。内訳は『満洲日々新聞』三本、『東京日日新聞』、『觀光東亜』、『ひだびと』各一本であった（『著作目録』『大間知篤三著作集六』所収による）。

55 大間知篤三「黒竜江紀行」『東京日々新聞』一九四一年六月（『大間知篤三著作集六』所収、六〇頁）。

56 同前、六〇頁。

57 同前、六一頁。

58 大間知篤三「大藍旗屯の信仰」一九四四年六月、未発表（『大間知篤三著作集六』所収）。

59 同前、六三頁。

60 関景春は大間知篤三に神棚の祖宗匣を下ろして神位と神名を教え、貴重な宗族の祭祀規則や族譜を見せて写させ、さらに白日祭祖、夜間祭神、院心祭天三部構成の大事な宗族祭祀に参加させ、それが終わった後、満洲語による祭文も贈ったという。同前参照。

61 畢光遠は、かつて名著『松花江下流のホチヨ族』を著した凌純声が一九三〇年に調査していた際の案内役であり、凌が南京に戻ってからも二〇余万字の報告を送っていた。大間知篤三は約十日、毎日彼から話を聞いていたという。大間知篤三「魚皮を纏いし人々」『芸文』一九四三年七月（『大間知篤三著作集六』所収）。

62 同前、七〇頁。

63 大間知篤三「民族篇 二満洲族」『満洲風土記』満洲日報奉天支社、一九四四年（山下晋司・中生勝美他編「アジア・

- 太平洋地域民族誌選集」三三所収、クレス出版二〇〇二年）一五頁。
- 64 大間知篤三「魚皮を纏いし人々」前掲、七七頁。
- 65 大間知篤三「ホロンバイルの民族と宗教」（『大間知篤三著作集六』所収、一一七頁）。
- 66 大間知篤三「満洲の民族呼称」『建国大学研究院月報』一九四三年十月（『大間知篤三著作集六』所収、一五九頁）。
- 67 大間知篤三「ダウール族巫考」（『大間知篤三著作集六』所収、一七五―一七六頁）。
- 68 同前、二一七頁。
- 69 大間知篤三「民族篇 六蒙古族」『満洲風土記』前掲、三二頁。
- 70 同前、三〇頁。
- 71 大間知篤三「民族研究所の必要」（『大間知篤三著作集六』所収、一四九頁）。
- 72 大間知篤三「民族篇 六蒙古族」前掲、五一頁。
- 73 小寺融吉「満洲と朝鮮」『旅と伝説』一九三〇年一月、一〇―一一頁。
- 74 『建国大学要覧』一九四一年前掲、坂東勇太郎「建国大学教授大間知篤三先生」『追悼特集』一二七―一二九頁。坂東は樺太生まれ、大泊中学校卒業、当時は建国大学の二期生であった。なお、坂東は大間知が「専門の民俗学を教えられた」と記しているが、正式の科目名は民族学であった。
- 75 大間知篤三「屯長訪問記」『満洲日日新聞』一九四一年五月（『大間知篤三著作集六』所収、一三三頁）。
- 76 大間知篤三「新京南郊探訪記」初出「觀光東亜」一九四一年七月（『大間知篤三著作集六』所収、五三頁）。
- 77 同前、四三頁。
- 78 大間知篤三「土地神覚書―屯の宗教的性格の分析のために」初出『建国大学研究院月報』一九四三年五月（『大間知篤三著作集六』所収、二六頁、「漢族巫素描」『書光』一九四三年七月（同、三三頁）。劉沛泉はホチヨ族調査の時も通訳であった（魚皮を纏いし人々）前掲、七一頁。劉は吉林生まれ、ハルピン兩級中学卒業、政治学科専修であった。泉水巖は岡山生まれ、旅順中学校卒業、文教学科専修。（『建国大学要覧』一九四一年前掲、六〇、六二頁）。
- 79 大間知篤三「土地神覚書」前掲、二一―二四頁より整理。
- 80 同前、二二頁。

- 81 初出『日本家族制度の研究』、「家についての覚書」と改題して『大間知篤三著作集六』に所収、四四―四六頁。
- 82 大間知篤三「神社奉祀の問題」初出『滿洲日日新聞』一九四四年二月（『大間知篤三著作集六』所収、一三七頁）。
- 83 大間知篤三「南屯迎春譜」未発表（『大間知篤三著作集六』所収、九二―九三頁）。
- 84 大間知篤三「民族学と民俗学」前掲、二頁。
- 85 村岡重夫「民族学と農村実態調査」『滿洲民族学会会報』創刊号、十二頁。
- 86 山根順太郎（一九〇三年〜？）は一九二九年大阪外国語学校蒙古古語学部卒業、興安東省布特哈旗代理参事官、蒙古政府
 沽源県顧問、滿洲国蒙政部調査科などを経て一九三九年六月から現職についた（中西利八編『滿洲紳士録』前掲、一九四
 ○年第三版、三六八頁、一九四三年第四版、一三四四頁を参照した）。
- 87 『民間伝承』六一六（一九四一年三月）大間知篤三と大山彦一による通信を参照。
- 88 板垣守正の「滿洲民族学会の設立」『滿洲民族学会会報』創刊号、及び大山彦一「社会学と民族学」同二―二のによる。
- 89 中生勝美「植民地の民族学―滿洲民族学会の活動」前掲、一三八頁。
- 90 「會員名簿」『滿洲民族学会会報』一―三、一九四三年十一月。
- 91 岡正雄「現代民族学の諸問題」『民族学研究』新一一、一九四三年一月。
- 92 創刊号に載せられている会長神尾式春による「当来の民族学―会報発刊の辞に代えて」で『民族学研究』に載せたこの
 岡正雄の講演にふれ、共鳴を示している。
- 93 たとえば、「土地神覚書―屯の宗教的性格の分析のために」『建国大学研究院月報』一九四三年五月、「民族学と民俗学」
 『滿洲民族学会会報』一九四三年七月、「漢族巫素描」『書光』一九四三年七月、「滿洲の民族呼称」『建国大学研究院月報』
 一九四三年十月、「ホロンバイルの民族と宗教」一九四四年一月講演、「ダウール族巫考」『建国大学研究院月報』四一、
 一九四四年七月など（『大間知篤三著作集六』所収）。
- 94 大間知篤三「文献紹介」『滿洲民族学会会報』一―一（一九四三年五月）、十四頁。

第4章

- 1 直江広治「あとがき―民俗学と私」(一九八七年六月)『民間信仰の比較研究―比較民俗学への道』吉川弘文館、一九八七年所収、三八四頁。
- 2 一九三五年の中島哲夫、一九三八年の久長興仁に次いで金関丈夫は台湾における三番目の入会者であった。
- 3 有馬真喜子「直江広治氏―筑波大学教授(ひと)」『季刊人類学』一〇一三、京都大学人類学研究会、一九七九年、一三八―一四七頁。
- 4 北見俊夫「直江広治先生と民俗学」筑波大学歴史・人類学系『歴史人類一〇 直江広治先生退官記念集』一九八二年三月、三一―二頁。
- 5 直江広治『民間信仰の比較研究』前掲所収、三七九―三九八頁。
- 6 直江広治「柳田先生の思い出―民俗学研究所を中心として」播磨学研究所編『再考 柳田国男と民俗学』神戸新聞総合出版センター、一九九四年十二月所収、二〇三―二二五頁。
- 7 鶴見太郎「柳田民俗学の東アジア的展開」前掲、一二二―一二六頁。
- 8 直江広治「あとがき―民俗学と私」前掲、三八〇頁。
- 9 直江広治「まえがき」(一九六七年二月)『中国の民俗学』岩崎美術社、一九六七年、一頁。
- 10 最近、田中正明編『柳田国男の絵葉書―家族にあてた二七〇通』(晶文社、二〇〇五年)が出版され、『国外編』(大正六年)にこの「台湾支那旅行」の旅先よりの書簡、絵葉書計二七通が収録され(一五一―一八一頁)、「柳田国男年譜」(前掲、一三三頁)の記述と照合し、具体的な日程や活動が確認できた。三月下旬の台北、基隆の滞在を経て柳田国男は四月十一日に厦門より上陸し、十四日に香港に着き、翌日から広東を旅行し、二五日に香港に戻り、二九日香取丸にて上海に出発し、五月二日に到着。五月七日に南京、九〇十三日に漢口、大冶、十四〇二〇日に北京を旅行した後天津、濟南、青島、大連、奉天、京城を経て六月二日に帰宅した。
- 11 柳田国男「六十余日の旅を了へて」『東京日日新聞』一九一七年六月四日付(『柳田国男全集二五』所収、二三三五頁)。
- 12 直江広治「まえがき」前掲、二頁。

- 13 直江広治「あとがき―民俗学と私」前掲、三八二頁。
- 14 『民間伝承』四一七に詳しい。講師陣は柳田国男、折口信夫、金田一金助をはじめ、大藤時彦、関敬吾、橋浦泰雄など木曜会の先輩がいた。
- 15 直江広治「あとがき―民俗学と私」前掲、三八二―三八四頁。
- 16 江馬三枝子は一九三六年九月に民間伝承の会に入会し、当時『ひだびと』を主宰していた。
- 17 この二冊は創元中国叢書の第三、四冊目であった。最初の二冊はは胡適の『四十自述』と豊子愷の『縁々堂隨筆』であり、ともに吉川幸次郎訳。
- 18 直江広治「あとがき―民俗学と私」前掲、二八二―二八三頁。
- 19 柳田国男「学問と民族結合」『柳田国男全集三〇』、三二八頁。
- 20 直江広治「柳田先生の思い出―民俗学研究所を中心として」前掲、二〇九頁。
- 21 一九四一年七月十二日付橋浦宛葉書による（「直江広治書簡」所収）。「直江広治書簡」（以下、「直江書簡」とは橋浦泰雄が残した個人資料の中に入っていた直江広治より橋浦や柳田宛の葉書、書簡、電報など計十二通（一九四一年十一月―一九四五年一月）を指す。尚、この資料の利用は鶴見太郎、直江千鶴子両氏のご好意による。
- 22 直江広治「会員消息」『民間伝承』六一―一、一九四一年八月。
- 23 「直江書簡」によると、一九四一年十一月『西讃岐昔話集』（武田明編、香川県立丸亀高等女学校郷土研究室、一九四一年六月）、一九四三年六月『民間伝承と家族法』（橋浦泰雄、日本評論社、一九四二年十二月）が送られている。
- 24 「直江書簡」によると、直江は一九四二年四月に『石神問答』（柳田国男、創元社日本文化名著選一、一九四二年）、菅江真澄（創元社創元選書、一九四二年三月）、一九四二年十一月に『日本民俗学入門』（柳田国男・関敬吾、改造社、一九四二年八月）、『増補風位考資料』（柳田国男編、明世堂、一九四二年七月）、『国語と民俗学』（倉田一郎、青磁社、一九四二年七月）、一九四三年十月に『民俗探訪』（橋浦泰雄、大阪六人社民俗選書、一九四三年）をそれぞれ購入している。
- 25 直江広治「北京東郊の民俗」（初出「ひだびと」一一一―一〇、一九四三年十月、『中国の民俗学』前掲所収、一九七頁）。
- 26 沢田瑞穂「縁起」（一九六五年七月）沢田編『燕趙夜話―探訪華北伝説集―』采華書林、一九六五年、一一九頁。
- 27 直江広治「宛平県河北村探訪記」（『中国の民俗学』前掲所収、二二三頁）。

- 28 華北農村慣行調査の本調査は一九四〇年十一月から一九四三年まで行われ、最終的な調査地は華北四村落、山東二村落、すなわち河北省順義県、饒城県、昌黎県、良鄉県（附静海県）、山東省歴城県、恩県であった。
- 29 『民間伝承』八一―（一九四三年三月）新入会員の「中華」項に再び「山本斌」の名前が見られ、重複だと思われる。生田中庸は一九四三年時点で東方民俗研究会の会員であり、民風会のメンバーであったと思われる。所属は一九四三年十月当時開瀾炭鉱唐山出張所であり、一九四四年十二月、華北総合調査研究所に変わった（『東方民俗研究会一覽』一九四三年十月、「民間伝承の会会員名簿」一九四四年十二月、ともに「橋浦文書」による）。
- 30 「直江書簡」所収。
- 31 一九四二年七月十二日直江広治より橋浦泰雄宛書簡では「歳時記わざわざ『民族学研究』に御廻送下され感謝致します。及川氏より御紹介あり、御返事を出して置きました」と記されている。なお、橋浦は日本民族学会の会員であり、『民族学研究』六一三（一九四〇年十一月）に「南洋諸島の産育習俗」を寄稿している。
- 32 「食・九〇 見・九〇 山一・七〇 居一・〇〇 送（書留）・八〇 会二・〇〇 七・三〇 代金請求中（山本氏へ）」という書込みによって判断した（図14参照）。なお「山」は『山村生活の研究』も考えられるが、『民間伝承』八一―（一九四二年五月一日印刷）の「本会発行及び取扱図書目録」の定価によって『分類山村語彙』であるべきだと判断した。
- 33 『炭焼日記』一九四四年四月一日に「北京の山本斌君来、直江君紹介」（『柳田国男全集二〇』所収、四八七頁）とある。
- 34 直江広治『中国の民間伝承』前掲、二四五頁。
- 35 『折口信夫全集三六』所収、中央公論社、一〇七頁。
- 36 二五二番〜二五九番、同前所収、一九八一〜二〇〇頁。
- 37 阿部正路・芳賀日出男「折口信夫の中国行」芸能学会編集委員会編『年刊芸能』三号、一九九七年三月。
- 38 一九四一年十二月皇典講習所華北総署の月刊機関誌『惟神道』が創刊され、一九四二年二〜四月号に折口信夫の「古代人の信仰」を載せている。『民間伝承』八一三（一九四二年七月）に『惟神道』創刊号から四月号が受贈したとある。民俗学関連の文章は外に石橋丑雄「祖師信仰に就て」（創刊号）、「支那の沐浴儀礼と禊祓」（二月）、武田熙「中国回教序説」（三月）、村田治郎「閔帝廟祭祀の一考察」（四月）がある。定価月五〇銭、発行は北京市外四区広安門大街とある。なお

- 一九四三年六月の『民間伝承』九一二にも『惟神道』寄贈の情報があつた。
- 39 「五日がかりで北京に到着、相当疲れました(中略)いろいろ見学で、なかなか寝る間も乏しいほどです」とある。
- 40 沢田瑞穂『中国の民間信仰』工作舎、一九八二年、五五一―五五二頁。
- 41 同前、五五二頁。
- 42 中法漢学研究所は、一九四一年十月、駐中国フランス大使コスモー(H. Cosma)の主宰で、旧中法大学の敷地に設置されたものである。一九二〇年に創設された中法大学は北京占領後、軍側の弾圧によって一九三八年に閉校となり、北京における文化活動機関として設置されたのがこの中法漢学研究所である。研究所は民俗組、語言歴史組、通検組、図書館からなっており、主任研究員は楊堃で、民俗組に傅芸子、傅惜華などがいた。研究所機関誌は中国語とフランス語による『漢学』で、一九四四年に第一輯を発行した。民俗関係では楊の研究や、研究所常務理事デュボスク(一九〇三年、Mdubosc)のコレクションを中心とした「神馬」、「年画」の蒐集整理、そして一九四二年七月に行われた「民間新年神像図画展覧会」などがあげられる(『漢学』第一輯、一九四四年などを参照)。
- 43 沢田瑞穂「縁起」前掲。
- 44 早川孝太郎は「会員消息」で「十月八日に東京を立つて朝鮮と満洲に参りました。朝鮮では平安北道の満浦鎮といふ山村に参り、そこから鴨緑江に沿うて、約九十里を下り、昨日新義州に出で、そのまま奉天市に参りました。これよりハルピンを廻り、牡丹江から北鮮に出で、十一月はじめに京城にかへり、十一月十七日頃東京にかへります」と報告している(『民間伝承』六一三、一九四〇年十二月)。早川が農村更生協会の囑託となつたのは一九三六年五月であつたが、すでに満洲移住協会が一九三五年に設立され、満洲移民が次第に「農山漁村更生運動」の焦点の一つとなつていた。一九四〇年のこの旅もそれを背景にしているのだろう。
- 45 日本地学史編纂委員会・東京地学協会編「日本地学の展開(大正十三年～昭和二〇年)〈その二〉―「日本地学史」稿抄―」『地学雑誌』一一〇―三三、二〇〇一年、三三六―三三九二頁。
- 46 直江広治「あとがき―民俗学と私」前掲、三八六頁。
- 47 宮本敏行『山西學術紀行』新紀元社、一九四二年、一三頁。
- 48 宮本敏行「第一次山西學術調査研究団の編制及行程」朝日新聞社東京本社『山西學術探検記』一九四三年所収。

- 49 植物分類地理学会編『植物分類・地理』四〇―五・六、一三三―一四六頁。
- 50 華北交通株式会社は日本が占領した華北地域の鉄道、バス業務を管理するために一九三八年に創立された国策会社であった(華交互助会編『華北交通株式会社史』一九八四年)。「北支」は一九三九年六月に創刊され、国内では現在五一号(一九四三年八月)まで確認できた。
- 51 直江広治「あとがき―民俗学と私」前掲、三八八頁。
- 52 たとえば、鶴見太郎「柳田国男とその弟子たち」前掲、一八一―一八二頁にもそれに関する指摘がある。
- 53 のち、このひと夏の調査結果である報告書は印刷中空襲で焼失してしまったという(『石田英一郎全集四』筑摩書房、一九七〇年、四九頁)。
- 54 同前、五一頁。
- 55 一九四二年十一月十一日柳田国男宛書簡(直江書簡)所収。
- 56 以下、輔仁大学について多くは『北平私立輔仁大学檔案(一九二五―一九五二)』(以下「輔仁檔案」と記す)による。一九二五年の大学創立の準備作業から、一九五二年到北京師範大学に合併されるまでの学校の公式記録が、解放前(一九四八年まで)と解放後(一九四九年以降)に分けて保管されている。とくに解放前の資料は、総類二三卷、人事類六九卷、教学教務類五四四卷、政治類六五卷、総務財務類二二卷、付属学校関係二八卷、年刊同学録など三七卷と資料三三三卷という膨大な数に上っている。なお、解放後に関しては総類二七卷、人事類二五卷、教学教務類六三卷、総務財務類二四卷、付属学校関係七卷などの資料がある。戦前中国における教会大学の概況および輔仁大学の沿革については拙文「教会大学と日中戦争―『北平輔仁大学檔案』から見た戦時下の学生収容」(『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化三』神奈川大学21世紀COEプログラム、二〇〇六年三月)を参照。
- 57 神言会は一八七五年にドイツ人によってオランダで設立されたカトリック団体で、文学名著の印刷、教会での高等教育などに力を入れ、一九三七年には九〇〇〇人規模の信者がいた。
- 58 拙文「教会大学と日中戦争―『北平輔仁大学檔案』から見た戦時下の学生収容」前掲を参照。
- 59 外務省資料H一六二一〇―二六二〇二二「寄贈品関係雑件第二十二卷 一八、輔仁大学二函書寄贈」による。
- 60 「輔仁檔案」巻五八。

- 61 北京大使館より外務大臣宛機密第六二三号電、外務省資料H一六一二〇一二六一〇二二、前掲所収。
- 62 「輔仁檔案」卷六二。
- 63 一九三九年五月、細井次郎は輔仁大学図書館に日本関係図書の寄贈と、日本語が優秀な学生への賞品としての辞書の提供を大使館に頼んだが、諸事情で成り得なかった(外務省資料H一六一二〇一二六一〇二二、前掲)。
- 64 終戦後辞表を出した細井次郎に対して、九月五日、校長陳垣がわざわざ書簡を出した。そこで七年間の校務に対する貢獻に感謝し、辞職に関しては当面一年間休暇を与える形にし、期間満了後戻ってほしいと述べている(「輔仁檔案」卷六九)。
- 65 「輔仁檔案」卷四二。校務長の事務補助として秘書が置かれたが、首席秘書という職はなかった。太平洋戦争勃発後、初期の書類ではまだ校務長首席秘書のサイン欄が印刷されておらず、手書きで追加されている。この職が新設された以降、すべて重要書類に必ず校務長首席秘書のサインが必要であった。
- 66 「輔仁檔案」卷三〇二一。
- 67 八卷澄江は当時二八歳、日本東京女子大学卒業(「輔仁檔案」卷五九)。
- 68 嶋美恵子は当時二六歳、東京私立聖心女子学院高等専門学校国文科卒業、日本文部省国語科師範学校及び中等学校教員(「輔仁檔案」卷六〇)。
- 69 渡辺善次は上智大学哲学科卒業(「輔仁檔案」卷六一)。
- 70 一九四二年十一月十一日柳田国男宛書簡では直江広治は「細井先生は(中略)東京では先生の所に是非お伺ひすると申して居りました」と伝えている(「直江書簡」所収)。
- 71 一九四四年七月三日橋浦泰雄宛書簡(「直江書簡所」所収)。
- 72 『柳田国男全集二〇』所収、五一五頁。
- 73 「輔仁檔案」卷六九に収録されている。
- 74 「輔仁檔案」卷一五九。
- 75 顧頡剛(歴史研究所研究員)、白寿彝(北京師範大学歴史系教授)、容肇祖(哲学研究所研究員)、楊堃(中央民族研究所研究員)、楊成志(中央民族学院教授)、羅致平(民族研究所研究員)、鍾敬文(北京師範大学中文系教授)の七名である。

る。

- 76 中国民俗学籌委会編『会刊』、一九八二年十二月、七六頁。
- 77 中国民俗学会編『会刊』第二期、一九八四年三月、六八、八〇頁。
- 78 そこで日本民俗学の發展を準備期（二八八六～一九〇六年）、『郷土研究』時期・発足期（一九〇七～一九二四年）、『民族』時期・確立期（一九二五～一九三三年）、木曜会時期・發展期（一九三四～一九四五年）、民俗学研究所時期・再建期（一九四六～一九五七年）、柳田国男死去以降（一九六二年～）との六時期に分け、それぞれの主な活動と業績を概観している。中国民俗学会秘書組編『民俗工作通訊』第一期、一九八四年六月、一～三頁、及び張紫晨編『民俗学講演集』書目文献出版社、一九八五年、一二七～一四七頁を参照。
- 79 後藤興善著・王汝瀾訳『民俗学入門』中国民間文芸出版社、一九八四年六月。
- 80 関敬吾編、王汝瀾・龔益善共訳『民俗学』中国民間文芸出版社、一九八六年六月。
- 81 「輔仁檔案」卷四四。
- 82 趙衛邦は輔仁大学大学院史学科卒、一九四二年から研究員となる。
- 83 一九四二年から許道齡（北京大学史学部卒）に変わる。
- 84 一九五二年以降、中国語の誌名がなくなり、出版元もSVD Research Institute（東京、一九五三～五六六年）、神言会（東京、一九五七～六二年）と変わり、一九六三年以降やまに『Asian Folklore Studies』（東京：Society for Asian Folklore、一九六三～七二年→名古屋：Asian Folklore Institute、一九七三年～）と改名した。エーデルは一九八〇年四月二七日に日本で亡くなり、その蔵書は戦後、彼が所員を務めていた南山大学人類学研究所に寄贈された。なお、『Asian Folklore Studies』は同研究所に受け継がれ、いまでも年二号出版されている。拙文『民俗学誌（Folklore Studies）について』『非文字資料研究十一』神奈川大学21世紀COEプログラム、二〇〇六年三月を参照。

第5章

- 1 柳田国男研究会編『柳田国男研究資料集成十八』所収、日本図書センター、一九八九年、一一七～一三八頁。

- 2 前記、藤井隆至「柳田国男のアジア認識」が『柳田国男経世済民の学―経済・倫理・教育』（前掲）に収録される際、表題が『比較民俗学』の政治思想「太平洋戦争下のアジア意識」と改められている。
- 3 鈴木満男「東アジア世界からみた柳田学」『柳田・折口以降・東アジアにおける《民俗》のトポス』世界書院、一九九一年。
- 4 たとえば、直江広治『民間信仰の比較研究』前掲、桜井徳太郎『桜井徳太郎著作集七 東アジアの民俗宗教』吉川弘文館、一九八七年、下野敏見『東シナ海文化圏の民俗・地域研究から比較民俗学へ』未来社、一九八九年、竹田旦『祖先祭祀と死霊結婚』人文書院、一九九〇年など。
- 5 鳥越皓之「柳田国男の比較民俗学の論理構造」竹田旦編『民俗学の進展と課題』所収、国書刊行会、一九九〇年。
- 6 川村湊『大東亜民俗学』の虚実』前掲、十一頁。
- 7 古家信平「まぼろしの国際共同研究」筑波大学民俗学研究室編『心意と信仰の民俗』所収、吉川弘文館、二〇〇一年。
- 8 このとき、『民間伝承』の編集は遅れており、八月号は実際発行されたのは九月以降であった。
- 9 たとえば『民間伝承』七一―二（一九四一年十一月）の「学界消息」では一九四一年末の各地民俗講座の様子を以下のようにならべている。「福井市 大政翼賛会福井県支部主催講座 十一月三四五日 柳田、柴田実、平山敏治郎、高谷重夫 県下全村から一名以上召募予定 新潟市大政翼賛会新潟県支部、高志社共同主催講座 十一月十五六日 関敬吾外教氏 福岡県 北九州文化聯盟、福岡郷土会共同主催講座 十一月十七八日 柳田 二十五日長崎医大 二十七日熊本医大講演」。
- 10 同じ内容の「会告」は次号の『民間伝承』九一―五では古稀記念会の趣旨、発起人、実行委員と一緒に再び掲載された。一九四三年の最終号に当たる九一―八（十二月）で三回目掲載されたとき、記念事業の全体像を意識してのことか、初めて「内地以外に於ける民俗学大会の開催」という項目が追加された。
- 11 橋浦泰雄「古稀覚書」、「橋浦文書」所収。
- 12 このとき折口信夫、橋浦泰雄以外、金田一京助、伊波普猷、石黒忠篤、新村出、渋谷敬三、石田幹之助、安藤正次、東條操、西田直二郎の名前があがった。
- 13 今野田輔「柳田国男と研究会―木曜会を中心に」『女子聖学院短期大学紀要九』一九七七年、二八頁。

- 14 小田倉一は医学博士、新人会成員で、大間知篤三と一九二七年同期の卒業生である。
- 15 盧溝橋事変後、北京の多くの高等教育機関が内陸奥地に移り、その空白を埋めるべく、一九三八年、旧北平、北京、清華、交通などの大学を統合する形で、「国立北京大学」が作られたが、那須皓はその農学院の創始者として活躍していた。周作人が一九三九年八月同大学に開設された文学院の院長であった。周は柳田国男の学問に親近感を持つことはよく知られている。
- 16 「会員名簿」『満洲民族学会会報』一一三（一九四三年十一月）十二―十四頁。
- 17 中生勝美「植民地の民族学―満洲民族学会の活動」前掲、一三八頁。
- 18 「小規」『民間伝承』八一―一、一九四三年三月。
- 19 たとえば、大間知は「私は台湾にこの月刊誌のあることを喜び且つ羨み、創刊号以来愛読している」と賞賛し、「北支」に同類の雑誌がないことを嘆いている（『満洲民族学会会報』創刊号の文献紹介）。
- 20 一九四三年五月六日金関丈夫より柳田国男宛書簡、「橋浦文書」所収。
- 21 柳田国男「学問と民族結合」『柳田国男全集三〇』三三〇頁。
- 22 柳田国男、浅野晃、橋浦泰雄「民間伝承について」『柳田国男対談集』所収、筑摩書房、一九六四年、一一五―一三三頁。
- 23 中生勝美『植民地人類学の展望』前掲、二二―二五八頁。
- 24 橋浦泰雄「古稀覚書」前掲による。
- 25 十月二日直江広治より橋浦泰雄宛書簡、「直江書簡」所収。
- 26 鶴見太郎「戦後に於ける対峙―石田英一郎からの問いかけ」『柳田国男とその弟子たち』前掲、一八六頁。
- 27 大間知篤三「民族学と民俗学」前掲、二頁。
- 28 鶴見太郎「柳田国男民俗学の東アジア的展開」前掲、一一六頁。
- 29 「昭和十八年度 東方民俗研究会二覽」「橋浦文書」所収、一頁。
- 30 張菊香・張鉄榮編『周作人年譜』（天津人民出版社、二〇〇〇年）一九四三年十月三日条に「午後、東華会館に行き、東亜民俗研究会成立大会に参加し、挨拶をした」とある（六六六頁）。これは同年譜の中で東方民俗研究会に関する唯一

の記録であった。

31 「対支文化事業」に関しては、阿部洋『「対支文化事業」の研究―戦前期日中教育文化交流の展開と挫折―』汲古書院、二〇〇四年を参照。

32 なお、同誌の最終号（二二一五、一九四四年五月）に、北京の日本研究社による『日本研究』一九四四年二月号に載せられた周作人の「草園與茅屋」（二月八日付）を「ツブラと茅茸家」（大野政雄訳）として巻頭を飾っている。周はこの文章で江馬三枝子『飛騨の女たち』の冒頭の一編「ツブラの中」に因んで「東亜の連帯」を訴えている。

33 周作人と新民印書館の関係は一九四二年あたりに始まったと思われる。それ以降の著作、たとえば『葉味集』『葉堂散文』『風雨後談』などはほとんど北京新民印書館から発行されている。

34 新民印書館、一九四四年九月。のち一九八四年、張紫晨翻訳・陳秋帆校正の訳文は書目文獻出版社より出版された。

35 沢田瑞穂「縁起」前掲参照。なお、一九四七年に東京印書館が設立され、新民印書館の日本人引揚者を受入れ、平凡社の出版物印刷を中心とした活動を展開していた（東京印書館ホームページによる）。一方中国で接収された新民印書館は正中書局北平印刷廠に改名した（『近代篇・第十六章第三節』『中華印刷通史』財団法人印刷伝播興文教基金会、一九九八年）。

36 坂本龍起の経歴は外務省記録、公文雑纂などによる。

37 和田憲夫は北支那開發会社調査局に勤め、東方民俗研究会の会員である。華北総合調査研究所は一九四二年六月に日本政府によって創設された「華北建設の基礎となる自然、文化の総合調査研究の中核機関」（防衛庁防衛研究所戦史室「北支の治安戦」朝雲新聞社、一九六八年）であり、その入会はおそらく一九四三年六月からその副理事長を務めている周作人の影響があると思われる。鳥居龍蔵は一九四一年末太平洋戦争が勃発し、燕京大学が閉校を余儀なくされた後も北京に留まり、調査と研究に没頭していた。

38 平山は平山敏治郎のことである。しかし平山敏治郎は自分から同行を辞退した記憶はなく、後日橋浦泰雄から旅行許可の書類を記念に送ってもらったと回想している（平山「折口信夫先生」『民俗学の窓』学生社、一九八一年、一〇〇頁）。

39 同前、九九一―一〇〇頁。

40 藤井隆至「柳田国男のアジア認識」前掲、一一八頁。

- 41 鈴木満男「東アジア世界からみた柳田学」前掲、一五一頁。
- 42 柳田国男・浅野晃・橋浦泰雄「民間伝承について」前掲、一一七―一八頁。
- 43 同前、一二七頁。
- 44 『民俗台湾』五―二、一九四五年二月、一九頁。
- 45 鳥越皓之「柳田国男の比較民俗学の論理構造」前掲、五九六―五九七頁。
- 46 同前、六〇一頁。
- 47 高桑守史「倉田一郎―その研究と方法」前掲、二八四頁。
- 48 倉田一郎「新しき国風の学」『民間伝承』八一四、一九四二年八月。
- 49 柳田国男「出版界新編成への期待」『日本読書新聞』第二三七号、一九四三年二月（『柳田国男全集三一』所収、二八頁）。
- 50 三巻までであった「非売品」との表示が四巻以降は消えたが、定価の表示はなかった。
- 51 鶴見太郎「柳田国男とその弟子たち」前掲、五六―五七頁。
- 52 一九三六、三八、三九、四〇年の新入会員は各一名ずつしかなかったが、一九四一年二月の『民間伝承』六一五では二名が新たに会員となった。それに対して、次号（六一六）の学会消息では「民間伝承の会高千穂支部」として、朝日新聞社客員関口泰が旅行する際の勧めにより、宮崎県高千穂町外四村の有志が地方支部を設立したと説明している。その入会申請書は成城大学民俗学研究所に所蔵している（小国喜弘『民俗学運動と学校教育』前掲、一一二―一一三頁を参照）。
- 53 『民間伝承』六一八で宮崎からはさらに五名が入会した。
- 54 実は大阪の世話人沢田四郎作も当時満洲に軍医として赴任中であつた（奥村隆彦・原泰根編『沢田四郎作博士記念文集』沢田四郎作先生を偲ぶ会、一九七二年）。
- 55 この日、出席者十九名は柳田国男を中心に記念撮影をした（『民間伝承』八一〇、一九四三年二月）。
- 56 「民間伝承の会会員名簿」（『橋浦文書』所収）前掲。なお、会員は総計二二三名、うち中華民國十五名という小国喜弘の統計（『民俗学運動と学校教育』前掲、一一一頁）は不正確である。

終章

- 1 柳田国男「民間伝承の会消息」『祭日考』所収（『柳田国男全集十六』一〇三頁）。
- 2 『民間伝承』一一―三、一九四六年十月。
- 3 「大間知篤三著作目録」（『大間知篤三著作集六』所収）では「ハイラル・ダウール族の氏族巫」『季刊民族学研究』一四
一、日本文化人類学会、一九四九年という一本しかなかった。
- 4 直江広治「八月十五夜考」『民間伝承』一四―八、一九五〇年八月。
- 5 福田アジオ「近代日本の植民地と民俗学」『日本研究・京都会議一九九四Ⅱ』国際日本文化センター・国際交流基金、
一九九四年。
- 6 岡正雄「東亜民族学の一つの在り方」『民族研究彙報』三―一・二合併号、一九四五年八月、一―四頁。

参考文献

■論文・著書

- 赤坂憲雄 「書評『大東亜民俗学』の虚実」 『中央公論』一九九六年十月号
- 『海の精神史―柳田国男の発生』小学館、二〇〇〇年
- 『一国民俗学を越えて』五柳書院、二〇〇二年
- 朝日新聞社東京本社編 『山西学術探検記』朝日新聞社、一九四三年
- 阿部正路・芳賀日出男 「折口信夫の世界折口信夫の中国行」芸能学会編集委員会編『年刊芸能』三号、芸能学会、一九九七年三月
- 阿部正路 「中国における日本文学研究と民俗学の現状」『日本文学論究』四六号、国学院大学国語国文学会、一九八七年三月
- 阿部洋 『対支文化事業』の研究―戦前期日中教育文化交流の展開と挫折―汲古書院、二〇〇四年
- 有馬真喜子 「直江広治氏―筑波大学教授（ひと）」『季刊人類学』一〇―三、京都大学人類学研究会、一九七九年
- 飯倉照平 「周作人と柳田国男」『柳田国男全集月報二五』筑摩書房、二〇〇一年一月
- 石田英一郎 『石田英一郎全集』筑摩書房、一九七〇―一九七二年
- 『輔仁大学人類学博物館発行『民俗学誌』』『季刊民族学研究』八一―二、一九四三年一月

「中国との出会い」「人間を求めて―文化人類学三十年―」「石田英一郎全集八」所収、筑摩書房、一九七二年
石橋臥波 「本誌の任務」「民俗」創刊号、一九一三年五月

伊藤幹治 『柳田国男と文化ナシヨナリズム』岩波書店、二〇〇二年

稲畑耕一郎 「手で読む人―追想 沢田瑞穂先生―」『東方宗教』一〇〇号、日本道教学会、二〇〇二年十一月

今野円輔 「柳田国男と研究会―木曜会を中心に―」『女子聖学院短期大学紀要九』一九七七年

今村与志雄 「直江広治著『中国の民俗学（民族・民芸叢書十三）』」『文学』三五・一九、岩波書店、一九六七年九月

色川大吉 『日本民俗文化大系―柳田国男 常民文化論』講談社、一九七八年

岩田重則 「戦争への発言」野村純一・三浦祐之・宮田登・吉川祐子編『柳田国男事典』勉誠出版、一九九八年

「『七生報国』と祖霊信仰」「戦死者靈魂のゆくえ―戦争と民俗―」吉川弘文館、二〇〇三年

岩竹美加子編訳 『民俗学 of 政治性―アメリカ民俗学一〇〇年目の省察から』未来社、一九九六年

岩本由輝 「中国に対する植民地政策と柳田国男」『歴史書通信』九一、一九九三年

岩本通弥 「国際連盟委任統治委員としての柳田国男」『文明研究』一三、東海大学文明学会、一九九四年

上野和男 「大間知篤三―その研究と方法―」瀬川清子・植松明石編『日本民俗学のエッセンス』ぺりかん社、一九七九年

内田隆三 「柳田国男と事件の記録」講談社、一九九五年

内山雅生 「現代中国農村と「共同体」―転換期中国華北農村における社会構造と農民」御茶の水書房、二〇〇三年

「中国史研究における実態調査と地域研究」神田信夫先生古稀記念論集『清朝と東アジア』山川出版社、一九九二年

江副敏生 「幻の研究―東亜研究所について」『中国研究月報』六二〇号、一九九九年十月

王京 「教会大学と日中戦争―『北平輔仁大学檔案』から見た戦時下の学生収容』『年報 人類文化研究のための非文字

資料の体系化三』神奈川大学21世紀COEプログラム、二〇〇六年三月

「『民俗学誌 (Folklore Studies)』について」『非文字資料研究十一』神奈川大学21世紀COEプログラム、二〇〇

六年三月

「太田陸郎とその中国研究―戦時下の民俗学者」『日本民俗学』二四八号、二〇〇六年十一月

- 「戦時下の中国民俗研究—永尾龍造の研究と『支那民俗誌』編纂刊行の背景について」『年報 人類文化研究のための非文字資料の体系化四』神奈川大学21世紀COEプログラム、二〇〇七年三月
- 王向遠 『日本对中国的文化侵略』学者、文化人的侵華戦争』崑崙出版社、二〇〇五年
- 王建民 『中国民族学史 上卷（一九〇三—一九四九）』雲南教育出版社、一九九七年
- 太田陸郎 『支那習俗』三國書房、一九四三年
- 大藤時彦 『日本民俗学史話』三一書房、一九九〇年
- 王文宝 『中国民俗学發展史』遼寧大学出版社、一九八七年
- 『中国民俗学史』巴蜀書社、一九九五年
- 『中国民俗研究史』黑竜江人民出版社、二〇〇三年
- 大間知篤三 『民族篇』『滿洲風土記』滿洲日報奉天支社、一九四四年（山下晋司・中生勝美他編「アジア・太平洋地域民族誌選集」三三所収、クレス出版二〇〇二年復刻版）
- 『大間知篤三著作集』一—六卷、未來社、一九七五—一九八二年
- 大間知篤三編 『山村生活調査第一回報告書』一九三五年
- 大間知篤三ほか編 『日本民俗学大系』一—十三卷、平凡社、一九五八—一九六〇年
- 大森志郎編 『日本文化論纂』拓文堂、一九三九年
- 大山彦一 『中国人の家族制度の研究—東亜諸民族の社会学的考察—』関書院、一九五二年（社会学叢書第五冊）
- 岡正雄 『東亜民族学の一つの在り方』『民族研究彙報』三—一・二合併号、一九四五年八月
- 『柳田国男との出会い』季刊 柳田国男研究』一九七三年
- 小川直之 『画像資料と民俗学』『国学院大学学術フロンティア事業研究報告 人文科学と画像資料研究第一集』二〇〇四年
- 小川利康 『中国の民俗学者江紹原と熊楠』『文学』八一—、岩波書店、一九九七年一月
- 小熊英二 『単一民族神話の起源—日本人—の自画像の歴史』新曜社、一九九五年
- 『柳田国男と『一国民俗学』』『アエラムック 民俗学がわかる。』朝日新聞社、一九九七年
- 奥野信太郎 『中国の民俗学』『民俗文学講座六』月報、弘文堂、一九六〇年

奥村隆彦・原泰根編 『沢田四郎作博士記念文集』 沢田四郎作先生を偲ぶ会、一九七二年（非売品）

折口信夫 「年譜」「書簡」「折口信夫全集三六」中央公論社、二〇〇一年

華交互助会編 『華北交通株式会社社史』一九八四年

何思敬 「支那の新中国運動」「民族」一―五、一九二六年七月

加藤千代 「鐘敬文の日本留学」「人文学報」一六六、東京都立大学人文学会、一九八四年

何彬 「中国民俗学の歩み―研究史的回顧および展望」「人文学報」三三一、東京都立大学人文学部、二〇〇二年三月

株式会社富島組編 『株式会社富島組五十年史』一九三八年

加茂幸男 『太田陸郎伝―民俗学者太田陸郎を語る玄圃梨の記―』私家版、一九九二年

川島右次・藤本槌重編 『網干町史』網干町史刊行会、一九五一年（非売品）

川田稔 『柳田国男のえがいた日本』未來社、一九九八年

川村湊 『大東亜民俗学』の虚実』講談社、一九九六年

川村邦光 『幻視する近代空間』青弓社、一九九〇年

『戦争と民俗／民俗学』『日本民俗学』二二五号、日本民俗学会、一九九八年

『戦争と民俗学―柳田国男と中山太郎の実践をめぐって』『比較日本文化研究七』比較日本文化研究会、二〇〇三年

三年

菊地暁 『柳田国男と民俗学の近代―奥能登のアエノコトの二十世紀』吉川弘文館、二〇〇一年

岸本美緒編 『岩波講座「帝国」日本の学知 第三卷 東洋学の磁場』岩波書店、二〇〇六年

木山英雄 「周作人「対日協力」の顛末』岩波書店、二〇〇四年

邱淑珍 「柳田国男と台湾民俗学」後藤総一郎編『常民大学研究紀要一 柳田国男のアジア認識』岩田書院、二〇〇一年

近現代資料刊行会編 『日本近代都市社会調査資料集第六集―神戸市社会調査報告書（含兵庫県）』、近現代資料刊行会、

二〇〇三年

クライナー・ヨーゼフ 「ヨーロッパにおける柳田国男研究の系譜」『柳田国男全集月報二九』筑摩書房、二〇〇四年

倉田一郎 『国語と民俗学』青磁社、一九四二年七月

- 建國大學刊 『建國大學要覽 康徳八年度』 一九四一年七月
- 呉小龍 『少年中國學會研究』 上海三聯出版社、二〇〇六年
- 呉密察 『民俗台灣』 發刊の時代背景とその性質』 藤井省三他編 『台灣の「大東亜戦争」——文學・メディア・文化』 東京大學出版會、二〇〇二年
- 江紹原 『髮須爪・關於它們的迷信』 開明書店、一九二八年
- 『現代英吉利諺俗及謠俗學』 上海中華書局、一九三二年
- 香原志勢 『鳥居龍藏博士攝影、写真資料カタログ』 東京大學総合研究資料館、一九九〇年
- 國分直一 『民俗台灣』 の運動はなんであったか—川村溱氏の所見をめぐって— 『しにか』 一九九七年二月号、大修館書店
- 小国喜弘 『民俗學運動と學校教育—民俗の發見とその國民化』 東京大學出版會、二〇〇一年
- 小島晋治・大里浩秋・並木頼壽編 『二〇世紀の中國研究—その遺産をどう生かすか』 研文書店、二〇〇一年
- 後藤興善著・王汝瀾訳 『民俗學入門』 中國民間文芸出版社、一九八四年
- 後藤総一郎 『柳田国男と戦争』 『歴史公論』 一九七六年五月
- 『柳田国男の「殖民地主義論」の誤謬を質す』 後藤総一郎編 『常民大學研究紀要一 柳田国男のアジア認識』 岩田書院、二〇〇一年
- 後藤総一郎編 『柳田国男研究資料集成』 全二〇卷、日本図書センター、一九八七年
- 『常民大學研究紀要一 柳田学前史』 岩田書院、二〇〇〇年
- 小林英夫 『満鉄「知の集団」の誕生と死』 吉川弘文館、一九九六年
- 子安宣邦 『一國民俗學の成立』 『岩波講座現代の思想一 思想としての二〇世紀』 岩波書店、一九九三年
- 『近代知のアルケオロジ— 國家と戦争と知識人』 岩波書店、一九九六年
- 『アジア』 はどう語られてきたか—近代日本のオリエンタリズム— 藤原書店、二〇〇三年
- 子安加余子 『近代中國と民俗學—周作人・江紹原・顧頡剛』 『福井大學教育地域科學部紀要一（人文科學） 國語學・國文學・中國學編』 二〇〇五年
- 坂野徹 『帝國日本と人類學者 一八八四—一九五二年』 勁草書房、二〇〇五年

- 崔吉城 「日帝殖民地時代と朝鮮民俗学」 中生勝美編『植民地人類学の展望』風響社、二〇〇〇年
- 桜井徳太郎 『桜井徳太郎著作集七 東アジアの民俗宗教』吉川弘文館、一九八七年
- 桜木富雄 『文化人たちの大東亜戦争—PK部隊が行く』青木書店、一九九三年
- 佐藤健二 『読書空間の近代—方法としての柳田国男』弘文堂、一九八七年
- 佐藤健二・船曳健夫 『対談…メーキング・オブ・柳田国男 複数の柳田国男がいる』『ちくま』三三〇、三三一号、筑摩書房、一九九七年
- 佐藤卓己 『言論統制 情報官・鈴木庫三と教育の国防国家』中央公論新社、二〇〇四年
- 『キング』の時代—国民大衆雑誌の公共性』岩波書店、二〇〇二年
- 佐野賢治 「東北民俗学からアジア民俗学へ—藤原相之助論(一)」『比較民俗学研究十七』比較民俗学研究会、二〇〇〇年
- 沢田瑞穂 『中国の民間信仰』工作舎、一九八二年
- 『支那民俗学の収獲』『漢文学会会報』国学院大学漢文学会、一九三九年
- 沢田瑞穂編 『燕趙夜話—採訪華北伝説集—』采華書林、一九六五年
- 篠原徹 『近代日本の他者像と自画像』柏書房、二〇〇一年
- 芝崎厚士 『近代日本と国際文化交流—国際文化振興会の創設と展開』有信堂高文社、一九九九年
- 島村恭則 『多文化主義民俗学とは何か』『京都民俗十七』一九九九年
- 『比較と多文化の民俗学へ』『東北学九』東北芸術工科大学東北文化研究センター、二〇〇三年
- 下野敏見 『東シナ海文化圏の民俗—地域研究から比較民俗学へ』未来社、一九八九年
- 上海日本商工会議所編 『上海要覧 改定増補一九三九』一九三九年八月再版
- 鍾敬文 「中国民譚の型式」『民俗学』五一—一、一九三三年十一月
- 植民地文化研究会編 『満州国』文化細目』不二出版、二〇〇五年
- 新谷尚紀 「戦争と柳田民俗学」福井勝義・新谷尚紀編『人類にとって戦いとは五 イデオロギーの文化装置』東洋書林、二〇〇二年

- 末成道男 「鳥居龍藏と中国民俗学」愛知大学現代中国学会編『中国21 Vol.16』風媒社、一九九九年五月
- 末広昭 「アジア調査の系譜―満鉄調査部からアジア経済研究所へ」末広昭編『岩波講座「帝国」日本の学知 第六卷 地域研究としてのアジア』岩波書店、二〇〇六年
- 末広昭編 『岩波講座「帝国」日本の学知 第六卷 地域研究としてのアジア』岩波書店、二〇〇六年
- 鈴木栄太郎 『日本農村社会学原理』時潮社、一九四〇年
- 鈴木満男 「東アジア世界からみた柳田学」『柳田・折口以降…東アジアにおける《民俗》のトピクス』世界書院、一九九二年
- 「帝国の知」の喪失―戦後日本・再考 東アジアの現地から』展転社、一九九九年
- 鈴木健之 「中国民俗学小史」歴史学会編『史潮』新三号、弘文堂、一九七八年五月
- 「中国民俗学・民族学研究史年表（連載）」『中国民話の会会報』一九七〇年代
- 諏訪春雄 「アジアの中の民俗学」『アエラムック 民俗学がわかる。』朝日新聞社、一九九七年
- 成城大学民俗学研究所編 『増補改定 柳田文庫蔵書目録』成城大学民俗学研究所、二〇〇三年
- 瀬川清子・植松明石編 『日本民俗学のエッセンス（増強版）』日本民俗学の成立と展開』ぺりかん社、一九九四年
- 関敬吾 「日本民俗学の歴史」『日本民俗学大系二』平凡社、一九五八年
- 「萩原正徳さん」『日本民俗学大系八』平凡社、一九五九年
- 「中訳本序」関敬吾編、王汝瀾・龔益善共訳『民俗学』中国民間文学出版社、一九八六年
- 関敬吾編、王汝瀾・龔益善共訳『民俗学』中国民間文学出版社、一九八六年
- 戦前期官僚制研究会編・秦郁彦著 『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』東京大学出版会、一九八一年
- 総務科編 『奉天省公署要覧（日文）』奉天省公署、大同二年（一九三三年）
- 孫邦華編著 『輔仁大学』河北教育出版社、二〇〇四年
- 高木敏雄 「郷土研究の本領―『郷土研究』創刊号、一九一三年三月
- 高木昌史編 『柳田国男とヨーロッパ』口承文芸の東西』三交社、二〇〇六年
- 高桑守史 「倉田一郎―その研究と方法」瀬川清子・植松明石編『日本民俗学のエッセンス』ぺりかん社、一九七九年
- 高見寛孝 「柳田国男と比較民俗学」『国学院大学日本文化研究所紀要八九』国学院大学日本文化研究所、二〇〇二年

瀧本弘之「中国民間版画ノート」外国人による中国民間版画研究四 永尾龍造「民芸」日本民芸協会、二〇〇二年三月、

五月号

竹田旦「解説」『大間知篤三著作集六 満洲の習俗』未来社、一九八二年

——「祖先祭祀と死霊結婚」人文書院、一九九〇年

竹田旦編『民俗学関係雑誌文献総覧』国書刊行会、一九七八年

竹村卓二「中国の民族学の歩み」『漢民族と中国社会』山川出版社、一九八三年

——「中国」日本民族学会編『日本民族学の回顧と展望』財団法人民族学振興会、一九六六年

田島俊雄「日本人による戦前・戦後の中国農村調査」『中国研究月報』六〇〇号、社団法人中国研究所、一九九八年二月

多田貞一「北京地名誌」新民印書館、一九四四年九月（東方民俗論叢一）

——「北京地名志」張紫宸翻譯・陳秋帆校正、北京書目文獻出版社、一九八四年

田中藤司「柳田文庫所蔵読了自記洋書目録・略年表」『民俗学研究所紀要』第二二集別冊、成城大学民俗学研究所、一九九

八年

田中正明編『柳田国男の絵葉書——家族にあてた二七〇通』晶文社、二〇〇五年

谷口貢「シンポジウム「近代」と民俗」について『日本民俗学』二二五号、日本民俗学会、一九九八年

中国農村慣行調査刊行会編『中国農村慣行調査』一―六卷、岩波書店、一九五二―五八年

中国民俗学会編『会刊』第二期、一九八四年三月

中国民俗学籌委会編『会刊』一九八二年十二月

中国民俗学会秘書組編『民俗工作通訊』第一期、一九八四年六月

張菊香・張鉄栄編『周作人年譜』天津人民出版社、二〇〇〇年

張紫宸「歌謡」週刊始末』『中国現代文芸資料叢刊八』一九八四年九月

張紫宸編『民俗学講演集』書目文獻出版社、一九八五年六月

趙世瑜『眼光向下的革命』北京師範大学出版社、一九九九年

全京秀「植民地の帝国大学における人類学的研究」岸本美緒編『岩波講座「帝国」日本の学知 第三卷 東洋学の磁場』

岩波書店、二〇〇六年

筑波大学歴史・人類学系編 『歴史人類一〇 直江広治先生退官記念集』一九八二年三月

柘植秀臣 『東亜研究所と私―戦中知識人の証言―』勁草書房、一九七九年

坪井正五郎 『土俗調査より生じる三利益』『東京人類学会雑誌』九五号、一九九四年二月

鶴見太郎 『柳田民俗学と東大新人会―大間知篤三を中心に―』『史林』七七―四、一九九四年七月

『柳田国男とその弟子たち―民俗学を学ぶマルクス主義者』人文書院、一九九八年

『橋浦泰雄伝―柳田学の大いなる伴走者』晶文社、二〇〇〇年

『民俗学の熱き日々―柳田国男とその後継者たち』中公新書、二〇〇四年

『戦時下の『モヤヒ』―柳田国男先生古希記念会に見る』『人文学報』一四三号、京都大学人文科学研究所、二〇〇

〇四年

『柳田民俗学の東アジア的展開』末広昭編『岩波講座「帝国」日本の学知 第六卷 地域研究としてのアジア』岩

波書店、二〇〇六年

鶴見俊輔 『戦時期日本の精神史』岩波書店、一九八二年（『同時代ライブラリー八二』所収、一九九一年）

東京大学教養学部国際関係論研究室編 『橋川時雄氏インタビュー記録―東方文化事業総委員会・北京人文科学研究所』東

京大学教養学部国際関係論研究室、一九八一年

外山操・森松俊夫編著 『帝国陸軍編制総覧』芙蓉書房、一九八七年

鳥越皓之 『柳田国男の比較民俗学の論理構造』竹田且編『民俗学の進展と課題』国書刊行会、一九九〇年

直江広治 『中国の民俗学』岩崎美術社、一九六七年（民俗・民芸双書十三）

『中国・台湾・韓国』『日本民俗学講座五 民俗学の方法』朝倉書店、一九七六年

『民間信仰の比較研究』吉川弘文館、一九八七年

『柳田先生の思い出―民俗学研究所を中心として』播磨学研究所編『再考 柳田国男と民俗学』神戸新聞総合出版

センター、一九九四年十二月

中生勝美 『中国農村慣行調査』の限界と有効性』『アジア経済』二八―六、一九八七年七月

- 「植民地主義と日本民族学」中国社会文化学会『中国—社会と文化』八、一九九三年
- 「植民地の民族学—滿洲民族学会の活動」『へるめす』五二、岩波書店、一九九四年
- 「民族研究所の組織と活動—戦争中の日本民族学」『民族学研究』六二—一、一九九七年
- 「内陸アジア研究と京都学派—西北研究所の組織と活動」『植民地人類学の射程』中生勝美編『植民地人類学の展望』風響社、二〇〇〇年
- 中生勝美編『植民地人類学の展望』風響社、二〇〇〇年
- 永尾龍造『支那民俗誌』一、二、六卷、支那民俗誌刊行会、一九四〇—一九四二年
- 中蘭英助『鳥居龍藏伝—アジアを走破した人類学者』岩波書店、一九九五年
- 中西利八編『滿洲紳士録』滿蒙資料協会、一九三七年（同第三版一九四〇年、第四版一九四三年）
- 中村勝範編『帝大新人会研究』慶応義塾大学出版会、一九九七年
- 中村哲『柳田国男の思想』法政大学出版社、一九六七年
- 中村生雄『「新国学」の戦前と戦後—柳田民俗学と国家との関係—』『日本思想史学』二六、日本思想史学会、一九九四年
- 日本民俗学会編『海村生活の研究』一九四九年
- 『日本民俗学文献総目録』弘文堂、一九八〇年五月
- 日本地学史編纂委員会・東京地学協会編『日本地学の展開（大正十三年—昭和二〇年）〈その二〉—『日本地学史』稿抄—』『地学雑誌』一一〇—三、二〇〇一年
- 野田涼『滿洲建國と奉天省に活躍する主要人物』奉天毎日新聞社、一九三三年
- H・スミス著、松尾尊允・森史子訳『新人会の研究—日本学生運動の潮流』東京大学出版会、一九七八年
- 橋浦泰雄『インタビュー・柳田国男との出会い』『季刊柳田国男研究』二、一九七三年
- 橋川文三『柳田国男』『二〇世紀を動かした人々—世界の知識人』講談社、一九六四年
- 原覚天『現代アジア研究成立史論—滿鉄調査部・東亜研究所・IPRの研究—』勁草書房、一九八四年六月
- 比嘉春潮編『郷土生活研究採集手帖』郷土生活研究所、一九三四年
- 平山敏治郎『民俗学の窓』学生社、一九八一年

- 福井直秀 「柳田国男のアジア認識」 古屋哲夫編『近代日本のアジア認識』緑陰書房、一九九六年
- 福田アジオ 『日本民俗学方法序説―柳田国男と民俗学―』弘文堂、一九八四年
- ―― 『日本の民俗学とマルクス主義』『国立歴史民俗博物館研究報告二七』一九九〇年
- ―― 『柳田国男の民俗学』吉川弘文館一九九二年
- ―― 『近代日本の植民地と民俗学』『日本研究・京都會議一九九四Ⅱ』国際日本文化センター・国際交流基金、一九九四年
- ―― 『日本民俗学研究史年表』『講座日本の民俗学十一 民俗学案内』雄山閣、二〇〇四年
- 福田アジオほか編 『日本民俗大辞典』吉川弘文館、一九九九～二〇〇〇年
- 藤井隆至 「柳田国男のアジア認識」柳田国男研究会編『柳田国男研究資料集成十八』再録、日本図書センター、一九八九年
- ―― 『柳田国男経世済民の学―経済・倫理・教育―』名古屋大学出版会、一九九五年
- ―― 『柳田国男のアジア認識』後藤総一郎編『常民大学研究紀要二 柳田国男のアジア認識』岩田書院、二〇〇一年
- 古家信平 「まぼろしの国際共同研究」筑波大学民俗学研究室編『心意と信仰の民俗』吉川弘文館、二〇〇一年
- 古屋哲夫・山室信一編 『近代日本における東アジア問題』吉川弘文館、二〇〇一年
- 北京師範大学校史編写組 『北京師範大学校史（一九〇二―一九八二）』北京師範大学出版社、一九八四年
- 北京大学編印 『国立北京大学研究所国学門概略』一九二七年
- 防衛庁防衛研修所戦史室著 『戦史叢書 支那事变陸軍作戦』朝雲新聞社、一九七五～一九七六年
- 本庄比佐子・内山雅生・久保亨編 『興亜院と戦時中国調査』岩波書店、二〇〇二年
- 益田勝実 『炭焼日記』存疑』『民話』十四、十五、十七、一九五九～一九六〇年
- 松岡静雄 『日本古俗誌』刀江書院、一九二六年
- 松本信広 「日本民俗学界鳥瞰」松村瞭編『日本民族』一九三五年
- 松本三喜夫 「絶信後の南方熊楠と柳田国男―大西伍一編の『郷土研究家名簿』に関連して―』柳田国男・南方熊楠・前田正名』近代文芸社、一九九一年
- 南满洲鉄道株式会社地方部学務課編 『満鉄教育回顧三十年』一九三七年（非売品）

南根祐 「朝鮮民俗学」と植民地主義―『遠距離砲』としての『比較民俗学』 『国立歴史民俗博物館研究報告一〇六』 国立歴史民俗博物館、二〇〇三年三月

宮田登 『原初的思考―白のフォークロア』 大和書房、一九七四年

宮本常一 「民俗学研究史」 『社会経済史学』 一〇一九・一〇、一九四一年一月

― 「民俗学への道」 『宮本常一著作集四二』 未来社、二〇〇二年

宮本敏行 『西学術紀行』 新紀元社、一九四二年

民間伝承の会編 『山村生活の研究』 一九三七年

民間伝承編集部編 「大間知篤三先生追悼記念特集（噫！大間知篤三兄逝く！（戸田謙介）他四六篇）」 『民間伝承』 三四―

二、六八社、一九七〇年七月

村井紀 『南島イデオロギーの発生―柳田国男と植民地主義』 福武書店、一九九二年

― 「新版」 南島イデオロギーの発生―柳田国男と植民地主義』 岩波書店、二〇〇四年（岩波現代文庫）

柳田国男 『柳田国男全集』 筑摩書房、一九九七年―

― 『定本柳田国男集 別巻四』 筑摩書房、一九六四年

― 『柳田国男対談集』 筑摩書房、一九六四年

― 『民俗学について 第二柳田国男対談集』 筑摩書房、一九六五年

― 『時の扉 Vol.2 特集 柳田国男講演演筆録』 『支那視察談』 翻刻・注釈・考察』 東京学芸大学古典文学第四研究室、

一九九八年

柳田国男研究会編 『柳田国男伝 別冊柳田国男年譜』 三一書房、一九八八年

柳田国男・関敬吾 『日本民俗学入門』 改造社、一九四二年

柳田国男・平野義太郎・川島武宜他 「比較社会学・日本と中国―林耀華著『金の翼』を中心として（座談会）」 『思想の科

学』 四一五、先駆社、一九四九年七月

柳田国男編 『日本民俗学研究』 岩波書店、一九三五年

山口昌男 「柳田に弟子なし」 『論争』 一九六二年

山根幸夫 『建国大学の研究―日本帝国主義の一断面』汲古書店、二〇〇三年

山室信一 『思想課題としてのアジア・基軸・連鎖・投企』岩波書店、二〇〇一年

山本斌 『中国の民間伝承』太平出版社、一九七五年

山本有造編 『帝国の研究・原理・類型・関係』名古屋大学出版会、二〇〇三年

谷肇祖 「北大歌謡研究会及風俗調査会的経過」『民俗』一五一六、一七一八、一九二八年七月

楊成志 「民俗学会の経過及其出版物目録一覽」復刊号『民俗』一〇一、一九三六年九月

吉田隆英 「長江中流域の生活と民俗…太田陸郎の中国民俗の研究について」『姫路独協大学外国語学部紀要五』一九九二年

劉悦勤稿・木戸徹訳 「北支農村歳時記―河北省順義県―」『民族学研究』八一二、一九四三年一月

婁子匡 「中国民俗学運動の昨日と今日」『民俗学』五一一、一九三三年一月

渡瀬莊三郎 「我国婚礼ニ関スル諸風習ノ研究」『人類学会報告』二、一八八六年三月

■ 雑誌

『近畿民俗』近畿民俗刊行会（のち近畿民俗学会）、一九三六～一九三七年、名著出版、一九八三年復刻版

『考古学』東京考古学会、一九三〇～一九四一年、小宮山出版、一九六八年復刻版

『旅と伝説』三元社、一九二八～一九四四年、岩崎美術社、一九七八年復刻版

『ひだびと』飛騨考古民俗学会、一九三五～一九四四年、歴史図書社、一九七九年復刻版

『兵庫県郷土研究』兵庫県郷土研究会、一九三七～一九三九年 岩田重則編『赤松啓介民俗学選集別巻』所収、明石書店、

二〇〇四年

『兵庫県民俗資料』兵庫県民俗研究会、一九三二～一九三五年、国書刊行会、一九八二年復刻版

『兵庫史談』神戸史談会、一九二六～一九三二年、中外書房、一九七八年復刻版

『北支』華北交通株式会社資業局、一九三九～一九四三年、第一書房

『満洲民族学会会報』満洲民族学会、一九四三～一九四五年、クレス出版、二〇〇二年復刻版（山下晋司・中生勝美他編）

「アジア・太平洋地域民族誌選集」(二九所収)

『民間伝承』民間伝承の会、一九三五～一九四四年、国書刊行会、一九七二年復刻版

『民族』民族発行所、一九二五～一九二九年、岩崎美術社、一九八五年復刻版

『民俗学』民俗学会、一九二九～一九三三年、岩崎美術社、一九八六年復刻版

『民族学研究』日本民族学会のち民族学協会、一九三五～一九四四年、国書刊行会、一九七七年復刻版

『民俗学誌』輔仁大学東方人類学博物館、一九四二～一九四七年、(台北)東方文化書局、一九七二年復刻版

『民俗芸術』地平社書房のち民俗芸術の会、一九二八～一九三二年、国書刊行会、一九七三年復刻版

『民俗台湾』東都書籍、一九四一～一九四五年、(台北)南天書局、一九九八年復刻版

■その他

『東京人類学会・日本民族学会聯合大会紀事』一九三六～一九六七年(神奈川県常民文化研究所所蔵)

『直江広治書簡』一九四一～一九四四年(直江千鶴子氏所蔵)

『橋浦泰雄関係文書』(成城大学民俗学研究所所蔵)

『北平私立輔仁大学檔案』一九二五～一九五二年(北京师范大学所蔵)

『民族振興会蔵書』(神奈川県常民文化研究所所蔵)

あとがき

本書は、二〇〇七年三月、神奈川県立歴史民俗資料学研究所に提出した博士学位請求論文「一九三〇、四〇年代の日本民俗学と中国」に改訂を加えたものである。

本書では戦前、とくに一九三〇、四〇年代に、柳田国男を中心に形成された日本の民俗学が中国と如何なる関係を持ったかを明らかにし、それが日本の民俗学に如何なる意味を与えたかを考察している。日本民俗学史の角度から概略的にまとめれば、本書の主張は以下のようなようになるだろう。

日本が内地以外の多くの土地を所有しながら拡張しつつある帝国であった時代、「一国民俗学」として展開しようとした日本の民俗学は常に学問の守備範囲である「日本（＝内地）」と、政治・軍事の支配範囲としての「日本」とのずれという矛盾を抱え、外地をすべて喪失した戦後になって初めて文字通りの「一国民俗学」が定着したのである。中国は戦時中、日本民俗学のそうした矛盾を顕在化させる重要なきっかけであったと同時に、また矛盾を解決するための「比較民俗学」の試みが実践されようとする主要な場でもあった、と。

書くべきことは果たして本文のなかで書けたかどうか、それは読者の判断に待つほかないが、ここで本研究の経

緯や筆者の立場について補足的な説明を加えておきたい。

筆者は中国人である。中国の大学、大学院で日本語、日本文化を専攻し、やがて日本に留学して民俗学を専門とした。日本の民俗学については、一から勉強した。柳田国男の学問に感動し、その翻訳を試みたこともあるし、「郷土人」の「自省」を掲げる「二国民俗学」の論理に戸惑いを感じながら、日本の村落でフィールド調査を行っていた。

戦前の民俗学関係雑誌で日本の民俗学者による中国関係の記事に出会ったのは、たまたま民俗事象の古い姿やその研究史を調べようとするときであった。まもなく一九三〇、四〇年代の『民間伝承』や『旅と伝説』には数多くの中国関係の内容を有することとなり、衝撃を受けた。民俗学の概説書には中国がまったく登場せず、民俗学会の機関誌『日本民俗学』において中国を対象とする論考はほとんど見られないという状況に、当時の筆者はすでに慣れていたのである。

思いがけない中国との関連を目の前に、なぜ、どのように、いつからいつまでなど、知りたいことが山ほどあった。しかし民俗学の学史研究に当たった結果、中国との関わりが多かった戦時下に関する研究は多くなかったうえに、議論は戦争加担・植民地主義などの責任論に大きく束縛されていることを知った。中国に深く関わった事実さえほとんどふられていないので、それでは自分で調べてみようと思うようになった。

戦時下、多くの民俗学者が様々な形で中国と関わっていたことは、決して秘密ではなかった。彼らの年譜や文章、自他による回想文に中国関係の記録が数多く見られる。すると、従来の学史研究がそれについてふれなかったのは、それらの事実について調べられなかったからではなく、最初から学史の内容として捉える意識が希薄だったからであろう。戦時下における中国関連の活動は研究成果を重視する立場から、個人的な事情、政治的な外力による「逸脱」だと判断されがちである。

しかし戦時下においては概念や理論、論文や著書だけを指標にするなら、民俗学は恐らく序章でふれた関敬吾の

場合のように、一九三〇年代前半と戦後との間の、もっぱら時局の影響による「停滞」として映ってしまうのであろう。中国との関わりを「逸脱」として見ず、それを媒介に当時の民俗学と当時の日本との関係を考えるのが本研究の出発点である。

日本民俗学と中国との関わりは、日本が中国に対して行った長期の戦争と支配という時代状況に大きく規定されていたが、学問をめぐる政治性を指摘するのは本書の目的ではない。本書で所々ふれているように、戦時下、日本の民俗学は中国への関わり方において、個人の場合でも、組織の場合でも、その認識や行動に明らかに限界をもっていた。その意味で主観的な意図を問わず、戦争加担や植民地主義の責任が問われてしかるべきである。かつて大きな被害を蒙った中国からきたという身分が、また筆者にそのように批判するための有利な立場を提供している。しかし、批判は直接的な手段ではあるが、最も有効な方法だとは限らない。尽きるところ、人間は反省を通してしか、真に責任を感じることも、責任を考えることもできないと筆者は思っている。責任論から自由になって初めて複雑な状況を客観的に捉えることができ、また反省のための確実な材料を提供できると信じている。

様々な限界があるが、戦時下において日本の民俗学が「一国」を越えようとする試みは、筆者は基本的に評価している。これは、本書の最後に提出した、「日本の民俗学は学問として日本以外の地域と関わる必要があるかどうか、必要であればどのように関わるべきか」という問いに対する筆者の考え方と関係する。

すなわち、民俗学は自国以外の地域と関わる必要がある。それは、異なる国家や民族の民俗事象間の相違点や共通点を並べ、民俗学の資料では証明できない起源や伝播、或いは自国・自民族の特質などを説明として付するものと異なり、自国での研究で培った手法をまったく新しい場で適用することによって、より一般性をめざす、民俗学の方法そのものを相対化する試みでなければならない。これが、筆者の理解である。

戦時下の「比較民俗学」には、このような方法を相対化する意図は含まれていなかった。しかし実際、「日本人」による「日本（＝内地）」の研究という閉鎖的な世界から一歩踏み出した途端、従来の民俗学の方法への反省が始まったのである。その試みは敗戦によつて挫折し、戦後早々、すべて切り捨てられたことは残念である。反省されるべきなのは関わり方をめぐる政治性であり、関わりそのものを簡単に切ってしまうだけでは解決にはならない。戦時下の認識、行動を反省する機会と、民俗学の方法を相対化する可能性を同時に失うだけである。

執筆する間、同じ時代を生き、同じ状況にいたなら、学問、戦争、国家、民族、権力、自由などについて自分がいったいどのように考え、またどのように行動していたのかは、よく考えていた。それはまた図らずも、現在を生きた者として、今の状況において同じ問題をどのように考え、どのように行動すべきかを自問することとなった。執筆は終わったが、様々な場面でこれからもこの自問は続くだろうと思う。

いろいろな意味で本書は反省すべき点が多い。当時の民俗学者の格闘を追体験しようと思うが、まだ彼らの思想・認識の深いところまでふれえていない。戦後の日本民俗学については単なる展望に留まっており、その実態や三十年代からの展開との関連の解明が課題として残っている。そして全体を描き出すために内容の一部には状況証拠の累積による推測、推論が見られる。これから自分のさらなる研究や同じ関心を持つ方々の業績によつて、間違いを訂正し、必要な場合、一部を新たに書きなおしていく覚悟を持っている。ご批判、ご指摘、ご意見をいただければ幸いである。

本書は筆者にとつて初めての単著である。多くの方々のご指導とご助言をなくしては本書の研究は完成し得なかった。

博士課程の指導教官である福田アジオ先生と初めて出会ったのは一九九九年、北京は秋であった。当時ちょうど

半年間の赴任中にあった先生は筆者の修士論文の審査委員として口頭試問に加わり、懇切なコメントをくださった。その後日本に留学し、さらに機を得て先生のもとで本格的なご指導をいただけたことは幸せであった。現代民俗学の方法構築という問題意識、フィールド調査と文献資料を駆使する研究手法、そして徹底的な批判精神や謹厳なる学風など、先生から学んだ多くのことはこれから時間をかけてしっかり消化していきたい。先生の学恩に最大の謝意を表したい。

筑波大学時代から一方ならぬお世話になっっている佐野賢治先生、そして蔡文高先生、岩田重則先生に厚く御礼を申し上げたい。博士論文の審査に際して諸先生から頂いた厳しいご批判と多くのご助言は、筆者にとって貴重な財産であった。

身辺の事情により途中で研究が挫けそうになりかけた時、孫安石先生と知り合ったのは幸運であった。時には日本で学位を取得した外国人研究者という大先輩として、時には中国近代史の専門家として、学問から生活にいたるまでのご指導とご配慮は、研究の大きな励みとなった。

泉水英計先生のご紹介で最終年度に関わることができた「旧日本植民地研究とデータベースの構築」研究会はいつも良い刺激と楽しさが溢れていた。関連資料の紹介だけではなく、重要な示唆を与えてくださった中生勝美先生、鶴見太郎先生をはじめ、メンバーの皆様は深く感謝する。

大学院にいる六年間、様々な形でご指導いただいた歴史民俗学研究所、外国語学部中国語学科や常民文化研究所の諸先生、いつも楽しい雰囲気の中で議論することができた福田ゼミをはじめとする大学院生、比較民俗研究会、良友研究会の皆様、そして本書の研究で資料閲覧と利用の便を図ってくださった神奈川大学常民文化研究所、成城大学民俗学研究所、北京師範大学檔案館、直江千鶴子氏に謝意を記しておきたい。

在学中の二〇〇二、二〇〇三年度には文部省より国費奨学金の交付、そして本書の出版に際して神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」より補助金の交付を受けた。同プログラムに、

二〇〇五年度より R A 研究員 (Research Assistant)、P D 研究員 (Post-Doctoral Fellow) として関わってきた。学位論文の作成、提出から本書の出版まで、ここまでの環境と経験なくしては困難であった。関係する先生、職員の方々、そして研究員同僚の皆様に心より感謝する。

今回の論文選定および出版に際してご配慮とご指導を頂いた香月洋一郎先生と世織書房の伊藤晶宣氏、地図作成、校正などでご協力いただいた H・S さん、土田拓さん、藤本真由海さんほかに厚く御礼を申し上げたい。

長年親代わりに見守ってくださった吉村亨先生と奥様、佐藤文明さん、そして留学中お世話になった皆様、本当にありがとうございます。

最後にこの場を借りて、一人っ子でありながら近くにおいて親孝行してこなかった筆者のわがままを許し、いつも支えてくれた両親に感謝したい。二人が揃って還暦を迎えた今年に、遅ばせながらの報告として本書を二人に捧げたいと思う。

二〇〇八年二月二七日

王 京

吉田隆英 62
吉村信吉 154

ら行

ラーマン 152, 159, 161
劉少奇 157
『歴史科学としての民俗学』 24
連続民俗講習会 74
蓮仏重寿 101, 179
六人社 217, 224
盧溝橋事変 140, 160

婁子匡 9

わ行

「わが国郷土研究の沿革」 4
和歌森太郎 142, 180
鷺尾三郎 65
和島誠一 76
渡瀬莊三郎 17
渡辺善次 162
和田憲夫 200
和辻哲郎 176, 180

福間敏男 99
藤井隆至 53, 174, 208
藤井崇治 176, 181
藤野岩友 198
藤村憲一郎 198
藤本隆 198
藤原相之助 42-43, 59
『豊前』 73
古家信平 175
『文芸春秋』 座談会 186, 210, 213
北京神社 153
北京大学歌謡研究会 22
『北京大学研究所国学門週刊』 22
北京大使館 198
北京文化協会 200-201
別所孝太郎 197
ペン部隊 149
『北支』 155
細井次郎 158, 160-161
ホチヨ族 120-122
堀一郎 180

ま 行

益田勝実 6
松坂屋 155, 196
松本信広 30
「満洲国」 13, 42, 119, 132, 182
満洲族 111, 119-122
満洲帝国協和会 182
満洲民族学会 132-133
『満洲民族学会会報』 130, 132
満鉄調査部 50, 104-106, 110, 145, 198
満日文化協会 130
水野成夫 100, 157
南方熊楠 93
宮川貢 199
宮武省三 65, 70
宮本常一 73, 176, 180
「民間伝承採集事業説明書」 31
「民間伝承の会会則」 220, 224
「民間伝承の会趣意書」 218
『民間伝承論』 3, 25, 31
『民族』 21, 23, 30, 36, 39

『民俗学』 30, 54
『民族学研究』 55, 133, 146
民族学研究所 133
『民俗学誌』 167-168, 183, 198
「民族学と民俗学」 116
民俗学の国民化 22
民俗学会 9, 30
『民俗芸術』 39-40, 65
民俗語彙 27, 192, 209, 211-212
『民俗台湾』 175, 178, 184-185, 187,
198-199
『民俗台湾』 座談会 7, 174-175, 186,
210, 213
民俗展覧会 91, 196
民風会 144, 151
『昔話研究』 40, 55
『昔話採集手帖』 163-164
「婿入考」 24
村井紀 6
村岡重夫 130, 182
『孟姜女』 9-10, 44
蒙疆調査機関聯合会 50
蒙古善隣協会 157
最上孝敬 102, 108
モリソン蔵書 22

や 行

柳田国男研究会 5
『柳田国男全集』 12
『柳田国男伝』 5
「柳田国男のアジア意識」 53, 174
柳田ブーム 5
「柳田文庫」 12
藪重孝 73
八巻澄江 162
山口貞夫 31, 33, 35, 98-99, 101, 105
山根順太郎 130, 182
『山の人生』 140
山本斌 145-147, 152, 199
「揚子江の魚と漁法」 82-83
翼賛会北京支部 200-201
吉井太郎 70
吉岡義豊 197-198, 200

朝鮮民俗学会 186
青島調査機関聯合会 50
辻正信 109
坪井正五郎 17
鶴見太郎 9, 95, 138, 175
『定本柳田国男集』 12
東亜研究所 50
「東亜民俗学」 239
東京人類学会 4, 17
東條操 176
東方人類学博物館 152, 167
東方文化事業総委員会 196
東方民俗研究会 196, 199-201
「東方民俗叢書」 199
土俗学 18
戸田謙介 217, 221
戸田貞三 176
土地神 127
富島組 63
鳥居龍藏 18, 160, 200
鳥越皓之 174, 212

な 行

内藤湖南 49
永井潜 196
中江丑吉 157
中生勝美 11, 132
永尾龍造 51
中島哲夫 234
中平解 99-100
中村哲 174
中山太郎 38
名倉次 63
那須皓 176, 180-181
南島研究 45
南島談話会 39
西田直二郎 176, 208
西角井正慶 176
西亨 154
西谷勝也 70, 72
輔仁大学日本語文学部(日本文学系、日文系) 162, 165, 198
日本口承文芸学会 9, 140

「日本の民俗学」 4
「日本民族学」 117
日本民俗学講習会 35, 70, 103, 177
『日本民俗学史話』 5
「日本民俗学の歴史」 5
日本民族学会 103
「日本民俗研究小史」 4
野口孝徳 30
野村正良 154

は 行

萩原正徳 31, 37
「橋浦泰雄関係文書」 12
橋川時雄 196-201
橋川文三 6
橋本進吉 176, 180
「八月十五日考」 225
花井重次 153-154
早川孝太郎 30, 38, 152-153, 198
原田正己 197, 199
『播磨』 72
播磨郷土研究同好会 72
「比較民俗学」 59, 174-175, 189, 208-209, 212, 215-216, 225, 230-231, 238-239
「比較民俗学の問題」 53
比嘉春潮 31
肥後和男 139, 176
『ひだびと』 4, 10, 48-49, 73, 199, 202
『兵庫県郷土研究』 74, 76
兵庫県郷土研究会 75
兵庫県郷土史料刊行会 67
兵庫県民俗研究会 67, 74
『兵庫史談』 65
『兵庫県民俗資料』 65, 70, 82
平山敏次郎 176, 203, 208
ピンケンスタイン 179
輔仁大学 152, 158-168, 183, 198
フオルクス・クンデ 117-118
Folklore Fellows Communications (FFC) 54
福田アジオ 8, 230
福橋茂樹 65

『支那民俗誌』 51
洪沢敬三 176, 180-181, 220
嶋恵美子 162
島袋源七 31
清水常吉 218
写真出品 91
ジャパン・ツーリスト・ビューロー 41
シャマニズム 116, 119
周作人 9, 179, 196, 199, 201-202
守随一 31, 33, 35-36, 97-101, 104-109, 137, 182, 215, 219
シュミット 161, 167
鍾敬文 9, 55
「常民」 117-118
シロゴロフ 111, 120, 167
新京民俗学同好会 130
神言会 159
「神社奉祀の問題」 129
新人会（東京帝国大学新人会） 95, 98
新谷尚紀 7
「心碑」 25, 38
新民印書館 199
新民学院 198
新村出 176, 220
翠明荘 148, 154
杉浦健一 31, 33, 36, 99
鈴木金太郎 149
鈴木言一 157
鈴木満男 174, 209
須知善一 182
『炭焼日記』 164, 198, 202
清泉寮学院 160
「成長は自然」 73
西北研究所 139, 164, 188
「世界民俗学」 27-29, 52, 59, 143, 174, 238-239
瀬川清子 36
関敬吾 5, 32, 54, 166-168, 176, 179-180, 198, 202-203, 213, 215, 220, 234
銭稻孫 179, 199
創元社 49
遡江船舶隊 77
染木煦 198

た 行

太原神社 154
「対支文化事業」 51, 197
大政翼賛会 6, 177, 180-181
「大東亜共栄圏」（「東亜共栄圏」、「大東亜圏」）
10, 122-123, 133, 191, 210, 238
「大東亜民族」 43
「大東亜民族学」 116, 133
「大東亜民俗学」 185, 199
『「大東亜民俗学」の虚実』 6, 10, 175
「大日本帝国」 13
「体碑」 25, 38
「大陸民俗研究」 145
ダウル族 111, 120, 123-124
田内駿士 154
高木敏雄 18
高谷重夫 73
高藤武馬 176
高橋文太郎 39
竹田旦 96, 116, 139
多田貞一 197, 199
多田文男 153
辰井隆 70
田辺寿利 21
谷口虎年 154
『旅と伝説』 10, 12, 30, 36-46, 51, 61
-62, 65, 74, 78, 88, 91, 146, 153, 178
玉岡松一郎 70, 72, 76
玉置正美 218
千葉幸雄 182
千葉徳爾 137, 142
『中国の民間伝承』 145
『中国の民俗学』 138
中国民間文芸研究会 9, 139, 166
中国民俗学 9, 22-23
中国民俗学会 166
中国民俗学会（杭州） 9, 30, 54
中支調査機関联合会 50
中法漢学研究所 152
張家口 157, 188
『朝鮮民俗』 53, 142, 186-187

何思敬（何畏） 9, 22-23
加藤孝市 234
金沢覚太郎 182
金閼丈夫 137, 174, 176, 184-185, 198,
221, 224
金城朝永 31, 33
華北興亜翼賛会 201
華北交通株式会社 156, 198
華北事情案内所 198, 201
華北総合調査研究所 200
華北農村慣行調査 50, 145
華北文化協会 201
華北聯合調査委員会 50
神尾弼春 182
加茂幸男 62
『歌謡週刊』 22
川島右次 62, 65
川辺賢武 65
川村湊 6, 10, 175
河本正義 65, 73
漢字 86, 212
関東大震災 19
漢民族 125-127
北見俊夫 138-139
木内信蔵 154
「郷土」 26
「郷土研究」 18, 26, 36, 71
『郷土研究』 4, 18-19, 30
『郷土生活の研究法』 3-4, 30
協和服 126
『近畿民俗』 65, 72-75
近畿民俗学会 74-76
近畿民俗刊行会 72-74
金田一京助 176
「近代日本の植民地と民俗学」 230
熊谷辰次郎 30
倉田一郎 31, 33, 36, 46, 51, 61, 98,
100, 137, 176, 179-180, 214-215,
221, 234
栗山一夫（赤松啓介） 75
桑江常夫 42, 44-46
建国大学（満洲建国大学） 95, 109-110,
126, 131

建国大学研究院 116
興亜院 50, 153
『考古学』 65
黄氏鳳姿 184
江紹原 9
皇典講究所華北総署 148, 201
「口碑」 24, 38
「国際共同研究課題」 175, 187, 193, 211
国民学術協会 4
『高志路』 73, 178
小島勝治 61
「五族協和」 109, 115
小谷芳明 73
小寺融吉 42, 125
後藤興善 30-32, 166
後藤総一郎 5-6
後藤宗弘 70
小林伝十 61
小林正熊 30
子安宣邦 6
小山栄三 176, 180
今裕 176
今和次郎 176

さ行

坂口一雄 31
坂本龍起 196, 200
作田莊一 109
桜田勝徳 36, 73, 101, 221
桜谷忍 65
佐々木喜善 32
佐々木彦一郎 35, 98-99, 101, 104
沢田四郎作 62, 74, 224-233
沢田瑞穂 144-145, 151-152, 197-199
三元社 37, 39-40
山西学術調査 153-155
「残存」 18-19, 30
山村調査 3, 31, 34-35, 107-108
資源科学研究所 153
『支那習俗』 62, 78, 82, 84, 88, 189
「支那大陸の民俗調査の必要」 55
支那調査関係機関聯合会 50
「支那の新国学運動」 23

人名・事項索引

あ行

秋葉隆 180, 186
浅野晃 96, 99-100, 209
朝日文化賞 4
「アジアに寄する言葉」 53
『アジア問題講座』 49, 53, 55, 120
アチック・ミュージアム 39, 198
姉崎正治 32
有賀喜左衛門 21, 30
安藤正次 176
五十崎夏次郎 65
池上隆祐 30
池田敏雄 184
石黒忠篤 32, 176, 220
石田英一郎 98, 156-157, 164, 188, 218
石田太兵衛 70
石田幹之助 21-22, 30, 176
石原巖徹 201
泉靖一 139
伊藤武雄 157
井上太郎 197
伊波普猷 176
今井武志 180
今野円輔 180
今堀誠二 198
『因伯民談』 73
上野和男 95, 116
氏神 127-129
宇野円空 30
梅原未治 49, 176, 181
エーデル 152, 158-159, 167-168, 179,
183, 198-199, 201-202
H・スミス 98
エーベルハルト 53-54

江口為蔵 154
エスベラント学会 97, 100
江馬三枝子 48, 142
燕京大学 159-160
王汝瀾 166
大阪民俗談話会 71-72, 76
大笹吉次郎 41
「太田資料」 62
太田部隊 61, 77
大田遼一郎 157
『太田陸郎伝』 62
大藤時彦 4-5, 30-31, 33, 35-36, 99,
101, 176, 179-180, 203, 215, 221, 234
大橋富枝 51
大森志郎 99, 110
大矢真一 234
大宅壮一 96, 99
大山彦一 131, 182
岡川栄蔵 109, 234
岡田謙 174
岡部理 130, 188, 221, 224
岡正雄 21, 30, 101, 133, 239
小熊勢記 111
小田倉一 176, 181
落合重信 70
小野勝年 154, 156
小野武夫 176
折口信夫 9, 26, 30-31, 39, 148-151,
176, 179-181, 196, 201-203

か行

海村調査 35, 141-142
「蝸牛考」 23
『学術の日本』 4
「学問と民族結合」 53, 142

〈著者紹介〉

王 京 (Wang Jing, おう・きょう)

一九七五年、中国武漢市生まれ。武漢外国語学校、北京外国語大学日本語学部、北京日本学研究センター修士課程（日本文化専攻）を経て、二〇〇七年神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科博士後期課程修了。歴史民俗資料学博士。

現在、神奈川大学21世紀COEプログラムPD研究員 (Post-Doctoral Fellow)。

著書に『東アジア生活絵引・中国江南編』（共著）。論文に「水害から生まれた劇——ヤッサ祭りの環境論的考察」「教会大学と日中戦争——『北平私立輔仁大学檔案』から見た戦時下の学生収容」「戦時下の中国民俗研究——永尾龍造の研究と『支那民俗誌』編纂刊行の背景」「関東大震災と航空写真」などがある。



歴史民俗資料学叢書 3

一九三〇、四〇年代の日本民俗学と中国

2008年3月31日 第1刷発行©

著者	王 京
編者	神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科
発行者	神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
製作	(株)世織書房

〒221-8686 神奈川県横浜市神奈川区六角橋3-27-1
TEL[代表] 045(481)5661 FAX 045(491)7915

落丁・乱丁本はお取替いたします。Printed in Japan
ISBN978-4-9903017-6-7

『歴史民俗資料学叢書』刊行のことば

神奈川大学では、歴史民俗資料学の研究者を養成するために、一九九三年、日本常民文化研究所を母体として、大学院歴史民俗資料学研究科を開設、二年後の一九九五年には後期博士課程も設置するにいたしました。

教員、院生ともども、日本の民衆の生活・文化・歴史を歴史学と民俗学を統合した視角から対象とし、また自ら収集し、整理した文書・民俗資料に立脚した分析を第一の目標に掲げ、研究活動を推進してきました。この間、一〇周年記念シンポジウム「歴史と民俗の交錯」などを開催、歴史民俗資料学の有意義性を追求してきました。

大学院開設後一〇年を超えたこのたび、研究科では教員の研究成果はもとより、蓄積されてきた院生の修士論文・博士論文、それらに基づきさらに展開を試みた論考を歴史民俗資料学叢書として世に問うことにしました。歴史民俗資料学の有効性を少しでも理解していただき、斯学の発展に寄与できることを一同願うものです。

今回は、本研究科もその一拠点となっている、神奈川大学二十一世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」の若手研究者育成事業の一環として、刊行計画が実施に移されました。関係各位に感謝の意を表するとともに、今後とも、継続的に刊行していきたいと考えております。

二〇〇六年三月吉日

神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科